# 南田之口遺跡

—水道局配水場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

1985

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 南田之口遺跡

—水道局配水場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

# 序

前橋市の人口は、１年間で約2300人ほど増加しており、現在27万５千人を超える状況です。この人口増加に伴っておこる住宅地の不足を解消するため、前橋工業団地造成組合は、荒子町に大規模な住宅団地を造成する予定です。この造成に先立ち、飲料水を供給する配水施設の必要に応えるべく、上細井町にさらにもう１基の水道タンクを増設する計画が、前橋市水道局の手で進められてまいりました。

前橋市埋蔵文化財発掘調査団は、この水道タンクの建設予定地の約1800m²について、水道局の依頼に基づき、昭和59年８月から10月までの３ケ月間にわたり、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古墳時代と思われる住居址が８軒、掘立柱建物址が１軒、溝11条、土坑11基。また、住居に伴う土師器、須恵器の遺物に加え、周辺の古墳との関連が考慮できる鉄器、祭祀と関係すると思われる立石遺構など、古代の人々の生活を知る上で貴重な資料が数多く入手できました。この数年来、私どもが手がけてきた周辺の遺跡には、端気遺跡群Ⅰ、同Ⅱ、小神明遺跡群Ⅰ、同Ⅱなどがあり、これらの遺跡と関連して本遺跡を考えると、実に重要な遺跡であったと言えましょう。なぜならば、遺跡の宝庫である赤城山の裾野の付近一帯を知るためには、本遺跡のような〝点〟の発掘を積み重ねる以外に方法はありません。そして、いつの日か〝点〟が〝線〟となり、〝線〟が〝面〟に広がる時、この地域の古代の全体像が私達の目の前に明らかになっていくのです。そういう意味において、本遺跡の発掘調査を実施した意義は、増し加わることはあっても、決して減少することはないと確信しています。

最後に、今度の発掘調査にあたり、終始ご協力を頂いた前橋市水道局の各位と、照りつける真夏の太陽の下で発掘に従事して下さった作業員の皆さんに心から御礼申し上げたいと思います。

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　奈良三郎

# 例　　言

1. 本書は、水道局配水場施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の略称は、59Ｂ２とする。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査の要項は、次の通りである。

| | |
|---|---|
| 調査場所 | 前橋市上細井町字南田之口110番地の１ |
| 調査期間 | 昭和59年８月10日～10月31日 |
| 整理期間 | 昭和59年11月１日～60年３月30日 |
| 調査担当者 | 木暮　誠　前原　豊　桑原　昭　中野　覚　原田和博　福田瑞穂 |
| 調査補助員 | 加部二生 |

5. 本書の編集は、木暮誠、中野覚、原田和博、福田瑞穂の討議により分担編集し、執筆は主に遺構担当者が行ない、文責は文末に記載した。遺物整理、図面整理、図面作成、遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担して行なった。
6. 遺物の整理にあたり、前橋第二高等学校教諭　宮崎重雄氏と群馬県埋蔵文化財調査事業団大江正行氏の御教示を賜った。
7. 調査ならびに本報告書作成にかかわった方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。

発掘作業員

青柳宏枝　石関秀男　井野岳史　内田誠一　亀井美幸　木部理有子
小島勝男　小林ハナ子　佐藤佳子　白井栄恵　関口安次郎　竹内敏江
千明香根子　千明　仁　渡木秋子　中川　保　長岡徳治　長谷川とめ
長谷川千代乃　福島裕子　湯浅道子　湯浅たま江

整理作業員

青柳宏枝　白井栄恵　竹内敏江　千明香根子　渡木秋子　福島裕子
湯浅道子　湯浅たま江

# 凡　　例

1.　遺構の略称は、次の通りである。

古墳時代住居址→H　掘立柱建物址→B　溝状遺構→W　土坑→D　落ち込み→O

2.　挿図図版の縮尺は、次を基本としている。

1)　遺構

住居址→1/60　竈→1/30　遺物出土状態→1/60　住居址掘り方→1/80　掘立柱建物址→1/80

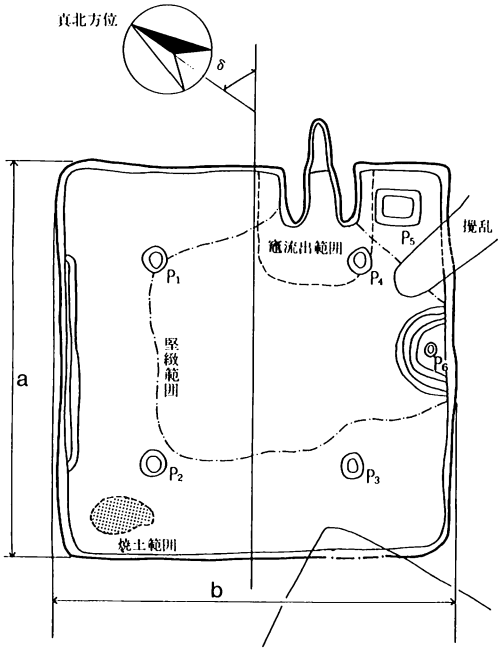
溝平面図→1/120　溝地断→1/40　土坑→1/60　遺構全体図→1/200

2)　遺物

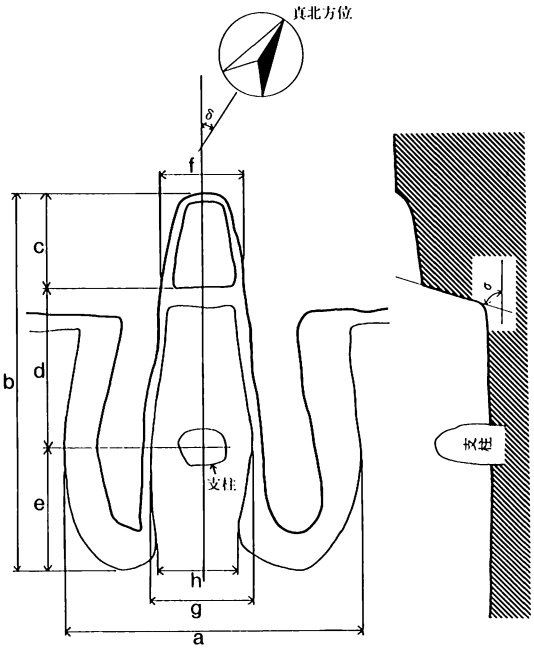
土師器・須恵器・縄文土器・石器→1/3　鉄器・砥石→1/2

3.　遺物出土状態の垂直方向は、水平方向の2倍に拡大されている。

4.　遺物番号は、遺物を取り上げた際の番号をそのまま使用している。接合により複数の番号をもつ遺物は、一つに代表させてある。尚、遺物出土状態も代表番号を記している。




a：南北軸長　b：東西軸長　δ：主軸方位




a：最大幅　b：全長　c：煙道部長　d：燃焼部長　e：炊き口部長
f：煙道部幅　g：燃焼部幅　h：炊き口部幅　δ：主軸方位　σ：煙道部立ち上がり角

# 目　　次

序

例　　言

凡　　例

I　発掘調査に至る経過 …… 1

II　遺跡の位置と環境 …… 1

III　発掘調査の経過 …… 5

1　調査方針 …… 5

2　調査経過 …… 5

IV　基本層序 …… 7

V　遺構と遺物 …… 8

1　住居址 …… 8

2　掘立柱建物址 …… 76

3　溝 …… 78

4　土坑 …… 84

5　立石 …… 87

6　縄文遺物 …… 88

VI　まとめ …… 90

# 挿 図 目 次


第１図　南田之口遺跡と周辺遺跡……３
第２図　南田之口遺跡周辺の地形図……４
第３図　発掘の経過……６
第４図　層序柱状図……７
第５図　住居址全体図……８
第６図　Ｈ－１号住居址……９
第７図　Ｈ－１号住居址竈……10
第８図　Ｈ－１号住居址遺物出土状態……11
第９図　Ｈ－１号住居址遺物出土状態……12
第10図　Ｈ－１号住居址遺物出土状態……13
第11図　Ｈ－１号住居址掘り方……13
第12図　Ｈ－１号住居址出土遺物……14
第13図　Ｈ－１号住居址出土遺物……16
第14図　Ｈ－２号住居址……20
第15図　Ｈ－２号住居址竈……21
第16図　Ｈ－２号住居址遺物出土状態……22
第17図　Ｈ－２号住居址掘り方……23
第18図　Ｈ－２号住居址出土遺物……24
第19図　Ｈ－２号住居址出土遺物……26
第20図　Ｈ－３号住居址……29
第21図　Ｈ－３号住居址竈……30
第22図　Ｈ－３号住居址遺物出土状態……31
第23図　Ｈ－３号住居址掘り方……32
第24図　Ｈ－３号住居址出土遺物……33
第25図　Ｈ－３号住居址出土遺物……34
第26図　Ｈ－４号住居址……35
第27図　Ｈ－４号住居址竈……36
第28図　Ｈ－４号住居址遺物出土状態……37
第29図　Ｈ－４号住居址掘り方……37
第30図　Ｈ－４号住居址出土遺物……38
第31図　Ｈ－４号住居址出土遺物……40
第32図　Ｈ－５号住居址……43
第33図　Ｈ－５号住居址竈……45
第34図　Ｈ－５号住居址遺物出土状態……46
第35図　Ｈ－５号住居址遺物出土状態……47
第36図　Ｈ－５号住居址掘り方……49
第37図　Ｈ－５号住居址出土遺物……50
第38図　Ｈ－５号住居址出土遺物……52
第39図　Ｈ－５号住居址出土遺物……54
第40図　Ｈ－６号住居址……55
第41図　Ｈ－６号住居址竈……56
第42図　Ｈ－６号住居址遺物出土状態……57
第43図　Ｈ－６号住居址掘り方……58
第44図　Ｈ－６号住居址出土遺物……58
第45図　Ｈ－７号住居址……61
第46図　Ｈ－７号住居址竈……62
第47図　Ｈ－７号住居址遺物出土状態……63
第48図　Ｈ－７号住居址掘り方……64
第49図　Ｈ－７号住居址出土遺物……65
第50図　Ｈ－７号住居址出土遺物……66
第51図　Ｈ－８号住居址……69
第52図　Ｈ－８号住居址竈……70
第53図　Ｈ－８号住居址遺物出土状態……71
第54図　Ｈ－８号住居址掘り方……72
第55図　Ｈ－８号住居址出土遺物……74
第56図　Ｈ－８号住居址出土遺物……76
第57図　掘立柱建物址……77
第58図　溝地断……79
第59図　溝地断……80
第60図　Ｗ－７号溝遺物出土状態……81
第61図　Ｗ－１号溝出土遺物……81
第62図　Ｗ－１・７号溝出土遺物……82
第63図　Ｄ－１～８号土坑……85
第64図　Ｄ－９～11号土坑……86

第65図　立石と風倒痕……87
第66図　立石とすり石……87
第67図　縄文時代の土器……88
第68図　縄文時代の石器……89
第69図　住居址の規模……91
第70図　住居址の主軸方位……92
第71図　竈主軸方位……92
第72図　竈の構造と貯蔵穴……93
第73図　土師器の器形分類……97
付図１　南田之口遺跡遺構全体図
付図２　南田之口遺跡溝平面図

# 図 版 目 次


図版１　南田之口遺跡遠景（南より）
南田之口遺跡全景（東より）
図版２　Ｈ－１号住居址
Ｈ－１号住居址掘り方
図版３　Ｈ－１号住居址遺物出土状態
Ｈ－１号住居址竈掘り方地断
図版４　Ｈ－２号住居址（北より）
Ｈ－２号住居址掘り方（西より）
図版５　Ｈ－２号住居址地断（南より）
Ｈ－２号住居址竈（西より）
図版６　Ｈ－３号住居址（北西より）
Ｈ－３号住居址掘り方（北東より）
図版７　Ｈ－３号住居址竈
Ｈ－３号住居址遺物出土状態
図版８　Ｈ－４号住居址（西より）
Ｈ－４号住居址掘り方（西より）
図版９　Ｈ－４号住居址遺物出土状態
Ｈ－４号住居址竈（西より）
図版10　Ｈ－５号住居址（西より）
Ｈ－５号住居址掘り方（西より）
図版11　Ｈ－５号住居址竈
Ｈ－５号住居址竈掘り方
図版12　Ｈ－５号住居址竈（北より）
Ｈ－５号住居址遺物出土状態
図版13　Ｈ－６号住居址（西より）
Ｈ－６号住居址掘り方（西より）
図版14　Ｈ－６号住居址竈（西より）
Ｈ－６号住居址掘り方（西より）
図版15　Ｈ－６号住居址遺物出土状態
Ｈ－６・７号住居址（西より）
図版16　Ｈ－７号住居址（西より）
Ｈ－７号住居址掘り方（西より）
図版17　Ｈ－７号住居址竈
Ｈ－７号住居址竈掘り方
図版18　Ｈ－８号住居址（西より）
Ｈ－８号住居址掘り方（西より）
図版19　Ｈ－８号住居址竈（西より）
Ｈ－８号住居址竈掘り方（西より）
図版20　Ｈ－８号住居址遺物出土状態
Ｈ－８号住居址特殊遺構
図版21　溝全景（東より）
Ｗ－３号溝（北西より）
図版22　Ｗ－１号溝（北より）
Ｗ－２号溝（東より）
図版23　Ｂ－１号掘立柱建物址（北より）
立石と風倒痕（東より）
図版24　Ｈ－１号住居址出土遺物
図版25　Ｈ－２・３・４号住居址出土遺物
図版26　Ｈ－４・５号住居址出土遺物
図版27　Ｈ－５・６・７号住居址出土遺物
図版28　Ｈ－７・８号住居址出土遺物
図版29　Ｗ－１・７号溝、Ｈ－２・５号住居址出土遺物

# I　発掘調査に至る経過

本遺跡の名称は、旧地籍、群馬県勢多郡南橘村大字上細井字南田之口の小字名を採用して、南田之口遺跡となった。昭和29年９月の市町村合併で現在の地番である群馬県前橋市上細井町字南田之口110番地の１と変更された。この周辺の調査は、土地改良事業に伴う調査が実施され、端気遺跡群や小神明遺跡群からは、貴重な遺物を出土している。

昭和58年12月、水道局より同地内の表面調査依頼があり、踏査の結果遺物の散布が見られ、昭和59年２月に埋蔵文化財包蔵地の可能性が大である旨を回答した。回答により、同年４月確認調査依頼が提出された。しかし、水道局工務課及び総務課と教育委員会社会教育課文化財保護係との間で協議、調整を重ねた結果、調査期間等の短縮を図るため、確認調査の段階で遺構が発見されたらただちに発掘調査に切り変える運びとなった。

調査区域は、配水場諸施設建設予定地を網羅できるように設定した。そのため、調査面積約1800㎡を全面的に発掘調査することになり、昭和59年８月10日に調査を開始してから、約３ケ月間にわたって実施された。（福田）

# II　遺跡の位置と環境

県道前橋・赤城線（通称赤城県道）を市街地から赤城山に向って進み、水田地帯を過ぎるとにわかに急な坂道にさしかかる。更に500m進むと大正用水を渡る。この赤城県道と大正用水の交差地点から東へ750m進む舌状台地に南田之口遺跡は所在する。地形・地質の特徴から見ると、赤城火山斜面の下端部にあたり、赤城山の裾野と広瀬川低地帯の接点付近にあたる。

本遺跡は、小字名の南田之口をもって遺跡名としたが、『群馬県遺跡台帳』によると、同じ南田之口の121～123番地、236～237番地から縄文時代後期の遺物の散布が確認されている。遺跡地から周囲を見渡すと、桑畑や畑作地のみで、水田らしきものは全く目に留まらない。そこで、なぜ「田の口」という小字名になるのか疑問が生じた。前橋市内には、北西部に「田口（たぐち）」町があり、この場合の「田口（たぐち）」は、この辺りから水田が始まるという意味で「田口（たぐち）」と呼ばれ、平坦部に位置する。一方、本遺跡は赤城山南面の裾野のため、ゆるやかな傾斜を示している。この斜面には、幾本もの南流する小河川が流れ、開析谷を形成し、比高は数mを測る。従って舌状台地上では水に乏しく、主に桑等が栽培され、小河川により形成された低地では、非常に狭隘な谷地ながら、水田が営まれている。恐らく古代においても、裾野を南流する河川の水を利用して、米作りが行われていたのだろう。遺跡地から数百m登り、富士見村から見下ろしてみると、「田口（たぐち）」と同様の意味で「田之口（たのくち）」と呼ぶにふさわしい地域であることが確認され、小字名の疑問は解消された。

標高は、140m前後を測り、広瀬川低地帯に属する崖下の水田地帯よりも30mほど高まっている。

旧利根川が洪水を起こしたとしても被害を受けずにすむ十分な高さが認められる。

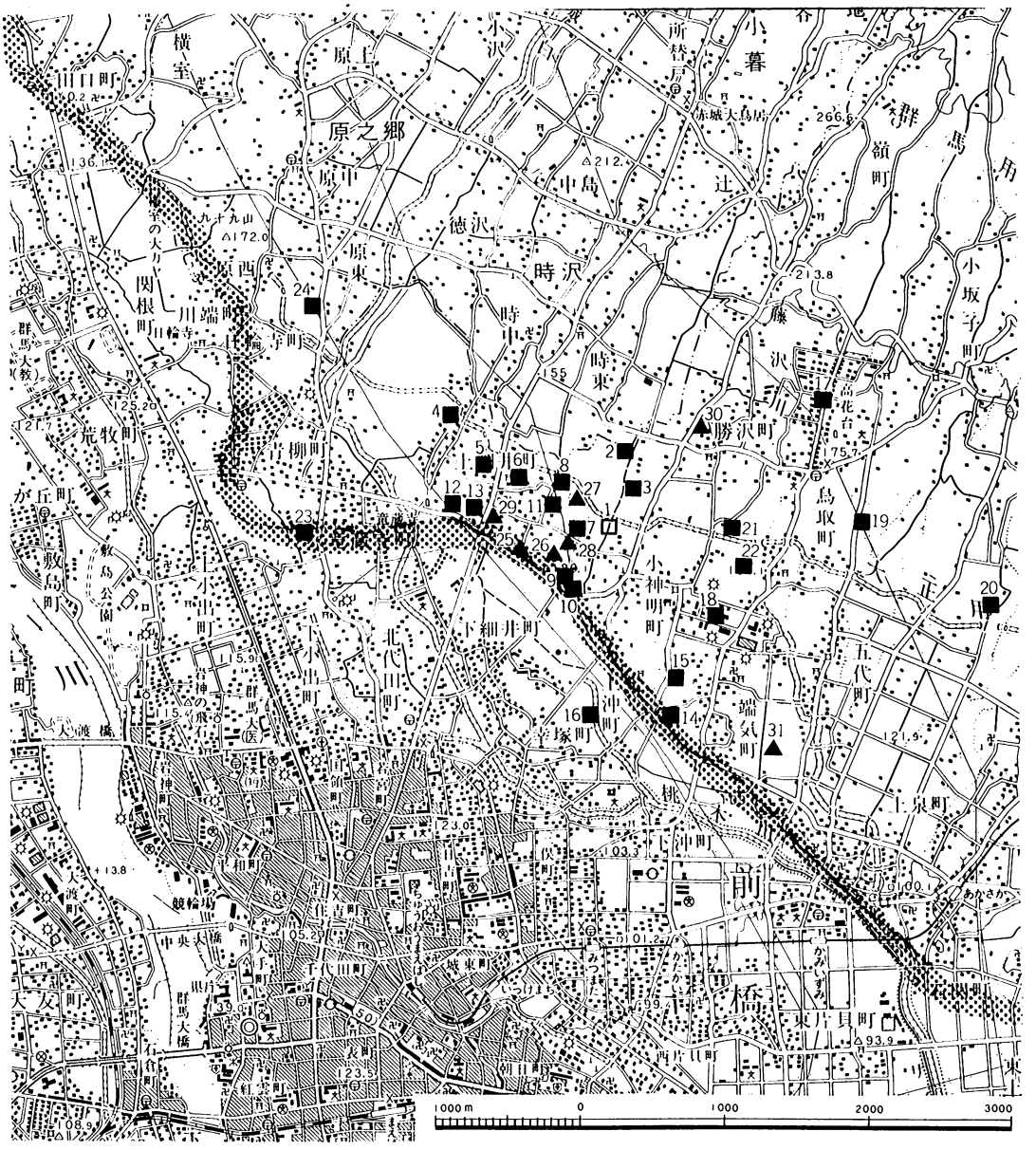
本遺跡の所在する前橋市上細井町には、数多くの遺跡が確認されている。第１図の１から13までは、上細井町にある遺跡を『群馬県遺跡台帳』から拾ったものである。赤城山の南側斜面の台地では、掘れば必ずといってよいほど遺跡にぶつかる埋蔵文化財の宝庫といわれている。全ての遺跡を地図に載せようとすれば、たちまちぎっしりになってしまうほどである。以下、上細井町に所在する、確認済みの遺跡についてだけ述べることにする。

上細井町字田之口には、古墳時代の集落跡と住居跡の検出された田之口遺跡。隣接する字西田之口では、縄文・弥生時代の土器片の出土した西田之口遺跡。字新田上からは、縄文中期の土器片の多い新田上遺跡。字天間久保では、縄文中期と後期の土器片の出土した天間久保遺跡。天王と天王浦からは、土器片と磨製石斧が発見された天王遺跡。その他には、前方後円墳の丑子塚遺跡、石組かまどと土師器の丑子遺跡。縄文中期･後期、古墳時代の灰俵遺跡。縄文の南灰俵遺跡。富士見村との境界地域にある定福遺跡。比高４mの河岸段丘の末端に位置する八幡山の砦遺跡。南橘14号墳の東側に位置する薬師古墳など、遺跡が密集している。

また、ここ数年来前橋市教育委員会が発掘調査を実施したものには、縄文時代の住居址１軒、弥生時代の方形周溝墓２基、古墳時代住居址２軒、中世の環濠１条、石敷遺構３基が検出された端気遺跡群Ⅰ。縄文時代の住居址１軒、古墳時代の住居址14軒、中世の環濠１条が確認された端気遺跡群Ⅱ。縄文時代の住居址、奈良・平安時代の住居址が多数検出され、戦国期の城跡も確認された芳賀北部団地遺跡群。縄文前期の住居址39軒、敷石住居６軒、古墳４基、奈良・平安時代の住居址420軒。掘立柱建物址194軒などを検出した芳賀東部工業団地遺跡。縄文前期の住居址７軒、古墳31基が確認された芳賀西部工業団地遺跡。縄文・古墳・奈良・平安時代の住居址11軒、掘立 柱建物址２軒を検出した小神明遺跡群Ⅰ。縄文・弥生・古墳時代の住居址19軒と古墳５基の小神 明遺跡群Ⅱ。奈良三彩の小壺を竪穴住居から出土した桧峯遺跡。平安時代の住居址12軒と水田址、 河川址が検出された青柳寄居遺跡などがあげられる。

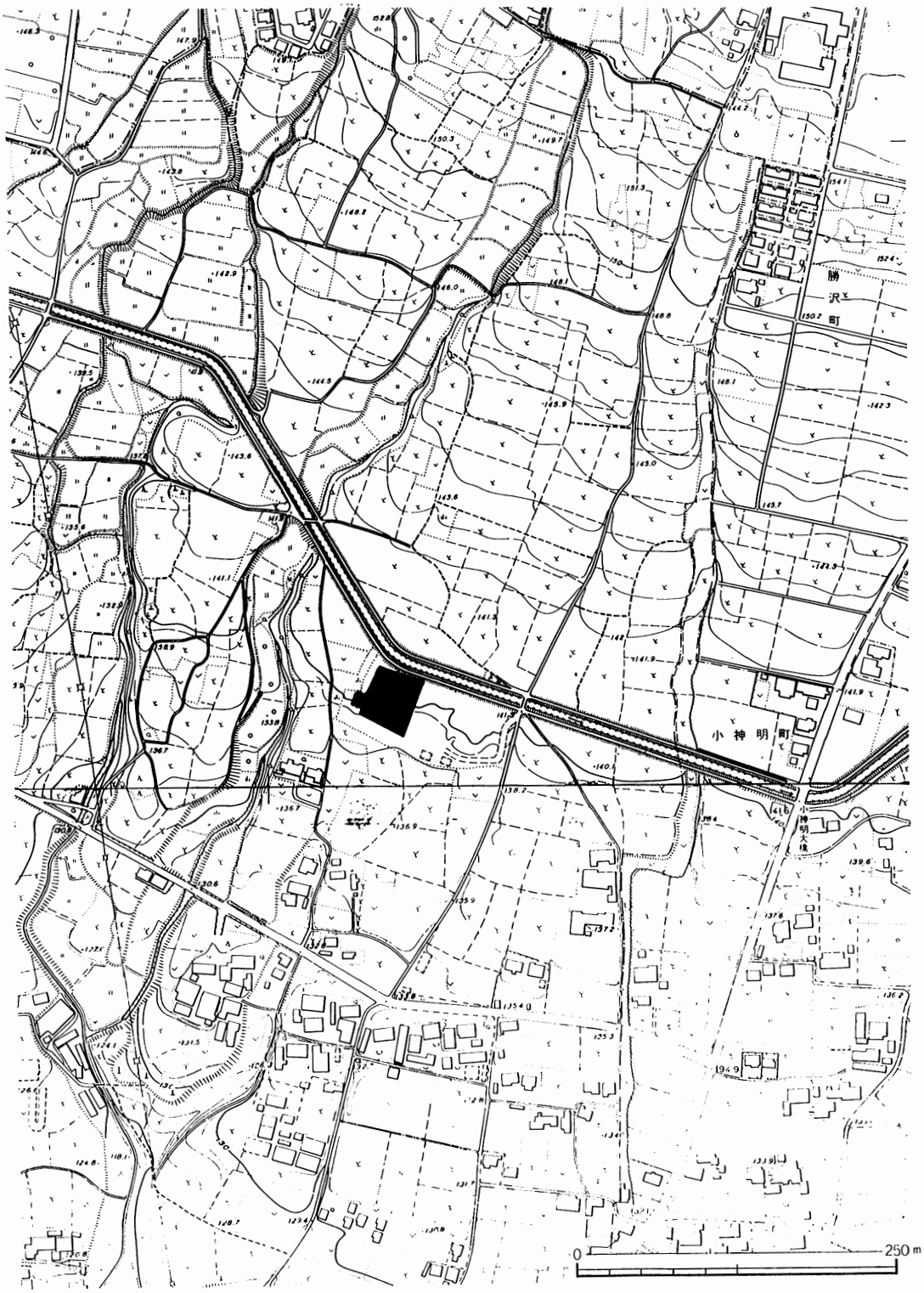
また古墳には、ほとんど平夷で、古墳の天井石の露出する新田上古墳。小円墳で、現在は墓地に利用されている南橘４号墳。径15m、高さ２mほど、横穴式石室で天井石が一部露出する円墳の南橘８号墳。径10m、高さ２mで、段丘線直上に位置する南橘９号墳。小円墳で、現在頂上に稲荷様の祀ってある南橘11号墳。市指定史跡前方後円墳、横穴式石室のオブ塚古墳。７世紀前半の横穴式石室を持つ大日塚古墳などがあげられる。

以上見てきた通り、本遺跡の所在する赤城山南側の斜面は、のきなみ遺跡地となっており、この地における連綿とした人々の歩みを見ることができる。本遺跡は、そのただ中に位置しており、古代の人々の生活を知るうえで貴重な資料を私たちに提示している。　　（中野）




第1図　南田之口遺跡と周辺遺跡

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. | 南田之口遺跡 | 9. | 灰俵遺跡 | 17. | 芳賀北部団地遺跡群 | 25. | 新田上古墳 |
| 2. | 田之口遺跡 | 10. | 南灰俵遺跡 | 18. | 芳賀西部工業団地遺跡群 | 26. | 南橋4号墳 |
| 3. | 西田之口遺跡 | 11. | 定福遺跡 | 19. | 芳賀東部工業団地遺跡群 | 27. | 南橋8号墳 |
| 4. | 新田上遺跡 | 12. | 八幡山の砦遺跡 | 20. | 桧峯遺跡 | 28. | 南橋9号墳 |
| 5. | 天間久保遺跡 | 13. | 薬師遺跡 | 21. | 小神明遺跡群Ⅰ | 29. | 南橋11号墳 |
| 6. | 天王遺跡 | 14. | 端気遺跡群Ⅰ | 22. | 小神明遺跡群Ⅱ | 30. | オブ塚古墳 |
| 7. | 壮子塚遺跡 | 15. | 端気遺跡群Ⅱ | 23. | 青柳寄居遺跡 | 31. | 大日塚古墳 |
| 8. | 壮子遺跡 | 16. | 西新井遺跡 | 24. | 青柳宿上遺跡 | 32. | 古利根川左岸 |




第２図　南田之口遺跡周辺の地形図（１／5000）

# III　発掘調査の経過

## 1　調　査　方　針

発掘調査を実施するにあたり、表土の掘削は調査期間の短縮を図るため重機を使用し、調査範囲は、約1800m²の区域にそって4m四方のグリッドを設定し、西から東へ算用数字、北から南へアルファベットで呼称した。各グリッドの呼称方法は北西の杭の名称を使っている。

調査は、表土層の除去後、プラン確認に入り、並行してグリッド及びB・Mの設置を行ない、その後、遺構の配置図を縮尺1/100にて作成し各遺構の調査工程を検討した。

その結果、住居址の調査は、

1. 中央部でクロスするセクションベルトを設けて土層観察を行なう。
2. 10cm四方以上の遺物は、縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット表記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。
3. 竈は、原則として縮尺1/10の図化、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。

以上、大まかな方針のもとに調査を進めたが、北側に隣接する大正用水からの漏水の量が多いため大幅に進捗をはばまれた。

測量の基準点であるが、B・Mは配水場内に設置されているものを使い、平面多角作業は、市役所土地改良課所有の座標台帳を使い、本遺跡調査区内のF－7、F－15グリッド杭に座標を設定した。その結果、F－7グリッド杭（X＝46576.748　Y＝－66423.238）F－15グリッド杭（X＝46576.877　Y＝－66391.238）となった。　（福田）

## 2　調　査　経　過

発掘調査は、8月9日にプレハブ設置、翌10日に発掘器材を運び込み、事務所内の整理、配水場施設の建設予定地内に東西のトレンチ設定からスタートした。13日には重機によるトレンチ内表土剝ぎが始まった。2本目のトレンチを入れた段階で、住居址4軒が確認できた。そのため、事前協議で決められていた全面発掘に切り変える。15日からは、ダンプも投入し、敷地内北西から全面掘削を始めた。同時進行の形でプラン確認を行い、23日までに遺構の全容を把握し、平板測量による遺構全体図の作成を行った。プラン確認の結果、住居址8、掘立柱建物址1、溝11、土坑11、落ち込み1が検出された。

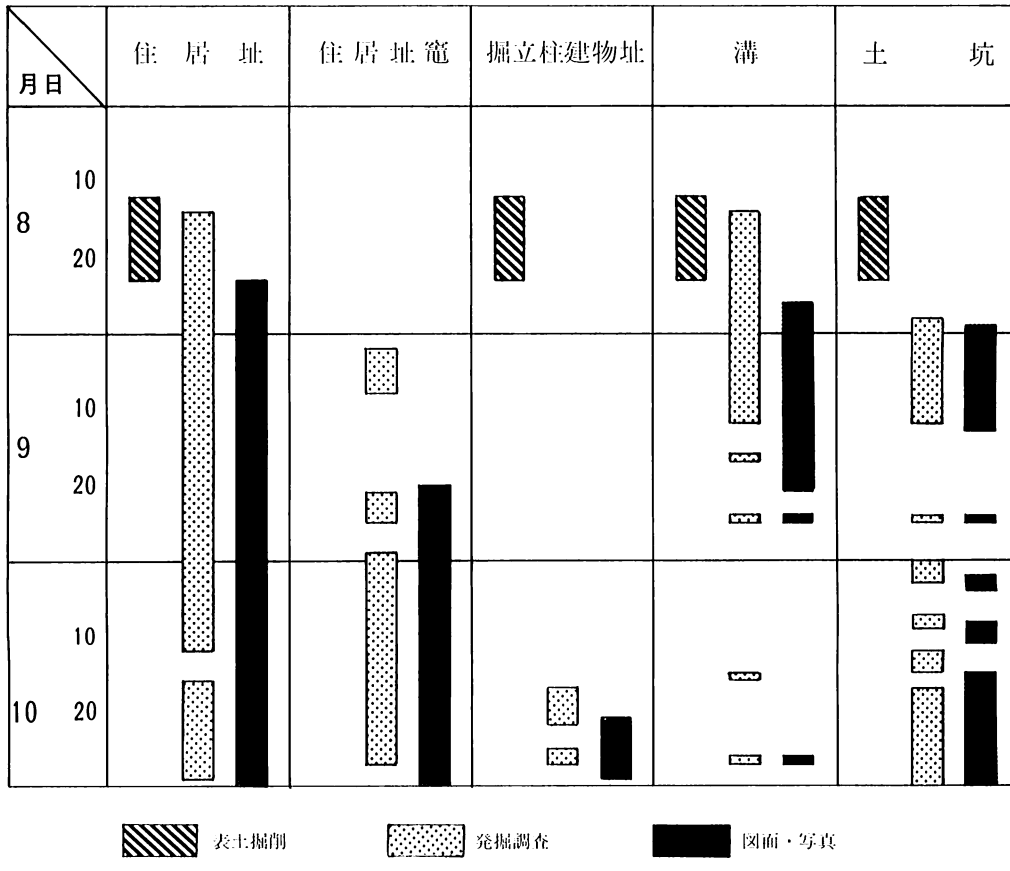
まず、時期の新しい溝から着手し、住居址、土坑、掘立柱建物址、落ち込みの順で調査を進めていくことになった。発掘作業を開始してまもなく、遺跡北側を流れる大正用水からの湧水が多く、遺構が水没し、作業が著しく停滞してしまった。そこで、遺跡北側に水抜き用の深掘りを入れ、排水ポンプを導入し、排水しながら調査を進めた。しかし、エンジンポンプのため夜間には

排水することができず、朝には遺構が水没してしまい、午前中は作業ができない日が続いた。作業を進めるために、電気工事を行い、24時間排水を続けることにした。これにより、湧水を防ぐことができ、一部の住居址を除いて調査が順調に進むようになった。

W－1号溝、W－2号溝は排土量が多く、他の溝も複雑に交差し合い、新旧関係をつかむのに手間取った。また、前述の湧水の影響もあり、溝を完掘したのが9月21日になってしまった。住居址はすべて貼床があり、2倍以上の調査時間を費やさなければならなかった。特に、H－1号住居址やH－2号住居址そして、H－5号住居址は出土遺物が多く、精査にも時間がかかった。また、H－8号住居址は、掘り込みが深く、大正用水の渇水期まで手をつけることができなかった。壁面には炭化物を含む黒色土の特殊遺構が確認され、その精査にも多くの時間を費やさなくてはならなかった。

調査は、10月24日ハイライダーによる遺構全体写真を撮影し、31日落ち込みとH－5号住居址の調査を最後に、現場での作業を終了した。

遺物整理作業は、11月1日より元総社分室にて3月末まで行われた。　　（原田）




第3図　発掘の経過

# Ⅳ 基 本 層 序

本遺跡は、赤城山南面の裾野の南端に位置することから、南にゆるやかな傾斜を示している。南北の標高差は、1m前後と小さく、層位関係は同一と考えられる。そこで、大正用水の湧水を防ぐ目的で掘られた深掘りを中心に、中央のF－9グリッドと南壁のM－9グリッドの深掘りから層位関係を把握した。

次に全体層序を述べたい。

第 I 層　暗褐色土層、B軽石またはA軽石を含む細砂で、粘性は乏しく、やや締っている。

第 II 層　暗褐色土層、粗砂と白色のパミスを含む細砂で、粘性は乏しく、やや締っている。

第 III 層　黒褐色土層、白色軽石を含む細砂で、若干粘性を有し、締っている。

第III-a層　黒褐色土層、鉄分凝集によるオレンジ色の粒子が見られる細砂で、若干粘性を有し、締っている。

第III-b層　黒色土層、C軽石を多量に含む細砂で、若干粘性を有し、締っている。

第 IV 層　黒色土層、C軽石を微量含む細砂で、粘性を有し、締っている。

第 V 層　黄褐色土層、ソフトローム、礫と軽石を含み締っている。

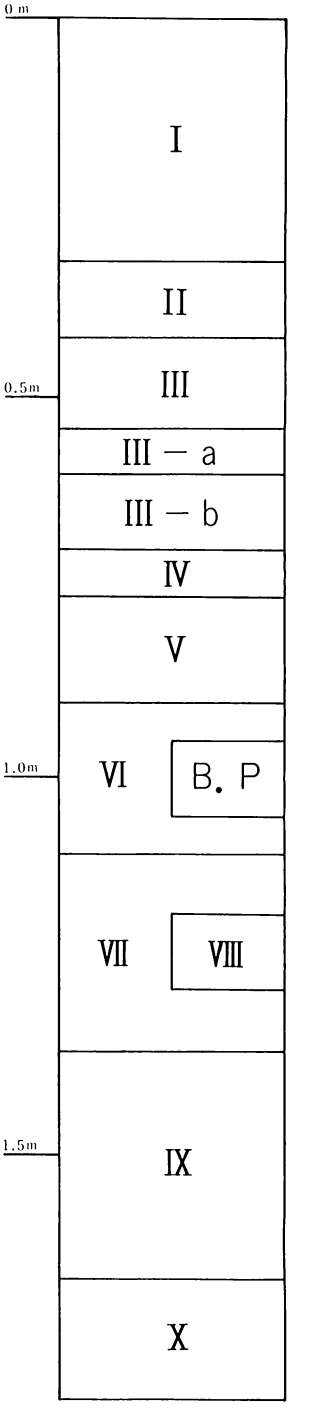
第 VI 層　にぶい黄橙色土層、ハードローム。軽石を多量に含み、締っている。B・Pは本層の中に見られる。

第 VII 層　黄褐色土層、ハードローム。礫と軽石をわずかに含み、粘性を有し、固く締っている。

第 VIII 層　オリーブ褐色土層、ハードローム。礫をわずかに含み、粘性が強く、固く締っている。

第 IX 層　黄褐色土層、礫とマンガン塊を含む粘土層で、締っている。

第 X 層　にぶい黄褐色土層、マンガン塊を含む粘土層で、固く締っている。　（原田）




第4図　層序柱状図

# V　遺構と遺物

## 1. 住　居　址

本遺跡から検出された住居址は、合計８軒である。これらは基本層序の第Ⅳ層で確認され、床面はハードロームまで掘り込まれていた。表土掘削後の標高は139m前後で、地形は北から南に緩やかに傾斜している。

第５図に示したように、住居址は遺跡のやや東寄りの１軒を除き西側に７軒が集中していた。うち１軒は範囲外にかかるため全掘できなかった。このような住居址の配置から、住居址はさらに西側に繋がっていく可能性が考えられる。

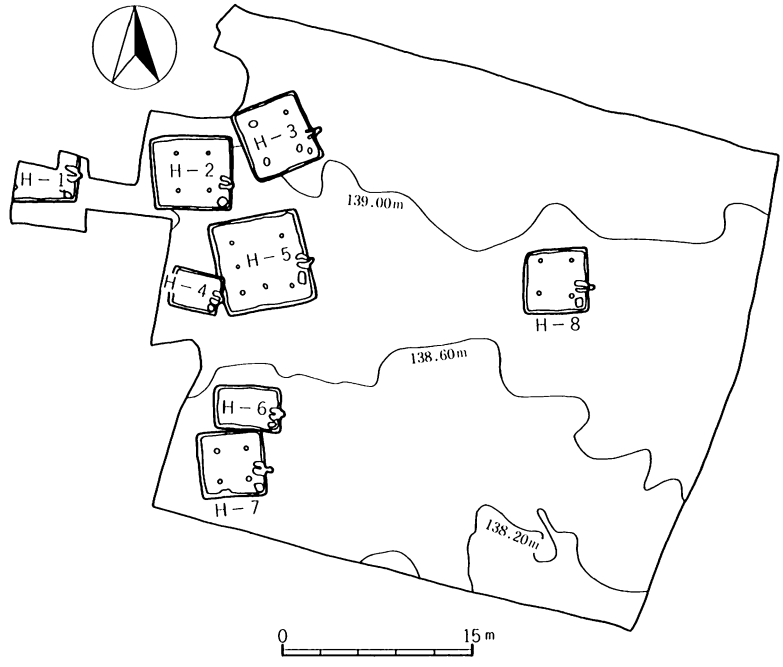
住居址はすべて東壁に竈を有する方形プランで、うち１軒は住居中央に炉址を有する。

６世紀初頭に降下したとされる榛名二ツ岳給源のＦＡ層が、２軒の住居址から確認された。

第５図には表示していないが、５軒の住居址が後世の溝の攪乱を受けている。

以下各住居址について説明していきたい。

（木暮）

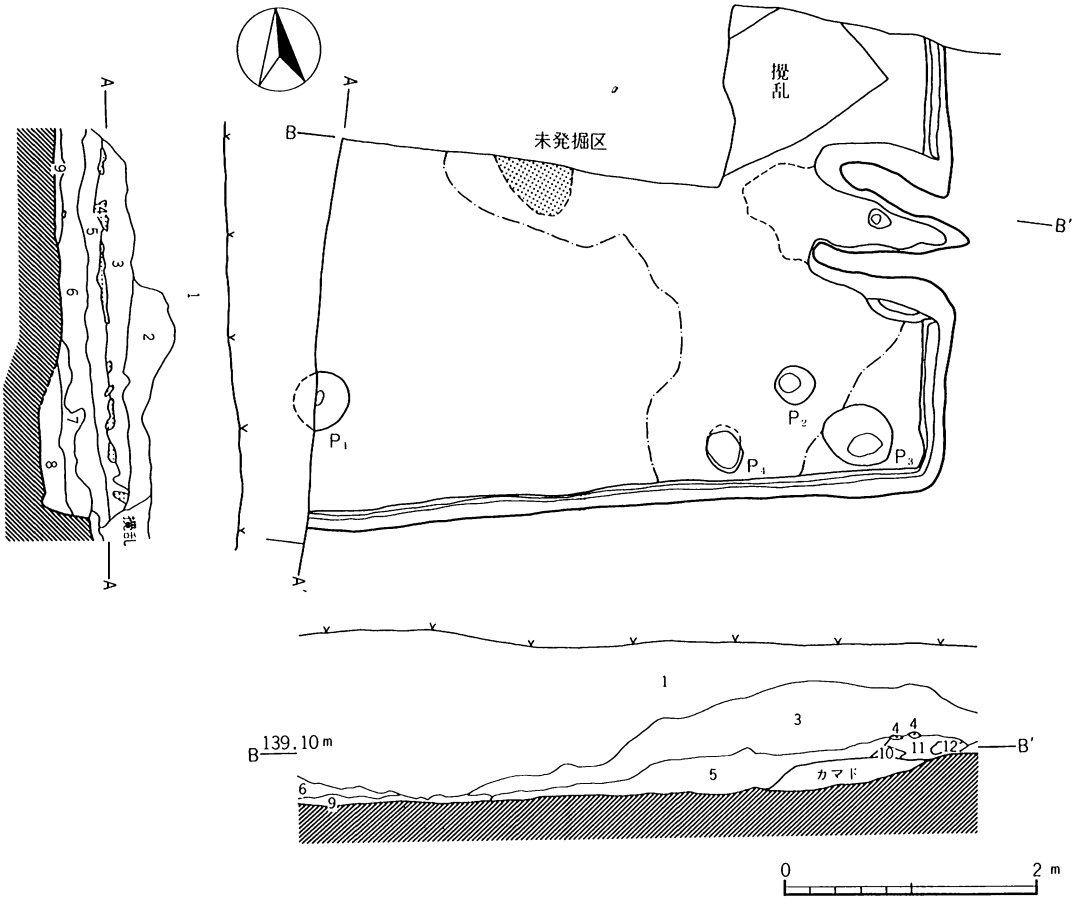



第５図　住居址全体図（１／600）

### Ｈ－１号住居址

**遺構**（第６・11図、図版２）

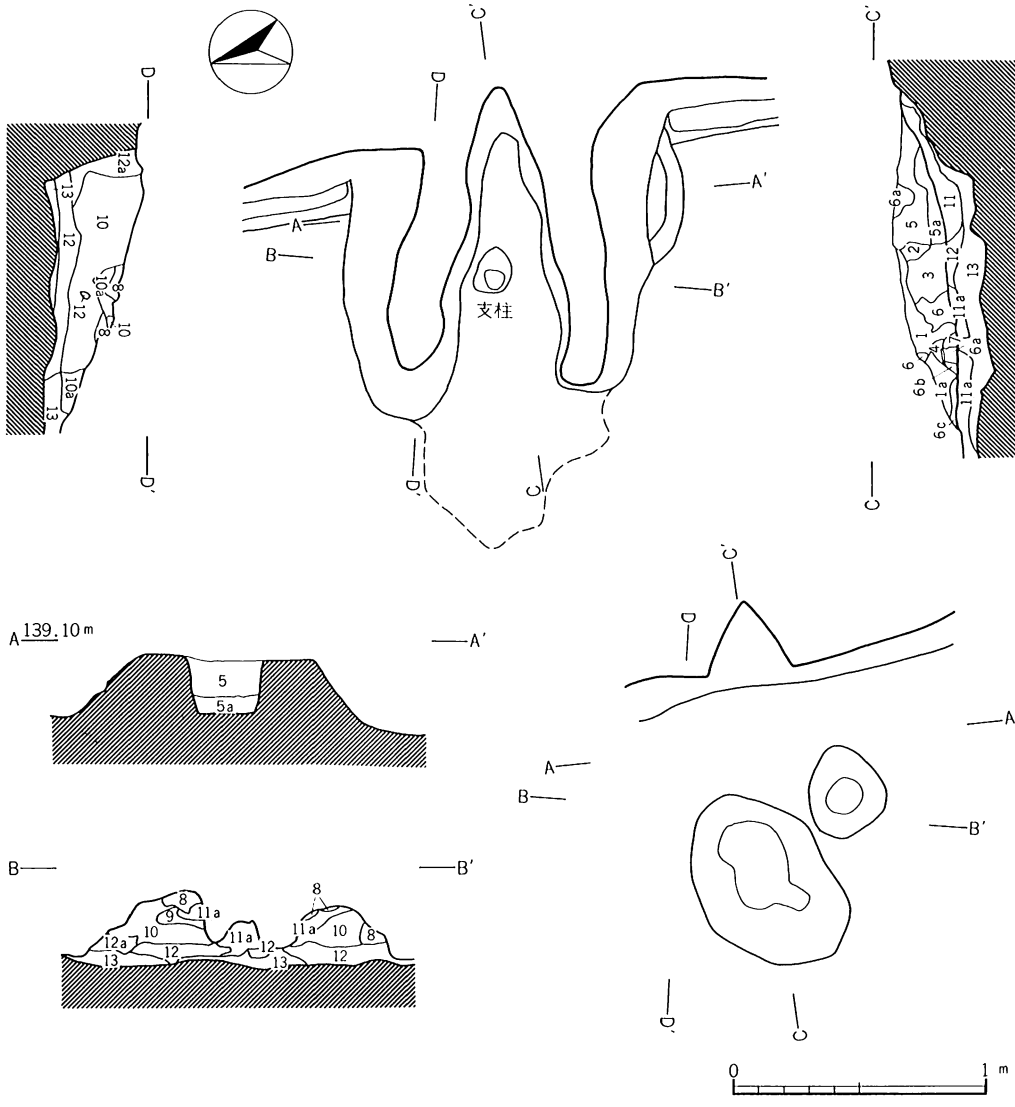
本住居址は、発掘区域の西、Ｅ・Ｆ－１・２・３グリッドに位置する。確認調査でトレンチを設定し掘り下げている段階で検出されたが、発掘区域外になるため調査はトレンチを南北方向に拡張して、竈をもつ東壁側半分と南壁側の一部のみ行うことになった。よって確認規模は東壁3.5m、南壁５mで調査面積は14.7m²である。平面形は東壁と南壁の一部が明らかになったにすぎないため推測になるが、両壁とも一直線に掘られ壁はほぼ直角に交わることから、東壁に竈を有す




第1層　黄褐色土層　ロームと褐色土の混土。客土層。
第2層　黒褐色土層　粘性弱い。しまりあり。φ 1cm～2cmのF・Pを少量含む。
第3層　黒褐色土層　粘性弱い。固くしまっている。粗砂を主体とする。F・P、C・Pを少量含む。
第4層　褐 色 土 層　F・A層。粘性はなくしまっている。
第5層　黒褐色土層　粘性弱い。固くしまっている。ロームブロック、C・Pを少量含む。
第6層　黒褐色土層　やや粘性をもち固くしまる。ロームブロック、C・P、炭化物を少量含む。
第7層　黒褐色土層　やや粘性あり。固くしまっている。炭化物、C・Pを少量含む。
第8層　暗褐色土層　やわらかく、やや粘性あり。ロームブロックを少量含む。
第9層　黄褐色土層　固くしまっている。やや粘性あり。
第10層　明褐色土層　焼土。固くしまっている。
第11層　褐 色 土 層　粘性弱い。しまっている。C・Pを少量含む。粗砂を主体とする。
第12層　黒褐色土層　やや粘性あり。しまっている。C・Pを少量含む。細砂を主体とする。

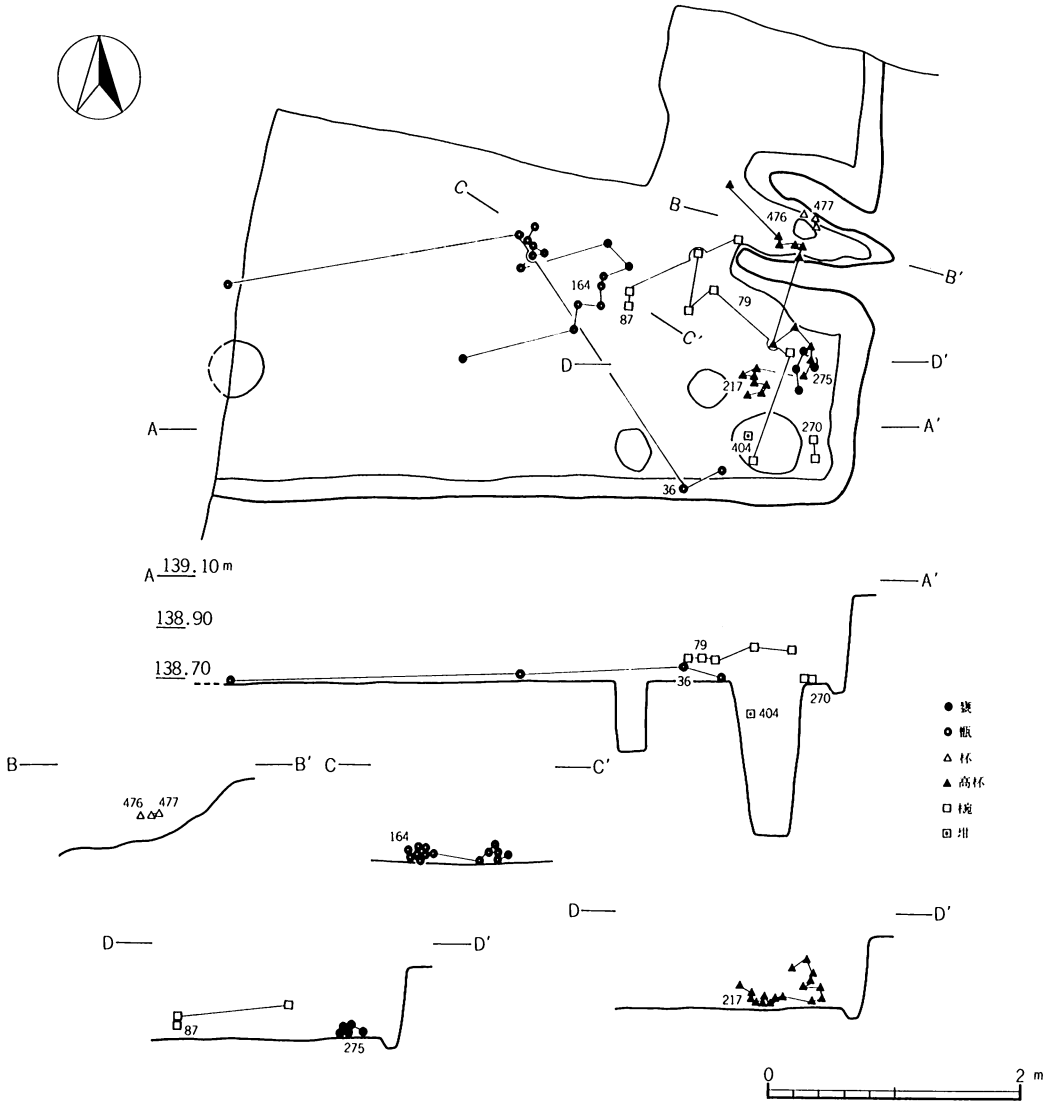
第6図　H－1号住居址（1／60）

る方形のプランを呈していたと想定できる。竈の位置や柱穴間の位置から推定すると一辺6m前後の規模と推測できる。確認面からの壁高は平均30cmで他の住居址に比較し浅い。ローム壁は平均80°の角度をもって立ち上がり明瞭に検出できた。周溝の範囲は、調査実施部については竈両袖わきから壁下を周っている。周溝幅は東壁側で平均12cm、南壁側は狭く平均8cmで深さは浅いところで3.5cm、最も深いところで10cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。




第１層　褐色土層　堅くしまる。φ２～７㎜のC・P、φ５㎜の焼土を少量含む。
第1a層　褐色土層　φ７㎜前後のC・P、炭化物を少量含む。
第２層　褐色土層　やや焼けて固くしまる。φ4㎜～５㎜C・P、焼土を少量含む。
第３層　褐色土層　焼土を主体とする。粘性なくやややわらかい。φ５㎜のC・Pを少量含む。
第４層　褐色土層　堅くしまっている。φ２㎜のC・P及び焼土粒を少量含む。粗砂を主体とする。
第５層　黒褐色土層　φ1.5cmの焼土を少量、φ３㎜～1.5cmのC・Pを３％含む。
第5a層　褐色土層　焼土の混入が多い。φ３㎜のC・Pを２％含む細砂。
第６層　赤褐色土層　よく焼け込んでいて堅い焼土。
第6a層　明褐色土層　ややしまっている焼土。粗砂を主体。
第6b層　褐色土層　ややしまりをもつ焼土。
第6c層　赤褐色土層　ややしまっている焼土。細砂を主体。
第７層　褐色土層　堅くしまる。細砂を主体とする。
第８層　褐色土層　φ３㎜の軽石を１％含む。
第９層　にぶい赤褐色土層　焼土と褐色土が混入する細砂。
第10層　褐色土層　堅くしまった粘土。
第10a層　にぶい赤褐色土層　堅くしまる焼土。微砂を主体。
第11層　暗赤褐色土層　φ１cmの焼土とφ１cmのロームブロックを斑状に含む。
第11a層　赤褐色土層　良くやけて堅くしまっている焼土。
第12層　黒褐色土層　φ２㎜のC・Pを２％含む細砂。
第12a層　暗褐色土層　φ１㎜のC・Pを少量含む細砂。粘性しまりも有す。
第13層　黄褐色土層　φ１㎜の軽石を少量含む。しまっていてやや粘性を有す。

第７図　H－１号住居址竈（１／30）

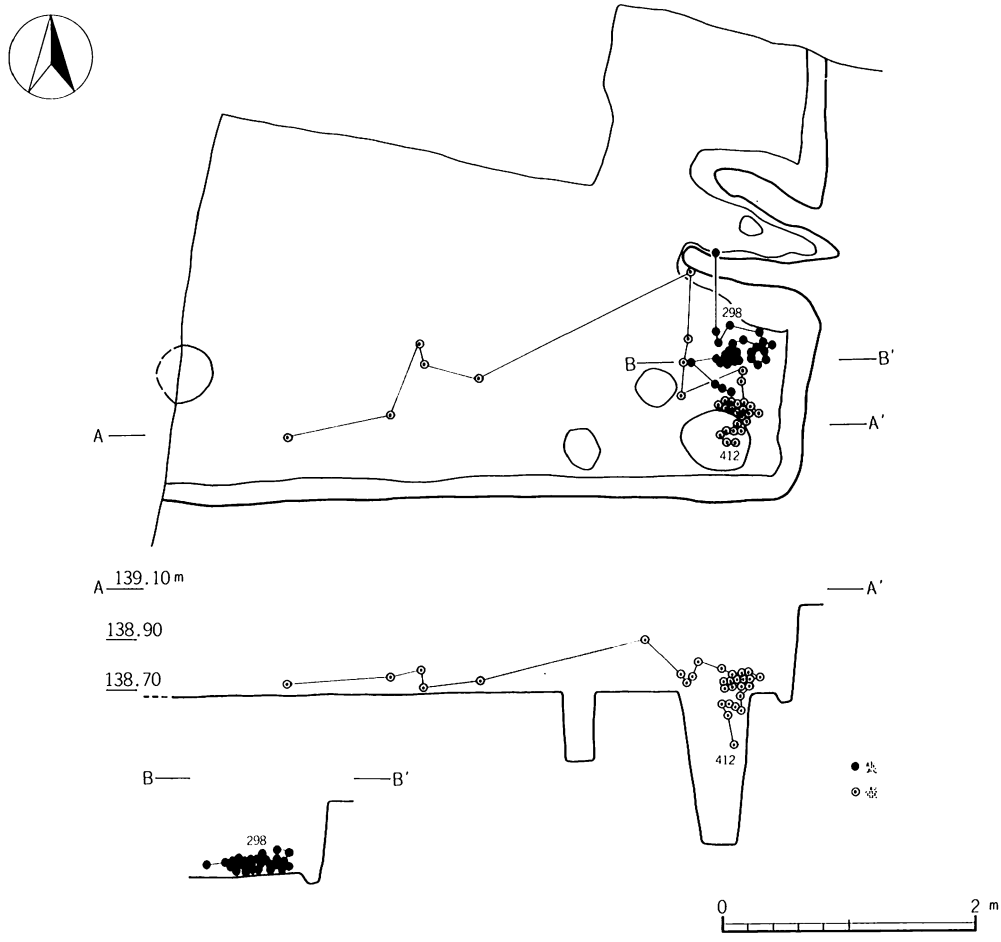



第８図　Ｈ－１号住居址遺物出土状態（１／60）

覆土は、現地表面から細分すると12層に分かれレンズ状堆積が認められた。住居址覆土は４～９層に分けられる。第１層はローム土と褐色土の混土層で、明らかに人為的に動かされた土と考えられる。第２層は上位を攪乱されているが、自然堆積を認めることができる。第３層も上位に攪乱を受けているが、それ以下の層は攪乱を受けずに堆積したことが認められる（南北地断参照）。第４層は榛名二ツ岳供給源火山灰層（FA 層）である。図版中にスクリーン・トーンを貼ったところが FA 層である。床面はローム層を掘り込んで削平した後、貼り床を施しほぼ平坦に形成され、南壁側は中央部に比べ約５cm低くなっている。床の堅緻な

| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 24 | 22 | 87 |
| $P_2$ | 30 | 30 | 62 |
| $P_3$ | 56 | 48 | 66 |
| $P_4$ | 32 | 28 | 28 |

ピット計測表




第９図　Ｈ－１号住居址遺物出土状態（１／60）

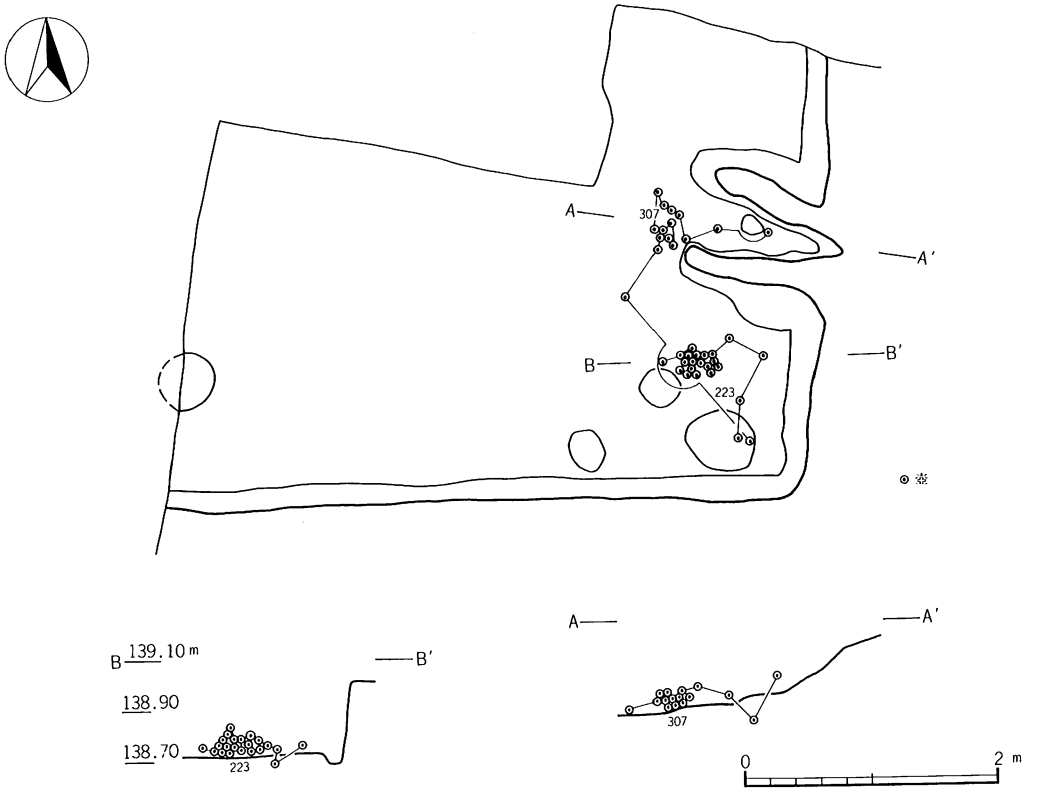
面は住居中央部付近と竈焚口付近から貯蔵穴周辺にまで広がっている。

床面上には４ケ所のピットを検出した。$P_1$・$P_2$は円形を呈し深さ87cm、62cmを測り主柱穴のものと考えられる。覆土の大半はローム土を含む暗褐色土層である。$P_3$は楕円形の貯蔵穴、$P_4$は入口施設に伴なうピットと考えられる。$P_1$—$P_2$のピット間の距離は3.7mである。

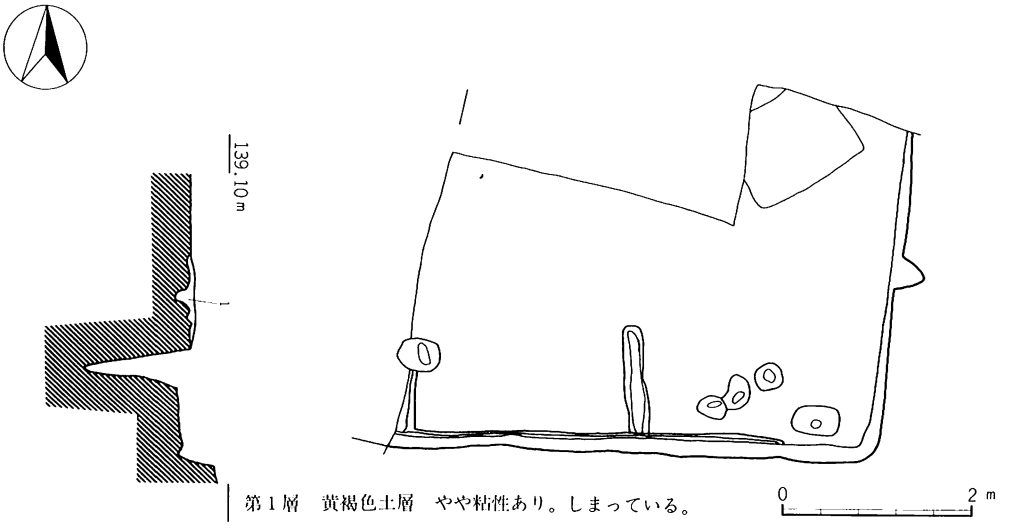
**竈**（第７図、図版３）

東壁の中央部よりやや南寄りに位置すると考えられる。全長130cm、幅120cm、焚口部長55cm、燃焼部長40cm、煙道部長35cm、焚口部幅42cm、燃焼部幅40cm、煙道部幅30cm、煙道部の立ち上がり20°を呈する。主軸方位は、N—17.5°—Eを指す。全体的に残存状態は良好で、竈内壁の断面は「U」字形を呈し良く焼けていた。また、支柱としてはほど良い位置に良く焼けこんだ土の塊が検出された。おそらく支柱として使用されたと推定できる。

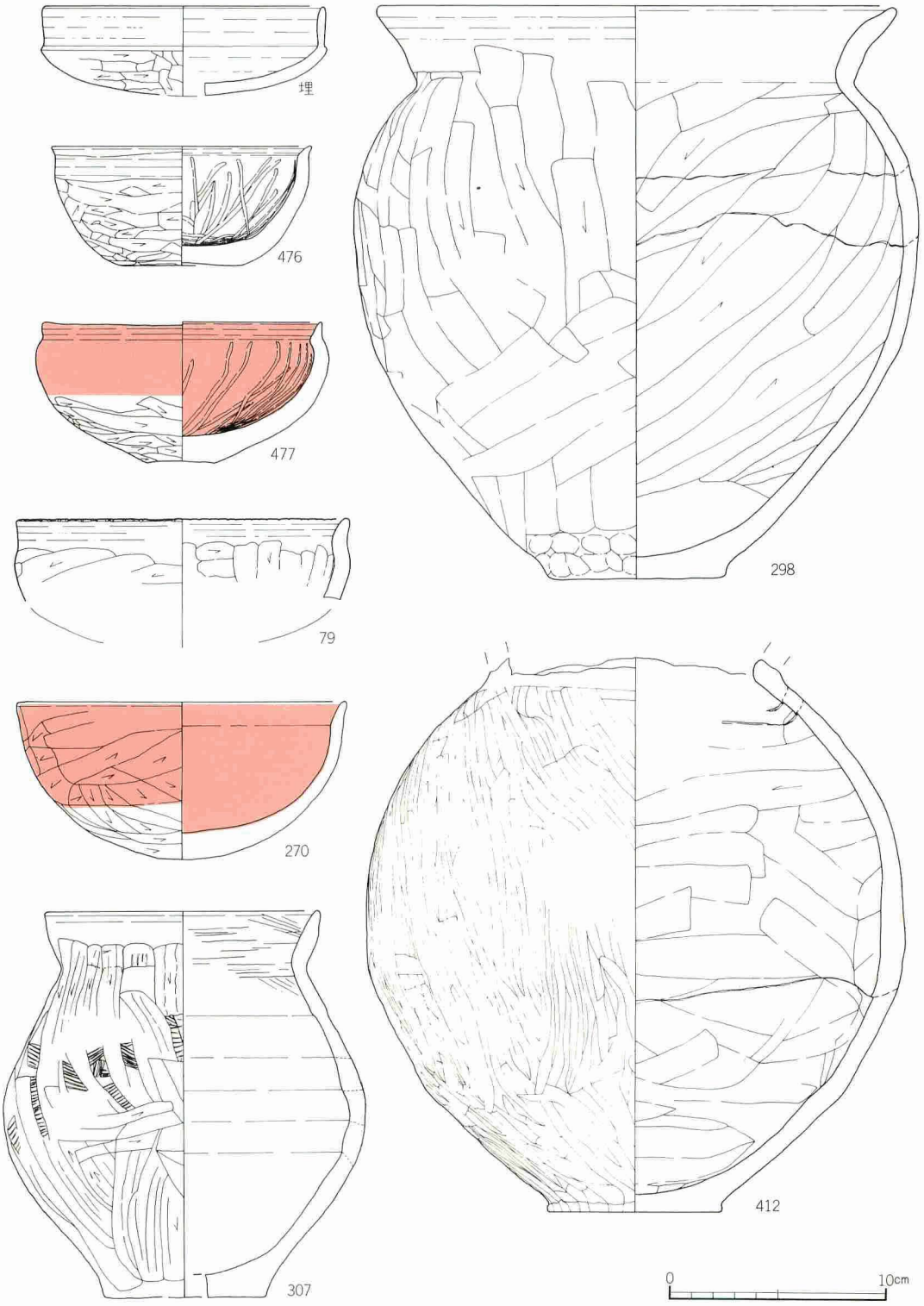
１層から７層までが覆土で焼土粒子を含んでいる。８層から13層が構築土である。袖部は粘土を用いて構築され、基底にローム主体の黄褐色土を敷きその下に$\phi$２㎜の軽石を含む黒褐色土を




第10図　H－1号住居址遺物出土状態（1／60）




第11図　H－1号住居址掘り方（1／80）




第12図　H－1号住居址出土遺物（1／3）

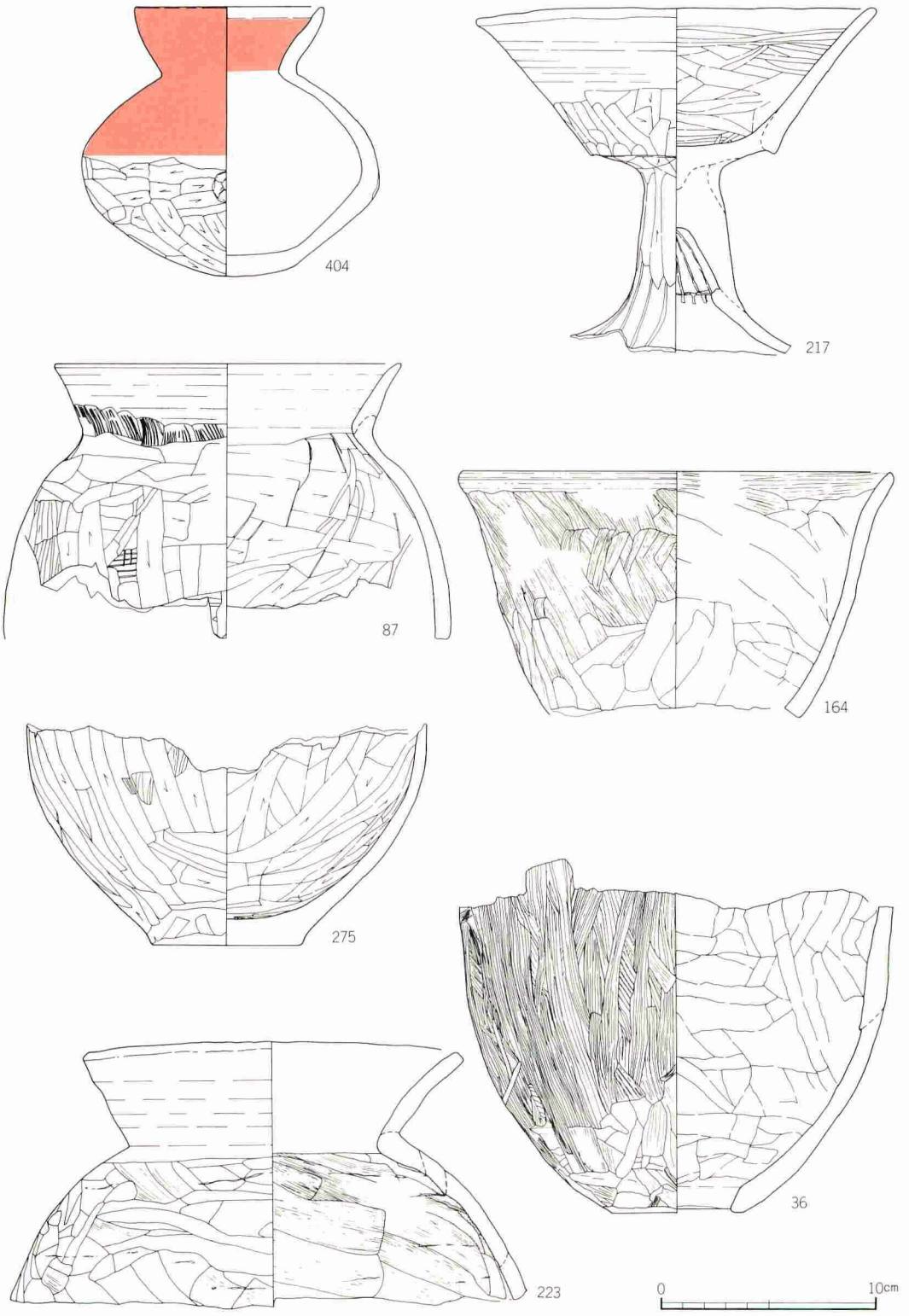
| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 埋土 | 杯 | (12.9)<br>4.1 | 扁平な体部は内湾ぎみに立ち上がり外稜を有す。口縁部は直立する。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリ。 | 口縁、体部、横ナデ。 | ①橙色②良好③¼④密 |
| 476 | 杯 | (11.9)<br>5.4<br>(5.8) | 口縁部は短くわずかに外反する。体部は平底の底部から内湾ぎみに立つ。底部に厚みをもつ。 | 口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。 | 口縁部横ナデ。体部は斜方向のミガキの後、縦方向のミガキ。底部は縦方向のミガキ。 | ①橙色②きわめて良好③¼④密 |
| 477 | 杯 | (12.8)<br>6.5<br>(3.1) | 底部は小さな平底で、体部は内湾ぎみに立ちあがり、口縁部は短く外反する。 | 口縁部、横ナデ。体部上位は、指おさえの後、横ナデ。体部、横方向のヘラケズリ。 | 口縁部横ナデ。体部は放射状の暗文を呈す。 | ①にぶい橙色②きわめて良好③⅖④密⑤口縁から体部中位に赤色塗彩 |
| 79 | 椀 | (15.2)<br>——<br>—— | 口縁部は短く、やや外反する。 | 口縁部、横ナデ。 | 口縁部、横ナデ。 | ①灰黄褐色②良好③口縁½④やや粗 |
| 270 | 椀 | (15.0)<br>7.2<br>2.0 | 体部は小さな平底の底部から内湾ぎみに立ち口縁部はわずかに外反する。 | 口縁部、横ナデ。体部下位から底部にかけてヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。体部、横ナデ。 | ①淡橙色②良好③⅔④密⑤内面と外面、体部上位に赤色塗彩 |
| 307 | 壺 | 12.7<br>17.8<br>7.4 | 口縁部は、ゆるやかに外傾する。体部中央に最大径をもつ。やや縦長の球胴形を呈す。平底。 | 口縁部、横ナデ。頸部、縦方向のハケメ。胴部上位、横方向のハケメの後棒状工具で沈線状を呈す。胴部下位、棒状工具で沈線状を呈す。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のヘラケズリ。頸部、ヘラケズリの後、指おさえ。 | ①にぶい橙色②良好③⅔④密 |
| 298 | 甕 | (23.8)<br>26.2<br>8.0 | 底部は平底で、胴部上位に最大径をもち、下位ですぼまる。口縁部は「く」の字状に外反する。 | 口縁部、横ナデ。胴部上位、ナデ。胴部中位縦方向のヘラケズリ。胴部下位ナデ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、斜方向のヘラケズリ。底部、ナデ。積み上げ痕を残す。 | ①にぶい橙色②良③⅗④やや粗 |
| 412 | 壺 | ——<br>——<br>8.0 | 胴部中位に最大径をもち、底部は、円形の小さな平底で球形を呈する。 | 胴部上位、斜方向のヘラケズリ。胴部中位、縦方向のヘラケズリの後、ナデ。胴部下位、縦方向のヘラケズリ。 | 胴部、横方向のヘラケズリ。 | ①にぶい橙色②良好③⅔④やや粗 |

H－1号住居址土器観察表

敷いている。火床面は床面よりやや上がりぎみで煙道部に至る。火床部の下にはローム主体の黄褐色土が敷かれ掘り方は楕円形を呈する。煙道部の掘り方は、40°の傾斜で三角形状に30cm張り出す。また、東壁から3mの竈前方に炉址が存在する。形態的には地床炉であり炉床は火により赤化しており、堅緻な面であった。類例としては粕川村前田遺跡1号住例があげられ、時期的には本住居址と一致するものである。また本遺跡2号住も同一時期であるが、住居形態から見れば本住居址の方が古い様相を呈するといえよう。

**遺物出土状態**（第8・9・10図、図版3）

遺物の平面分布を見ると竈の前面及び竈と貯蔵穴の間、貯蔵穴の上部に遺物の集中が見られる。まず図示した404（第8図）の坩は、貯蔵穴の中で床面から約10cm下ったところから直立した状態




第13図　H－1号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 404 | 坩 | 8.8<br>12.4 | 底部は丸底。口縁部は「く」の字状に外反し口唇部でやや内湾する。最大径は、胴部中位にもつ。胴部中位に穿孔を意識した痕跡を呈す。 | 口縁部、横ナデ。胴部上位、ミガキ。胴部下位、ヘラケズリの後ナデ。 | 口縁部、横ナデ。口唇部に磨耗痕を有す。口縁部ミガキ。胴部、ヘラケズリ。 | ①にぶい橙色②きわめて良好③ほぼ完形④胴部中位に穿孔痕を呈す⑤外面に赤色塗彩、内面口縁部、赤色塗彩 |
| 87 | 壺 | (16.1)<br>——<br>—— | 口縁部はゆるやかに外傾する。 | 口縁部、横ナデ。頸部、縦方向のハケメ。胴部、横方向のハケメの後、縦方向のハケメ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のハケメ。 | ①にぶい橙色②良好③胴部上位から口縁部にかけて⅓④やや粗 |
| 275 | 甕 | ——<br>——<br>6.9 | 底部は厚みをもつ平底。 | 胴部、縦方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 | 胴部、横方向のヘラケズリの後、斜方向のヘラケズリ。 | ①にぶい橙色②良好③底部と胴部下位⅔④やや粗 |
| 223 | 壺 | 17.6<br>——<br>—— | 口縁部は「く」の字状を呈す。 | 口縁部、横方向のナデ。胴部、斜方向のハケメの後、ナデ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のハケメ。 | ①にぶい橙色②良好③胴部上位½、口縁部½④やや粗 |
| 217 | 高杯 | 18.4<br>——<br>—— | 杯部は深く、口縁部は外傾する。柱部はやや円筒状を呈す。 | 口縁部から体部上位にかけて横ナデ。体部下位は縦方向のナデ。脚部から裾部にかけて縦方向のナデの後、縦方向のミガキ。 | 口縁部から体部にかけて横方向のナデ。裾部横方向のナデ。 | ①にぶい橙色②良好③杯部⅔脚部⅔④内面、外面の一部に赤色塗彩 |
| 164 | 甑 | ——<br>——<br>—— | 口縁部はやや外傾する。 | 口唇部横ナデ。口縁部から頸部にかけて斜方向のハケメ。胴部斜方向と縦方向のハケメ。 | 口縁部、横ナデの後、横方向のハケメ。 | ①灰白色②良好③胴部から口縁部にかけて⅓ |
| 36 | 甑 | ——<br>——<br>5.0 | | 縦方向のハケメ。 | 胴部下位、横方向のハケメ。底部、ヘラケズリ。胴部、ヘラナデ。積み上げ成形の痕跡を残す。 | ①にぶい橙色②良好③胴部下位½④密 |

H－1号住居址土器観察表

で出土している。307（第10図）の壺は竈の前面を中心にして、床面直上で重なり合って存在し、1.7m近く離れて貯蔵穴の中の一辺（床面より5cm近く低い）が接合している。223（第10図）の壺は竈と貯蔵穴の間にまとまって床面直上に重なり合って出土し、60cm以内に4片が接合しその中の1片が貯蔵穴内である。87（第8図）の壺は竈右袖前面にほぼ同レベルで1m近く離れて3片が接合している。412（第9図）の壺は貯蔵穴内でも床面から20cm以内と比較的浅めにひとかたまりになって、また貯蔵穴北側の端部に半割れの状態で重なったものと、それから最大3.4m先にちらばった6片が広範囲に接合した。次に杯477（第8図）は竈東西セクション検出時に火床面から出土した2片が接合し、そのすぐそばのほぼ同レベルから杯476（第8図）が出土している。杯埋土は本住居址掘り下げ中において比較的浅いレベルから出土した。椀79（第8図）は、竈と貯蔵穴付近にほぼ同レベルで最大2m近く離れている5片の接合である。椀270（第8図）は南東の角で床面直上の高さに存在した2片が接合している。217（第8図）の高杯は竈右袖わきから出土した

ものと竈内の6片で接合できた。275（第8図）の甕は竈右袖にほぼ床面直上の高さに存在し接合している。298（第9図）の甕も竈右袖わきの床面直上に半割れの状態で重なり合って存在したものが接合した。164（第8図）の甑は住居中央よりのほぼ床面直上に存在し1m四方内での接合を見せている。36（第8図）の甑は、ほぼ床面直上の高さに存在し広範囲に4片の接合を示す。

垂直分布を見ると、床面直上で水平接合するものに36の甑、270の椀があり、床面からやや浮いて接合するものに79の椀、87の壺、477の杯がある。床面直上出土とやや浮いたもので接合するものに217の高杯、275の甕、298の甕、223・307の壺がある。貯蔵穴内出土のものと浮いているもので接合し、斜線で結ばれるものに412の壺がある。床面直上出土とやや浮いたもので水平接合するものに164の甑がある。赤色塗彩土器3点は、404の坩が貯蔵穴内、477の杯が竈内、270の椀が床面直上から出土している。

遺物の出土状態から、完形個体が坩1点のみということは、住居廃棄時点で持ち去り、竈内及び床面直上から出土している土器は、住居廃棄後放置或るいは投棄された可能性が強いと推定できる。また、竈と貯蔵穴の間に壺1、甕3、高杯1が半割れの状態で重なり合うように集中して出土したことは、自然的要因を考えるより、むしろ人為的要因を考えた方が自然に思える。

**出土遺物**（第12・13図、図版24）

本住居址、出土遺物は、土師器487点と若干の埋土遺物である。図示したものは土師器壺4個体、甕2個体、甑2個体、坩1個体、高杯1個体、椀2個体、杯2個体である。壺の外面調整はハケメを有す、ミガキを有す、ケズリのみ有すの3つに分けられる。また、口縁部が「く」の字状に外反する傾向をもつ。甕は胴上位に最大径を有す球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に大きく外反し内外面にケズリを施す。甑は外面にハケメ調整が施され、164は鉢形、36は長胴形を呈すと思われる。杯は、外稜を有し口縁が直立するものと、内斜口縁を呈するものに分けられる。また内斜口縁の杯の中でも477は、肥厚した小さい平底を呈すが、476は比較的大きな平底である。椀は、赤色塗彩の有無で大きく2つに分けられるが、内外面の調整を見ると、外面にケズリをもつ270と内外面にケズリをもつ79に分けることができる。404の坩は、ほとんど完形に近い唯一の遺物で赤色塗彩を有するものの1つである。胴部中位には、直径1.5cm、深さ1cmの凹痕が認められることから、当初は瑯を意識して穿孔するつもりであったが、何らかの理由により中止されたと考えられる。このような穿孔途中製品の類例としては、昭和59年度、前橋市で発掘調査した「柳久保遺跡群」のH－1号住居址出土遺物の中に見ることができる。なお、埋土の杯は他の遺物との共伴関係からして、本住居に流れ込んだと考えられる。（福田）

### Ｈ－２号住居址

**遺構**（第14図・17図、図版４・５）

本住居址は、発掘区域の西、Ｅ・Ｆ－４・５・６グリッドに位置し、Ｈ－１号住居址から東へ６ｍのところに構築している。平面プランの規模は、長軸6.5m、短軸5.8mの方形を呈し、床面積は34.5m²である。主軸方位は、Ｎ－90°－Ｅを指している。

東壁と南壁はほぼ直線状でコーナーを直角に交えるが、北壁は外方にふくらむ。西壁と東壁は平行にならないため、南西、北西のコーナーは鈍角を呈する。各壁の長さはそれぞれ異なり、東壁5.5m、西壁5.3m、南壁5.9m、北壁6.3mを測る。確認面からの壁高は、北壁、西壁が深く45～55cmを測り、南壁、東壁は30～40cmを測る。平均壁高は45cmを測り、Ｈ－１号住居より若干深くなっている。ローム壁は、平均80°の角度をもって立ち上がり４壁とも明瞭に検出できた。

覆土は第14図土層地断Ｂ－Ｂ′に示されるように、５層に分けられレンズ状の堆積が認められた。ここで鍵層となるものが、スクリーン・トーンをかけた第２層の榛名二ツ岳供給源火山灰層（FA層）である。このFA層は、住居中央部で床面から25cm、厚さ10cmを測り堆積の状況から見て自然堆積したことは明瞭である。

周溝は、竈両袖わきから壁下を全周している。幅は、西・北壁ぞいよりも東・南壁のほうが狭く10～35cmを測り、深さは最大で6.5cm、平均５cmを測る。

床面はローム層を掘り込んで削平した後貼り床を施している。床面には凹凸が認められレベル差は17cm内外でおさまる。４個の主柱穴に囲まれた範囲、および南壁中央に接する付近と貯蔵穴のまわりはよく踏み固められ堅緻な状態を呈していた。貯蔵穴の周囲は一段高くなりテラス状を呈し、７～10cm高くなっている。また、入口状施設に関係する南壁中央部も５cm前後の高まりをもっていた。

床面上には６ケ所のピットを確認している。主柱穴は$P_1$～$P_4$の４個で、$P_5$は円形の貯蔵穴、$P_6$は入口状施設に伴うものと考えられる。各主柱穴の中心点を結んだ相互の間隔は、$P_1$－$P_2$が2.9m、$P_2$－$P_3$が2.6m、$P_3$－$P_4$が2.9m、$P_4$－$P_1$が2.5mで、$P_1$－$P_3$、$P_2$－$P_4$を結ぶ対角線の長さは、3.9m、3.8mを計測する。

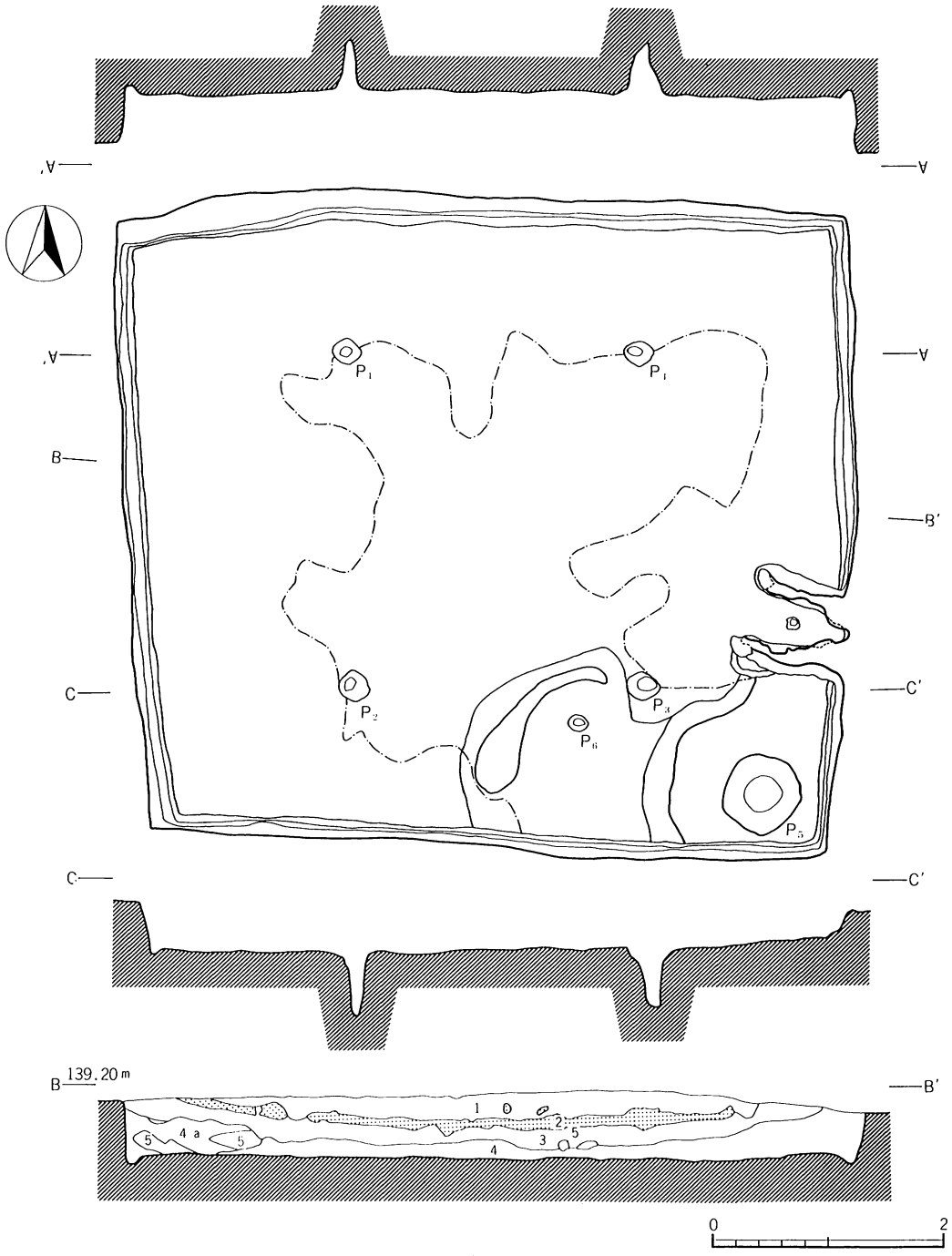
**竈**（第15図、図版５）

竈は東壁の中央部よりやや南寄りに設置されている。遺存状態は良好で両袖が残存していた。全長95cm、幅90cm、焚口部長45cm、燃焼部長50cm、焚口部幅45cm、燃焼部幅40cm、煙道部幅13cmの規模である。竈内壁の断面は「Ｕ」字形を呈し火床面は平坦で良く焼け、支柱には安山岩質の円礫が使われている。火床面は床面よりも若干低く、煙道部は緩やかな傾斜をもち、先端部で急角度に立ち上がる。

| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 26 | 23 | 43 |
| $P_2$ | 25 | 24 | 51 |
| $P_3$ | 29 | 24 | 59 |
| $P_4$ | 25 | 23 | 39 |
| $P_5$ | 70 | 69 | 67 |
| $P_6$ | 18 | 14 | 10 |

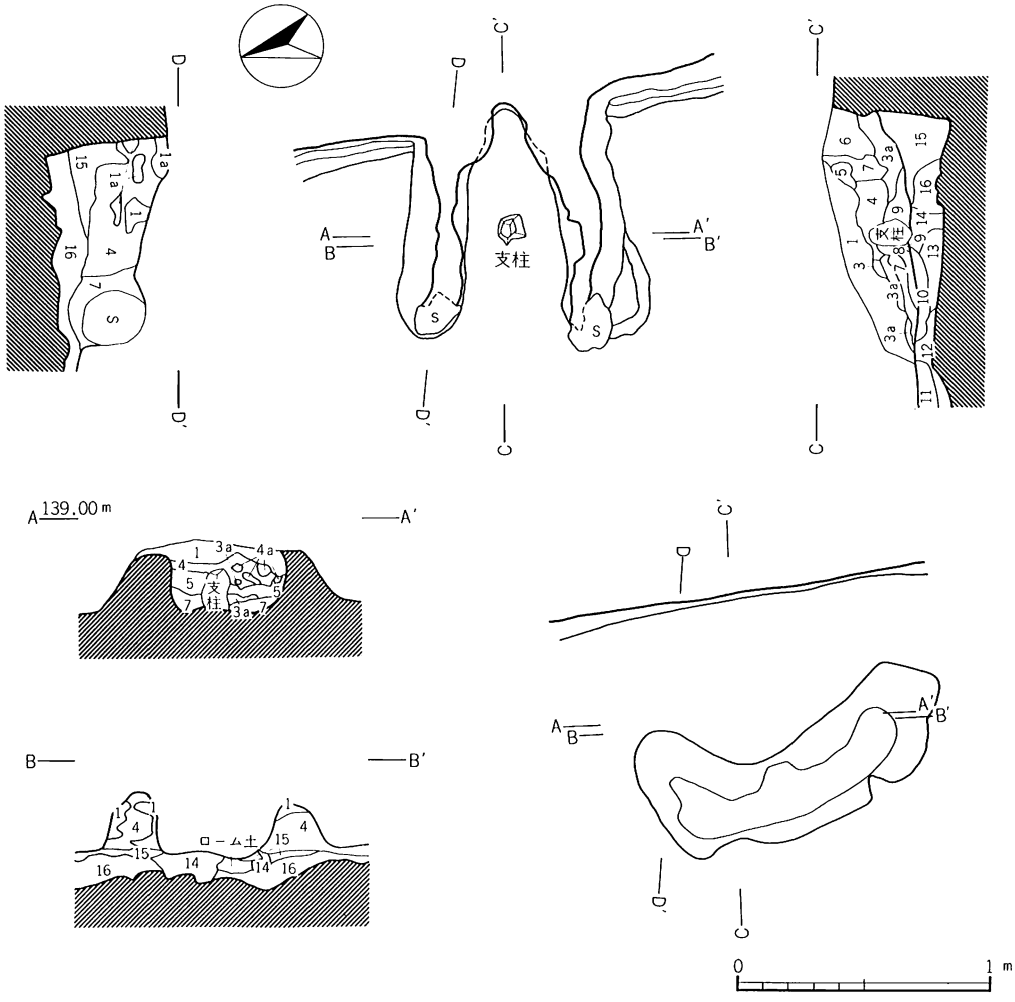
ピット計測表

袖部は白色粘土で造られ、基底に焼土ブロック混じりの



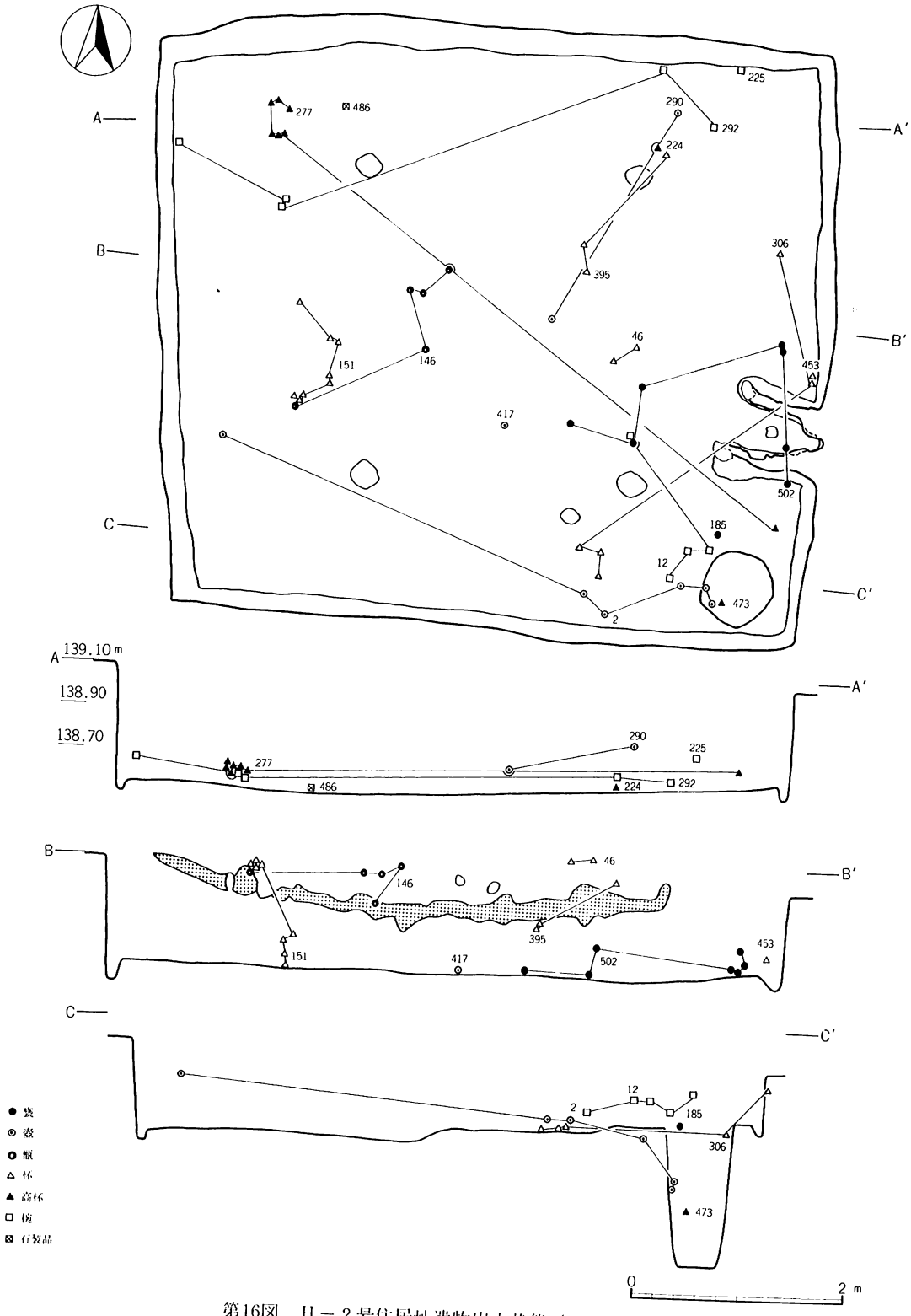

第1層　黒褐色土層　φ5㎜の礫1％、φ1㎝のF・Pを少量含み、1.5㎝×2㎝のF・Aブロックを混入する細砂。
第2層　褐色土層　F・A層。
第3層　黒色土層　φ3㎜～8㎜の礫を5％含む。しまりがあり粘性を有す細砂。
第4層　黒褐色土層　φ4㎝のロームブロックを少量含む。やや粘性をもった細砂。
第4a層　黒褐色土層　φ2㎝のロームブロックを少量含む細砂。
第5層　黒褐色土層　しまりのある、やや粘性をもった細砂。

第14図　H－2号住居址（1／60）

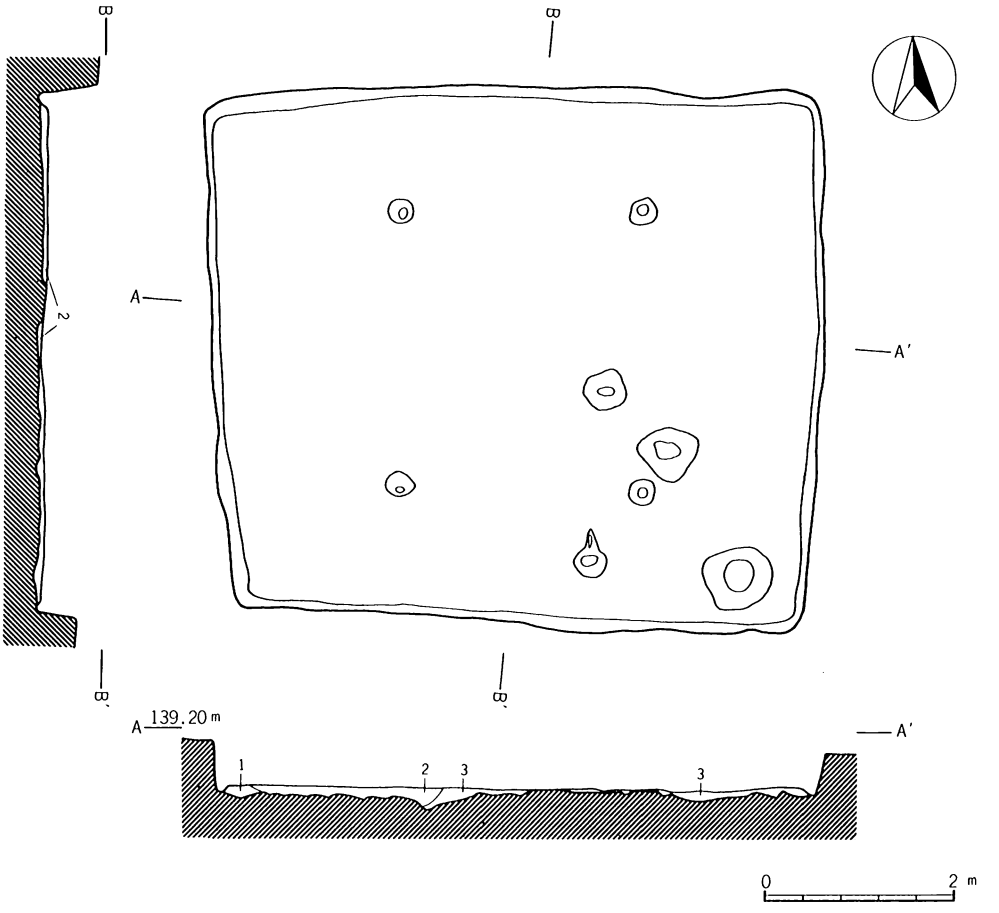



第１層　黒褐色土層　φ３㎜～1.5cmのC・P、φ５㎜の焼土ブロック、φ１cmのロームブロックを少量含む細砂。堅くしまりやや粘性を有す。
第1a層　１層と同じだが、焼土を含まない。
第２層　黄褐色土層　φ５㎜のC・Pを３％含む粗砂。粘性なし。
第３層　にぶい黄褐色土層　ややしまりが弱い焼土。
第3a層　明赤褐色土層　よく焼けている焼土。
第４層　にぶい黄褐色土層　φ５㎜の焼土を１％含む白色粘土。
第4a層　灰褐色土層　堅くしまり粘性を有す。
第５層　褐色土層　φ３㎜の軽石を１％含み堅くしまる。
第６層　暗褐色土層　φ５㎜の軽石を少量含み灰を混入。
第７層　暗褐色土層　φ３㎜の焼土１％、φ３㎜のC・P少量、炭化物、灰を含む。
第８層　褐色土層　φ３㎜～４㎜のC・Pを１％含む。
第９層　褐色土層　φ５㎜の焼土、φ２㎜～４㎜の軽石を少量含み、灰の混入が多い。
第10層　赤褐色土層　よく焼けて堅い焼土。
第11層　褐色土層　灰と焼土を混入する細砂。
第12層　褐色土層　粘性のない微砂。
第13層　にぶい黄褐色土層　φ１㎜～２㎜の軽石を１％含む細砂。粘性を有す。
第14層　暗褐色土層　φ２㎜～１cmの焼土ブロックを少量含み灰を混入する細砂。
第15層　黒色土層　φ２㎜～５㎜のC・P、φ５㎜～２cmの焼土ブロックを若干含む。
第16層　暗褐色土層　φ２㎜の軽石を２％、φ３㎜の焼土ブロックを少量含む。

第15図　H－２号住居址竈（１／30）




第16図　H－2号住居址遺物出土状態（1／60）



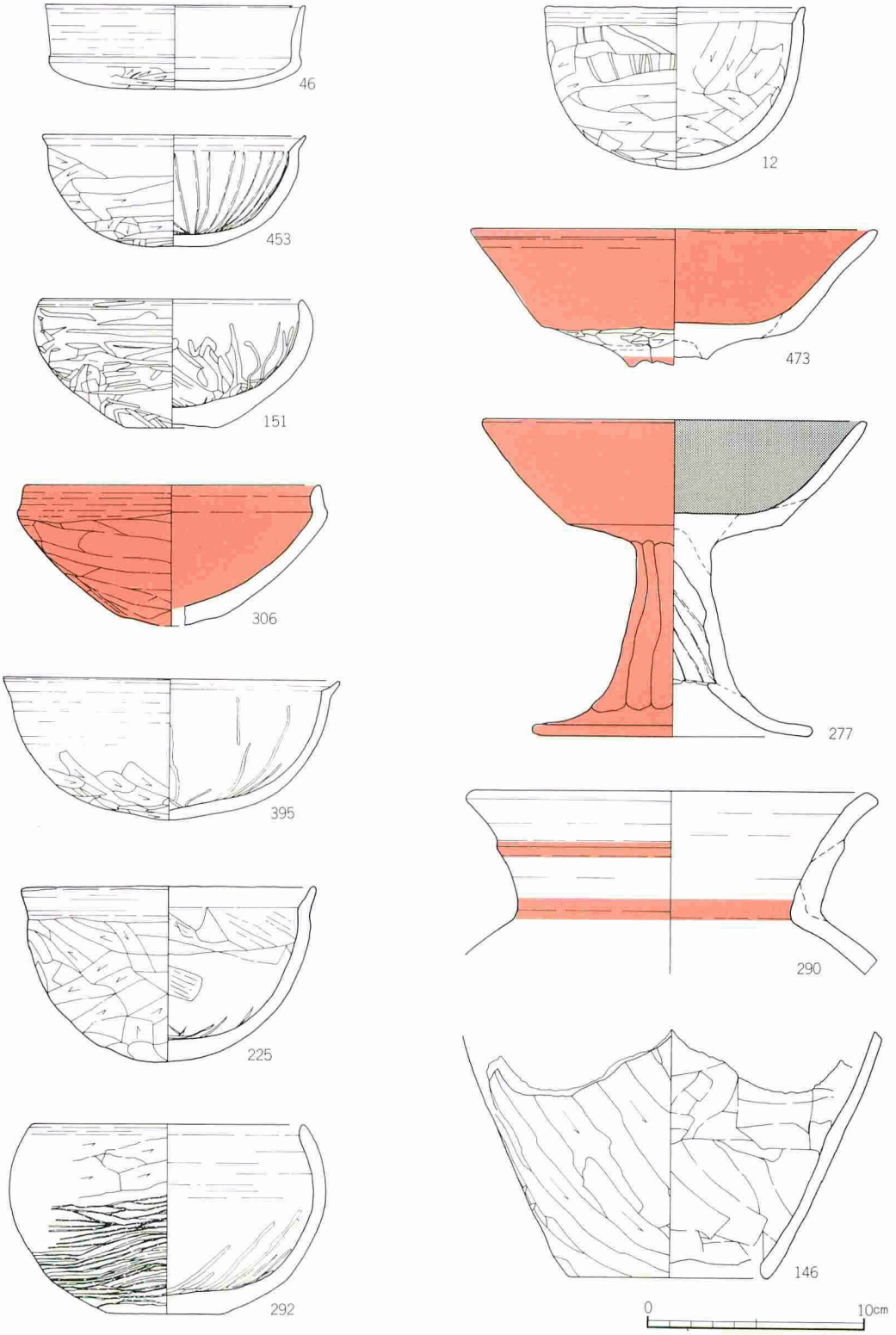

第1層　にぶい黄褐色土層　φ 2㎜の軽石を若干含む。しまりのある粘性をもった微砂。
第2層　褐　色　土　層　φ 2㎜の軽石を3％含み、暗褐色土を斑に混入する。
第3層　暗　褐　色　土　層　φ 3㎜のC・Pを2％含み、若干の粘性をもつしまりのある微砂。

第17図　H－2号住居址掘り方（1／80）

暗褐色土を敷き、その上にC軽石を含む黒色土を敷き込んである。火床部の基底も袖部と同様であった。両袖の先端には、円礫を1個ずつ埋め込み袖の補強材として使用していた。この類例として、昭和58年度に前橋市教育委員会で調査した端気遺跡群IIの第8号住居址竈があげられる。

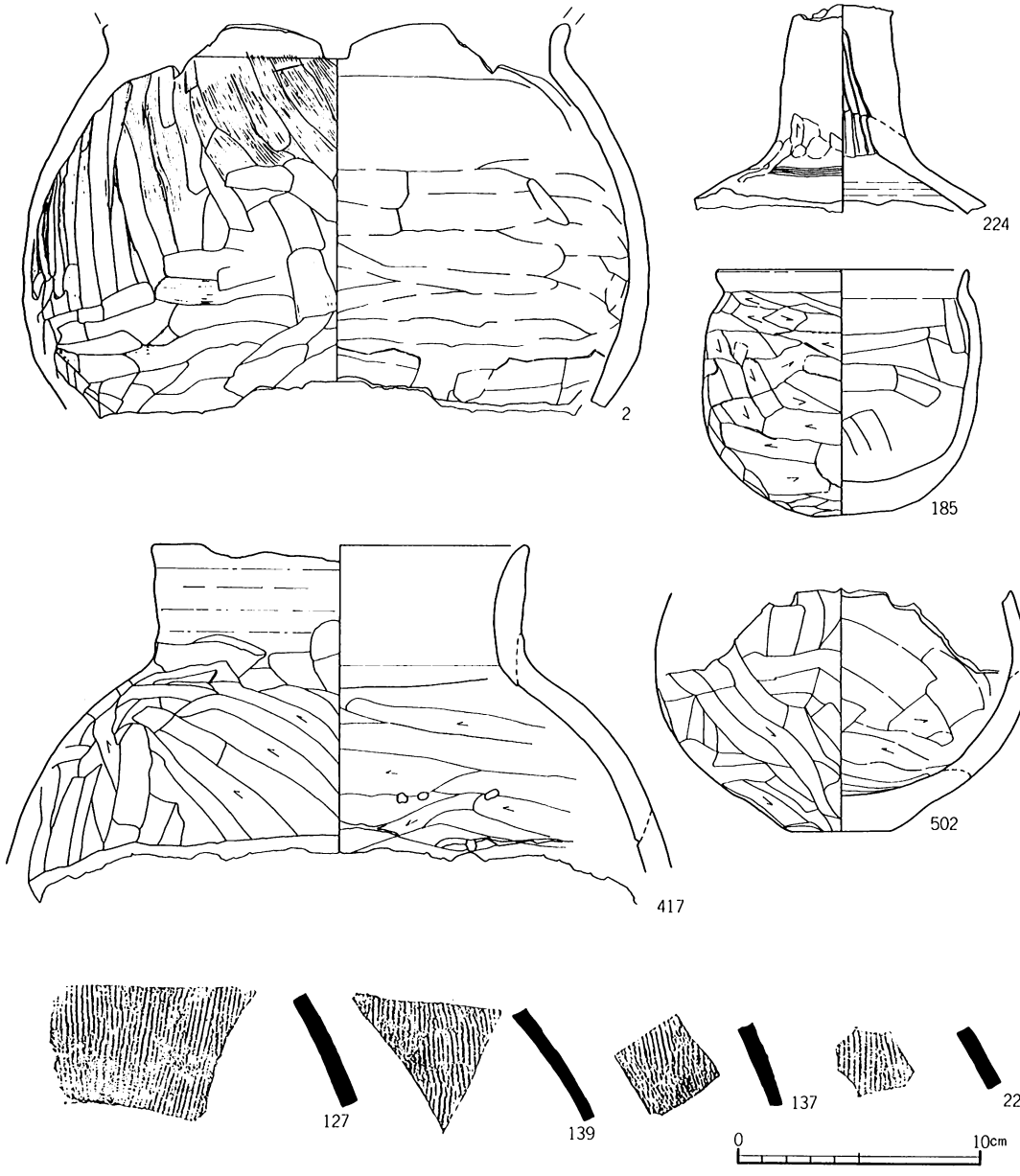
**遺物出土状態**（第16図）

遺物は、住居址全体に分布しH－1号住居址のような集中性は認められなかった。完形土器として小形の甕と椀が1個体ずつ出土した。平面図から、甕は竈と貯蔵穴の付近に散在して出土し、甑は住居中央部よりやや西寄りに存在している。壺は住居の中央部と南壁、北壁ぞいから出土している。杯は5個体中、3個体が竈周辺から出土しているが、床面直上の高さに存在したものは2個体であった。椀2個体は、竈周辺で床面よりやや浮いた位置から出土した。高杯は、貯蔵穴内と北壁付近から出土している。185の完形小形甕は、貯蔵穴と竈の間で床面直上から横転した状態で出土した。502の甕は、床面直上のものとやや浮いたもので接合している。146の甑は、FA層




第18図　H－2号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 46 | 杯 | (11.9)<br>3.8 | ほぼ均一した厚みをもつ、体部は扁平で口縁はわずかに外反する。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリの後ナデ。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリの後ナデ。 | ①橙色②良好③1/3④密 |
| 453 | 杯 | (12.0)<br>5.1 | ほぼ均一した厚みをもつ。底部は平底ぎみを呈す。口縁部は短かく外反する。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリ。底部、ヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。体部、横ナデの後、放射状の暗文を呈す。 | ①明褐色②良好③3/4④やや粗 |
| 151 | 杯 | 11.9<br>5.9<br>4.3 | ほぼ均一した厚みをもつが、体部と底部の接合付近で厚みをもつ。底部は小さな平底で、体部は内湾ぎみに立ち口唇部でさらに内湾する。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリの後ミガキ。底部ヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。体部、横ナデの後ミガキ。 | ①にぶい橙色②きわめて良好③4/5④密 |
| 306 | 杯 | 13.6<br>6.5<br>—— | ほぼ均一した厚みをもつ。体部は急に立ち上がり、口縁部で内湾する。底部は小さく安定感がない。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリの後ナデ。底部、ヘラケズリ。 | 口縁部、体部、横ナデ。 | ①褐色②良好③2/3④密⑤内外面赤色塗彩 |
| 395 | 杯 | (15.4)<br>6.5 | 底部はなだらかに、体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は外反する。 | 口縁部、体部、横ナデ。底部、ヘラケズリ。 | 口縁部、体部、底部、横ナデ。体部、底部、縦方向のミガキ。 | ①明赤褐色②良好③1/3④密 |
| 225 | 椀 | 13.4<br>8.1 | 底部は平底を意識した丸底。体部は半球状を呈す。 | 口縁部横ナデ。体部、ヘラケズリ。底部、ヘラケズリの後ミガキ。 | 体部、横方向のヘラナデ。底部、縦方向のミガキ。 | ①にぶい橙色②きわめて良好③完形④密 |
| 292 | 椀 | (12.5)<br>8.8<br>5.2 | 平底の底部に最大厚をもつ。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でさらに内湾する。 | 口縁部、横ナデ。体部は櫛状工具による横方向のナデ。 | 口縁部、横ナデ。体部、横方向のナデの後、放射状の暗文を呈す。 | ①にぶい赤褐色②やや不良③1/3④やや粗⑤内面に赤色塗彩、外面体部に煤付着 |
| 12 | 椀 | 12.0<br>7.5 | 底部は丸底で、体部は半球形状を呈す。口縁部はやや外反する。 | 口縁部、横ナデ。体部から底部にかけて横方向のヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリ。 | ①にぶい褐色②やや不良③2/3④やや粗⑤外面1/4に煤付着 |
| 473 | 高杯 | 18.6<br>——<br>—— | 内面、底部は平坦。底部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反して開く。 | 口縁部から体部にかけて横ナデ。底部、横方向のヘラケズリ、口唇部、ヘラケズリ。 | 口縁部、体部、底部、横ナデ。 | ①赤色②きわめて良好③杯部4/5④精良⑤内面、赤色塗彩。外面、体部と底部1/2に赤色塗彩、体部2/5に煤付着 |
| 277 | 高杯 | 17.7<br>(14.5)<br>(12.9) | 底部内面は平坦で、体部はやや内湾して立ち上がる。底部と体部との境に稜をもつ。 | 口縁部、横ナデ。体部、底部、横ナデ。柱部、縦方向のヘラケズリの後、ナデ。裾部、横ナデ。 | 口縁部、体部、底部、横ナデ。 | ①にぶい赤褐色②きわめて良好③脚部の一部欠損④精良⑤外面、赤色塗彩内面黒色塗彩 |
| 290 | 壺 | (18.8)<br>——<br>—— | 口縁部はなだらかに外反し、口縁部中央にわずかな段をもつ。 | 口縁部、横ナデ。 | 口縁部、横ナデ。 | ①にぶい橙色②良好③口縁部の片辺④密⑤外面、頸部と段に赤色塗彩 |




第19図　H－2号住居址出土遺物（1／3）

より上位のものの接合であり、46の杯も同様である。次に2の壺は広範囲にわたり最大45cmのレベル差をもって接合可能となった。290は、壺の2片の接合であった。417の壺は、住居中央床面直上に半割れの状態で出土した。椀225は、床面から10cm浮いて完形のまま西方向に傾いた状態で出土し、椀12は、床面から15cm前後浮いたものが斜の線で接合できた。内斜口縁の杯453は、東壁下の床面からやや浮いて北方向に傾いて直立した状態で出土していた。杯306は床面直上の水平接合と東壁中位の接合が可能となった。473の高杯は、貯蔵穴内底部から20cmの位置に直立の状態で、224の高杯は床面直上に横転して、227の高杯は、床面より10cm浮いたものが広範囲に水平接合可

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 146 | 甑 | ——<br>——<br>(8.0) | | 斜方向のヘラケズリ。 | ヘラナデ。 | ①にぶい橙色②良好③底部½④やや粗 |
| 2 | 壺 | ——<br>——<br>—— | 胴部中位に最大径をもち球形を呈する。 | 胴部上位、縦方向のハケメ。胴部中位、横方向のヘラケズリ。 | 胴部、横方向のヘラケズリ。 | ①にぶい褐色②良好③胴部上位½④やや粗 |
| 417 | 壺 | (15.5)<br>——<br>—— | 口縁部は直に立ち上がる。 | 口縁部、横ナデ。胴部、斜方向のヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のヘラケズリ。 | ①橙色②やや不良③胴部上位から口縁にかけて⅖④密 |
| 224 | 高杯 | ——<br>——<br>—— | 杯接合部から裾端部に向かうにつれて、次第にうすくなる。 | 柱部、ナデ。裾部、横ナデ。 | 脚部、絞り目痕。裾部、横ナデ。 | ①にぶい橙色②良好③脚部⅔④密 |
| 185 | 甕 | 10.3<br>10.1<br>3.3 | 底部は小さい平底で、胴部中位に最大径をもつ。頸部で少しくびれ口縁部はやや外反する。 | 口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリの後ヘラナデ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリの後、指おさえ。 | ①にぶい橙色②良好③完形④密 |
| 502 | 甕 | ——<br>——<br>4.2 | 底部は小さな平底で、胴部はやや球形を呈す。 | 胴部、底部、ヘラケズリ。 | 胴部、ヘラケズリ。底部ナデ。 | ①灰褐色②不良③胴部下位から底部にかけて⅓④粗 |

H－2住居址土器観察表

能となったものである。

**FA 層をはさむ遺物の接合関係について**（第16図B－B′）

杯395、杯151の2個体は、FA 層をはさんで接合可能となったものである。395は内斜口縁で、151は平底で内反する口縁をもち、いずれも内面にミガキを呈している。151は平面分布図によると住居址中央部のやや西壁よりで、床面直上の一辺とそれよりやや浮いている一片が FA 層直上の数片と接合したものである。その中で最も大きい破片が床面直上より出土した。395は FA 層直下のものと FA 層直上のものの接合が可能となったものである。395の場合は、住居廃棄後の流れ込みであり、151の場合は、住居廃棄後に放置されたものと、住居埋没途中の後半に流れ込んだものの接合が可能となったものである。

**出土遺物**（第18・19図、図版25）

本住居址からは、土師器538点と若干の埋土遺物が出土した。図示したものは、土師器壺3個体、甕2個体、甑1個体、高杯3個体、杯5個体、椀3個体と石器1、須恵器片5点である。甕は胴部に最大径をもち器肉の厚い平底を呈し、外面には、タテと斜方向のヘラケズリを施す。502の甕は小形で胴部は球形を呈し底部に最大厚をもつ。185は完形の甕で、502よりも小形で胴部は扁平し口縁部は短く外反しつくりは丁寧である。壺には口縁部が直立ぎみにやや外反するものと、有段口縁をもつものがある。胴部は球形を呈し中央部に最大径を有すと思われる。290の口縁には2条の赤色塗彩が認められる。椀は、12、225のように口縁内面に稜をもちやや外反し体部は半球状

を呈すものと、292のように口縁部は内反し底部は器肉の厚い平底を呈すものに分けられる。225は完形品で胎土、焼成とも良質で丁寧につくられている。杯は、所謂「内斜口縁」を有するもの、外稜を有するもの、口縁部と体部を分ける稜線をもたず半球形を呈するもの、口縁部が短かく内傾するものに分けられる。この中で内斜口縁を有する杯は内面に暗文やミガキをもち、口縁部が内傾する306は、内外面に赤色塗彩が施されている。151の杯は、肥厚した平底を呈し内面にミガキをもつ。高杯は、杯部のみ、柱部、裾部一部欠損の3点が出土し、その中の2点に赤色塗彩が施されており、473は内外面に、277は外面のみで内面は黒色塗彩となっていた。この2つは塗彩の施しが異なるが、杯部の形状を見るかぎりではきわめて似ている。277と224の相異点としては塗彩の有無も上げられるが、224の脚部内面には絞り目が施されていることである。須恵器片4点には、平行叩き目文や波状文の痕跡が認められる。スクレイパー1点は北壁よりの床面直上より出土しているが、これについては縄文の項で取り扱う。（福田）

### H－3号住居址

**遺構**（第20・23図、図版6）

本住居址は、発掘調査区域の北西の隅、D・E－6・7・8グリッドに所在する。すぐ西にはH－2号住居址が隣接し、住居の東側部分をW－1号溝によって切られている。そのため、東側の約⅓ほどが攪乱を受けている。確認は、基本土層の第IV層でなされ、長軸方向（南北）が5.8m、短軸方向（東西）は5.5mを測る。平面プランは、整美な正方形を呈し、東壁には竈を有する。主軸方位は、N－69°－Eを測り、面積は30.7m²である。

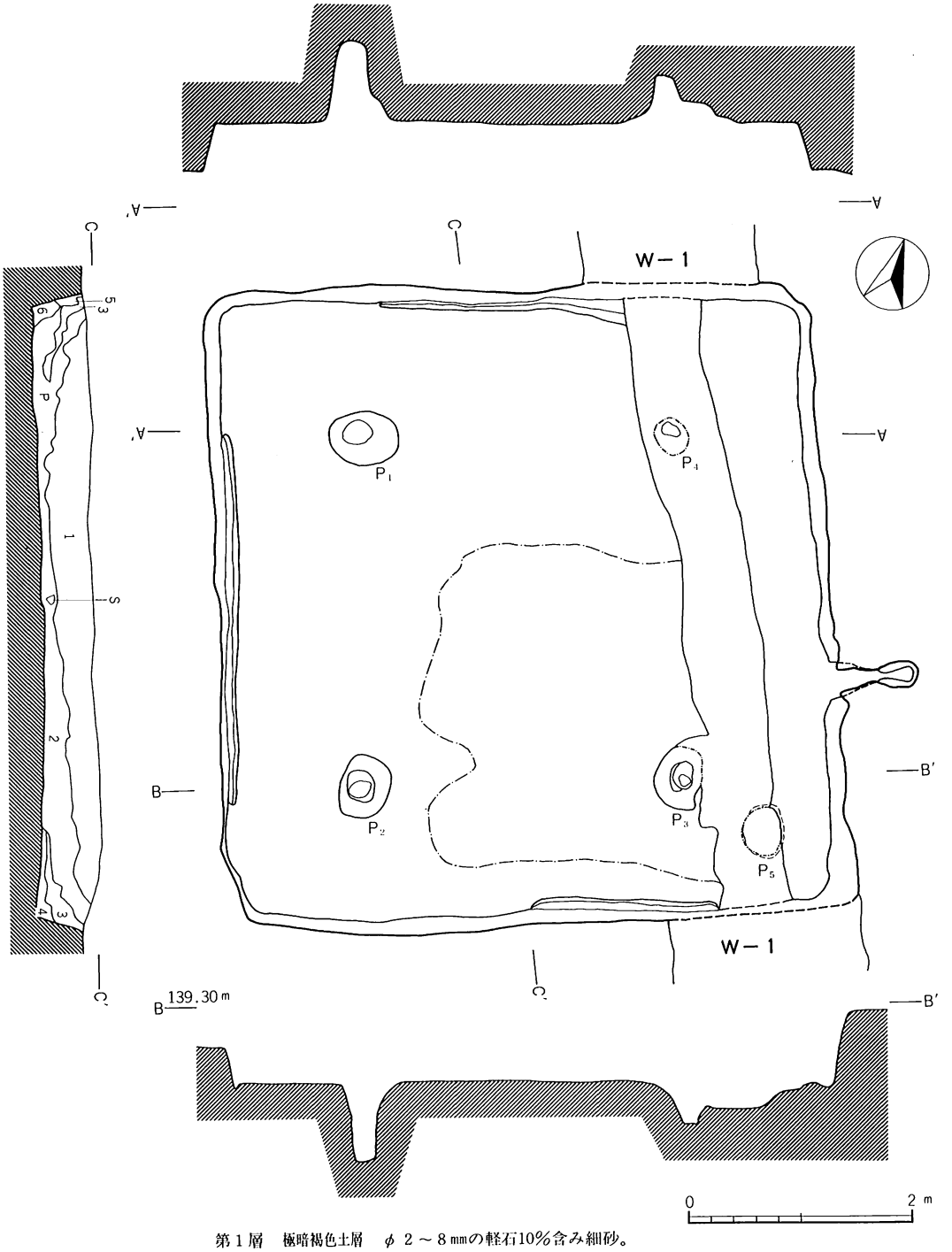
| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 62 | 50 | 72 |
| $P_2$ | 58 | 44 | 66 |
| $P_3$ | 56 | 44 | (35) |
| $P_4$ | 33 | 26 | (24) |
| $P_5$ | 48 | 38 | (22) |

ピット計測表

覆土は、細砂、軽石混じりの細砂、ロームブロック混じりの細砂に区別できる。プラン確認の段階では、覆土と住居の切り込まれているローム層が鮮明に分かれ、確認は容易であった。

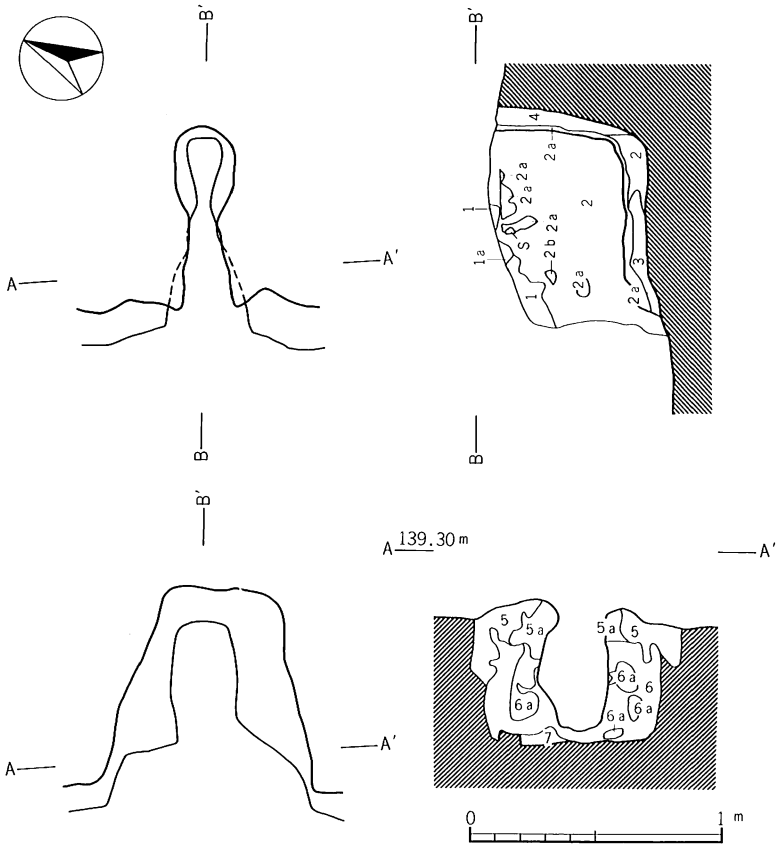
確認された壁高は、44cmを測り、80°ほどの角度でシャープに立ち上がっている。周溝は、W－1号溝による攪乱を受けた東壁以外の3方向の壁で確認されたが、全周はしていなかった。幅は15cm内外で深さは5cm前後を測る。床面は、厚さ2～16cmほどで貼床が施され、平坦に仕上げられている。住居内中央から東側にかけては、堅緻な面が確認された。床面の掘り方は、一般的に東が高く西が低いという傾向が見え、特に$P_1$周辺は著しく低まっている。また、北・西ほど凹凸の波が大きく、南・東ほど小さいという傾向も併せもっている。また、$P_1$付近から西壁にむけてと、$P_2$付近から南壁にかけて、さらにその中間に東西方向に走る間仕切状遺構が3基確認された。

柱穴は4個確認され計測値は表の通りである。W－1号溝の攪乱を受けた$P_3$・$P_4$・$P_5$は現況の数値を示した。柱穴の平面形は概ね円形でそろっている。深さは、西側の$P_1$・$P_2$が70cm前後とかなり深く掘り込まれている。どの柱穴からも柱受けと思われる石や遺物は検出されなかった。柱穴間距離は、北側の$P_1$－$P_4$が2.8m、南側の$P_2$－$P_3$が2.9m、東側の$P_3$－$P_4$が3.1m、西側の




第１層　極暗褐色土層　φ ２～８㎜の軽石10％含み細砂。
第２層　黒褐色土層　φ ３㎜の軽石３％含む細砂。ローム粒あり。
第３層　黒 色 土 層　φ ４～７㎜の軽石３％含む細砂。ローム粒あり。
第４層　黒褐色土層　２層に近いが、軽石が少ない。
第５層　明褐色土層　ソフトローム。
第６層　褐 色 土 層　ソフトローム混入する細砂。

第20図　Ｈ－３号住居址（１／60）




第1層　暗褐色土層　φ５～８㎜の礫１％含む細砂。
第1a層　黒褐色土層　１層に近いが、黒色が強い。
第２層　にぶい褐色土層　やけた白色粘土。
第2a層　明褐色土層　よくやけた白色粘土の純層。
第2b層　褐灰色土層　やけの弱い白色粘土。
第３層　黒褐色土層　焼土20％混入する細砂。
第４層　褐色土層　ソフトローム。
第５層　暗褐色土層　白色粘土30％含む粗砂。軽石１％。
第5a層　褐色土層　粗砂。軽石３％、焼土５％。
第６層　にぶい褐色土層　白色粘土。礫、軽石１％以下。
第6a層　明褐色土層　よくやけた白色粘土。
第７層　極暗褐色土層　焼土５％混入する軽石混じりの黒墨土。

第21図　Ｈ－３号住居址竈（１／30）

$P_1$－$P_2$が3.2mを測り、かなり近い数値を示している。４個の主柱穴の中心を結ぶとほぼ正方形の頂点の位置となり、計測のうえで柱穴が掘り込まれたことを示唆する。貯蔵穴$P_5$は、W－１号溝の削平を受け、平面は楕円形を呈する。

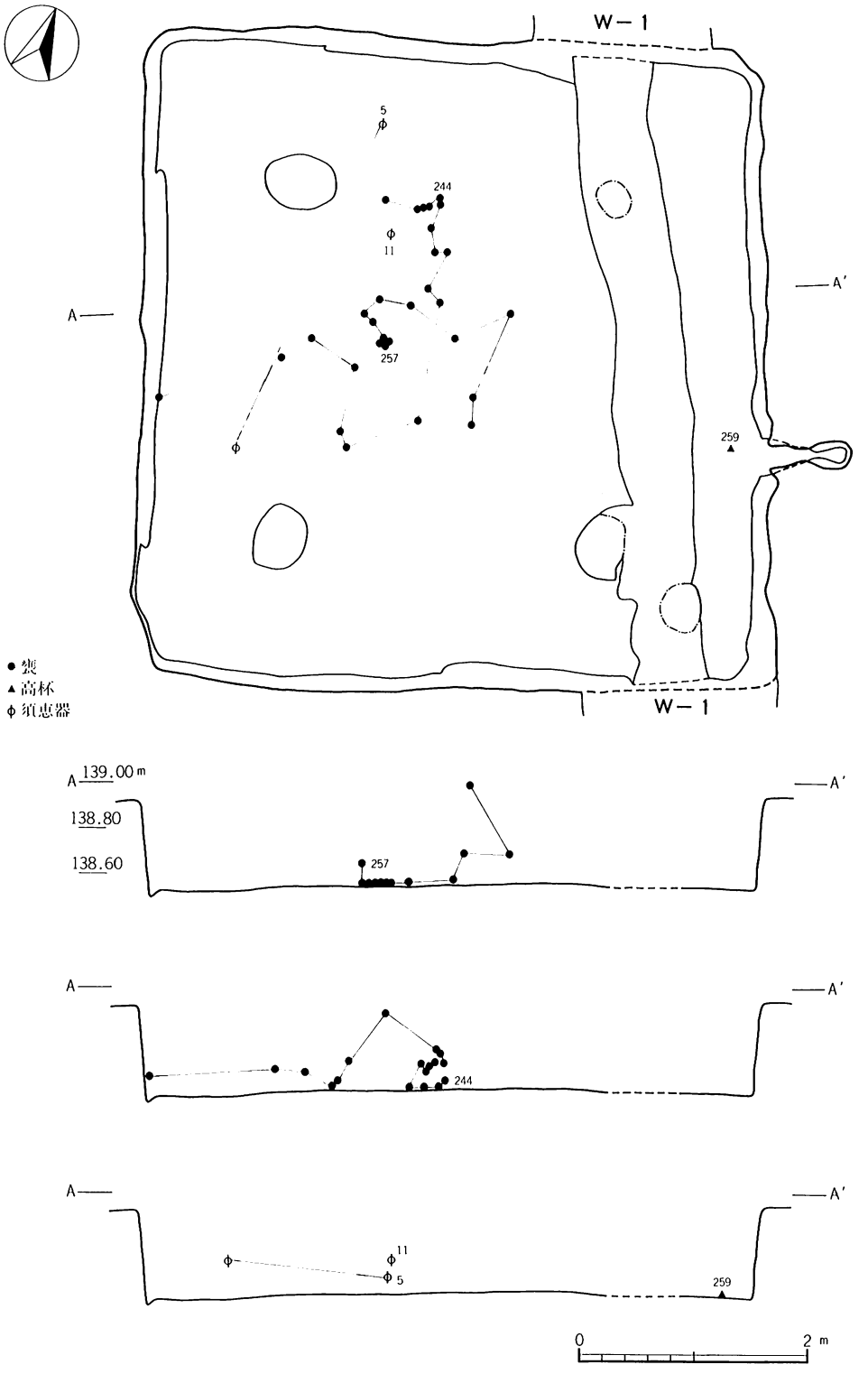
空間利用については、住居中央部から東側の堅緻面のあたりが使用頻度の高い空間と見ることが可能である。南壁中央付近の床面掘り方より入口施設に係わると思われる柱穴が確認されていることからも、住居内南側が頻繁に使用されたものと理解できる。

**竈**（第21図、図版７）

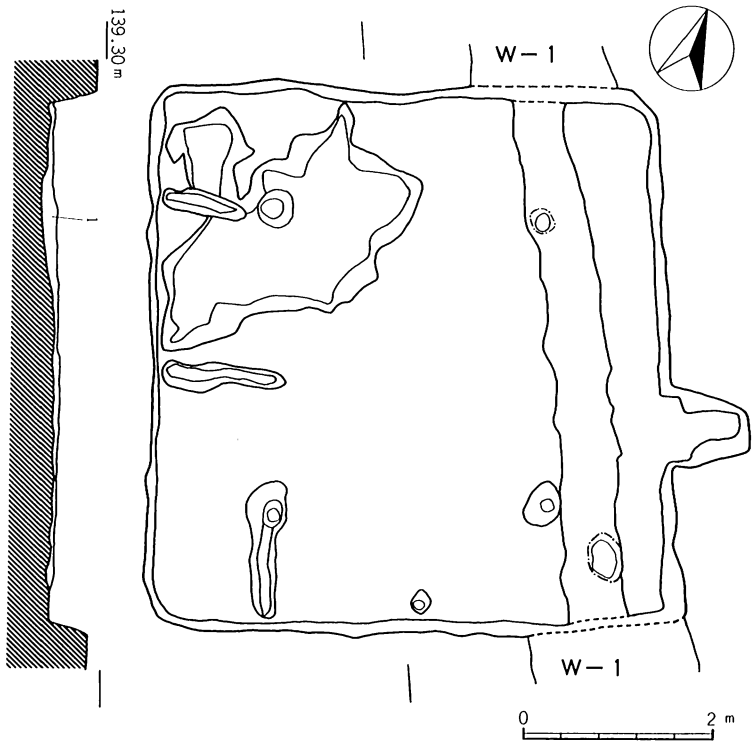
東壁の中央よりやや南寄りに、東に切り込む形で据えられている。主軸方位は、N－66°－Eを指す。W－１号溝による攪乱で袖部は破壊されており、遺存状況は良好とは言えない。僅かに燃焼部の一部と煙道部の一部が残存するのみである。

竈火床面は、床面と同じレベルであり、確認できた燃焼部は、60cmほどを測る。燃焼部から煙道部にかけては、50cmほど立ち上がる。立ち上がり角度は、予想をはるかに越え85°と鋭く立ち上がり、ほとんど直立と言ってよい立ち上がりを呈する。

構築は、東壁からさらに壁外へ80cm切り込んでおり、深さは70cmを測る。ローム層の上に僅か




第22図　H－3号住居址遺物出土状態（1／60）




第１層　明黄褐色土層　細砂。粘性、しまりともにあり。
ロームブロック70%。

第23図　Ｈ－３号住居址掘り方（１／80）

な黒色土を敷き込み（竈南北地断Ａ－Ａ′の第７層）、その上に白色粘土を貼りつけ、積み重ねていく工法がとられている。補強材としての遺物や礫等は検出されておらず、袖石や支脚も確認されなかった。焼け方については、燃焼部の北側の壁が強いのに対し、南側は弱くなっている。煙道部は、50cmほど立ち上がり、鮮やかな赤褐色を呈している。

構築について西に隣接するＨ－２号住居址と比較すると、いくつかの顕著な差異が認められる。Ｈ－２号住居址の場合東壁に切り込まず、床面に据えられている。竈の高低差でも本住居址が70cm以上であるのに対して40cm前後で、立ち上り角度にも大きな差異が認められる。竈の規模や、壁外への突出など、構築時期の差が形態の差となって現われていると言えるだろう。尚、住居内中央部から北西の隅にかけてと南壁付近の床面より10cmほどのところで、焼土及び炭化物が厚さ５cmで層をなして出土していた。

**遺物出土状態**（第22図、図版７）

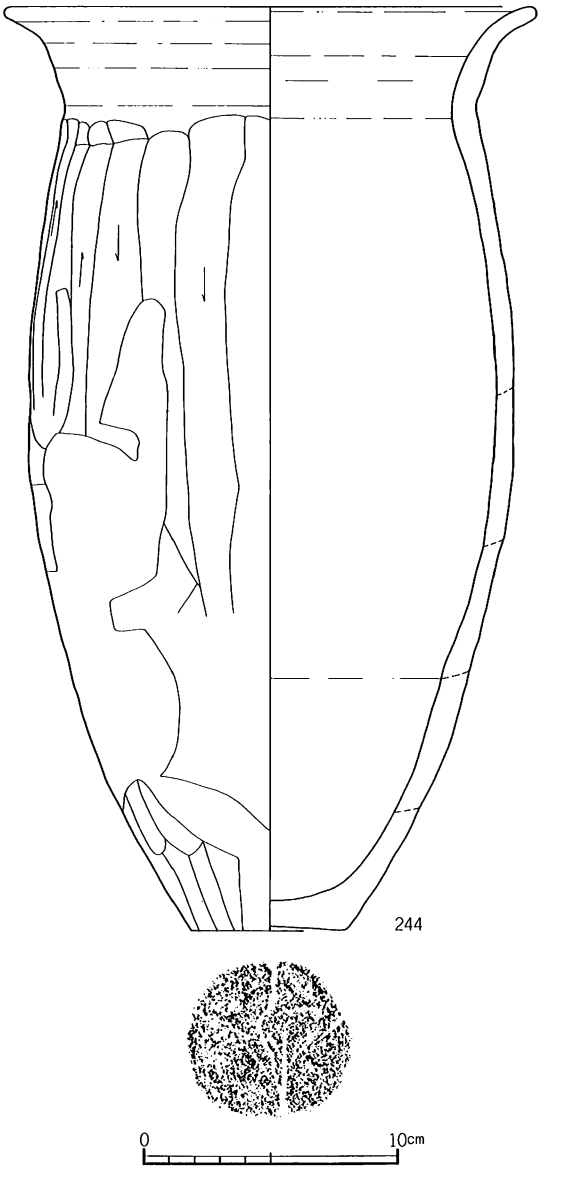
本住居址の出土遺物は総数で260点を越える。そのうち接合・実測が可能となったものは、僅か５個体に過ぎない。第22図には、この５個体の出土状態を示した。遺物全体を眺めてみると、Ｗ－１号溝による攪乱を受けた部分を除いて、ほぼ偏よることない散らばりを見せている。接合・実測が可能となった244と257の２個体の甕の場合は、住居中央部の床面付近から集中的に出土しており、出土分布に偏りが見られる。５の短頸壺は、胴部の1/6程度しか出土しておらず、僅か２点にすぎないが、水平分布・垂直分布ともに散らばりを見せている。11の須恵器杯は、$P_1$の東から出土したが、他に接合可能な遺物が出土していない。259の土師器高杯脚部は、竈のすぐ西から出土し、位置的には焚口部に当るが、二次焼成も見られず、埋土がＷ－１号溝によるものであったため、竈との直接的な関連は見られない。

257と254の甕の場合、床面直上と確認面（床面より45cmほど）付近というかなりのレベル差をもって出土している。

**出土遺物**（第24・25図、図版25）

接合・実測が可能となったのは、土師器の長胴化した甕2個体、土師器高杯脚部1個体、須恵器短頸壺1個体、身なのか蓋なのか区別はつかない須恵器杯1個体、以上の5個体である。

244と257の長胴化した甕は、どちらも口縁部に最大径を有する。257は砲弾型で244に比べ胴部のふくらみが大きい。厚さの点では、257のほうが薄手である。双方とも二次焼成が見られ、部分的に焼土が付着している。244と257を比較した場合、どちらも長胴を呈するものの、257の方がより長胴化が進んでおり、新しいと判断できよう。5の須恵器短頸壺は、胴部に波状紋が見えており、そのうちの2本が交互に美しく交叉している。器形からTK10からTK43に比定できよう。また5は本遺跡における唯一の短頸壺である。また11の須恵器杯は、口縁部が欠損しているうえに体部も僅か1/3程しか残存しないため、年代的に位置付けるのは困難である。259の高杯の脚部は、エンタシス状に立ち上がり、裾部は短く開く。この器形からみると、本遺跡全体で6個体出土する高杯のうち、H－1・2号住居址のFA降下以前の高杯と、H－5号住居址の

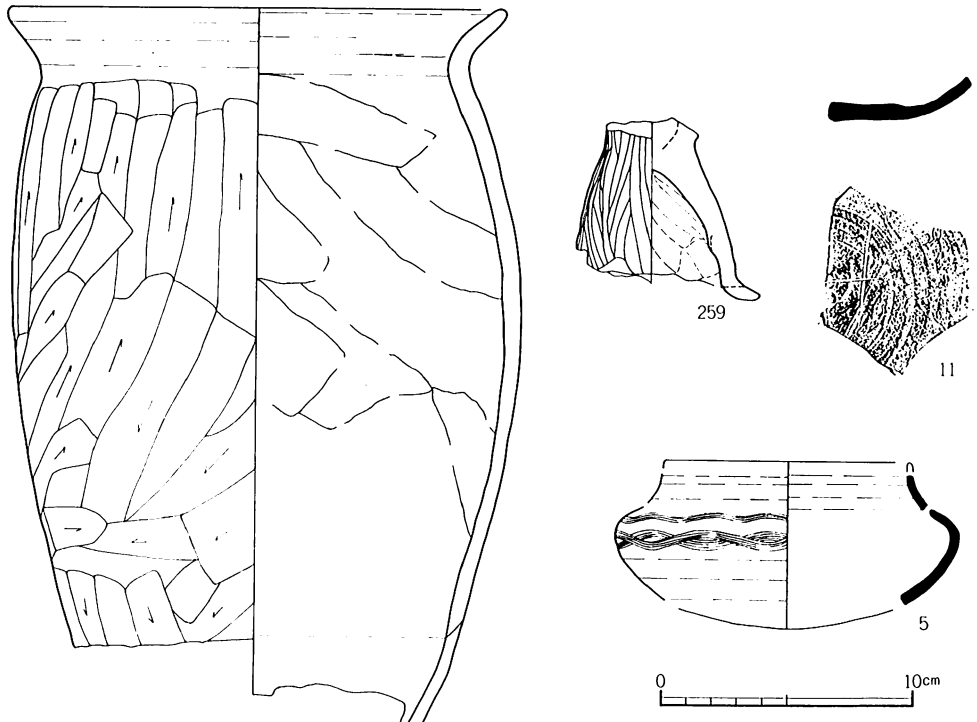



第24図　H－3号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 244 | 甕 | 21.0<br>36.6<br>6.1 | 口縁部外反し、胴部は長胴化を呈する。平底。 | 口縁部ヨコナデ。口縁の下部よりタテ方向の長いヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部にヘラミガキ痕。スス付着。 | ①赤褐色②堅緻③口縁～底部1/5④やや粗⑤焼土付着、木葉痕 |

H－3住居址土器観察表

高杯のちょうど中間に位置すると判断できよう。本住居址の遺物を総括的に見ると、6世紀中葉から7世紀の初頭が想定できる。 (中野)




第25図　H－3号住居址出土遺物

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 257 | 甕 | 19.5<br>——<br>—— | 口縁部は外反し、ゆるやかな丸味を有し長胴化する。砲弾型。 | 口縁部ヨコナデ。口縁の下部より不定方向のあらいヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。胴部へラナデ。 | ①明褐色②堅緻③口縁～胴部5/5④石英含む |
| 259 | 高杯 | ——<br>——<br>—— | 脚柱部、湾曲して開く。裾部は短く開く。 | 脚部へラミガキ。 | 脚部指によるナデ。 | ①明赤褐色②堅緻③脚部2/3④密 |
| 11 | 杯<br>須恵器 | ——<br>——<br>—— | 口縁部欠損。体部ゆるやかに丸味を有する。底部にヘラ記号あり。 | 回転ヘラケズリ。 | 回転ナデ調整。 | ①暗青灰色②堅緻③体部1/3④密⑤重ね焼き痕あり |
| 5 | 短頸壺<br>須恵器 | ——<br>——<br>—— | 口頸部欠損。胴部に最大径を有し、さらに内湾する。底部欠損。 | マキアゲ、ミズビキ成形。 | 回転ナデ調整、剝落による凹凸あり。 | ①灰青色②堅緻③胴部1/6④密⑤胴部に波状紋有り |

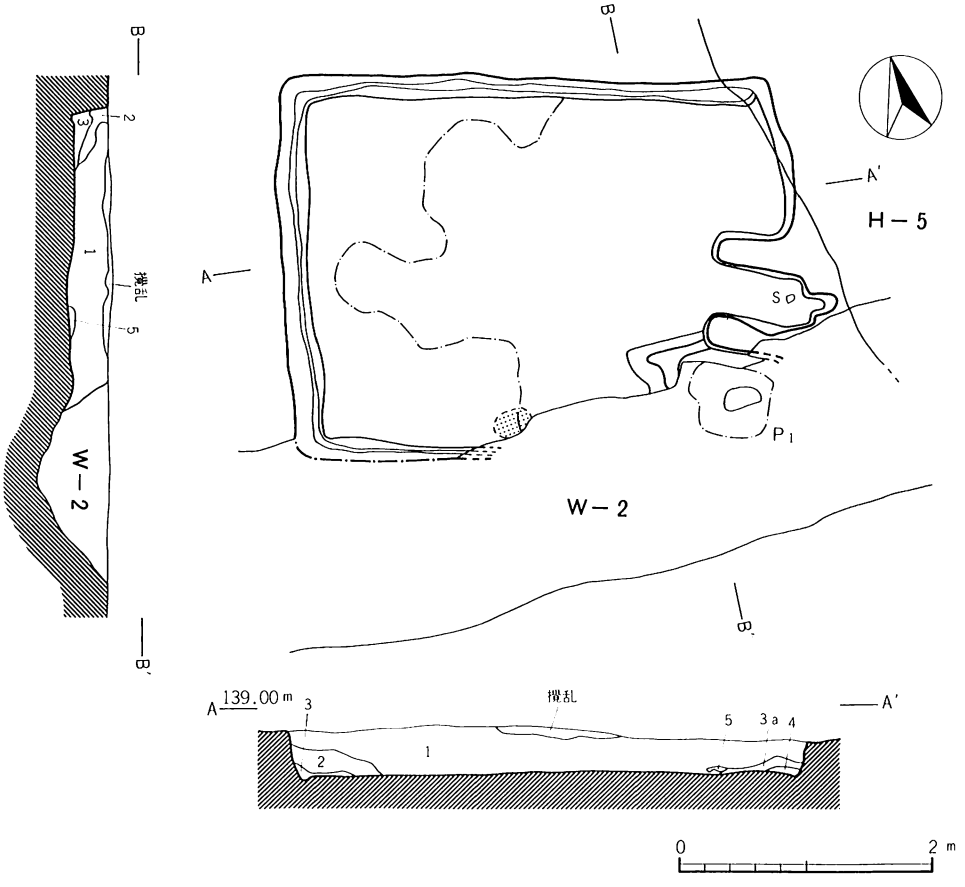
H－3住居址土器観察表

## H－4号住居址

**遺構**（第26・29図、図版８）

調査区西、G・H－４・５グリッドに所在する、本遺跡中最小の住居址である。プランは東西に長い長方形で、竈は東壁のほぼ中央に設置される。軸長は、東西4.1m、南北3.2mを測り、主軸方位はN－106°－Eを指す。東西に走行するW－２号溝に南壁を切られており、それによる毀損は、住居址南東部の床面、竈の右袖まで及んでいた。一方、北東コーナーは本遺跡中最大のH－５号住居址と重複しており、本住居址は同住居址の西壁の一部を切って構築されていた。面積は、残存部が10.5m²で、形状からの住居址全体の推定値は、11.9m²である。

覆土は細かく見れば５層に分けられるが、概ねロームブロックと軽石を斑に含む柔らかい細砂

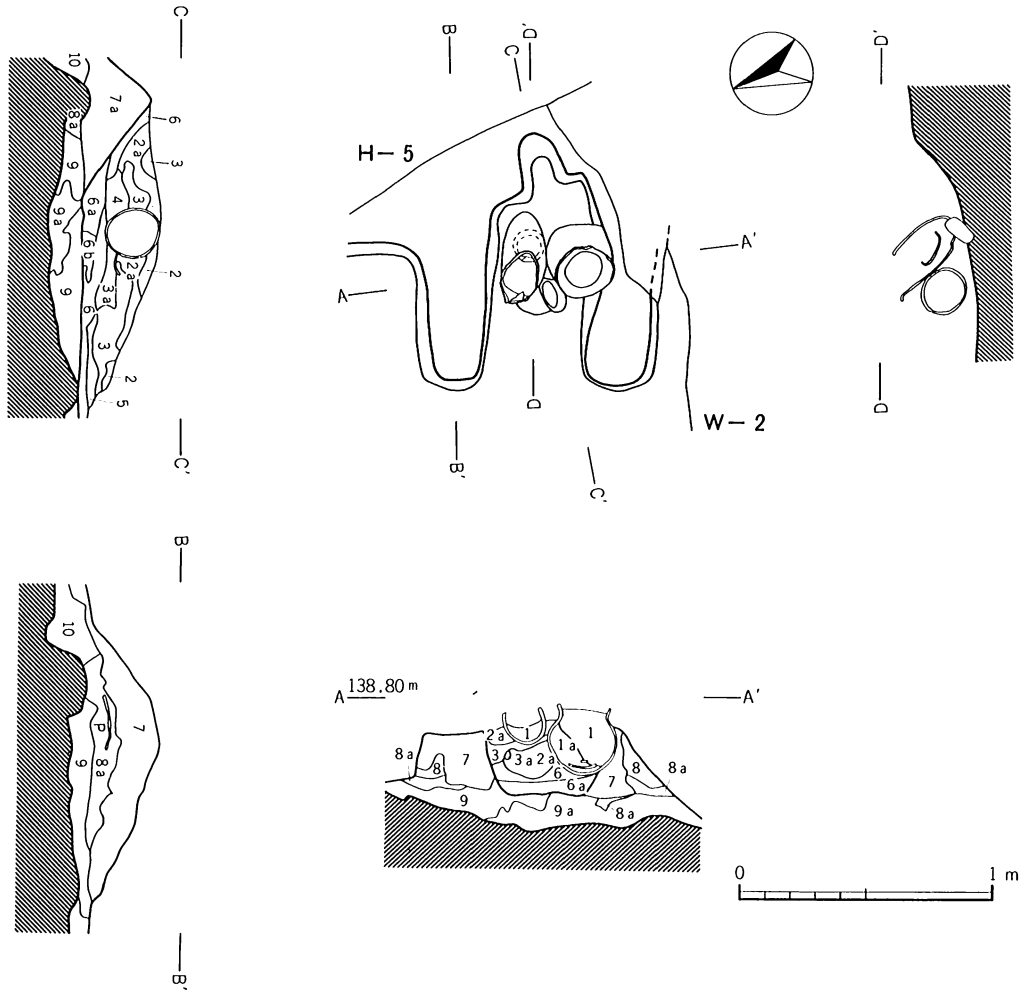



第１層　黒褐色土層　柔かく粘性の少ない細砂が主体。ロームブロックがまだらに５％、軽石が10％混入している。
第２層　黒色土層　軽石を10％包含する細砂で、しまり、粘性とも少ない。
第３層　黒褐色土層　ロームブロックを少量含む細砂で、やや粘性をもつ。
第3a層　黒褐色土層　第３層に似ている。若干の軽石と灰の混入が見られる。
第４層　黒色土層　軽石を微量含む細砂で、ややしまりをもつ。
第５層　橙色土層　やや粘性をもつ、ふかふかした焼土。

第26図　H－４号住居址（１／60）

で、第５層は竈に関連するものと思われる。

確認面からの壁高は、南壁を除き36cmという平均値を得た。壁はローム壁で、平均のたち上がり角度は74°である。周溝は東壁を除き、幅20cm、深さ５cmの規模で周っていた。床面はロームブロックを含む褐色土で10～20cm貼床され、平坦な面になっている。特に、住居址の西側部を除き



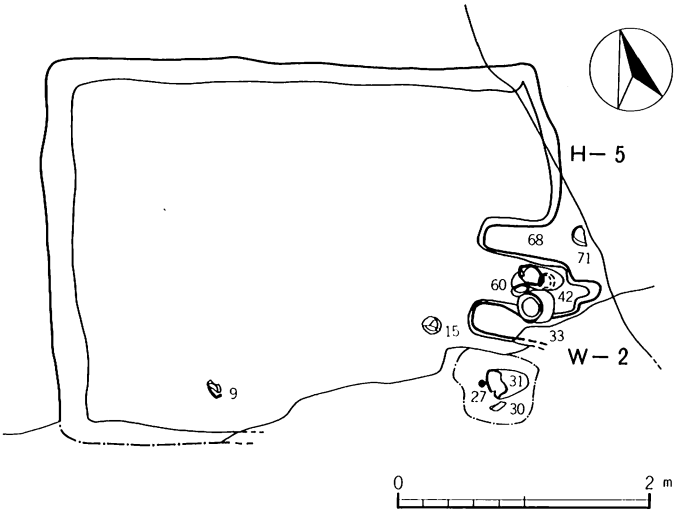

第１層　暗褐色土層　ややしまりをもつ細砂で、微量の軽石を包含する。
第1a層　黒褐色土層　第１層よりもやや粘性をもつ。
第２層　オリーブ褐色土層　粘土粒を多量に含む細砂。
第2a層　黄褐色土層　第２層よりも、さらに粘土粒が多い。
第３層　にぶい黄橙色土層　純粘土。天井部の崩落土。
第3a層　赤色土層　焼土。天井部粘土の焼けたもの。
第４層　赤褐色土層　焼土。粘土粒を多量に含む細砂。
第５層　褐色土層　粘土を少量含む細砂。
第６層　黒褐色土層　灰。
第6a層　黒色土層　炭化物と灰の混じり。
第6b層　赤褐色土層　焼土。
第７層　にぶい黄褐色土層　純粘土。袖構築材。
第7a層　にぶい黄褐色土層　粘土と細砂の混じり。
第８層　にぶい黄褐色土層　粘土を多く含む細砂。
第8a層　黒褐色土層　微量の軽石を含む細砂。
第９層　褐色土層　ロームブロックを40％含む細砂。
第9a層　黄褐色土層　ロームブロックに細砂が混入する。
第10層　褐色土層　粘土粒を多量に含む細砂。

第27図　Ｈ－４号住居址竈（１／30）

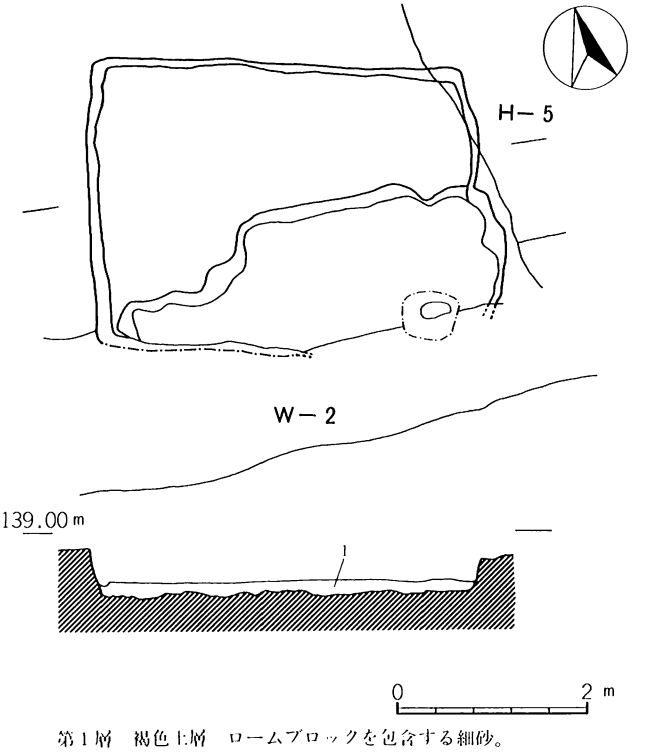
堅緻な面が広がっていた。掘り方は凹凸の多い不整形な面で、南半分がやや深く掘られる傾向が見られた。

ピットは、竈の右に貯蔵穴が検出されたが、主柱穴は確認されなかった。本住居址は、住居内に主柱穴を持たない住居と言えるだろう。貯蔵穴は、北辺の一部を除きW－2号溝に大幅な攪乱を受けていたが、プランは、残存状況から東西に長い長方形が推定される。なお、貯蔵穴のまわりには、ちょうどそれを取り囲むような比高3cmの帯状の高まりが確認された。

本遺跡から合計8軒の住居址が検出されているが、本住居址は、プラン、規模、主軸方位、壁内に主柱穴が存在しない、貯蔵穴を取り囲む帯状の高まりが存在する等の点で、H－6号住居址と共通点があることが指摘できる。




第28図　H－4号住居址遺物出土状態（1／60）



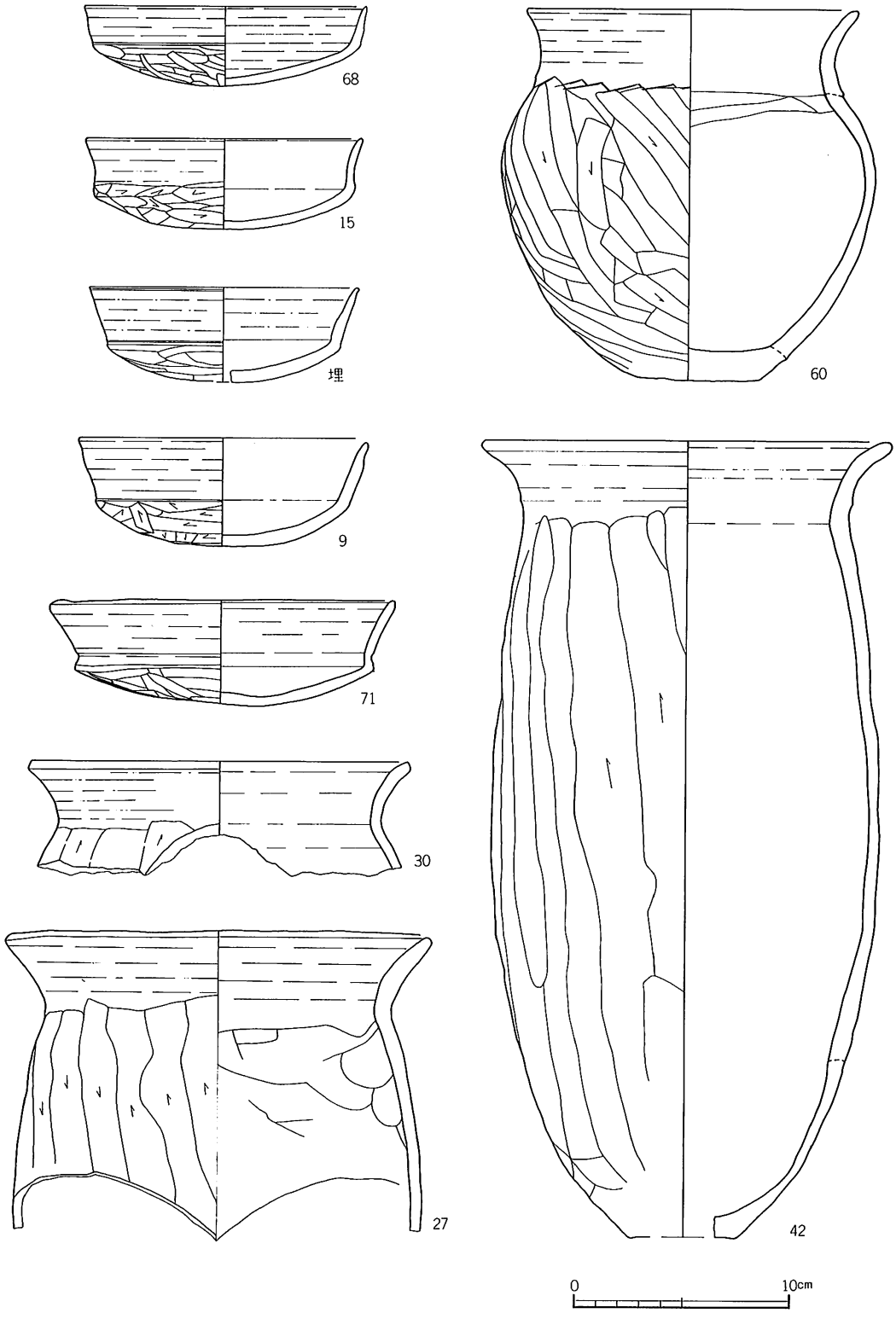

第1層　褐色土層　ロームブロックを包含する細砂。

第29図　H－4号住居址掘り方（1／80）

**竈**（第27図、図版9）

東壁のほぼ中央に位置する。表土掘削時に削りすぎたため煙道の一部を欠損し、またW－2号溝により右袖の一部を欠損しているが、竈内には遺物が多く残存し、住居廃棄時の状況をよくとどめている。全長101cm、幅99cm、炊き口部幅38cmで、主軸方位はN－105°－Eを指す。

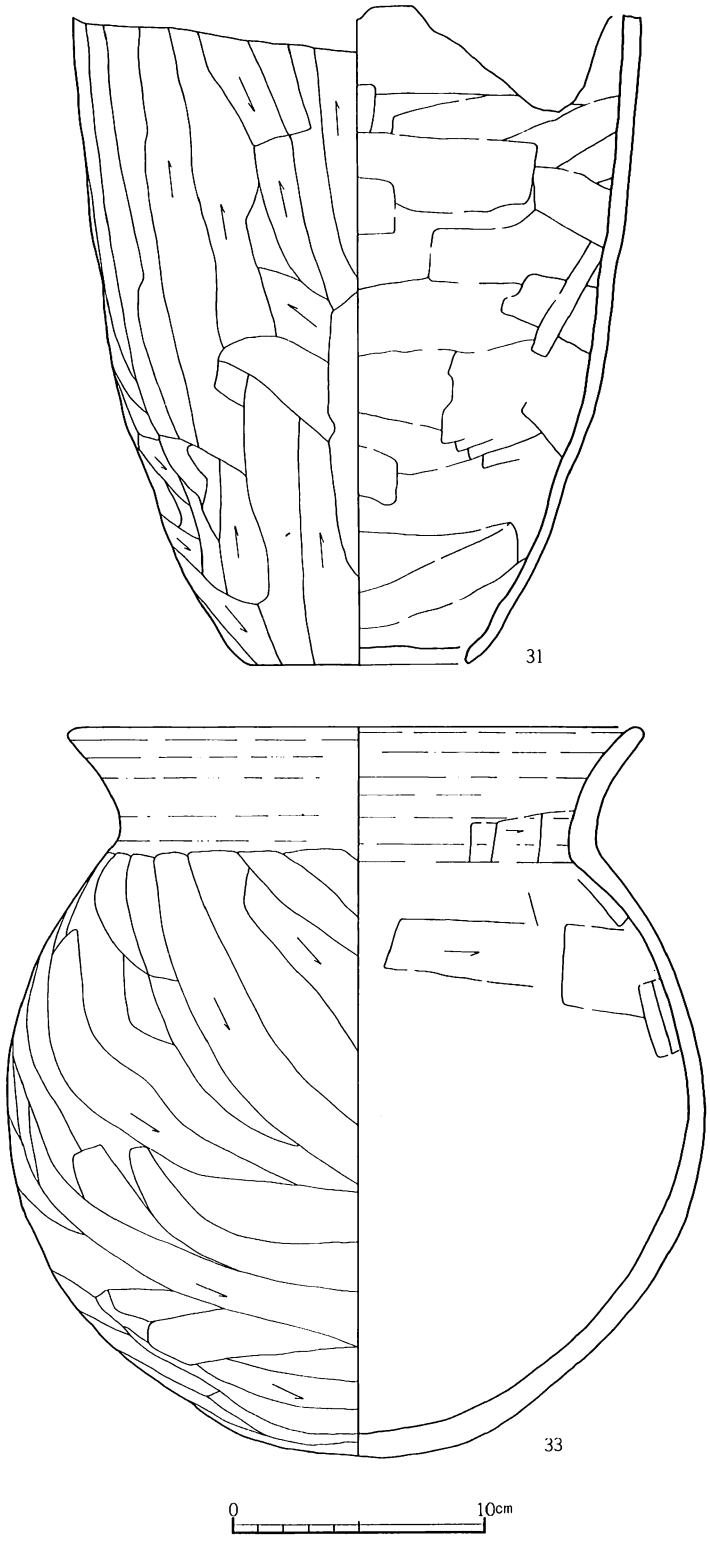
第1層から第6$_b$層までが覆土で、第7層から第10層までが構築土である。第3層は、天井部構築土の崩落したものと考えられる。




第30図　Ｈ－４号住居址出土遺物（１／３）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 68 | 杯 | 13.0<br>3.7 | 口縁部はほぼ直立し、外稜を明瞭に残す。体部はゆるやかな丸底。 | 口縁部ヨコナデ。体部手持ちヘラケズリ。 | 体部不定方向のナデ調整後、口縁部とともに回転ナデ調整を施す。 | ①にぶい黄橙色②良好③4/5④やや粗⑤内外面ともに黒色処理 |
| 15 | 杯 | 12.9<br>4.2 | 不明瞭な外稜を有し、口縁部は一度くびれてから僅かに外傾する。 | 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。外稜もヘラケズリで面取りしている。 | 底面不定方向のナデ後、口縁から体部上半にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③完形④密 |
| 埋 | 杯 | (12.4)<br>(4.4) | ほぼ直線的に外傾する。口縁部と比較的深い丸底の体部を明確な外稜で画する。口唇屈曲。 | 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ、口唇部は指頭により外方へつまみあげられている。 | 体部ヘラナデ後、全面を回転ナデ調整。 | ①橙色②良好③1/6④やや粗 |
| 9 | 杯 | 13.4<br>5.0 | 比較的深い丸底の体部とやや湾曲して外傾する口縁部を外稜で画する。口唇は外方へ屈曲。 | 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ、口唇部つまみあげ後ナデ。 | 底面不定方向のナデ後、口縁から体部上半にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③5/6④密 |
| 71 | 杯 | 16.0<br>4.8 | 口径の大きい大形の杯で極端に突出した外稜をもち、口縁はほぼ直線的に外傾する。 | 口縁部ヨコナデ。体部不定方向の手持ちヘラケズリ。 | 底面不定方向のナデ後、口縁から体部上半にかけて回転ナデ調整。風化のため器面が荒れている。 | ①明褐色②良好③4/5④やや粗 |
| 30 | 甕 | 17.7<br>——<br>—— | 口縁部は外反し、ゆるやかな丸味を有す。 | 口縁部ヨコナデ。胴部上位より縦方向ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。 | ①灰褐色②良好③口縁部1/4④やや粗、細砂粒を混入⑤内面に煤が付着 |
| 27 | 甕 | 19.8<br>——<br>—— | 口縁部はほぼ直線的に外反し、頸部は「く」の字状を呈する。 | 口縁部ヨコナデ、胴部上位より縦方向ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ、胴部上位横方向ヘラナデ、部分的に指頭によるナデ。 | ①にぶい黄橙色②良好③1/6④やや粗⑤内外面ともに煤付着 |
| 60 | 甕 | 15.3<br>17.2<br>5.6 | 口縁部を僅かに外反してゆるやかな丸味を呈す丸胴の小形甕。 | 口縁部ナデ、胴部全体にヘラケズリを施す。頸部に工具痕が明瞭に残る。 | 口縁部ヨコナデ、胴部全体にヘラナデ。底部指頭によるナデ、オサエ。 | ①にぶい黄橙色②良好③5/6④やや粗、細砂粒を混入⑤煤付着 |
| 42 | 甕 | 19.0<br>36.9<br>(4.9) | 口縁部を大きく外反する平底の長胴甕。 | 口縁部ナデ、胴部、底部ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。胴部横方向ヘラナデ、下半は不定方向ナデ。 | ①にぶい黄橙色②良好③5/6④やや粗⑤胴部内外面に煤付着 |
| 31 | 甑 | ——<br>——<br>8.6 | 口縁から胴上半にかけて欠損。ゆるやかな丸味を呈し、下位に行く程すぼまる。 | 胴部全面ヘラケズリ。底部は焼成前に刀子状工具で削孔される。 | 胴部ヘラケズリ後ヘラナデ。 | ①にぶい黄橙色②良好③2/3④やや粗⑤胴部内外面ともに煤付着 |
| 33 | 壺 | 22.8<br>28.8 | 口縁部はほぼ直線的に外反し、頸部は「く」の字状を呈する。胴部に最大径を持ち球形である。 | 口縁部ヨコナデ、他は全面ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ、頸部内面はヘラケズリ後ナデ。器表は荒れている。 | ①にぶい黄橙色②良好③7/8④やや粗⑤二次焼成痕が明瞭であり煮沸具の機能を持つ |

H－4住居址土器観察表




第31図　H－4号住居址出土遺物（1／3）

袖部は、上部が粘土を用いて構築され、基底部は、ロームブロックを含む褐色土が敷かれている。その間に、C軽石を包含する黒褐色土あるいは土器片が充填され、間層をなしている。火床面は床面とほぼ同じで、煙道部へ43°で立ち上がる。掘り方はやや不明瞭で、煙道部が若干壁外へ張り出し、また火床部は窪み、左袖下に段差が認められた。

**遺物出土状態**（第28図、図版9）

本住居址の出土遺物は、合計82点と数少ないが、その70％が住居南東部、すなわち竈および貯蔵穴付近に集中していた。特に注意を惹くのは、竈内から甕3個体、杯1個体が出土していることである。第27図に示したように、33の甕は右袖内壁に密着し、また内部に68の杯が入る長胴化した42の甕は、閃緑岩製の支柱に乗って出土した。両者とも東側から力を受けたためか炊き口部側へ傾斜している。60の小形の甕は、恰もそれらを支えるかのように横位に存する。これらの遺物がそのまま竈の使用状況を物

語っているとは、考えにくい。使用状況というよりは、むしろ竈を塞ぐように遺物を廃棄した印象を与える。

71の杯は住居の壁外で、H－5号住居址につく可能性も考えられるが、竈の構築土内にあったことから、本住居址の構築材と解したい。貯蔵穴内上位からは、残存率のよくない甑1個体、甕2個体が出土している。完形の15の杯は逆位で、9の杯は横位で、それぞれ床面直上から出土した。

**出土遺物**（第30・31図、図版25・26）

本住居址の出土遺物は、土師器82点と若干の埋土遺物である。実測可能な土器は、杯5個体、甕5個体、甑1個体である。杯はすべて外稜を有するもので、口縁部は程度の差はあるがみな外傾ぎみで、体部は浅い。68と埋が似た形態を示しており、9は体部がうすいのが目立つ。15は口縁部にくびれがあり、71はやや大形で体部がうすく、口縁が大きく外反している。甕は形態的に3つに分けられる。60は胴上部に最大径を有する丸胴の小形の甕で、口縁は緩やかに外反している。42は口縁に最大径を有する長胴化した甕で、口縁は大きく外反している。27も長胴化が推定される。33は丸胴の甕で、球形の胴中央に最大径を有し、口縁は「く」の字状に外反している。甑は、胴上部から口縁部を欠損しているが、胴中央から下部にかけては比較的直線的なすぼまりを呈する。

以上のような様相から、本住居址の出土遺物は6世紀後半頃に比定できよう。　　（木暮）

### H－5号住居址

**遺構**（第32・36図、図版10）

調査区西方の中央部にあり、F・G・H－5・6・7グリッドに位置する。住居西壁の一部分がH－4号住居址の東壁と竈掘り方によって破壊されており、南壁の大半はW－2号溝によって切られていた。平面形は本調査で最大規模の東西7.5m、南北7.9m、面積51.4m²を測り、整った正方形を呈する。主軸方位はN－85°－Eと重複するH－4号住居址より21°北扁しており、東壁やや南寄りに竈を設置している。確認面は第Ⅳ層で、そこからローム地山を掘り込んで構築されていた。確認面からの壁高は平均45cmと良好な遺存状況を示し、ローム壁は平均77°で立ち上がっていた。覆土はレンズ状に堆積しており、全体で10層に分けられた。比較的上方にセカンダリーなローム質土が流れ込んだ状況が確認されている。周溝は竈部分を残して全周しており、床面との比高差平均5cm、幅26cmでめぐっていた。床面は全体的にほぼ平坦であり、ローム地山を掘り込んで平均8cm前後にロームブロックと黒色土の混土を貼床していた。堅緻面は住居入口部を想定させる南壁の中央から住居中心部にかけての主柱穴に囲まれた空間と、竈周辺一帯であり、竈流出土下にまで及んでいた。又、南壁中央部の入口用ピットのまわりには高さ数cmの若干の高まりが確認され、竈右脇にある貯蔵穴の西側、南側周辺にも高さ2～3cmの土手状の高まりが検出されている。

ピットは4本の主柱穴が対角線上に配され、西面する$P_1$と$P_2$を結ぶライン状ほぼ中央に支柱穴の$P_7$が、さらに南面する$P_2$と$P_3$を結ぶライン中央の内側に寄って支柱穴$P_8$がそれぞれ確認された。主柱穴はいずれも径30cm前後の大きさで50～60cmの深さに掘り込まれており、$P_3$を除く3個の主柱穴で柱痕を確認している。柱痕は径12～18cmの大きさで、$P_1$、$P_4$では20cm、$P_2$では40cmの深さを測り、埋土はいずれも灰質の紫灰色性分を基調とする黒褐色細砂土であり、あるいは立ち腐れ的状態を経たものかとも思われる。又、柱穴地層断面の観察結果から、柱穴を建ててから貼り床が施されていることが確認された。支柱穴の直径は主柱穴とほぼ同規模であったが、深さが主柱穴の約半分と明らかに差異を生じている。貯蔵穴である$P_5$は床面では一辺50cmのほぼ正方形で約20cm掘られていたが、北側が一段深く比高差34cmで40cm程トンネル状に掘り込まれており、上部にローム地山が厚さ15cmで蓋状に残存していた。貯蔵穴内からは15点の土師器小破片と1点の編物石が検出されたが接合されたものは皆無であった。入口用ピット$P_6$は径15cmの円形を呈し、深さは10cm前後と浅かった。貼床を除去すると$P_1$、$P_7$を中心とした住居北西部に東西3.6m、南北3.2mの不整方形を呈する浅い落ち込みが確認された。又、住居南東隅付近にも径32cm、深さ25cmのピットが1個検出されている。住居掘り方は比較的凹凸したローム地山であり、貼り床内からも3点の土師器小破片が出土している。

**竈**（第33図、図版11・12）

東壁の中央よりやや南寄りに位置し、主軸方位はN－87°－Eを指す。残存状況は良好で、全長130cm、最大幅137cm、炊き口部幅37cmの規模で、数枚の灰層の上に天井部が崩落したと考えられる、多量のスサ混りの焼土ブロックが堆積していた。燃焼部はやや傾斜して、極度に赤くよく焼けた煙道部立ち上がりへと突き当る。その立ち上がり角度はほぼ直角に近く85°で20cm程上方にあがって住居確認面へと至る。竈構築に当っては、住居壁を長さ40cm、幅20cmで掘り込み、燃焼部も瓠形に10cm前後掘り方を設けて黒色土を敷きその上にロームで本体を築いている。

| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 29 | 27 | 60 |
| $P_2$ | 36 | 32 | 65 |
| $P_3$ | 39 | 29 | 50 |
| $P_4$ | 29 | 28 | 57 |
| $P_5$ | 90 | 60 | 55 |
| $P_6$ | 15 | 14 | 11 |
| $P_7$ | 28 | 25 | 36 |
| $P_8$ | 36 | 29 | 34 |

ピット計測表

袖部は左袖のみが中心に土師器長胴甕を伏せて補強材としており、両袖の先端には20×10cmの輝石安山岩礫石を小口面を若干埋めてたてられていた。この掘り方は楕円形を呈し、深さ4cmを測った。炊口の前面には天井部に用いられたと推定される50×30cmの円礫が調度崩れ落ちた感じで検出されており、炊口部は円礫を用いて鳥居状に組まれていたと考えられる。袖石を設定した段階で竈袖部の長さが決定するわけで、竈構築にあたってある程度の設計がなされていたことが伺える。又、袖に用いられていた土は周辺の地山とは異なるものであり、他所から採土してきていると推定される。

第１層　黒褐色土層
軽石、焼土粒、炭化物を微量含む細砂。

第２層　黒褐色土層
軽石、炭化物、ローム粒を微量含む細砂。

第2a層　黒 色 土 層
軽石、炭化物を微量含む細砂。

第３層　黒褐色土層
軽石、炭化物、ローム粒を微量含む細砂。

第４層　暗褐色土層
ローム質土を多く含む細砂。

第4a層　褐 色 土 層
ローム質土のブロック。

第4b層　暗褐色土層
主体がローム質土。

第５層　黒褐色土層
軽石、炭化物、焼土粒ローム質土を微量含む細砂。

第６層　褐 色 土 層
ロームブロックが主体。

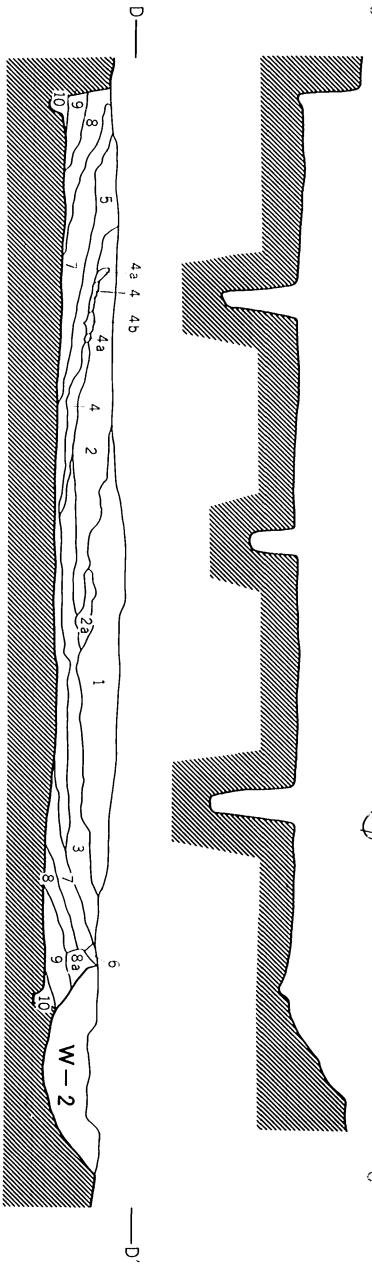
第７層　黒 色 土 層
軽石、炭化物、ローム質土、灰ブロックを微量含む細砂。

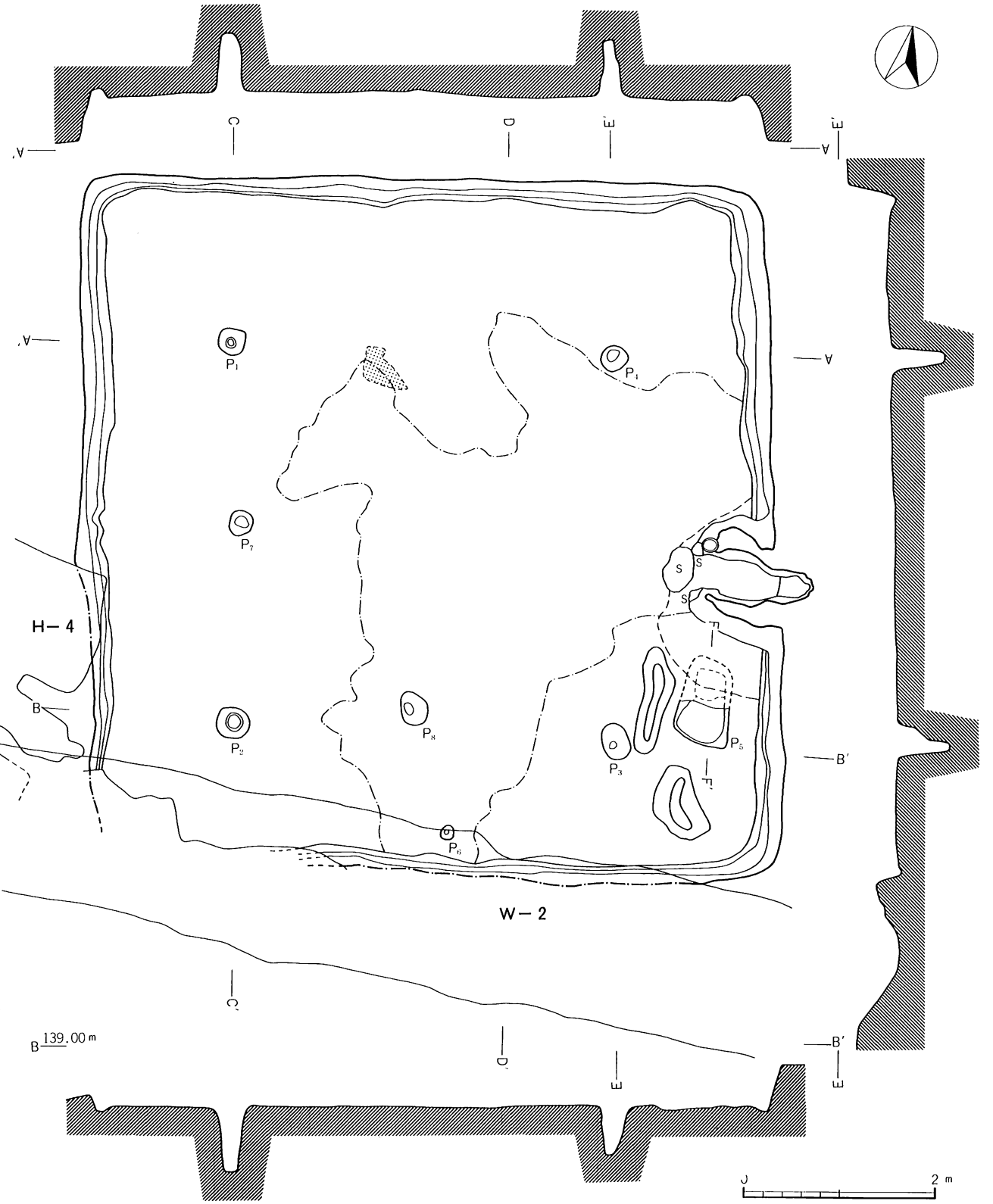
第８層　黒褐色土層
ロームブロック、軽石、炭化物、焼土粒を含む細砂。

第8a層　黒褐色土層
軽石、小礫、ローム粒を微量含む細砂。

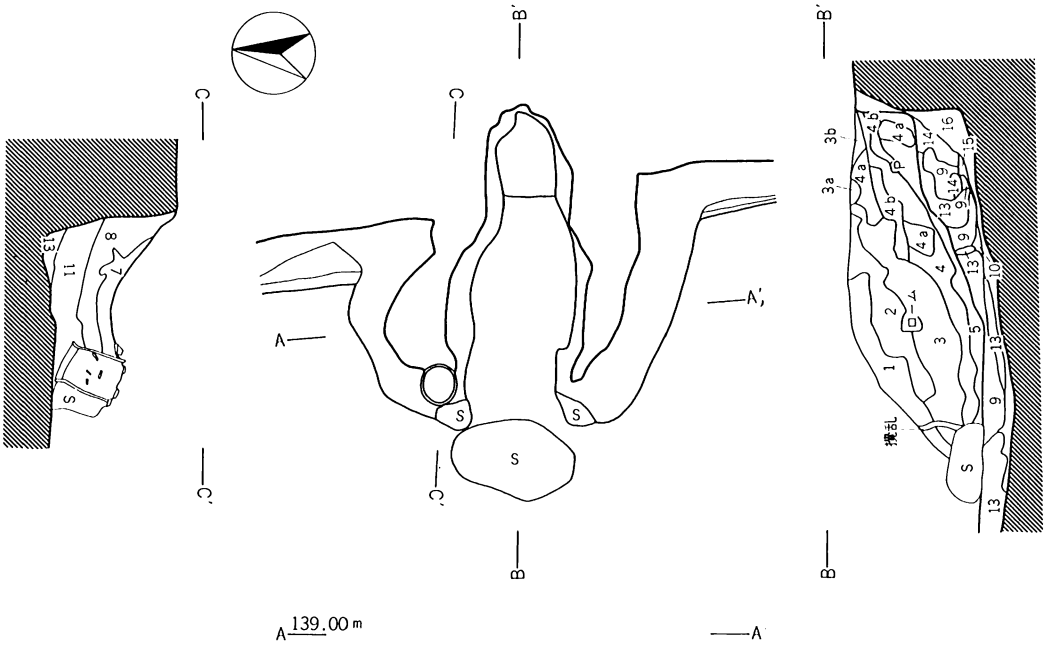
第９層　極暗褐色土層
ロームブロック、軽石を微量含む細砂で、やや粘性をもつ。

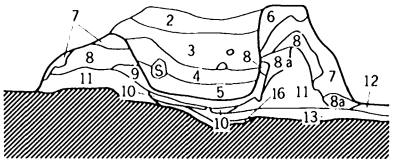
第10層　にぶい黄褐色土層
ロームブロックを30%含む、柔かい細砂。

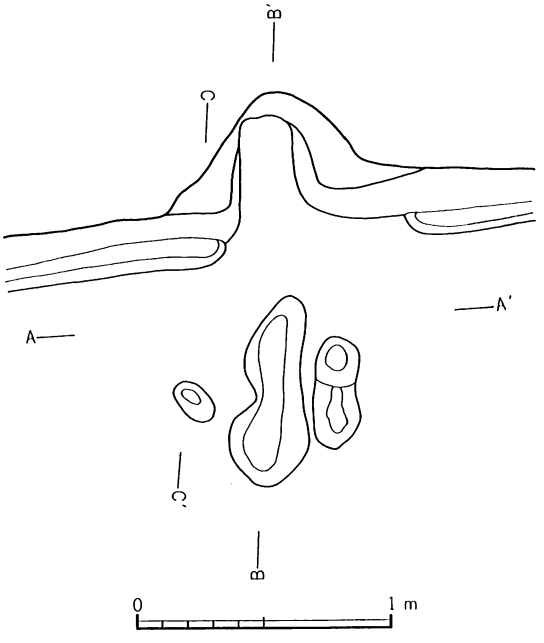





第32図　H－5号住居址（1／60）

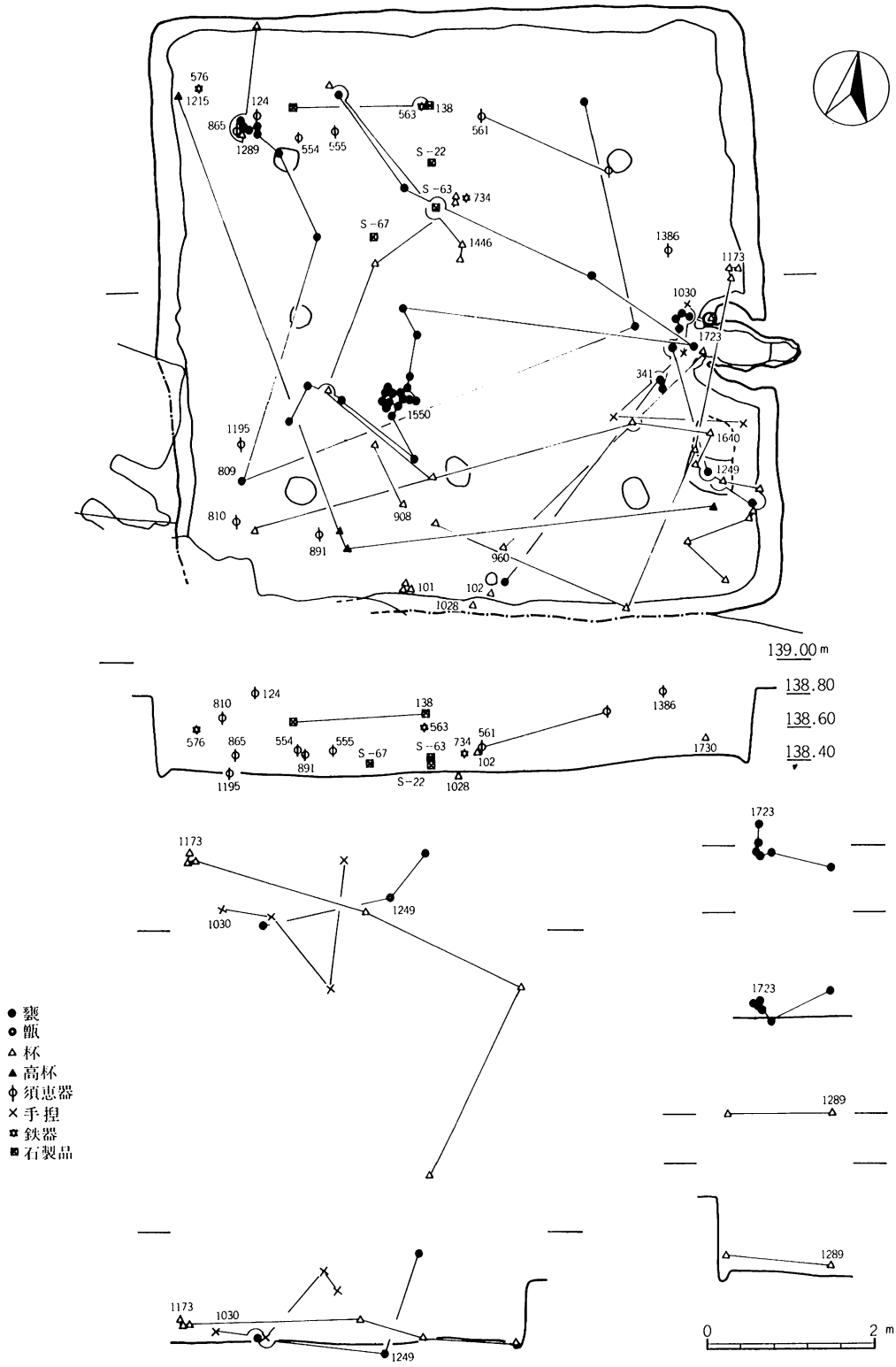


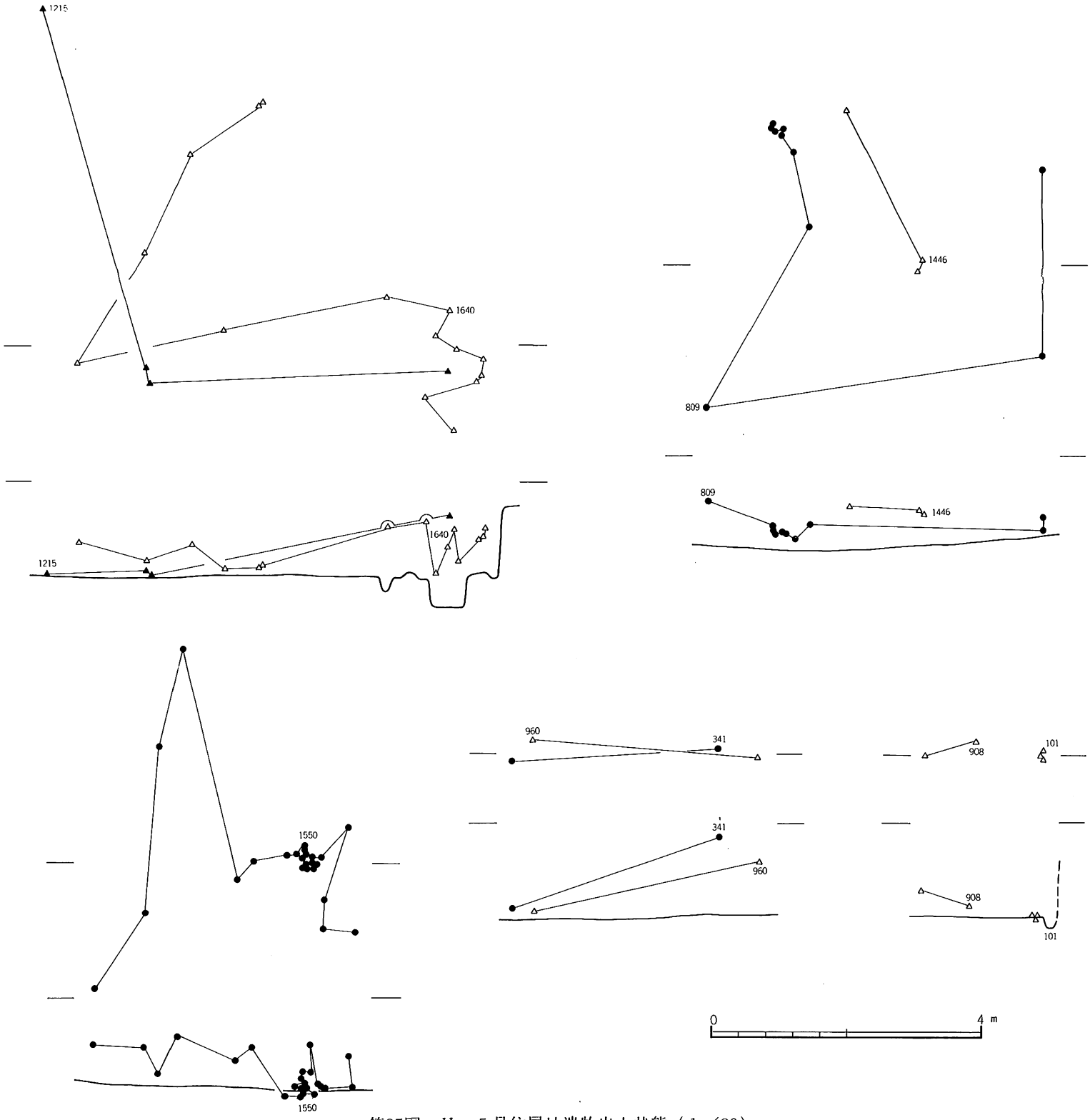



第1層　暗褐色土層　細砂。
第2層　暗オリーブ褐色土層　やや粘性を有する細砂。
第3層　黒褐色土層　細砂。
第3a層　にぶい黄褐色土層　やや粘性を有する細砂。
第3b層　暗褐色土層　細砂。
第4層　にぶい黄橙色土層　焼土ブロックとシルト質粘土の混じり。天井部の崩落。
第4a層　赤褐色土層　焼土、灰、軽石を含み、固い。
第4b層　暗褐色土層　細砂。
第5層　黒色土層　灰。
第6層　褐色土層　粘性、しまりを有する細砂。
第7層　オリーブ褐色土層　細砂。
第8層　にぶい黄褐色土層　しまりを有する細砂。
第8a層　赤褐色土層　焼土ブロック。
第9層　赤褐色土層　焼土。
第10層　黒色土層　灰。
第11層　オリーブ褐色土層　細砂。
第12層　暗褐色土層　細砂。
第13層　暗黄灰色土層　ロームブロックを多く含む細砂。
第14層　黄褐色土層　柔かくしまりのない細砂。
第15層　黒色土層　炭化物。

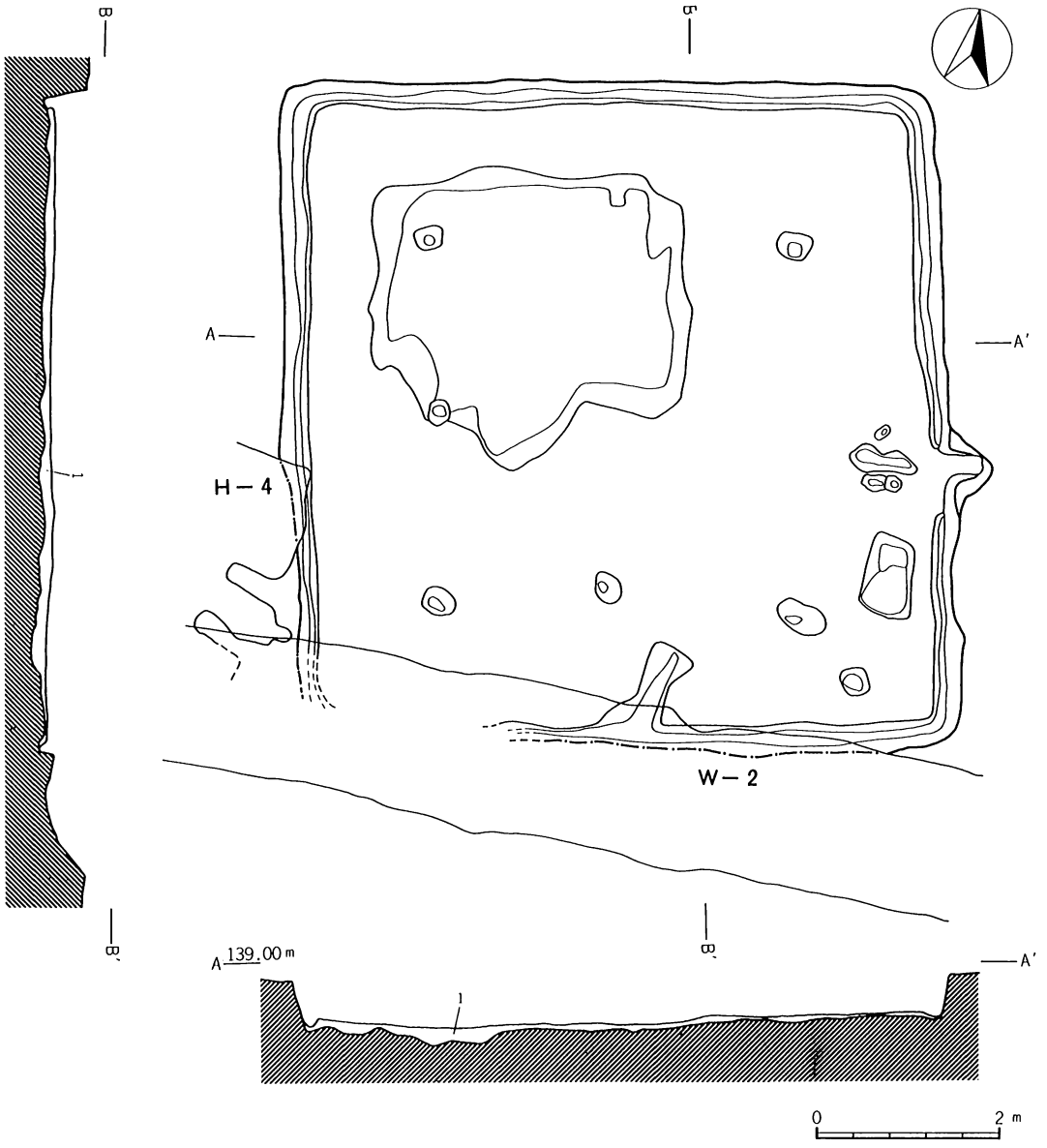
第33図　H－5号住居址竈（1／30）




第34図　H－5号住居址遺物出土状態（1／80）




第35図　H－5号住居址遺物出土状態（1／80）

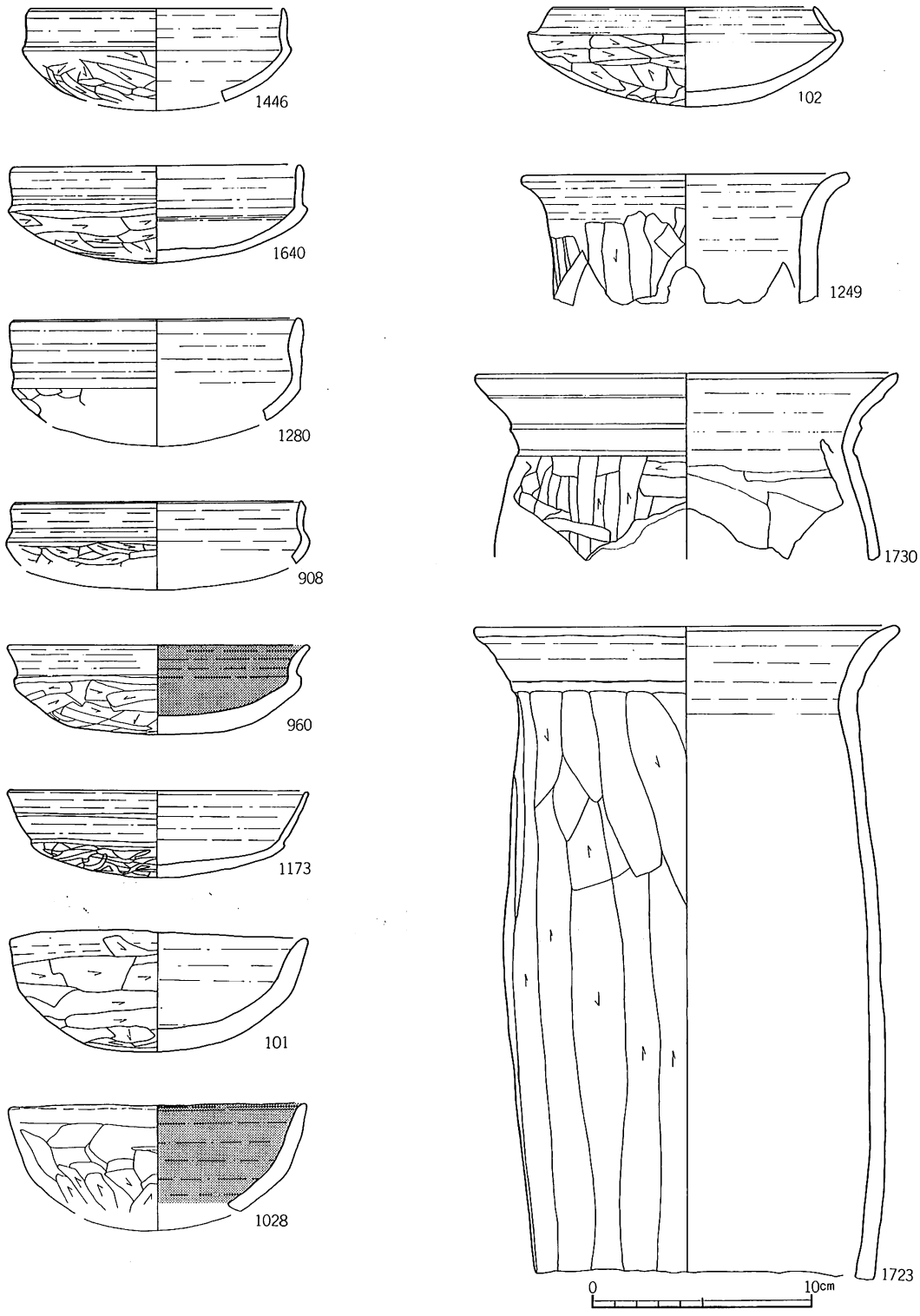



第1層　黄褐色土　ロームブロックと黒色土の混じりで、軽石が微量混入する。

第36図　H－5号住居址掘り方（1／80）

**遺物出土状態**（第34・35図、図版12）

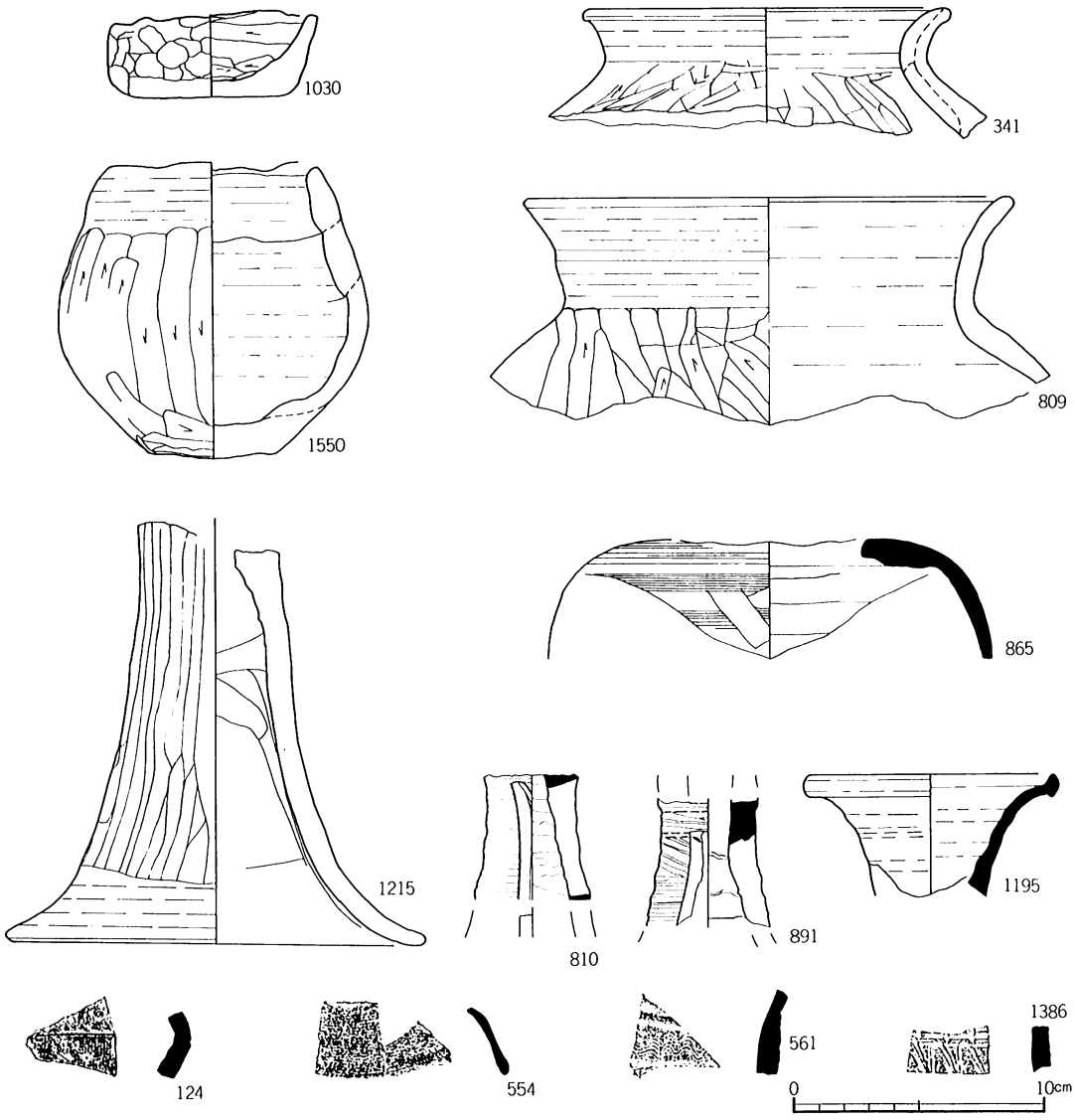
遺物は遺構全面に広がっており、小破片は比較的上方からの出土が目立っている。接合されたものは床面付近が多く、大きく竈付近、北西隅、中央部の3地域に分布が集中している。床面直上から出土したものに960、1028、1173の杯類(第35図)と、1215高杯、1195須恵器瓶等があるが、これらのほとんどは残存良好なもので、あまり接合はされなかった。特殊遺物としては563・734の鉄鏃、576の刀子、138の砥石等いずれも床面より浮いて北西隅の遺物集中部から出土しており、




第37図　H－5号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1446 | 杯 | 11.8<br>(4.7) | 口縁はほぼ直立し端部でやや内湾する。外稜を明瞭に残す。 | 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 | 底面不定方向ナデ後、回転ナデ調整を施す。 | ①にぶい赤褐色②良好③1/6④密⑤内外面口縁部に黒色処理 |
| 1640 | 杯 | 13.3<br>4.4 | 口縁部を直立し端部でやや内湾する。外稜を明瞭に残し、比較的浅い。 | 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。口唇部は外ソギ後ナデ調整。 | 底面不定方向ナデ、回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③3/5④やや粗、細砂粒を混入する |
| 1280 | 杯 | (13.4)<br>—— | 口径に比して体部の深い模倣杯。口縁は直立し、明瞭な外稜を残す。 | 口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 | 体部上位から口縁部にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③1/5④密 |
| 908 | 杯 | (13.1)<br>—— | 口縁部を直立し端部でやや内湾する。最大径は体部上位にある。 | 口唇部外ソギ後、口縁ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 | 体部上位から口縁部にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①灰褐色②良好③1/8④密⑤内外面ともにタール状付着物 |
| 960 | 杯 | 13.7<br>4.1 | やや下ぶくれの体部に極端な外稜を残し、口縁を大きく外反する。 | 体部ヘラケズリ、外稜はヘラケズリで面取り後、口縁とともにヨコナデ。 | 体部底面ヘラケズリ後、中央部のみ不定方向ナデ。周辺より上位は回転ナデ。 | ①にぶい黄橙色②良好③3/4④やや粗⑤内外面ともに黒色処理 |
| 1173 | 杯 | 13.7<br>3.9 | 口縁部はやや内湾気味に外反する。体部は丸味を帯び、口縁との境には明瞭な外稜を有す。 | 口縁部ヨコナデ、中間にヘラケズリによる沈線。体部はヘラケズリ後ミガキを施す。 | 底面不定方向ナデ後、周辺から口縁部にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③3/5④密⑤部分的に赤色顔料付着 |
| 101 | 杯 | 13.6<br>5.4 | 外稜のない素口縁の杯で、口縁部はやや直線的に外反する。 | 全面ヘラケズリ後、口縁部のみヨコナデを施す。 | 底面不定方向ナデ後、周辺から口縁部にかけて回転ナデ調整。 | ①橙色②良好③3/5④やや粗 |
| 1028 | 杯 | (13.6)<br>—— | 外稜のない素口縁の杯で、口縁部は直線的に外反する。 | 体部ヘラケズリ後、口縁部のみヨコナデを施す。 | 底面不定方向ナデ後、周辺から口縁にかけて回転ナデ調整。 | ①にぶい褐色②良好③1/5④やや粗⑤内面と外面口縁黒色処理 |
| 102 | 杯 | 12.0<br>4.5 | 口縁部を内傾する須恵器杯身の模倣杯。外稜は鋭利につくられ、明らかに須恵器受部を意識している。 | 口縁部ヨコナデ、体部は比較的大きい単位のヘラケズリを全面に施す。外稜もヘラケズリで面取り。 | 底面不定方向ナデ後、周辺から口縁にかけて回転ナデ調整を施す。 | ①橙色②良好③5/6④密⑤口縁と体部の一部に赤色顔料付着 |
| 1249 | 甑 | (14.4)<br>——<br>—— | 口縁部をゆるやかに外反する甑で、口縁付近のみ残存する。 | 縦方向ヘラケズリ後、口縁付近のみヨコナデ。 | 口縁付近ヨコナデ。 | ①明赤褐色②良好③口縁部1/3④やや粗⑤二次焼成痕あり。 |
| 1730 | 甕 | (19.2)<br>——<br>—— | 頸部が「く」の字状を呈す、長胴甕で、口縁付近のみ残存する。 | 口縁部を2段にヘラケズリ後ヨコナデ。胴部は縦方向ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ調整。 | ①浅黄橙色②良好③口縁部1/3④やや粗⑤外面二次焼成 |
| 1723 | 甕 | (19.4)<br>——<br>—— | 口縁部をゆるやかに外反する長胴甕で、胴部は円筒形を呈す。 | 口縁ヘラケズリ後ナデ。胴部縦方向ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。胴部は部分的にヘラナデ。 | ①浅黄橙色②良好③2/3④やや粗⑤外面二次焼成。煤付着 |

H－5住居址土器観察表




第38図　H－5号住居址出土遺物（1／3）

1030の手捏土器は竈付近から出土した。又、所謂編物石は南壁付近床面直上から数個まとまって出土している。

煮沸具の甕甑類は破損度がひどく、竈袖材として用いられた1723を除いていずれも胴下半部を欠損していた。これらのうち1249は貯蔵穴付近から1730、341は竈付近から出土した。1550は24片が接合された小形甕であるが、1片だけ竈内より出土している。これに対し、須恵器は561大甕、865、124瓶、554高杯が北西隅から1195壺、810、891高杯が南西隅に集中する傾向がある。杯類は接合関係を見ると住居南半分から北西隅にかけて分布しており北東隅は遺物の絶対量が少なかった。

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1030 | 手捏 | 8.2<br>3.2<br>6.1 | 口縁部をほぼ直立する。底部平底、円筒形を呈す。 | 体部ユビオサエ後ユビナデ。底面ナデ。 | 指頭によるナデ。 | ①明赤褐色②良好③2/3④やや粗⑤内面タール状付着物 |
| 1550 | 甕 | 8.4<br>11.8<br>5.0 | 口縁部を内傾する小形の甕で、胴部やや下半に最大径をもつ。底部は平底。 | 胴部縦方向ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後、棒状工具による刺突あり。 | 底部不定方向ナデ。体部口縁部ヨコナデで輪積み痕を消している。 | ①橙色②良好③4/5④やや粗⑤外面底部に二次焼成、内面に白色付着物あり |
| 1215 | 高杯 | ——<br>——<br>(16.6) | かなり長脚の大形高杯脚部で、杯部をすべて欠損している。 | 脚部、縦方向ヘラケズリ後ミガキ、裾部横方向ナデ。 | 杯部との接合部を指頭によるナデで装着。裾部のみ横方向ナデ。 | ①橙色②良好③脚部4/5④密⑤外面下半赤褐色を呈す |
| 341 | 甕 | (14.6)<br>——<br>—— | 急激に外反する短い頸部を有する。全体に肉厚である。 | 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ミガキを施す。 | 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。部分的にナデ。 | ①明赤褐色②良好③口縁部1/5④やや粗 |
| 809 | 甕 | ——<br>——<br>—— | やや「コ」の字状に近い口縁形態を示す。胴部は球胴形を呈すると思われる。 | 口縁部を2段にヘラケズリ後ヨコナデ。胴部はナナメ方向ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。 | ①浅黄橙色②やや不良③1/8④やや粗、φ1cm大、小石含む⑤内面二次焼成 |
| 865 | 壺 or 瓶 須恵器 | ——<br>——<br>—— | 球形の胴部から比較的平坦な肩部へと移行する。口縁部欠損。 | 全面カキメ調整。 | 内面ナデ。口縁部との接合部を指頭によるナデで装着させている。 | ①外面灰色、内面灰白色、断面灰赤色②精良③1/8④良好⑤肩部自然釉付着 |
| 810 | 高杯 須恵器 | ——<br>——<br>—— | 脚部の一部のみ残存。長脚2段高杯の上段でスカシは3方向に開く。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整後、最後にスカシを切開する。 | 不定方向のナデで輪積痕を消している。 | ①灰色②精良③脚部1/6④良好⑤透孔断面が酸化により赤褐色を呈す |
| 891 | 高杯 須恵器 | ——<br>——<br>—— | 脚部の一部のみ残存。長脚2段高杯の下段部で、スカシは上下段並列して3方向に有す。 | マキアゲ、ミズビキ成形カキメ調整。 | 不定方向のナデで輪積み痕を消している。 | ①灰色②精良③脚部1/6④良好、石英長石粒を混入する |
| 1195 | 瓶 須恵器 | (9.8)<br>——<br>—— | 口縁部の一部が残存。ゆるやかに外反して、端部は肥厚して丸棒状を呈す。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整。 | 回転ナデ調整。 | ①外面青黒色、内面灰色、断面明青灰色②精良③口縁部1/3④きわめて良好⑤自然釉 |

H－5号住居址土器観察表

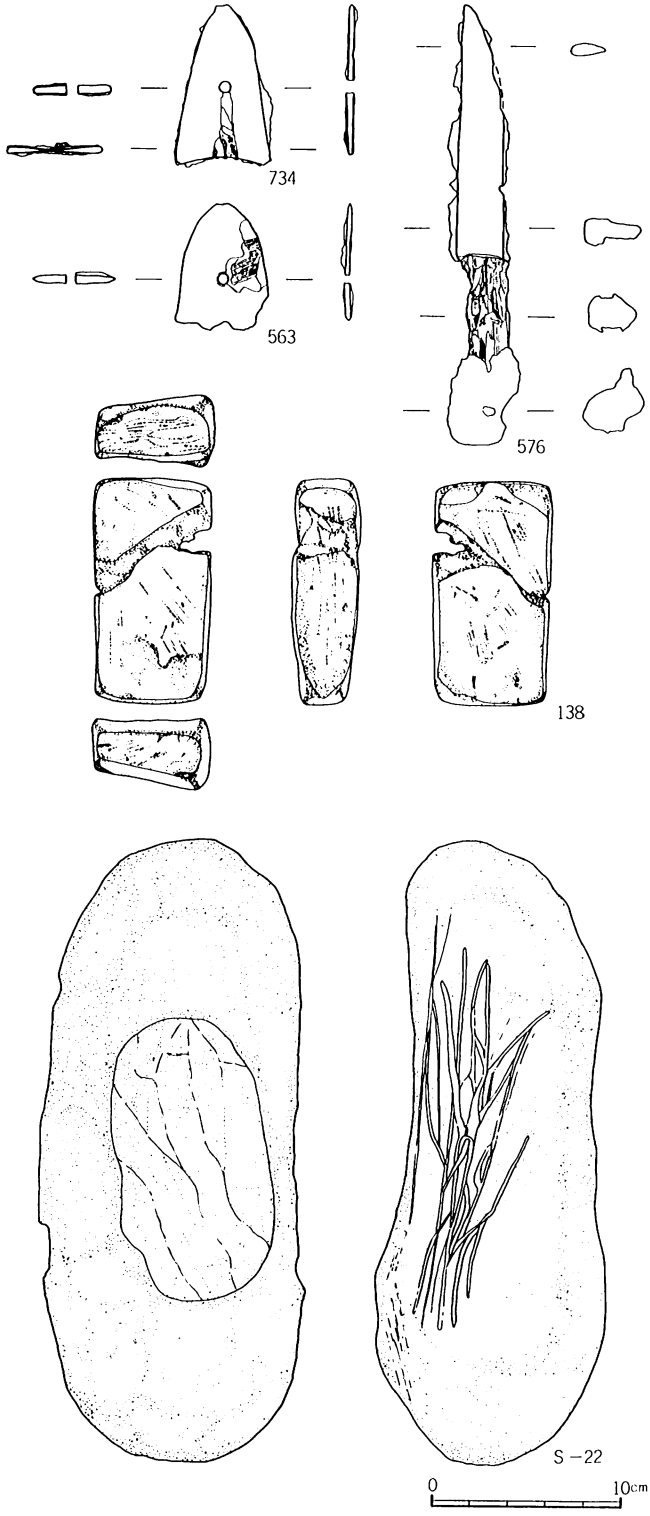
**出土遺物**（第37・38・39図、図版26・27）

本遺構からの出土遺物は土師器1695点、須恵器10点、鉄器3点、砥石2個体、編み物石23個と縄文時代の石器5点であった。これらのうち接合されて実測可能となったものは、土師器杯9個体、甕6個体、高杯1個体、須恵器8個体、手捏土器1個体に鉄鏃2本、刀子1本、砥石2個であった。杯は大きく3分類できる。所謂須恵器杯蓋模倣杯を中心とした外稜を有するものと101、1028のような素口縁のもの、それに口縁を内傾させる102の須恵器杯身の模倣杯である。外稜をもつものでも1280、1446、1640のように口縁を直上させるものから908のように形態的に崩れてい

るもの、さらに960、1173のように外に開くタイプのものがある。102は須恵器を忠実に模倣しているとすれば、形態的に陶邑 TK10～43型式に比定できよう。

長胴甕は胴部上位が膨らみ、口縁を「く」の字形に開くものであるが胴下半はいずれも欠損しているため不明であった。1215の高杯はかなり長脚化したものであるが杯部をすべて欠損している。須恵器は全部で8個体あり、うち5個体が袋物であった。瓶類は胴部にカキメを施す865、頸部に波状文を施す561・1386等がある。杯蓋554は端部が肉厚につくられており、焼成段階でかなり変形している。高杯810、891は脚部片のみであるが、長脚二段透し孔を施すと思われ、陶邑（TK10～43）型式に比定されると思われる。鉄鏃は2本でているが、両者とも無茎で中央に穴を持つタイプのものである。又、刀子は比較的原型を保つもので、茎には木質が残存していた。なおサビ付着が著しく目釘状のものもあり、あるいは蕨手状を呈す可能性もある。鉄器と砥石の共判例も興味深く、西側にある古墳群との関連性を指摘できよう。全体的に6世紀後半代と比定できよう。

（加部）

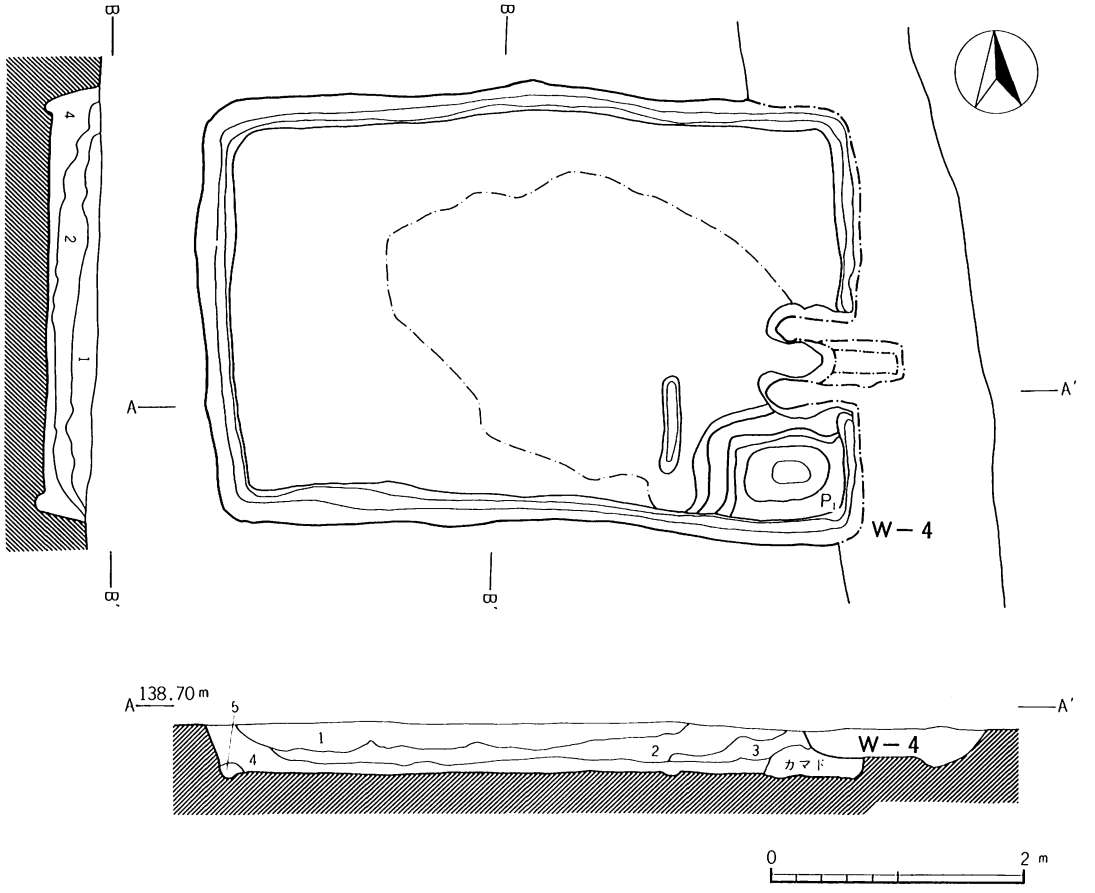



第39図　H－5号住居址出土遺物（1／2）

## H－6号住居址

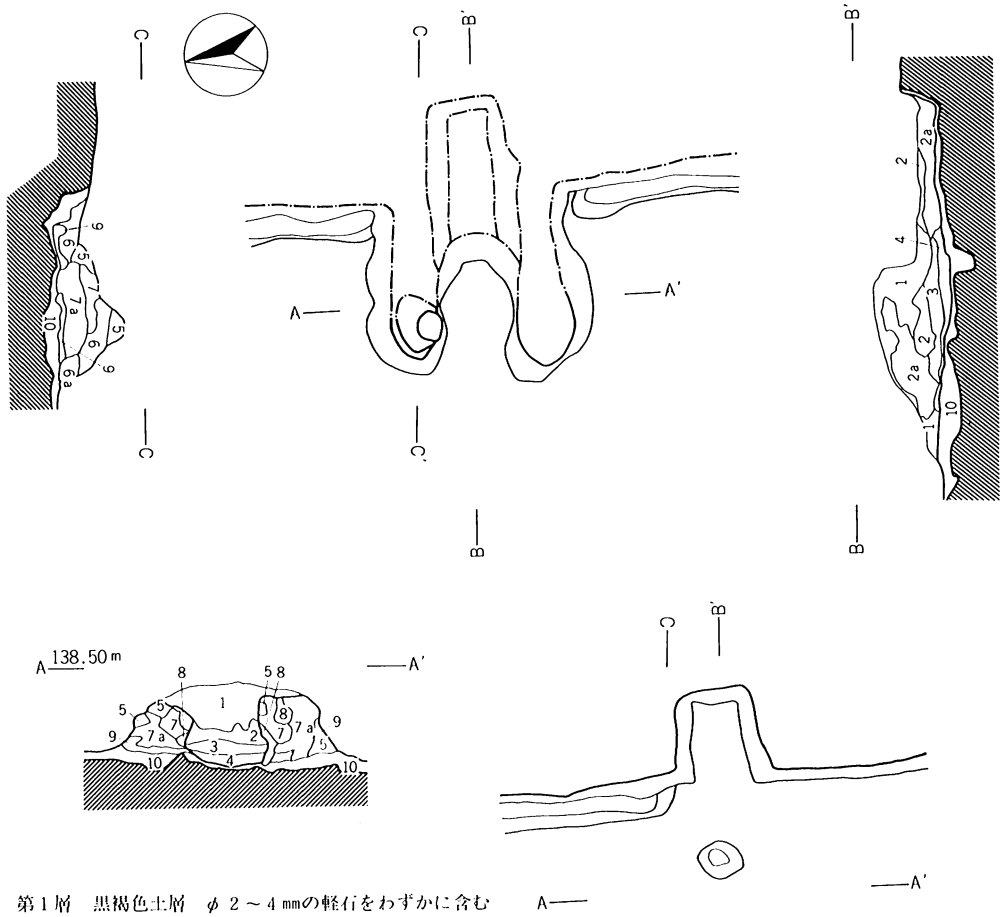
**遺構**（第40・43図、図版13・15）

本住居址は、調査区の南側J－5・6・7グリッドに所在する小形住居址である。南にはH－7号住居址が隣接しており、南壁の一部が接している。また、本住居址の東側には、W－4号溝があり、プラン確認、排土作業を通して本址より新しいものであることが明らかになった。基本層序Ⅳ層上面で確認され、平面形は東西に長い長方形で、竈を東壁中央やや南寄りに持つ。規模は



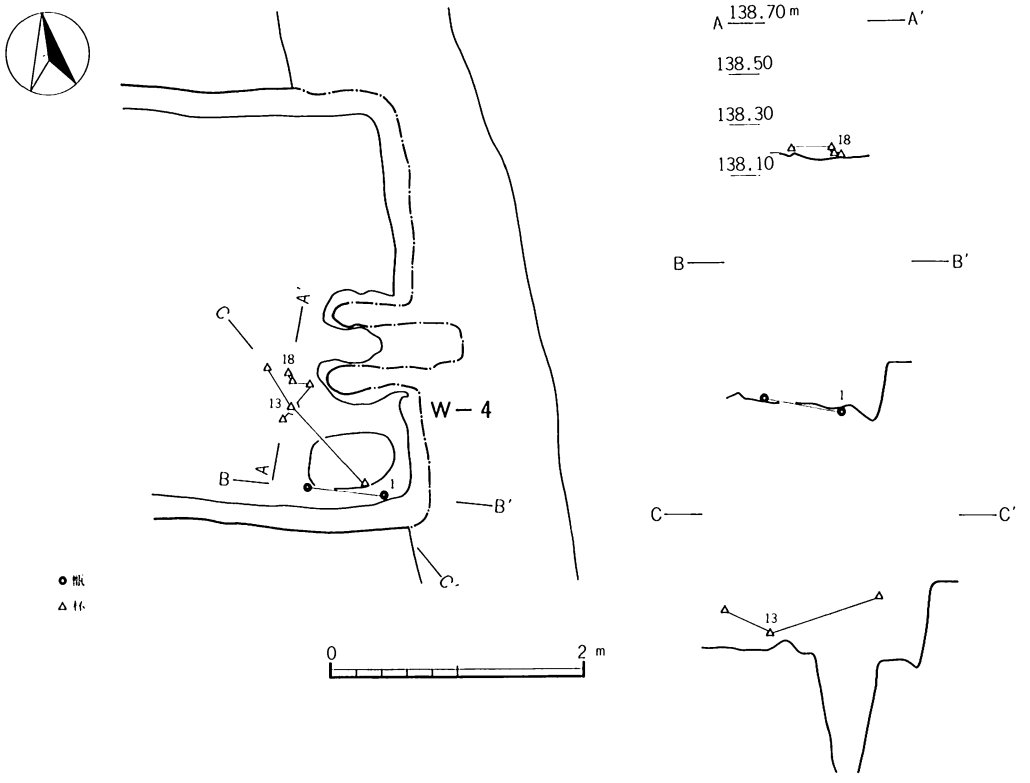

第1層　黒褐色土層　細砂。しまり、粘性共になし。φ 3～30㎜のロームブロックがまだらに5％混入する。
第2層　黒褐色土層　細砂。しまりなし。やや粘性を有する。φ 2～20㎜の軽石を含む黒色土が30％混入する。
第3層　黒褐色土層　細砂。粘性を有する。φ 3～15㎜のロームブロックが5％混入する。
第4層　極暗褐色土層　細砂。やや粘性を有する。φ 10㎜前後のロームブロックが少量混入する。
第5層　暗褐色土層　細砂。しまりなく、やや粘性を有する。φ 8㎜前後のロームブロックが少量混入する。

第40図　H－6号住居址（1／60）




第１層　黒褐色土層　φ２～４㎜の軽石をわずかに含む細砂。しまり、粘性共になし。
第２層　明褐色土層　黒褐色土をわずかに含む焼土層。
第2a層　にぶい黄褐色土層　粘土を50～60％含む。しまりややあり、粘性あり。
第３層　灰褐色土層　φ２～６㎜の焼土粒を含む灰層。しまり、粘性共になし。
第４層　黒褐色土層　φ２～４㎜の軽石をわずかに含む灰層。しまり、粘性共になし。
第５層　暗褐色土層　φ５㎜前後の粘土ブロックを含む細砂。しまり、粘性共ややあり。
第６層　にぶい黄褐色土層　φ２～４㎜の小石を含む粘土層。しまり、粘性ともに強い。
第6a層　にぶい黄褐色土層　細砂を40％程度含む粘土層。しまりややあり、粘性強い。
第７層　赤褐色土層　よく焼けた粘土層。しまりが強く、粘性ややある。
第7a層　にぶい黄褐色土層　焼けていない粘土層。しまり、粘性共にややある。
第８層　黒褐色土層　φ３㎜前後の軽石をわずかに含む細砂。φ５㎜前後の粘土ブロックが40％混入。
第９層　黒褐色土層　φ３～７㎜の軽石をわずかに含む細砂。しまり、粘性共になし。
第10層　黄褐色土層　φ20～30㎜のロームブロックを多量に含む細砂層。φ３～７㎜の軽石をわずかに含む。

第41図　Ｈ－６号住居址竈（１／30）




第42図　H－6号住居址遺物出土状態（1／60）

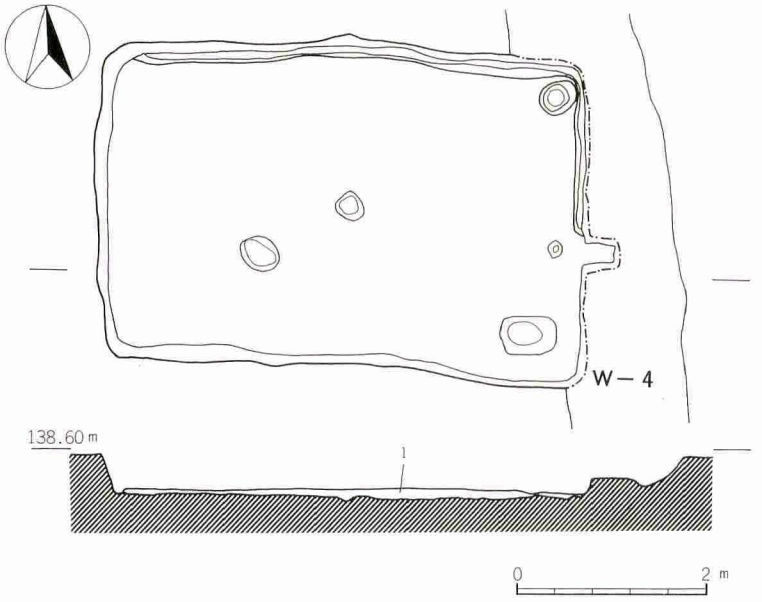
南北軸3.6m、東西軸5.3mであり、面積は17.2m²を測り、南壁、北壁の中央がやや湾曲するが、各辺とも整った形態を呈する。主軸方位はN－93°－Eをさしている。遺存状況は、竈及び東壁のW－4号溝に切られている部分を除いては良好である。

| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 69 | 44 | 50 |
| $P_2$ | 43 | 36 | 18 |
| $P_3$ | 31 | 28 | 17 |
| $P_4$ | 44 | 35 | 17 |

ピット計測表

覆土は、第40図の地断A－A′に示されるように5層から形成されている。各層とも粒子が細かい細砂で1～3層が黒褐色土、4・5層が暗褐色土で、遺物は4層を中心に出土した。

確認面からの壁高は、平均36cmを測り、急傾斜をもって立ち上がる。壁の立ち上がり角度は、平均74°であった。周溝は、竈の部分を除いて深さ5cm、幅10～20cmの規模で施工されている。床面は、基本層序第Ⅴ層を掘り込んで構築されており、ほぼ平坦で5cm内外のレベル差でおさまる。竈前面から中央にかけての空間、南壁中央から貯蔵穴付近にかけてはよく踏み固められ、堅緻な状態を呈していた。竈右袖先端から70cm西に、長さ77cm、幅13cm、深さ1～4cmの南北方向の間仕切り状の掘り込みが見られる。床面は、黄褐色土で貼床が全面に施工され、北西部が2～6cmで薄く、南東部は8～12cmとやや厚くなっている。




第１層　黄褐色土層　細砂。φ ２～６㎜の小石を含む。
φ 10～12㎜のロームブロックを70％含む。

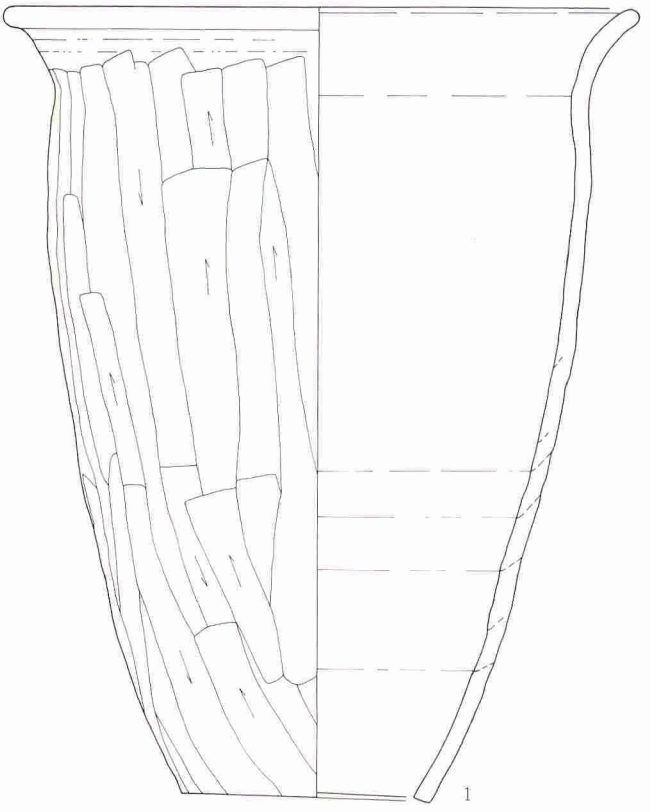
第43図　Ｈ－６号住居址掘り方（１／80）

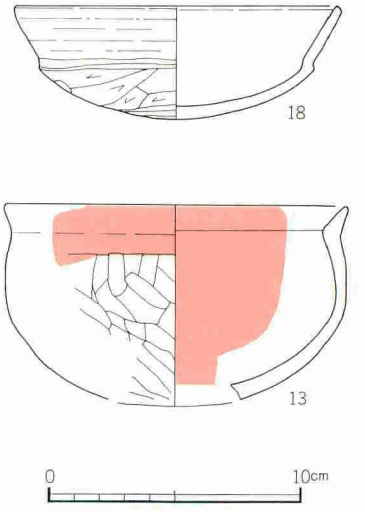
ピットは計測表に示すように、５個確認されたが、$P_2$～$P_5$は床下土坑で主柱穴は検出されなかった。$P_1$は貯蔵穴で、長方形を意識して掘り込まれている。貯蔵穴を囲むようにして、帯状の高まりが、床面から２～４cmの高さで見られる。

床面の掘り方は、多くの凹凸が認められたが、ほぼ水平に荒掘りがなされている。また、床下土坑が北東壁際に１基、中央部に２基、竈の前に１基検出された。

**竈**（第41図、図版14）

東壁の中央より南寄りに位置し、主軸方位はＮ－96°－Ｅを指




第44図　Ｈ－６号住居址出土遺物（１／３）

す。後世のW－4号溝により、両袖上部、煙道部が破壊されており残存状況は悪い。全長115cm、幅90cmを測り、住居内と住居外の比は76cm：39cmである。煙道部立ち上がり角度は69°である。袖石、支柱は検出されなかった。

袖部は7層に分けられ、細砂の混入する粘土を固めて構築されている。基底には、ロームブロックを多量に含む黄褐色土を敷いており、火床部の下も同じ黄褐色土が敷かれている。煙道部の掘り方は、壁外をきっちりした長方形に掘り込んでいる。火床部からはピットが検出された。W－4号溝により半分を破壊された竈であるが、精巧に造られていたと想像される。

**遺物出土状態**（第42図、図版15）

本住居址から出土した遺物は、実測可能な3個体以外はすべて小破片であり、これらの60％までの土器が竈及び貯蔵穴付近に集中している。1の甑は、貯蔵穴と壁の間の床面に口縁部を壁の方に向け、斜め上方から押し潰されるように出土した。尚、60cm離れた1片が接合している。13の杯は、1m以上離れた3片が接合したもので、床面上7～25cmの高さに分布している。18の杯は、約40cm離れた4片が接合したもので、竈右袖前の床面直上から出土している。

**出土遺物**（第44図、図版27）

本住居址からの出土遺物は、総数60点で実測可能の遺物は甑1個体、杯2個体の3個体であった。1は大形甑で、口縁部に最大径を有し、ゆるやかに外反する。18は、外稜を有する杯で、口縁部が外傾する。13は、内斜口縁を有す杯で、内面は全面に赤色塗彩がなされ、外面は口縁部のみなされている。この杯は、他の土器との共伴関係から時代を異にするもので、H－1号住居址やH－2号住居址出土の遺物と類似している。このことから、13の杯は本住居址の遺物とは考えられず、流れ込みによると思われる。（原田）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甑 | 25.2<br>31.4<br>9.8 | 口縁が最大径で、胴部は丸味を帯び、下位に行くにつれてつぼまる。 | 胴部全面縦方向ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。 | ①橙色②良好③完形④やや粗⑤外面に二次焼成痕あり |
| 18 | 杯 | (12.9)<br>4.5 | 体部から稜をもって区画された口縁部がわずかに外傾しながら直線的にのびている。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。 | ①橙色②良好③5/6④密 |
| 13 | 杯 | 13.6<br>——<br>—— | 器高の高い椀に近い形態を示し、深い丸底の体部に内斜口縁を付す。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。口縁部のみ赤色塗彩。 | 体部不定方向ナデ、口縁部ヨコナデ後全面赤色塗彩。 | ①灰黄褐色②良好③1/3④密⑤体部外面煤付着 |

H－6住居址土器観察表

### H－7号住居址

**遺構**（第45・48図、図版15・16）

本住居址は、発掘調査区の南西の隅、J・K・L－5・6グリッドに所在し、北壁がすぐ北に隣接するH－6号住居址の南壁に接する位置関係にある。また、東側80cmにはW－4号溝が、ほぼ北から南へ走っている。確認は基本土層の第IV層でなされ、遺存状況は良好であった。平面プランは、長軸方向（東西）が5.2m、短軸方向（南北）が5.1mを測り、整美な正方形を呈する。主軸方位は、N－85°－Wを測り、面積は25.0m²。東壁中央よりやや南寄りに竈を有している。

覆土は、基本的には細砂で6層に区分でき、レンズ状に堆積している。住居中央部の床面から5cmほどのところから、厚さ6cmで多量に炭化物を含む層（東西地断4b層）が検出されている。

確認された壁高は、平均で45cmを測り、80°の角度でシャープに立ち上がる。周溝は、確認に苦労したが、全周していた。幅が20cm前後、深さは3cmほどである。床面は、厚さ2～6cmで全面的に貼床が施され、平坦に仕上げられている。床面のレベル差は、10cm以内におさまり、東が高く、西に低いという傾向が見られる。また、住居中央部から東壁にかけて、非常によくしまった堅緻面が検出されている。掘り方では、大きな凹凸の波が認められたが、その他間仕切状遺構などの特殊な施設は見られなかった。確認された柱穴は、主柱穴が4個、支柱穴が1個、入口施設に関係すると思われる柱穴1個、合計6個である。その長径・短径及び深さは右の表の通りである。貯蔵穴$P_5$・補助柱穴$P_7$・入口施設に関係する$P_6$以外の主柱穴$P_1$から$P_4$の深さは、40～50cm前後でほぼそろっている。平面形においても$P_5$と$P_6$を除けば、円形かそれに近い形状を呈する。柱穴間の心心距離を見ると、北方向（$P_1$－$P_4$）が2.3m、南方向（$P_2$－$P_3$）も2.3m、東方向（$P_3$－$P_4$）も同数の2.3m、西方向（$P_1$－$P_2$）がややふくらんで2.4mを測り、ほぼ正方形の頂点の位置に配されている。$P_7$の位置は、$P_1$－$P_3$・$P_2$－$P_4$を結ぶ対角線の交点から僅か10cm西へずれており、支柱穴と判断できる。主柱穴に比べると長径・短径とも小さいため、細めの柱が立てられていたことになる。貯蔵穴$P_5$は、方形を呈し、竈のすぐ南側に位置し、底部まで方形のまま50cm以上掘り込まれていた。

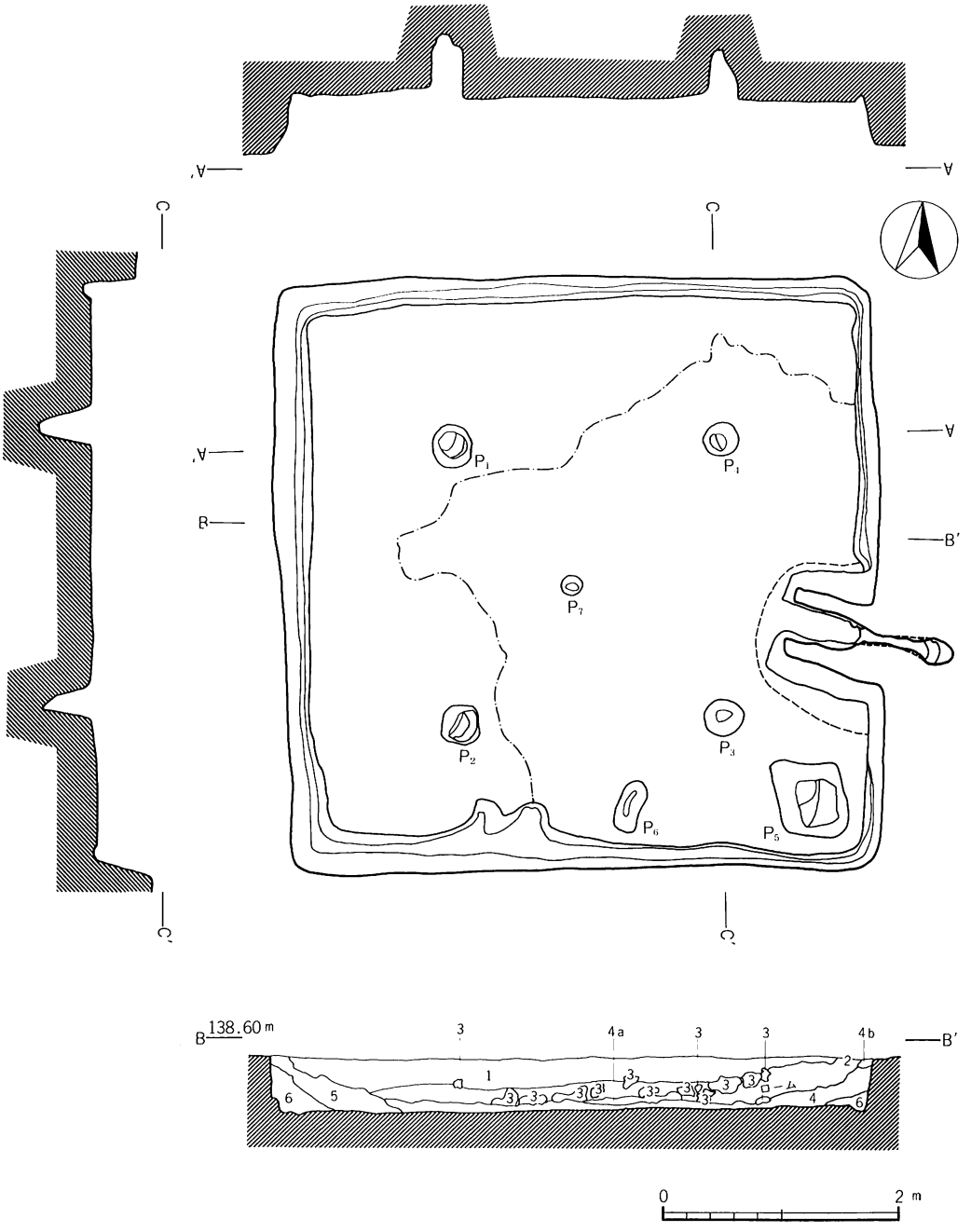
| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 36 | 33 | 51 |
| $P_2$ | 33 | 31 | 46 |
| $P_3$ | 32 | 33 | 44 |
| $P_4$ | 30 | 28 | 43 |
| $P_5$ | 74 | 59 | 53 |
| $P_6$ | 46 | 22 | 5 |
| $P_7$ | 18 | 17 | 25 |

ピット計測表

空間利用については、住居中央部から東側にかけて広がる堅緻面は、使用頻度の高さを示唆する。南壁中央よりやや東に寄る位置にある$P_6$は、この堅緻面の存在を考慮するとき、入口施設に関係するものであろうと判断できる。

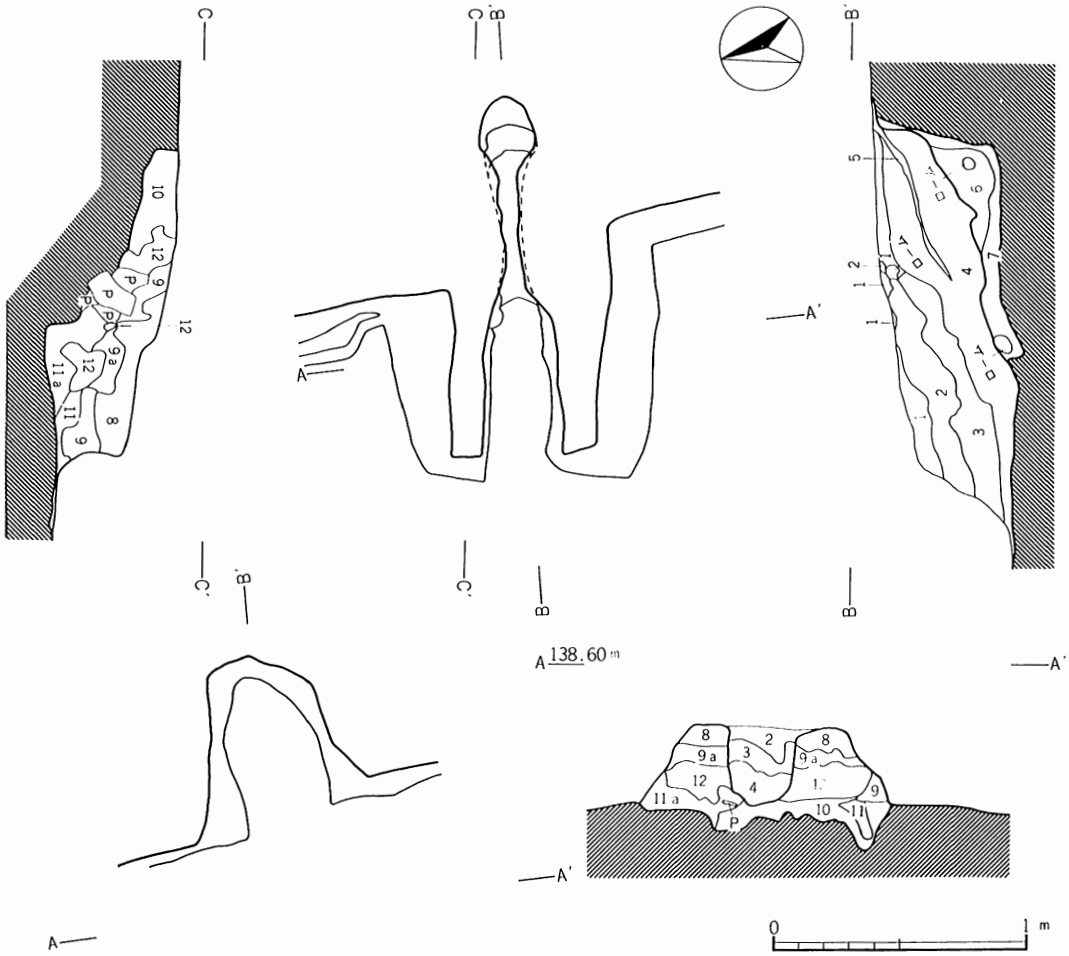
**竈**（第46図、図版17）

東壁の中央よりやや南側に馬蹄形状に確認された。主軸方位はN－100°－Eを指し、主柱穴$P_3$を避けるように据えられている。攪乱はなく、極めて良好な遺存状況である。全長は153cm、全幅が108cmにも及び、煙道の立ち上り角度は80°、高低差が50cmにも達する大形の竈である。竈は、壁内



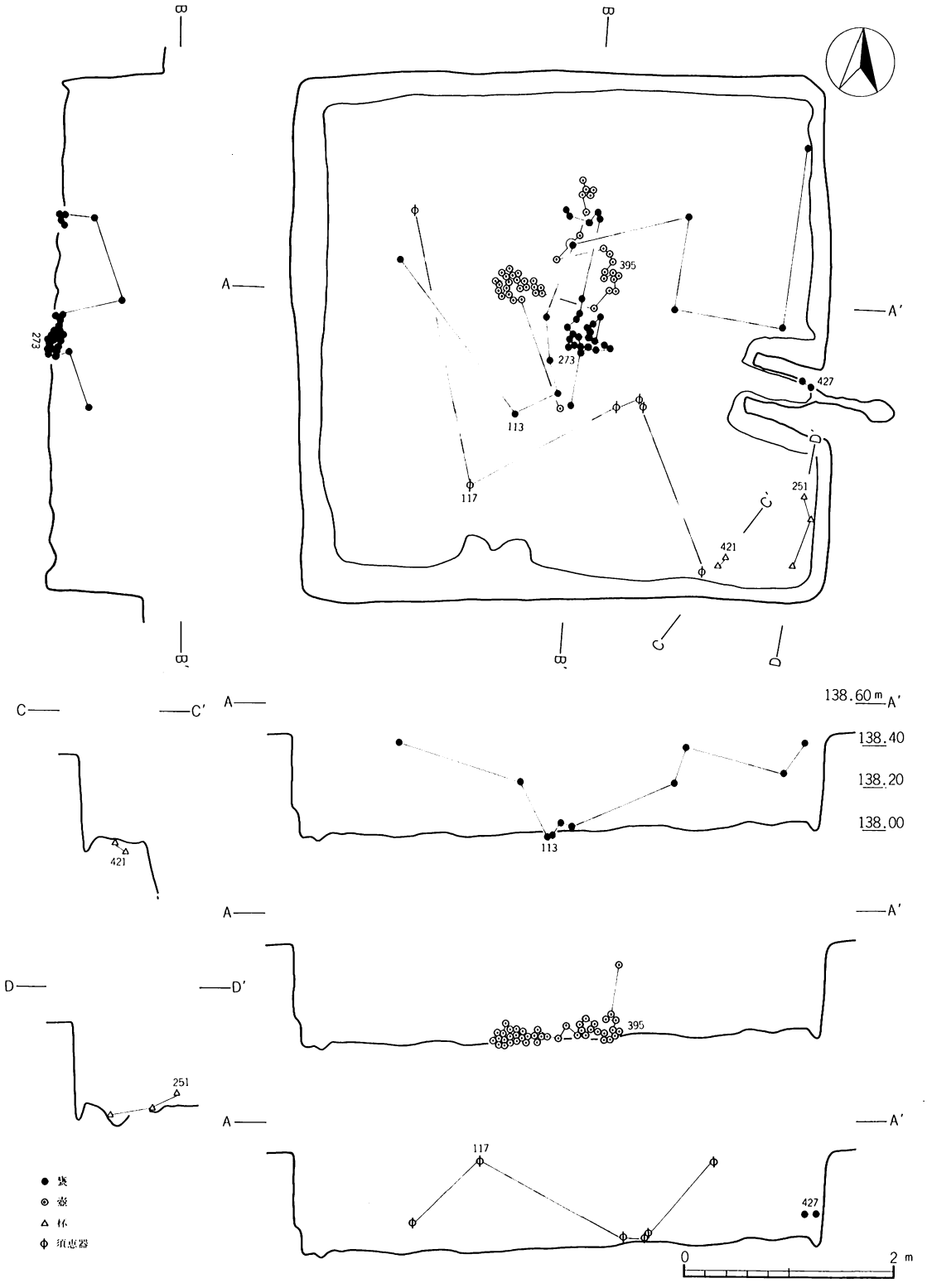

第１層　黒褐色土層　φ ２～５㎜の軽石３％混入する細砂。
第２層　にぶい赤褐色土層　φ ２～５㎜の軽石２％、ロームブロック混入の細砂。
第３層　明褐色土層　軽石１％未満含み、φ２～８㎜の礫２％混入の細砂。
第４層　暗褐色土層　φ ２～７㎜の軽石１％混入する細砂。粘性、しまり有り。
第4a層　暗褐色土層　炭化物混入。
第4b層　黒褐色土層　軽石の混入しない細砂。粘性やや有り。しまり有り。
第５層　褐 色 土 層　φ ２～５㎜の軽石１％混入する粗砂。ロームブロック有り。
第６層　褐 色 土 層　φ ３～５㎜の軽石１％未満混入する細砂。しまりあり。

第45図　Ｈ－７号住居址（１／60）

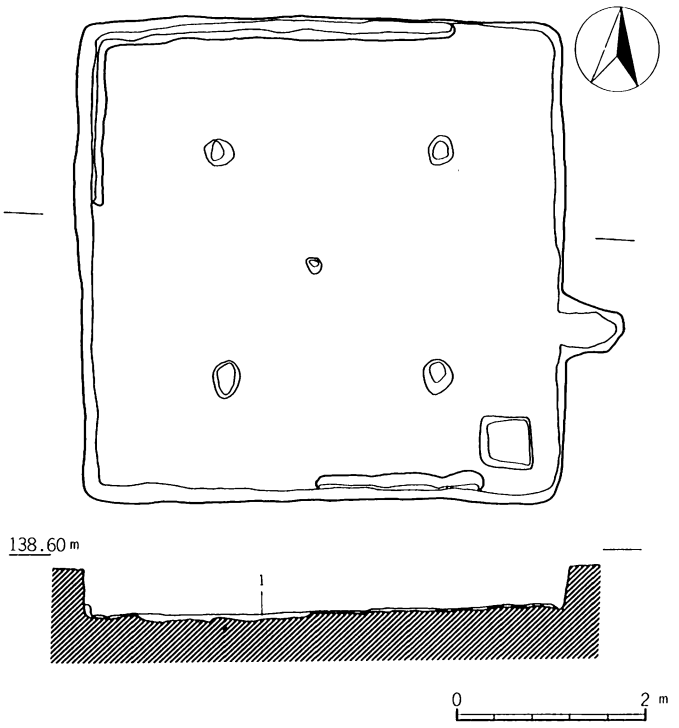



第１層　褐 色 土 層　φ１～３㎜の軽石３％含む細砂。
第２層　にぶい褐色土層　粘土粒を多量に含む細砂。
第３層　黒褐色土層　φ２～４㎜の軽石３％、φ10㎜のロームブロック７％含む細砂。
第４層　にぶい黄褐色土層　よくやけた純粘土の層。粘性・しまりあり。
第５層　褐 色 土 層　粘土粒50％、φ２～３㎜の礫２％混入する細砂。
第６層　暗褐色土層　φ１㎝の礫１％、φ１㎝の焼土ブロック３％含む細砂。
第７層　灰褐色土層　純層に近い白色粘土。φ１㎝のロームブロック１％混入。
第８層　褐 色 土 層　粘土粒50％混入する細砂。φ１～２㎜の軽石２％混入。
第９層　暗褐色土層　φ５～50㎜のロームブロック20％混入する細砂。
第9a層　暗褐色土層　φ２～10㎜のロームブロック１％混入する細砂。
第10層　黒褐色土層　粘性・しまりのある細砂。焼土粒１％混入。
第11層　褐 色 土 層　粘性のある細砂。焼土粒１％混入。
第11a層　褐 色 土 層　粘土粒50％混入する細砂。焼土粒１％混入。
第12層　にぶい黄褐色土層　純粘土層。やけて赤茶けた所あり。

第46図　Ｈ－７号住居址竈（１／30）




第47図　H－7号住居址遺物出土状態（1／60）



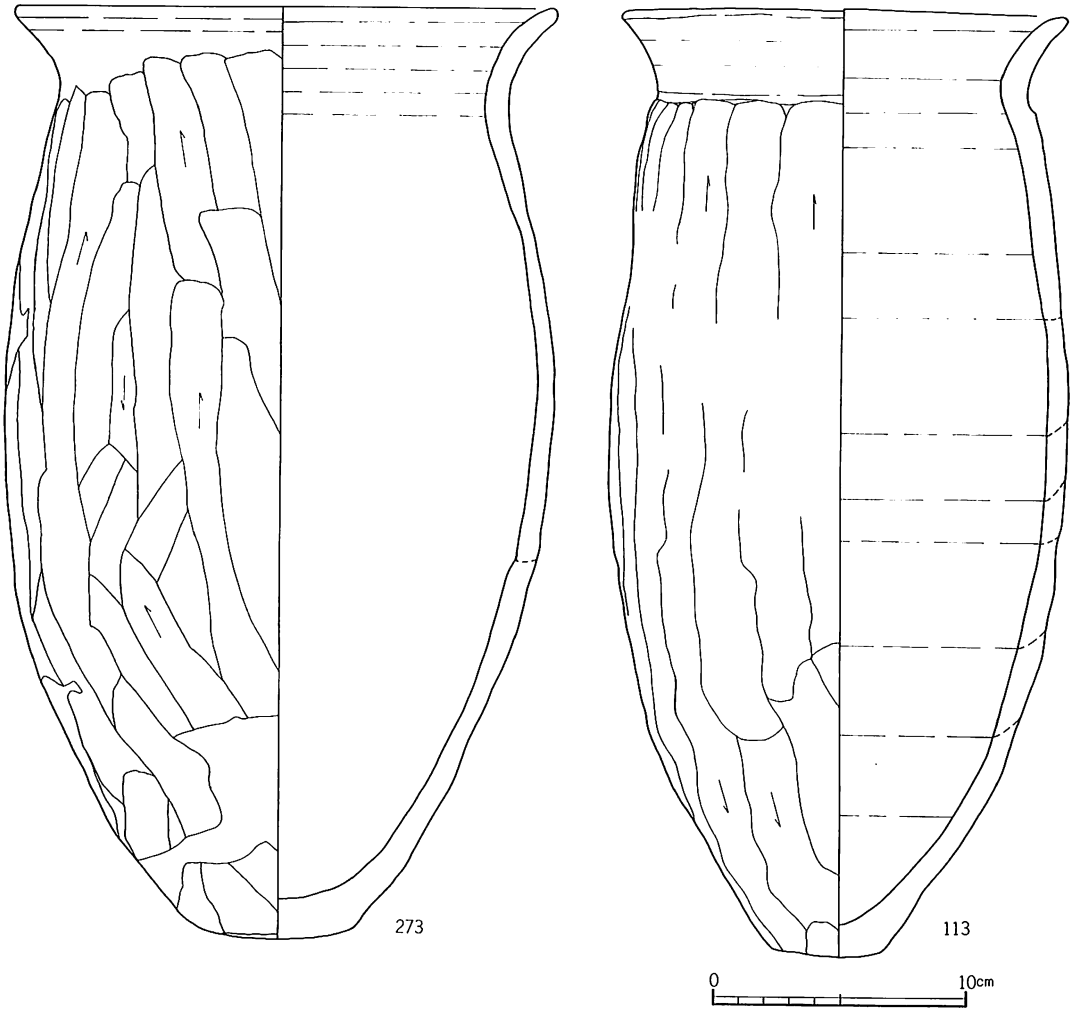

第1層　明黄褐色土層　細砂。粘性、しまりあり。
ロームブロック粒50%混入する。
第48図　H－7号住居址掘り方（1／80）

が92cm、壁外61cmであり、東へ突き出るように設置されている。

構築は、東壁の中央よりやや南寄りを、深さ45cmで、60cmほど切り込み、掘り方としその掘り方上に白色粘土を貼りつける工法がとられている。この構築方法は、H－3号住居址、H－5号住居址等と同じ方式で、東側に大きく掘り込んでおり、掘り込みのないH－2号住居址とは対照的である。構築材は先述の如く軟質の白色粘土を中心とする。左袖の切開中には、ぎっしりと細砂の詰まった甕が出土し構築材として使用されていたことが確認された。また、袖の中から僅かながら切り藁も検出された。構築材には焼土も見られ、袖部分に多く、煙道部に進むほど少なくなる傾向が見られた。使用面の確認の際には、焼土が予想するほど出ず、どこまでが天井部の崩落で、どこからが使用面なのか確認に苦しんだ。結局、予想よりもはるかに燃焼部が深く、そこから一気に急角度で煙道が立ち上がることが明らかになった。使用面における焼けぐあいは、焚口部で強く、煙道に進むほど弱くなっている。本住居址の竈は、全長153cmのうち壁内が92cm、壁外に61cm突出している。時代が進むほど竈が住居外へ出ていく傾向があることが良く知られているが、H－2号住居址のように東へ突出しない竈に比べ、構築時期がかなり新しいと見ることができよう。

**遺物出土状態**（第47図）

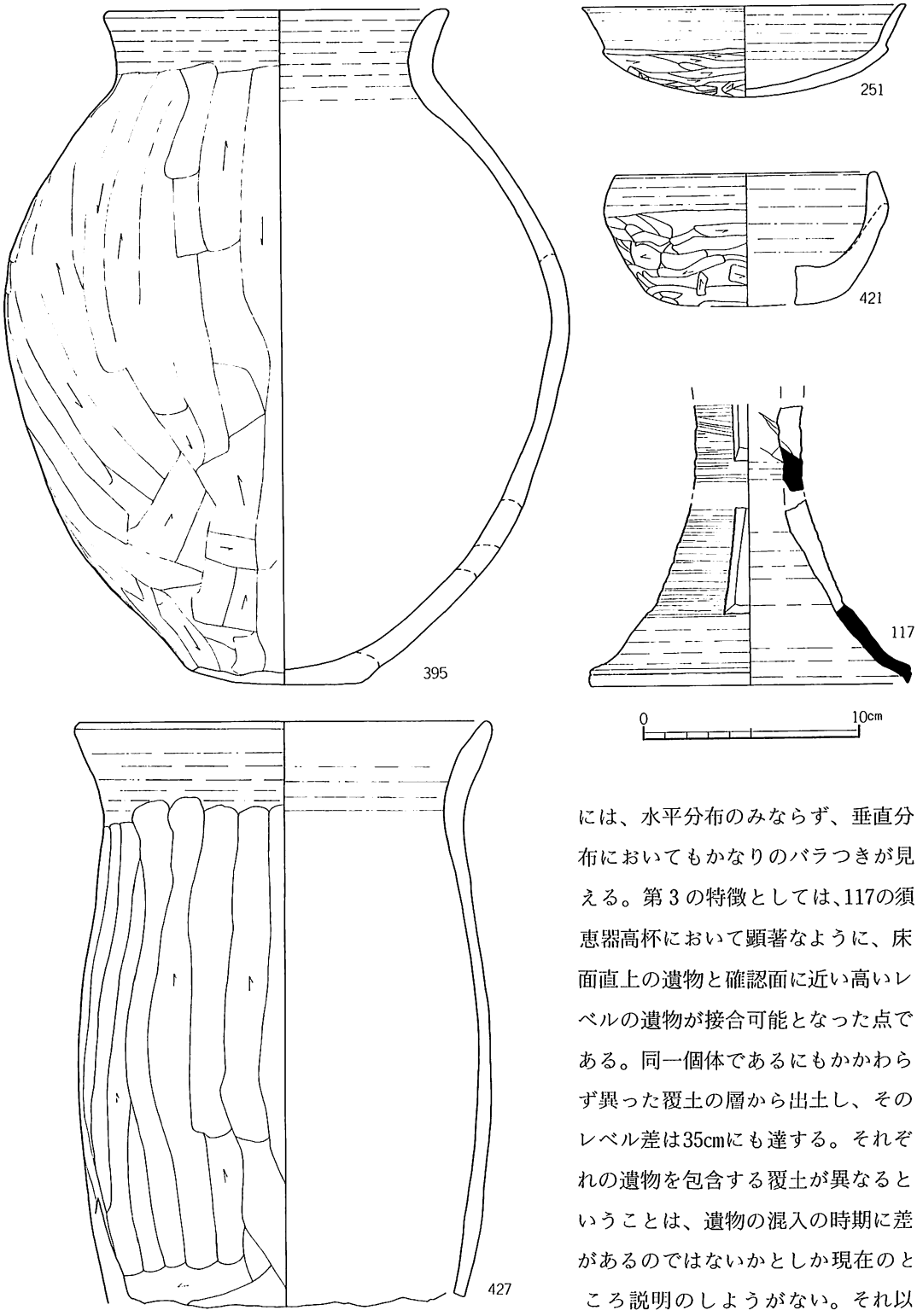
本住居址の遺物の出土には次のような特徴が見られる。第1に、430点以上にも登る遺物のうち、完形に近い接合状況を示すものは、ほとんどが床面直上から出土していることがあげられる。273や395の甕は、特にその傾向が顕著である。395の場合には、床面に横倒しになっているところへ上から圧力が加わったか、或いは床面よりもそう離れないところから床面に落とされて破壊された様相を呈していた。第2に、完形に近い接合が可能であった遺物を見ると、水平分布に散らばりが目立つものと、比較的集中するものに2分できた。273や395は遺物が集中して出土したのに対して、113は最も離れたものでは4m余りも離れている遺物が接合可能となっている。113の場合




第49図　H－7号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 273 | 甕 | 21.3<br>36.8<br>6.0 | 底部と口縁部に厚みをもつ。底部はやや扁平な平底で、胴部中位に最大径をもつ長胴甕である。口縁部は外反する。 | 口縁部、横ナデ。胴部、縦方向のヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、ヘラケズリの後ナデ。 | ①にぶい橙色②やや不良③胴部5/5④やや粗 |
| 113 | 甕 | 15.9<br>31.2<br>8.2 | 胴部中位に最大径をもち、頸部でくびれ外反する。底部は平底。 | 口縁部、横ナデ。胴部、縦方向のヘラケズリの後胴部中位にナデ。 | 口縁部、横ナデ。胴部から底部にかけてナデ。 | ①にぶい橙色②良好③5/6④やや粗 |

H－7住居址土器観察表




第50図　H－7号住居址出土遺物（1／3）

には、水平分布のみならず、垂直分布においてもかなりのバラつきが見える。第3の特徴としては、117の須恵器高杯において顕著なように、床面直上の遺物と確認面に近い高いレベルの遺物が接合可能となった点である。同一個体であるにもかかわらず異った覆土の層から出土し、そのレベル差は35cmにも達する。それぞれの遺物を包含する覆土が異なるということは、遺物の混入の時期に差があるのではないかとしか現在のところ説明のしようがない。それ以上の説明は、今後の課題となろう。

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 395 | 甕 | 17.6<br>37.3<br>4.4 | 底部に厚みをもつ。底部は丸みのある平底で最大径を胴部中位にもつ長胴甕である。頸部にわずかな外稜をもつ。口縁部はなだらかに外反する。 | 口縁部、横ナデ。胴部、縦方向のヘラケズリ。底部、ヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のヘラナデの後ナデ。 | ①にぶい橙色②きわめて良好③6/7④密 |
| 427 | 甕 | 19.3<br>——<br>—— | 胴部中位に最大径をもつ。口縁部はやや外反する。 | 口縁部、横ナデ。胴部、縦方向のヘラケズリ。 | 口縁部、横ナデ。胴部、横方向のヘラナデの後ナデ。 | ①にぶい橙色②やや不良③口縁部から胴部にかけて1/2④やや粗 |
| 251 | 杯 | (15.0)<br>4.2 | 体部が厚く、口縁部は薄い。体部は扁平に立ち、頸部に外稜をもつ口縁部は外反する。 | 口縁部、横ナデ。底部、体部、ヘラケズリ。口唇部、ヘラケズリ。 | 口縁部、体部、底部、横ナデ。 | ①橙色②良好③1/2④密 |
| 421 | 杯 | (12.0)<br>6.1<br>—— | 底部は平底。底部と体部の境は明瞭でない。体部は、内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。 | 口縁部、横ナデ。体部、ヘラケズリの後ナデ。 | 口縁部、横ナデ。体部、ナデ。 | ①橙色②良好③1/2④密 |
| 117 | 高杯<br>須恵器 | ——<br>——<br>—— | | 回転横ナデの後、横方向の回転ハケメ。 | 回転横ナデ。 | ①灰色②良好③脚部1/4④密 |

H－7号住居址土器観察表

**出土遺物**(第49・50図、図版27・28)

本住居址の実測可能となった遺物は、僅か7個体のみであった。土師器甕が4個体、同じく土師器杯が2個体、須恵器高杯が1個体である。4個体の甕のうち273、113、427は特に長胴化が著しい。これらはいずれも胴部中位に最大径を有し、二次焼成を受けているという共通点を有している。427は竈左袖内より構築材として使用されたものである。杯では、251の模倣杯が、北に隣接するH－6号住居址の18と非常に近い。一方、421の杯は、体部の器肉が厚く、FA降下以前の杯に近く、共伴関係からいって流れ込みと判断してよいだろう。須恵器高杯脚部117は、柱部にタテ方向のスカシ窓が2段配されており、裾部は緩やかに開いている。本遺跡の須恵器高杯の出土は4点を数えるが、溝より出土した1段スカシの高杯よりも新しく、H－5住居址の891や890と同じ時期、すなわち、TK10に比定できよう。

本住居址の出土遺物を個々のレベルではなく、ひとつのまとまりと考えると、6世紀中葉と判断してよいのではないだろうか。 (中野)

### H－8号住居址

**遺構**（第51・54図、図版18）

本住居址は、調査区の東方G・H－11・12・13グリッドに所在し、西の住居址群から一軒だけ離れている。南にはW－2号溝が本址と重複している。プラン確認の段階でW－2号溝の覆土が本址との重複部分に入っているという所見から、時期の新しいW－2号溝を完掘して本址の排土作業を進めた。基本層序Ⅳ層上面で確認され、平面形は正方形で、竈を東壁やや南寄りに持つ。規模は東西軸5.1m、南北軸5mであり、面積は23.6m²を測る。各辺とも直線的に構成され、整った形態を呈する。主軸方位はN－90°－Eをさしている。遺存状況は、南壁のW－2号溝に切られている部分を除いては、極めて良好である。

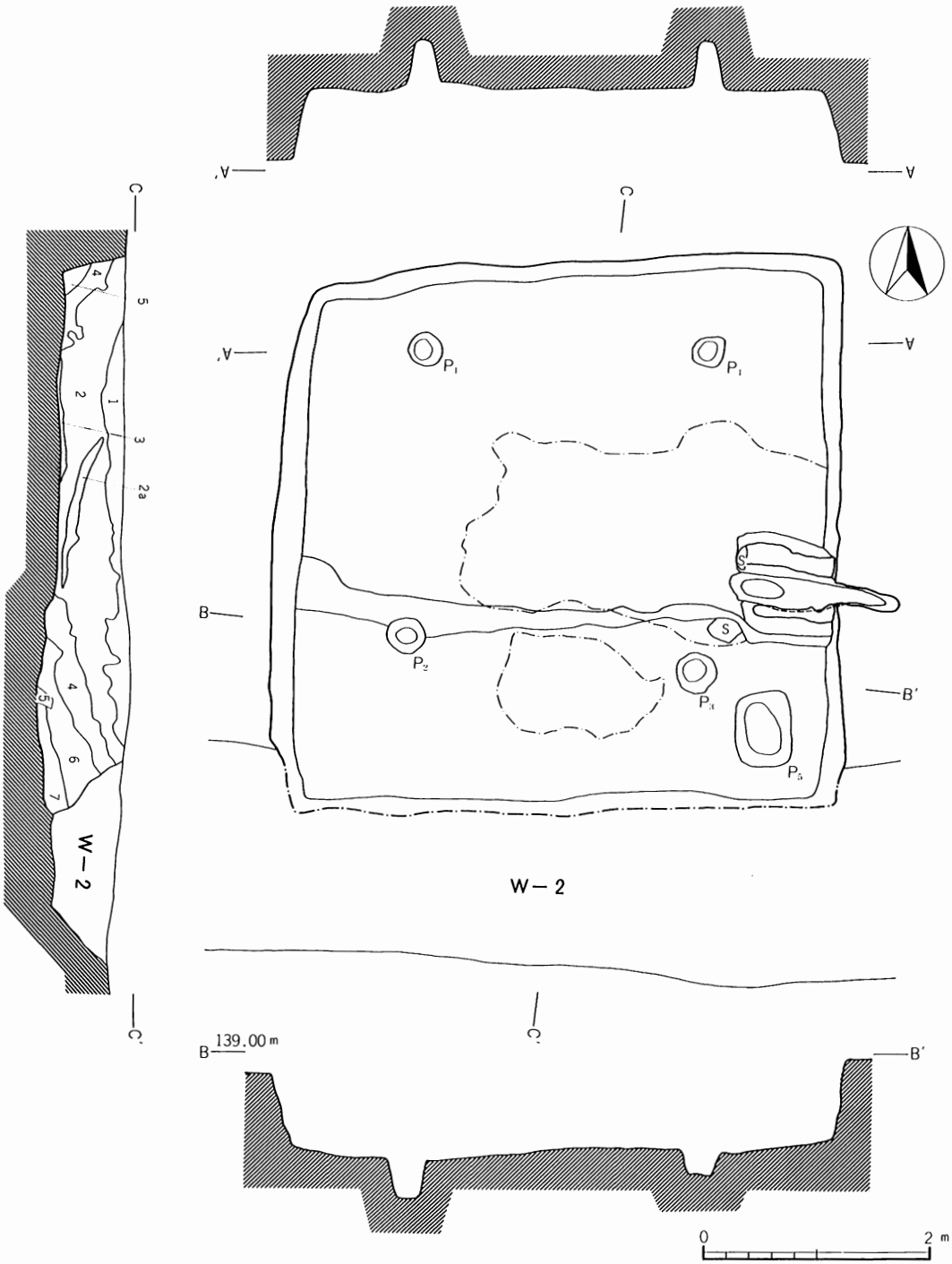
覆土は、第51図の地断C－C′に示されるように、8層から形成されている。各層とも粒子が細かい細砂からなっている。第2層の中の2a層は、炭化物が70％も含まれる黒褐色土で、住居址中央部に厚さ8cmで南に傾斜し、約1.5m²の範囲に見られる。

確認面からの壁高は、平均65cmを測る。壁の立ち上がり角度は、平均75°であり、シャープに立ち上がる。床面は、基本層序第Ⅶ層まで掘り込んで構築されており、北半分が高く、南半分が低い2段になっている。南北床面のレベル差は15～20cmある。堅緻部分は、中央から竈にかけての部分と、南の低い面中央部分にある。貼り床は、全面にわたり10～18cmの厚さで施工されている。ピットは、計測表に示すように、13個確認されている。主柱穴は$P_1$～$P_4$の4個で、各主柱穴の中心点を結んだ相互の間隔は、$P_1$－$P_2$が2.5m、$P_2$－$P_3$が2.6m、$P_3$－$P_4$が2.8m、$P_4$－$P_1$が2.5mで、$P_1$－$P_3$、$P_2$－$P_4$を結ぶ対角線の長さも3.70m、3.68mと極めて近似の数値を計測した。しかし、主柱穴は、住居址の各隅を結ぶ対角線上には位置しない。$P_5$は貯蔵穴で長方形に掘り込まれている。

床面の掘り方は、多くの凹凸が認められ、床下土坑が8基確認された。規模は大小様々で、北側と上段下段の境目に多く検出された。掘り方を終了した時点で、北壁のローム層の中に炭化物を含む黒色土が、厚さ4～10cmで鮮やかに確認された。そこで各壁を精査した所、西壁、東壁にも見られた。この炭化物の範囲を明らかにするため、第54図のように壁を7ケ所切り地断を調べた。その結果、黒色土が北壁では基本層序の第Ⅶ層と第Ⅸ層の間を切り、奥行40～50cmまで達している。西壁、東壁も同じ層を切り、壁面から10cm前後の所で止まっている。北壁では炭化物も多く広い範囲で明確にわかり、焼土も混入する。東壁及び西壁では炭化物も少なく狭い範囲になっている。北側の高い方にのみ見られ、南側の低い方には見られない。こういったことからも、自然のものとは思われず、住居に関する遺

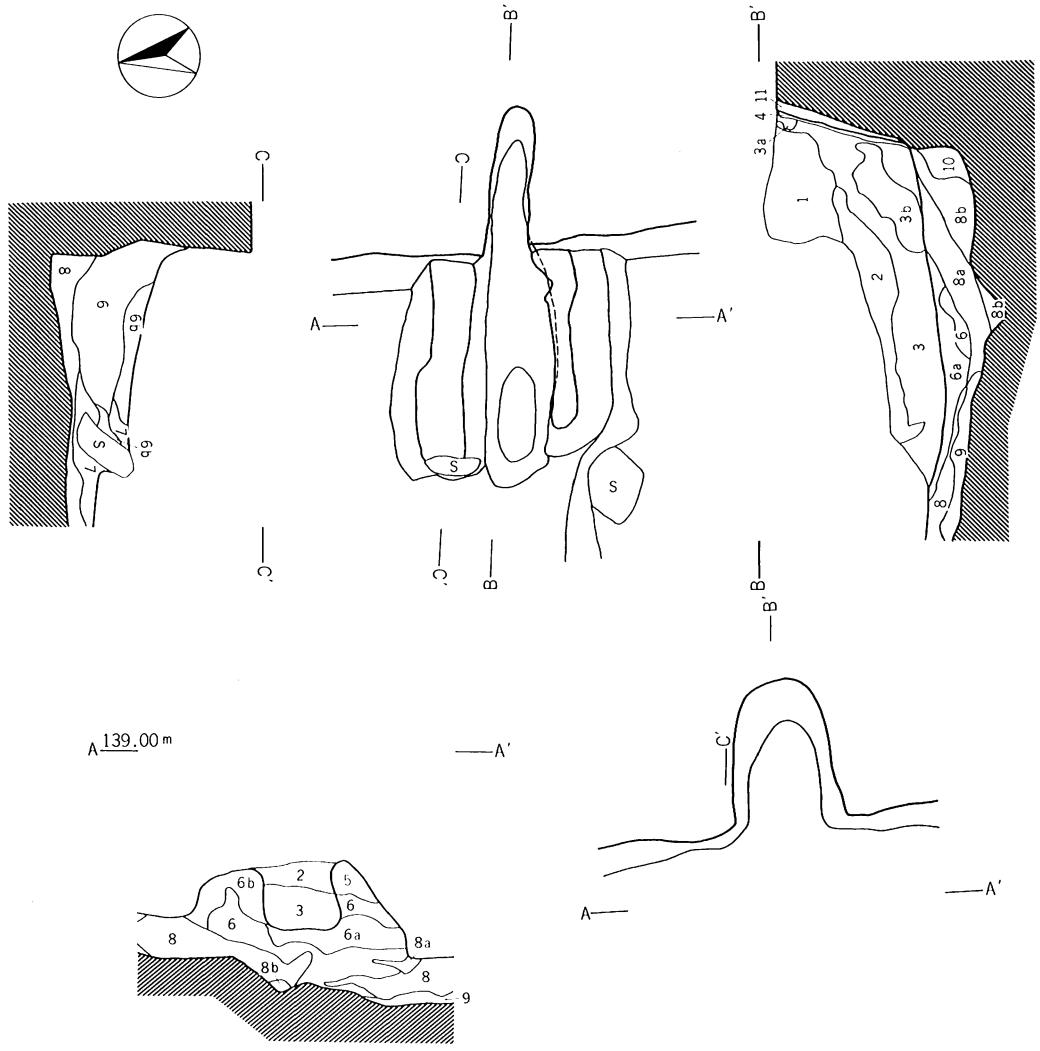
| | 長径cm | 短径cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| $P_1$ | 30 | 28 | 45 |
| $P_2$ | 34 | 32 | 41 |
| $P_3$ | 37 | 35 | 21 |
| $P_4$ | 28 | 27 | 43 |
| $P_5$ | 68 | 49 | 34 |
| $P_6$ | 138 | 92 | 20 |
| $P_7$ | 114 | 103 | 19 |
| $P_8$ | 101 | 58 | 16 |
| $P_9$ | 51 | 40 | 50 |
| $P_{10}$ | 46 | 27 | 25 |
| $P_{11}$ | 24 | 24 | 31 |
| $P_{12}$ | 40 | 35 | 28 |
| $P_{13}$ | 28 | 23 | 23 |

ピット計測表



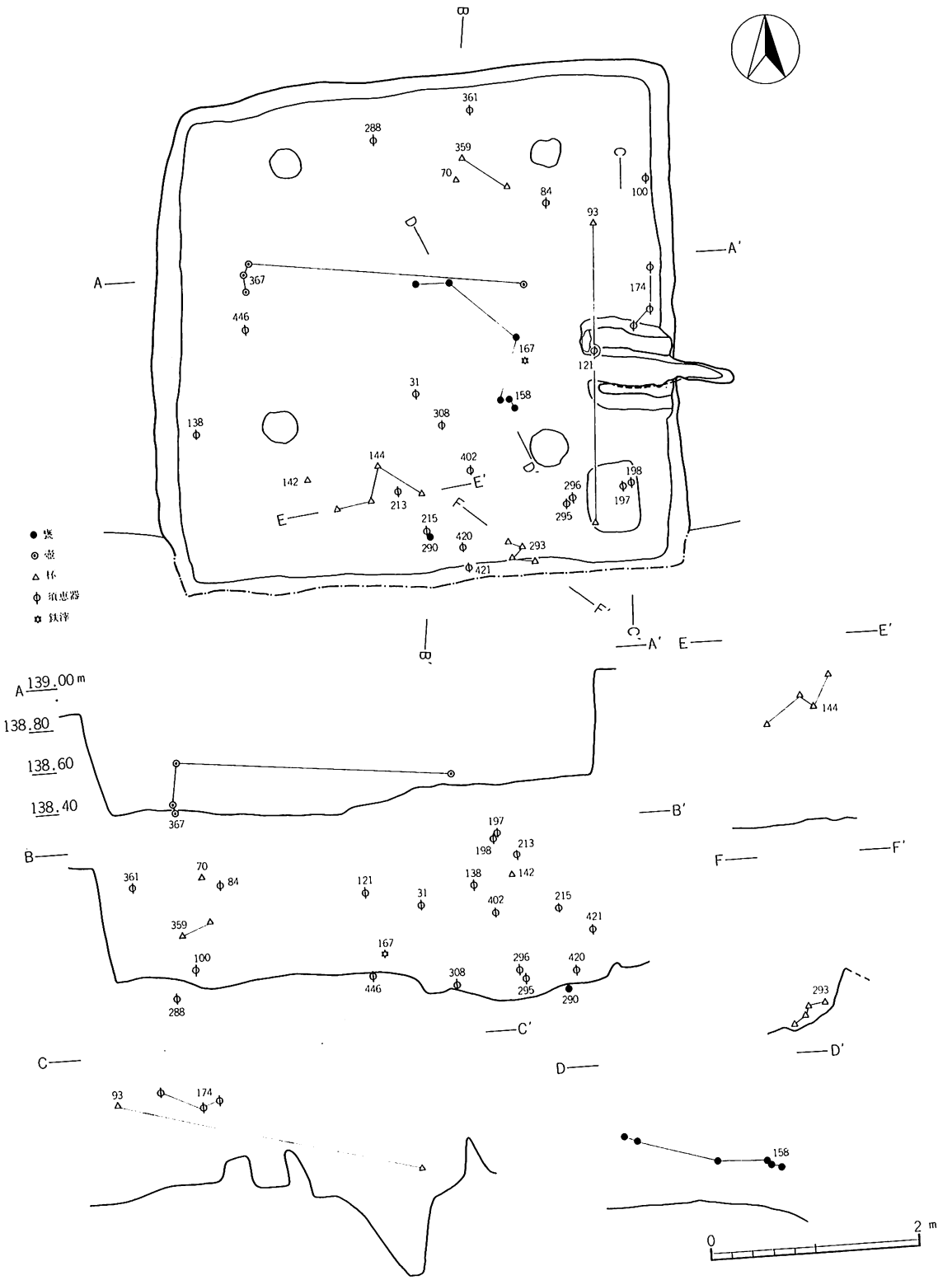

第１層　黒褐色土層　細砂。しまり、粘性なし。
第２層　暗褐色土層　細砂。φ５～40mmのロームブロックを多量に含む。しまり、粘性なし。
第2a層　黒褐色土層　細砂。炭化物が70％含まれる。
第３層　黒褐色土層　細砂。ローム粒を40％含む。粘性有。
第４層　黒色土層　細砂。しまり、粘性共にややある。
第５層　黒褐色土層　細砂。粘性強く、しまりややある。
第６層　暗褐色土層　細砂。しまりややある。
第７層　黒色土層　細砂。しまり、粘性共にある。

第51図　Ｈ－８号住居址（１／60）

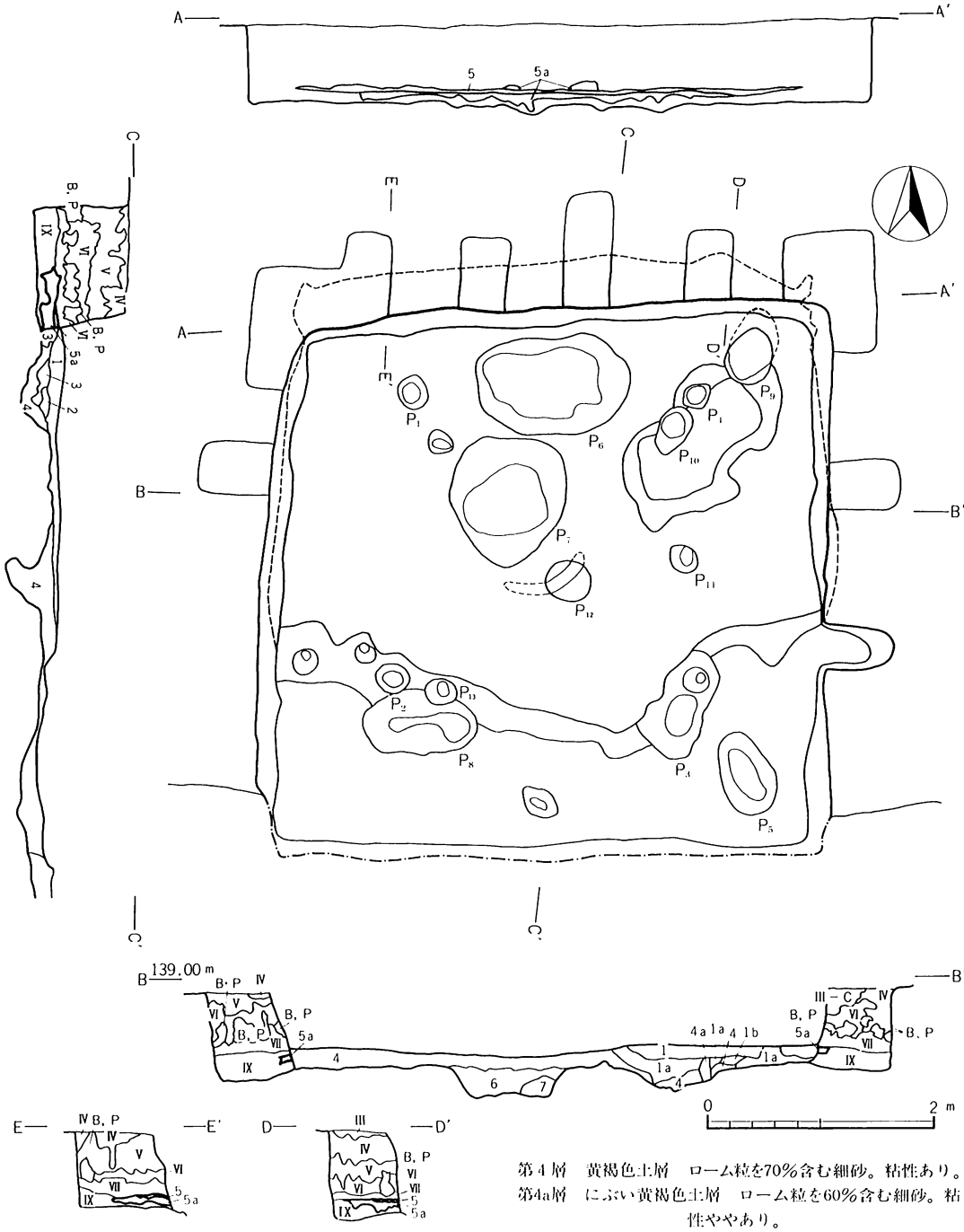



第１層　暗褐色土層　φ２～５㎜の軽石を５％含む細砂。
第２層　黒褐色土層　粘土粒を５％含む細砂。粘性あり。
第３層　褐色土層　φ５㎜の小石を４％含む粘土層。しまりあり、粘性強い。
第3a層　黒褐色土層　φ２～５㎜の軽石を微量含む細砂。
第3b層　黒褐色土層　灰が主体、焼土ブロックがまだらに10％混入する。
第４層　赤褐色土層　粘土、焼土。
第５層　褐色土層　粘土粒を若干含む細砂。ややしまりを有す。粘性もややある。
第６層　にぶい黄褐色土層　φ10㎜程の礫を微量含む粘土。しまり、粘性共にある。
第6a層　にぶい赤褐色土層　粘土質。ブロック状にまだらに焼土が見られる。炭化物が混入。
第6b層　明褐色土層　粘土質。しまり粘性を有す。φ３㎜の軽石を微量含む。
第７層　褐色土層　細砂。かたくしまっている。
第８層　黒褐色土層　灰、炭化物、焼土ブロックを多量に含む。やや粘性を有す。
第8a層　暗褐色土層　細砂。焼土を微量含む。粘性を有す。
第8b層　褐色土層　灰、ロームブロック混入。微量の焼土も見られる。粘性あり。
第９層　黄褐色土層　ローム質、若干やわらかいが粘性をもつ。所々に黒褐色土が混入。
第10層　にぶい黄褐色土層　細砂。粘性が強く柔かい。焼土粒が少量混入。
第11層　暗褐色土層　細砂。柔かく、粘性は少ない。

第52図　Ｈ－８号住居址竈（１／30）




第53図　H－8号住居址遺物出土状態（1／60）




第1層　黒褐色土層　ローム粒を30%含む細砂。粘性あり。
第1a層　黒褐色土層　φ10～20mmのロームブロックが10%混入する細砂。粘性ややあり。
第1b層　暗褐色土層　φ10～30mmのロームブロックが60%混入する細砂。粘性ややあり。
第2層　褐色土層　ローム粒を50%含む細砂。粘性あり。
第3層　黒褐色土層　ロームブロックを20%含む細砂。
第4層　黄褐色土層　ローム粒を70%含む細砂。粘性あり。
第4a層　にぶい黄褐色土層　ローム粒を60%含む細砂。粘性ややあり。
第5層　黒褐色土層　φ2～4mmの軽石を3%含む細砂。しまり、粘性共になし。炭化物が混入。
第5a層　暗褐色土層　φ10～20mmのロームブロックが20%混入。炭化物が混入。
第6層　褐色土層　φ10～40mmのロームブロックを60%含む。しまり、粘性共にややあり。
第7層　褐色土層　ローム粒30%混入。細砂。粘性あり。

第54図　H－8号住居址掘り方（1／60）

構であると思われる。尚、住居址内の床面及び貼り床からは、この様な層は検出されなかった。

**竈**（第52図、図版19）

東壁の中央やや南寄りに位置し、主軸方位はN－97°－Eを指す。本住居址の確認面が高かったため残存状況は極めて良い。全長150cm、幅100cmを測り、住居内95cm、住居外55cmである。煙道部立ち上がり角度は74°でシャープに立ち上がる。袖石は安山岩系の円礫を用い、左右共に存在したが、右袖石は下段の方へ崩れ落ちている。支柱は検出されなかった。火床部、煙道部共に良く焼けており、火床部の床面よりやや低くなっている。

袖部は5層に分けられ、粘土を固めて構築されている。掘り方を見ると、竈が上段と下段の境に築かれており、左袖は上の段に、右袖は下の段にある。そのため右袖を厚くし、左右の高さをそろえている。基底には、ローム質の褐色土が敷かれている。煙道部の掘り方は、70°の角度で立ち上がり、壁外を楕円形に掘り出す。

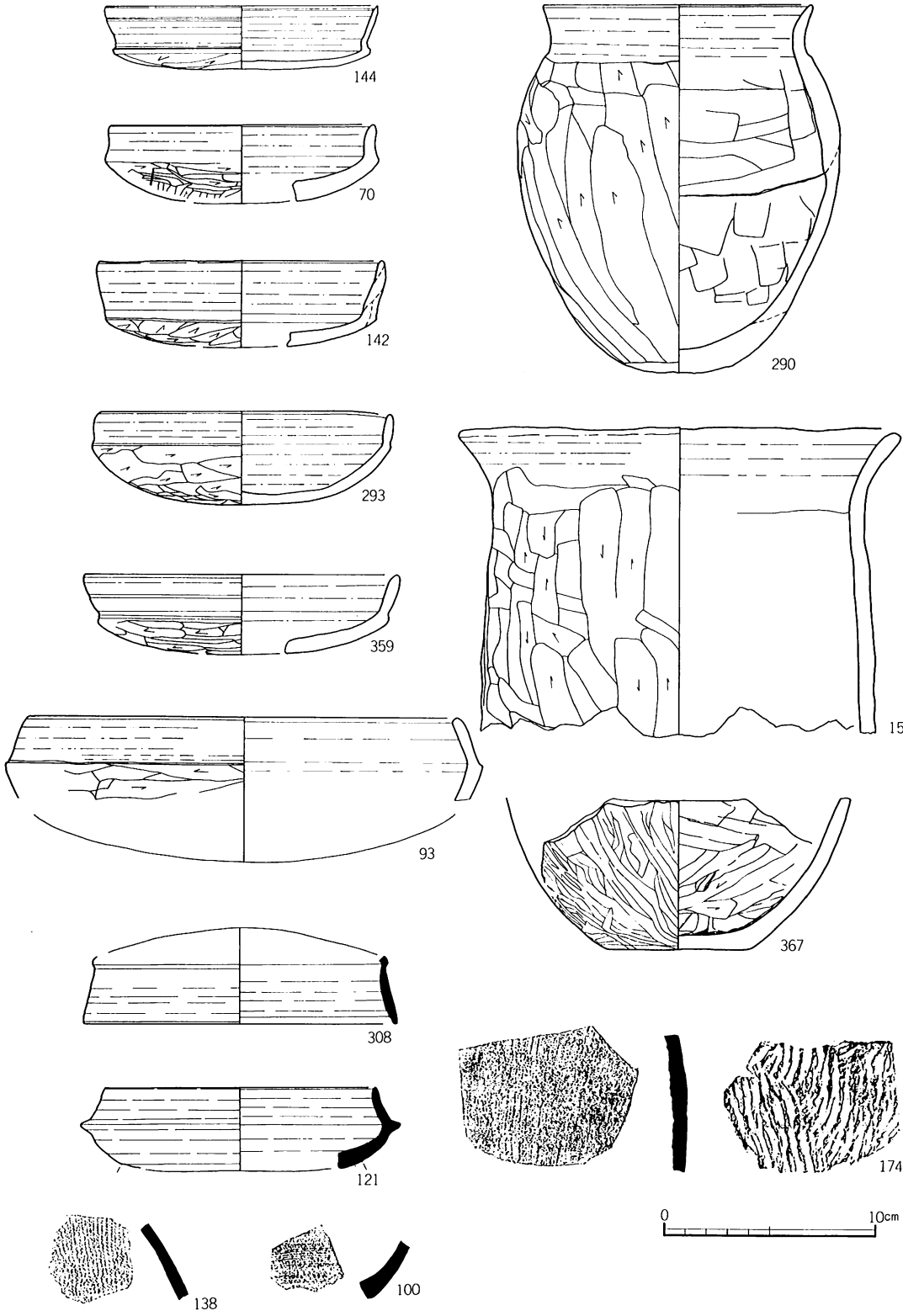
**遺物出土状態**（第53図、図版20）

本住居址から出土した遺物は、実測可能な13点以外すべて小破片であり、半数以上が南側の低い面に集中している。中央部は比較的少なく、$P_4$付近にも集中が見られる。144は、4片が接合する杯で、南側中央部に分布し、床面上50～70cmの高さから出土している。293は、4片が接合する杯で、いずれも南壁際の床面直上、あるいは床面近くから出土している。93は、2片が接合する杯で、竈をはさみ北と南に1片ずつ2m90cm離れて出土している。367は、4片が接合する壺で、3片は西壁付近にまとまっているが、底部の一辺だけが2m70cm離れた竈付近から出土している。158は、6片が接合する甕であり、竈前に分布しており、床面上20～30cmの高さで出土している。290の甕は、南壁際の床直上に横転した状態で出土した。174は、3片が接合する須恵器大甕で、竈の北に分布し、床面上40cm前後で出土している。295は、12片からなる須恵器大甕でこれら12片は接合しないが器形等から同一個体であることは明確である。10片は南壁付近に分布し、$P_1$－$P_2$、$P_1$－$P_4$の間に1片ずつ出土している。垂直分布では、地層断面の第1層に197、198の2片、第2層に31、213、446の3片、第4層に288、402の2片、第6層に215、295、296、421の4片、第7層に420の1片が分布している。水平分布、垂直分布から、295の大甕は、時期を異にして人為的に投棄されたものであると考えられる。167の鉄滓は、竈前方50cmの床面上10cm付近から出土した。

**出土遺物**（第55・56図、図版28）

本住居址からの出土遺物は、土師器433点、須恵器21点、鉄滓1点と若干の埋土遺物で、このほかにいわゆる編物石が12個出土している。実測個体数は、土師器甕が2個体、壺が1個体、杯が6個体、須恵器大甕が2個体、杯の蓋と身が1個ずつ、合計13個体であった。

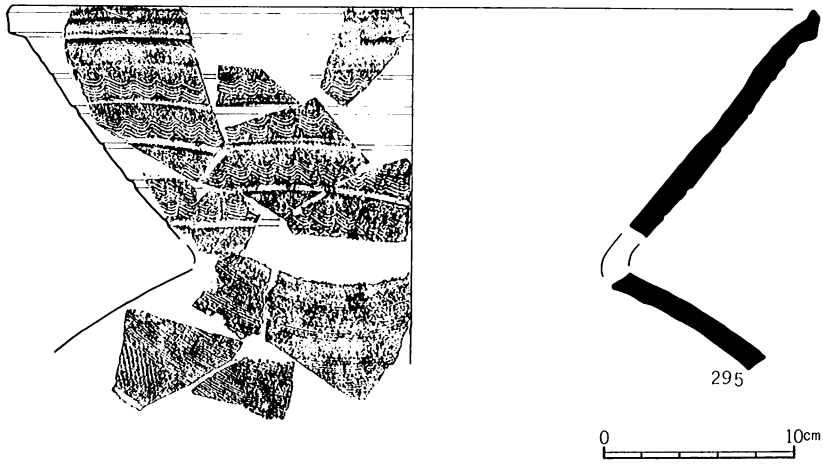
杯はすべて外稜を有し、口縁の形から大きく3分類される。口縁部が外反傾向にある142、144、359。口縁部がほぼ直立する70、293。口縁部が内傾し、非常に大形である93。142は、器肉が薄く平底になっている。甕は形態的に2つに分類される。口縁部に最大径を有する長胴甕であろうと推定される158。胴上部に最大径を有す丸胴の小形甕で口縁はゆるやかに外反する290。




第55図　H－8号住居址出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 144 | 杯 | 12.8<br>3.0 | 扁平な体部を明瞭な外稜によって口縁部と区分している。口唇は内そぎにより鋭角を呈す。 | 体部へラケズリ。外稜もへラで面取り、口縁部回転ヘラケズリによる沈線を入れた後ヨコナデ。 | 体部不定方向ナデ、口縁部ヨコナデ、口唇はヘラケズリによる内そぎ後ナデ。 | ①橙色②良好③9/5④やや粗⑤口縁と内面を黒色処理しており、忠実な須恵器模倣か |
| 70 | 杯 | (12.4)<br>—— | 直立しながらやや外反する口縁部と丸底の体部を外稜によって区分。 | 口縁部ヨコナデ、体部へラケズリ。 | 口縁部下半を回転ヘラケズリで面取り後ヨコナデ。体部は不定方向ナデ。 | ①橙色②良好③1/6④やや粗⑤外面二次焼成、内面煤付着 |
| 142 | 杯 | (13.4)<br>—— | 体部と外稜で区画された口縁部がわずかに外傾しながら直立する。 | 体部へラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 全面ヨコナデ。 | ①褐灰色②良好③1/4④密⑤内外面ともに黒色処理 |
| 293 | 杯 | 13.8<br>4.4 | 比較的深い体部に外稜で区画されたほぼ直立する短い口縁が出る。 | 体部へラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。 | 体部不定方向ナデ後、中央部を除き全面ヨコナデ。 | ①橙色②良好③9/10④密⑤内外面タール状付着物 |
| 359 | 杯 | (14.8)<br>—— | やや浅い体部から外傾しながら立ちあがり、口縁部は外反する。 | 体部へラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 体部不定方向ナデ後、中央部を除き全面ヨコナデ。 | ①にぶい褐色②良好③1/5④やや粗⑤口縁と内面を黒色処理 |
| 93 | 杯 | (20.2)<br>—— | ひじょうに大形、丸底の体部で口縁部内傾。 | 体部へラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | ヨコナデ。 | ①橙色②良好③1/8④密⑤他に同一個体が2片存在する |
| 290 | 甕 | 12.6<br>17.8<br>5.1 | 最大径が胴部上半にある小形甕で、口縁部は外稜をもって直立し、上位でやや外反する。 | 胴部及び底部へラケズリ。口縁部ヨコナデ。 | 胴部下位から底部まで縦方向ヘラナデ後ユビナデ。胴部中位輪積痕ナデ消し。上位と口縁部はヨコナデ。 | ①橙色②良好③1/2④やや粗⑤胴部外面二次焼成、口縁部と内面煤付着 |
| 158 | 甕 | (20.6)<br>——<br>—— | 円筒形の胴部に「く」の字形の口縁部を付す。 | 胴部縦方向ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。 | 口縁部ヨコナデ、胴部不定方向ナデ。 | ①にぶい赤褐色②良好③1/10④粗、φ1cm大小石を多量含む。胴部二次焼成 |
| 367 | 壺 | ——<br>——<br>6.8 | 底部付近のみ残存。球形の胴部に平底を付す。 | 残存部全面ミガキ。 | 底部へラナデ、胴部下半ユビナデ。 | ①にぶい橙色②良好③1/6④密⑤内外断面二次焼成。 |
| 308 | 杯 蓋<br>須恵器 | (14.6)<br>——<br>—— | 外稜はゆるく突出して口縁部は直線的に外反し、端部を内そぎして受部と合致させている。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整。 | 口縁端部回転ヘラケズリ後、回転ナデ調整。 | ①灰色②良好③口縁部1/5④密⑤外面自然釉付着、他に接合できない同一個体2片 |
| 121 | 杯<br>須恵器 | (12.7)<br>——<br>—— | たちあがりは内傾し端部付近で直立気味になる。受部先端もたちあがり端部同様、丸くおさめられている。 | マキアゲ、ミズビキ成形。時計まわりロクロによる回転ヘラケズリ後ナデ。 | ヨコナデ。 | ①灰色②良好③1/8④密⑤体部のみ自然釉が付着しており、蓋との重ね焼が推定される |
| 174 | 大 甕<br>須恵器 | ——<br>——<br>—— | 胴部小破片、ゆるやかな球胴を呈す。 | 縦方向の平行タタキ後、間隔をあけてヨコナデによるスリケシ手法。 | 青海波状文 | ①灰色②良好③小破片④密、長石、石英粒を混入する |

H－8号住居址土器観察表




第56図　H－8号住居址出土遺物（1／4）

須恵器杯、身は立ち上がりが「ハ」の字状に内傾し、端部に面を持たず丸くおさめている。受部先端も立ち上がり端部同様丸くおさめている。蓋は、天井部がほとんど欠損しているが、体部は「ハ」の字状に外傾し、天井部と体部を分ける稜線は明瞭である。この形状の特徴から『陶邑古窯址群Ⅰ』のTK10前後に比定できる。295の大甕は、口縁部に5条の沈線を施し、その間を櫛書き波状文が施される。これも杯同様TK10またはTK43式に比定される。　（原田）

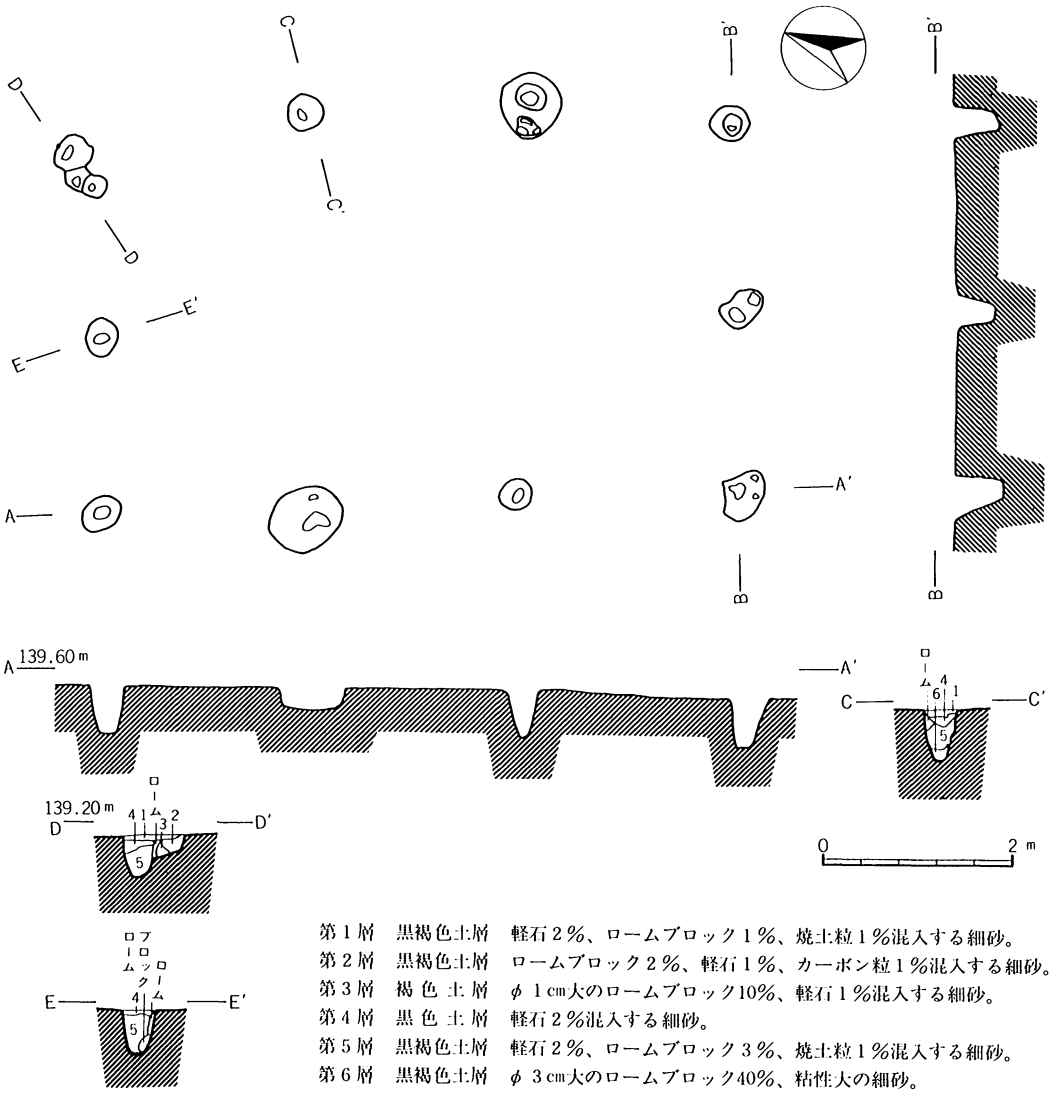
| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 295 | 大甕<br>須恵器 | (42.2)<br>——<br>—— | 口縁部は直線的に外反する。端部は一段突出して、「く」の字状に屈曲し、先端はほぼ直立する。 | 口縁部に五条の沈線を施し、その間を櫛書きの波状文が施文される。肩部は胴部からの平行タタキをカキメで消している。 | 全面ヨコナデ。 | ①灰色②良好③口縁1/8胴部若干④やや粗⑤全部で13片あるが3片のみ接合 |

H－8号住居址土器観察表

## 2　掘立柱建物址

**位置**　E・F・G－11・12グリッドに位置する。すぐ南東にH－8号住居址が隣接する。また、H－8号住居址の南壁を切るようにW－2号溝が東西に走る。西側のH－1～7号の各住居址群（一時期に全住居が構築されたという意味ではないが）から15mほど西に離れ、一定の距離を持って構築されたと判断できる。一方、調査区内での本建物址の北側・東側からの住居址の存在は認められなかった。

**形状**　桁行3間（6.0m）梁行2間（3.8m）のほぼ整った長方形に柱穴は位置する。長軸方向は、N－24°－Wを指す。柱穴間寸法は、表の如くで、北側と南側の柱穴の心心距離は全く同じ数値を示す。また、西側の$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$は直線的に配置されているものの、東側にふくらみがあり、




第57図　掘立柱建物址（1／80）

配列の乱れがみえる。いずれにしても、構築の際には、当時なりの計測が行われていたことは間違いなかろう。

**柱穴**　柱穴計測表にある通り、$P_1$・$P_3$・$P_4$・$P_5$・$P_6$・$P_8$・$P_9$・$P_{10}$の深さは50cm前後の近い数値を示しており、かなり正確に深さが測られたようである。また、どの柱穴からも柱受けと思われる石や遺物は検出されなかった。平面形は円形ないし楕円形を呈する。尚、$P_7$と$P_9$には建て替えとも見える形跡が見られる。

**遺物**　土師器の破片が3片出土しており、そのうち2点は甕、1点は杯のようである。ただ、出土位置が柱穴内部ではないため、本建物址との直接的な関連性は薄い。また、周辺グリッドからの遺物の出土は見られなかった。

**時期**　出土遺物あるいは覆土の所見、いずれからも構築の時期を明確にしうる材料に乏しく、確定しがたい。

（中野）

| | 長径 | 短径 | 深さ | 平面形 |
|---|---|---|---|---|
| $P_1$ | 44 | 32 | 48 | 楕円形 |
| $P_2$ | 72 | 64 | 69 | 楕円形 |
| $P_3$ | 34 | 33 | 48 | 円形 |
| $P_4$ | 55 | 44 | 50 | 不整楕円形 |
| $P_5$ | 47 | 34 | 48 | 楕円形 |
| $P_6$ | 42 | 38 | 47 | 円形 |
| $P_7$ | 65 | 64 | 71 | 円形 |
| $P_8$ | 38 | 35 | 53 | 円形 |
| $P_9$ | 42 | 36 | 47 | 楕円形 |
| $P_{10}$ | 40 | 34 | 47 | 楕円形 |

柱穴計測表

| 方向 | 柱穴 | 心心距離 |
|---|---|---|
| N | $P_1-P_{10}$ | 1.84 |
| | $P_{10}-P_9$ | 1.98 |
| S | $P_4-P_5$ | 1.84 |
| | $P_5-P_6$ | 1.98 |
| E | $P_9-P_8$ | 2.48 |
| | $P_8-P_6$ | 2.40 |
| | $P_7-P_6$ | 2.14 |
| W | $P_1-P_2$ | 2.26 |
| | $P_2-P_3$ | 2.10 |
| | $P_3-P_4$ | 2.30 |

柱穴間距離

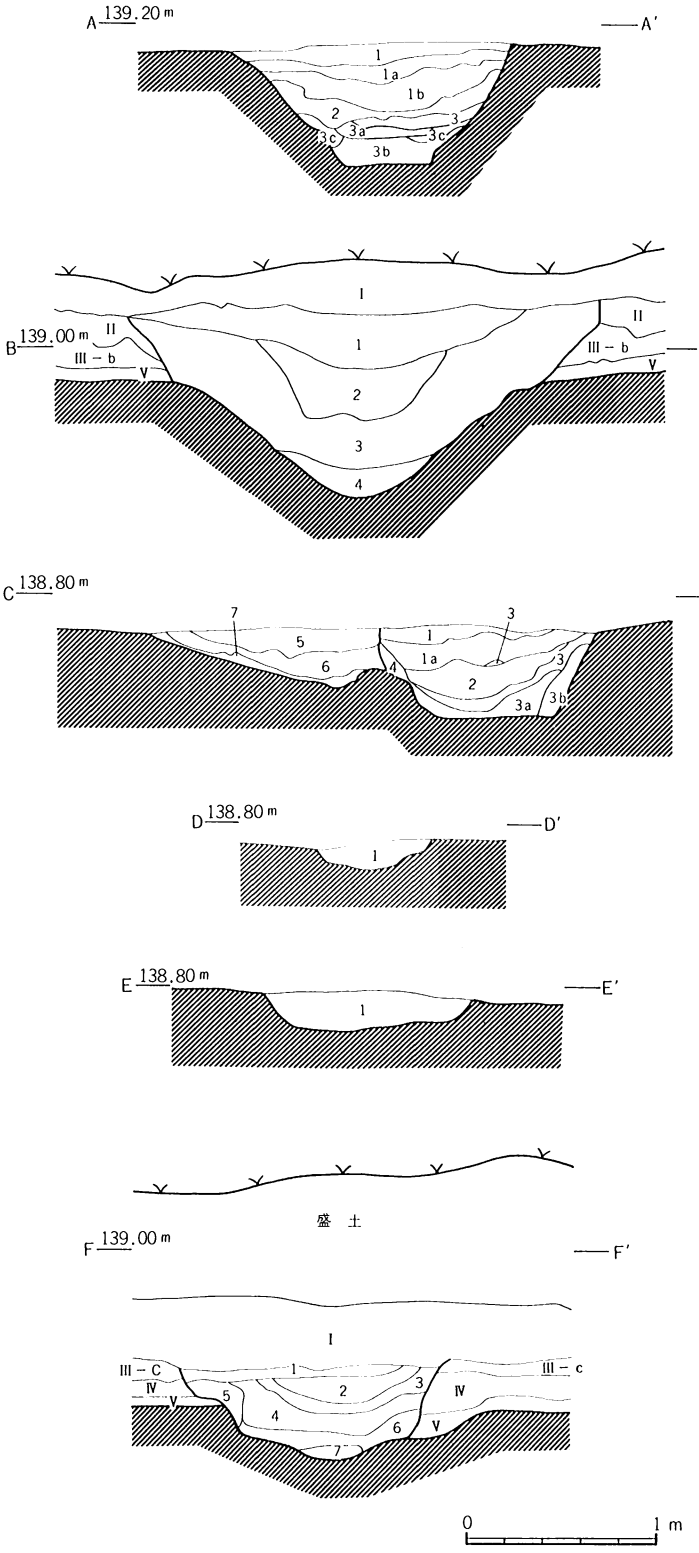
## 3　溝

本遺跡から検出された溝は、合計11条である。平面図は付図２、地層断面図は第58・59図、出土遺物は第61・62図に、それぞれ示した。

W－１号溝は、本遺跡の中央を北西から南東に走行する中規模の溝である。H－３号住居址を切り、H－９グリッド付近でW－２号溝と交差し、その後やや南に向きを換え、さらにK－９グリッド付近で東に向き直し、そのまま走行する。規模は上端幅173cm、下端幅52cm、深さ50cmで、形状は北側ではきっちりした逆台形を呈しているが、南に行くにしたがい上端・下端とも幅を広げ、しだいに崩れた形となる。W－２号溝はW－１号溝とほぼ同様な規模を有し、形状も類似している。本遺跡の中央を西から東に走行するが、途中D－３号土坑、H－４・５・８号住居址の壁を削っている。両者とも底部に礫や粗砂を含み、それに摩耗した土器片の混入が見られることから、水が流れていたことは明らかである。両者の新旧関係は把握できなかったが、交点付近のW－１号溝の東側肩部の広がりは、W－１号溝が東流した可能性を示唆するものである。

W－６・10・11号溝は、W－１号溝が分流したものと解したい。W－１号溝は、前述した流路が最新の流れで、それ以前の段階で、J－10グリッド付近で大きく広がり、W－６・10・11号溝となって南東流した可能性が考えられる。なお、W－６号溝はD－２・８号土坑によって切られており、一方W－７号溝を切っている。

W－３号溝はW－１・２号溝よりやや規模が小さく、上端幅133cm、下端幅40cm、深さ44cmで、形状はしっかりした逆台形を呈す。本遺跡の南西部を東南方向に曲流し、D－11号土坑を切り、K－９グリッドでW－１号溝と合流する。ある時期においては、W－３号溝と合流後のW－１号溝は、１条の流れであったと想像される。W－４号溝はW－３号溝と同程度の幅であるが、深さは26cmとやや浅い。W－３号溝の分流と考えられるが、地断からW－４号溝の方が旧い。W－４




第1層　黒褐色土層　固くしまった砂質土。
第1a層　黒褐色土層　固くしまった砂質土。
第1b層　黒褐色土層　しまった細砂を含む砂質土。
第2層　暗褐色土層　粘性を有する細砂を含む層。
第3層　黒褐色土層　礫と粗砂の混合層。粘性なし。
第3a層　極暗赤褐色土層　礫粗砂細砂がシルト状堆積。
第3b層　黒褐色土層　礫を含む粗砂を主体とする層。
第3c層　黒褐色土層　粘性を有す細砂を主体とする。

第1層　黒褐色土層　ややしまりを有す。粘性は少ない。軽石を7％包含。
第2層　にぶい黄褐色土層　細かい砂質土とφ2㎜の粗砂が混入する細砂。
第3層　黒褐色土層　しまりがあり、粒子が細かく、やや粘性を有す細砂。
第4層　黒褐色土層　ややしまりあり。ローム粒がまだらに見られる細砂。

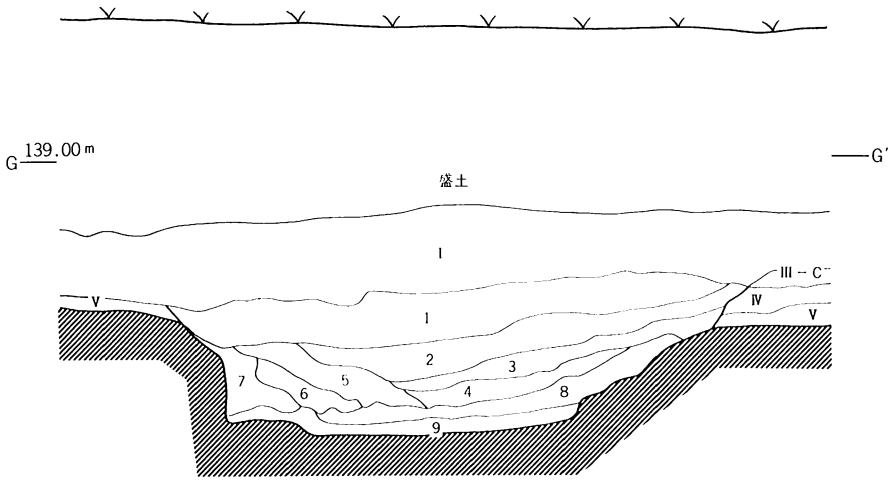
第1層　黒褐色土層　軽石を含む細砂。
第1a層　極暗褐色土層　軽石を含む細砂。
第2層　黒褐色土層　粗砂と細砂が混入。
第3層　黒赤褐色土層　締りを有す細砂。
第3a層　黒褐色土層　粘性を有す細砂。
第3b層　褐色土層　粘性を有す細砂。
第4層　黒褐色土層　締りを有す細砂。
第5層　黒褐色土層　軽石を含む細砂。
第6層　黒褐色土層　軽石を含む細砂。
第7層　褐色土層　ローム粒を多く含み、粘性を有す。

第1層　黒褐色土層　しまり、粘性を有する細砂層。白色軽石を1％含む。

第1層　黒褐色土層　φ2～6㎜の白色軽石を10％含む細砂層。

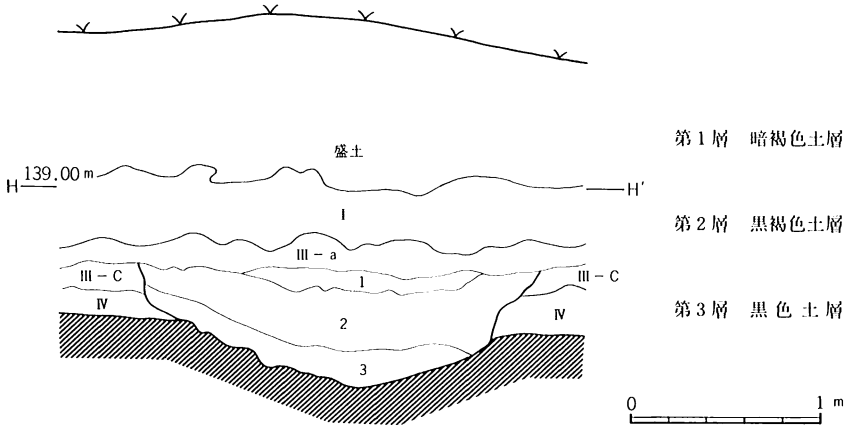
第1層　暗褐色土層　パミス、ロームブロック、焼土粒が混入する細砂。
第2層　黒褐色土層　パミスが1％混入する粗砂。
第3層　黒褐色土層　パミスが2％混入する粗砂。
第4層　黒褐色土層　パミスが1％混入する細砂。若干粘性を有す。
第5層　黄褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
第6層　暗褐色土層　不純物をほとんど含まない細砂。
第7層　黒褐色土層　粗砂、パミスがラミナ状に1％混入する。

第58図　溝地断（1／40）




第1層　黒褐色土層　パミス3％を混入する粗砂。しまりあり。
第2層　黒褐色土層　パミス1％、カーボン粒1％を混入する細砂。
第3層　黒色土層　パミス1％、焼土粒1％を混入する細砂。
第4層　黒色土層　パミス2％、ロームブロックを2％混入する細砂。
第5層　黒褐色土層　ロームブロック2％、パミス3％混入。

第6層　黒褐色土層　焼土粒1％。カーボン粒1％、パミス2％混入する細砂。若干しまる。
第7層　オリーブ褐色土層　細砂。若干しまる。
第8層　灰褐色土層　φ20mm大のロームブロック3％、パミス1％混入する砂礫層。若干しまる。
第9層　黒褐色土層　パミス1％、ロームブロック3％混入する砂礫層。




第1層　暗褐色土層　φ3～5mmの軽石を1％含む細砂。しまりはなくやや粘性をもつ。
第2層　黒褐色土層　φ3～5mmの軽石を2％、ローム粒を3％含む細砂。粘性あり。
第3層　黒色土層　φ2～10mmの軽石を5％含む細砂。ややしまりあり。粘性あり。

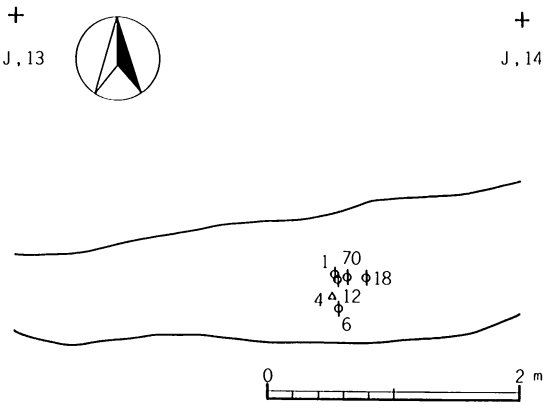
第59図　溝地断（1／40）

号溝はI－6グリッドからほぼ南流し、途中H－6号住居址の竈部を壊している。

W－5号溝は遺跡の南部を東西に走行する小溝である。上端幅50cm、下端幅20cm、深さ35cmで、若干の水流があったことが窺える。W－7号溝は不定方向に屈曲する小規模な溝で、W－6号溝に一部切られている。地断から水流は確認されなかった。W－8号溝はW－5号溝の北に位置する小規模な溝で、水流のあったことが窺える。W－9号溝はW－2号溝にほぼ平行する小溝で、D－8号土坑、W－6号溝に切られている。

出土遺物は溝により量の多寡はあったが、皆無であったW－5・8号溝を除き、全体でコンテナバット2箱であった。鬼高期の土師器片・須恵器片が圧倒的で、このほか縄文土器片、陶磁器片が少量含まれる。

W－1号溝からの出土が最も多く全体のほぼ半分で、W－6・10・11号溝を含めると8割程度となる。これらは水流による摩滅を受けた土器片で、わずかに陶磁器片が混入していた。このことから、W－1号溝の時期は、下限が近世であったと推定される。また鬼高期の土器片は恐らくH－3号住居址をはじめとして、上流の住居址から運搬されたものであったと考えられる。W－2・3・4号溝についても、同様な推測が可能である。

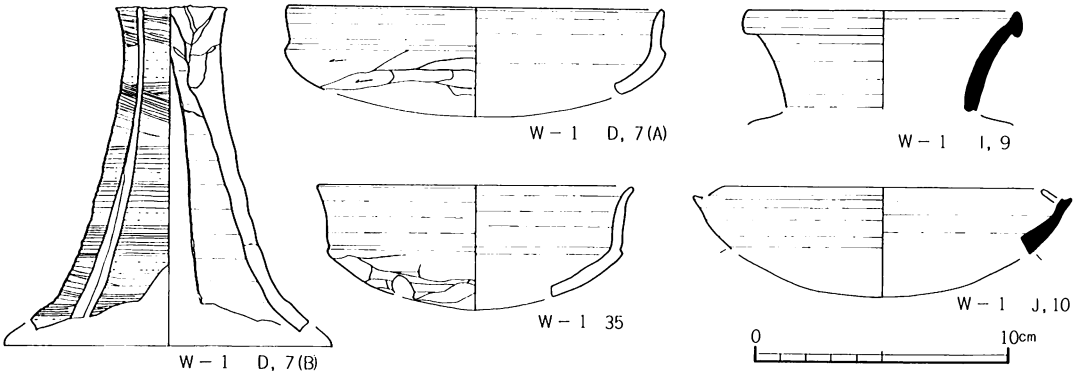


第60図　W－7号溝遺物出土状態（1／60）

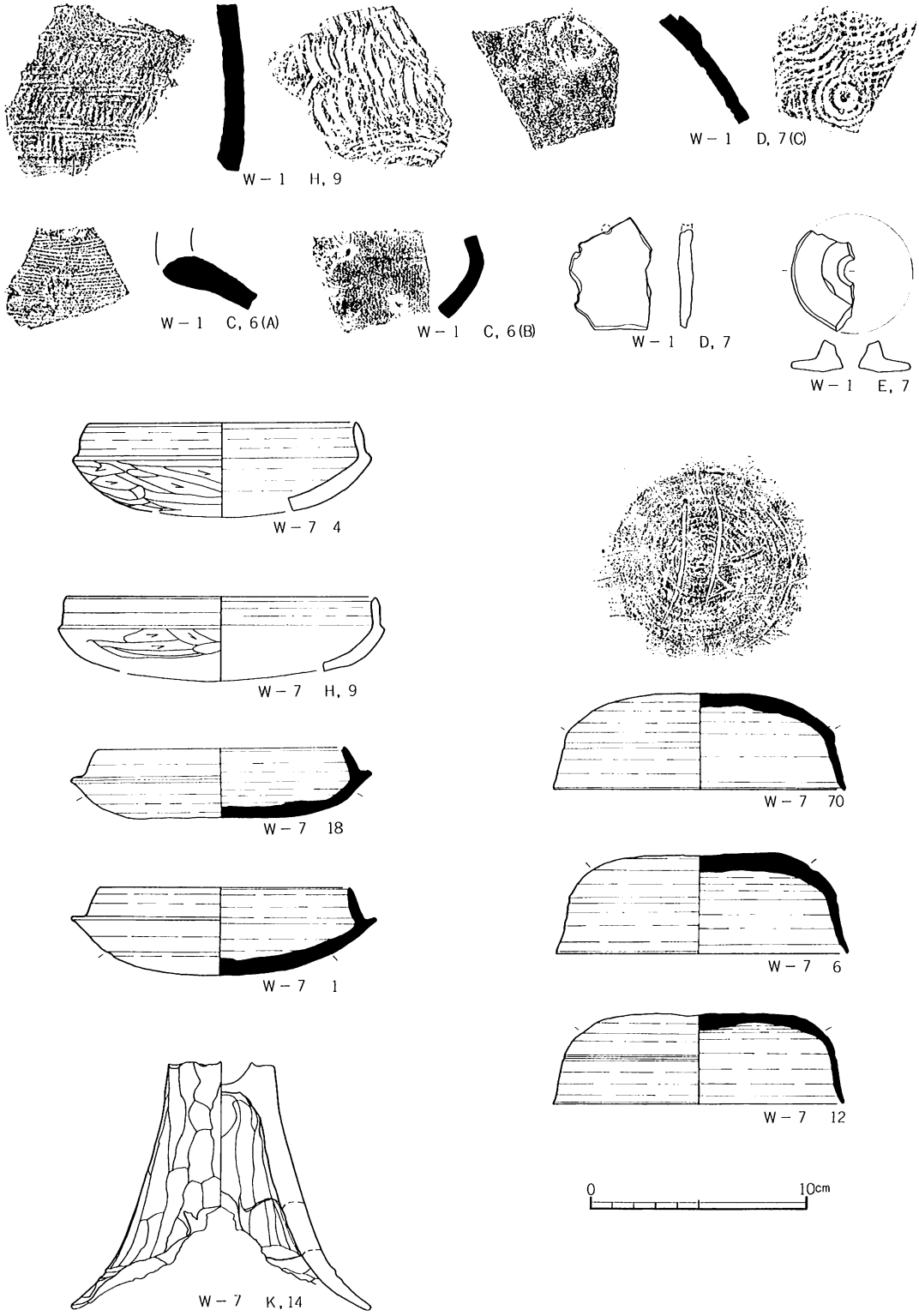
溝のなかでやや性格を異にするのが、W－7・9号溝である。どちらもC軽石を含む黒褐色土を覆土とし、水流の痕跡が認められなかった。遺物も鬼高期と縄文期に限定されており、特に第60図に示したように、W－7号溝からは須恵器の杯が5個体出土している。これらは古墳時代まで溯る可能性が強い。

W－1号溝からは、土器片に混じり馬の歯が検出された。出土位置は付図2のア地点で、地層的にみれば第58図A－A′の第3b層直上にあたる。宮崎重雄氏の御教示によれば、比較的若年の馬の上顎の臼歯6本であるという。また中世では馬の頭部を切断して川へ流し、雨ごいを行った事例があることを指摘された。W－1号溝の上限はいつ頃か不明であるが、このような儀礼が行われた可能性は強い。

図示した遺物は、W－1号溝が、杯2個体、長脚一段透しの須恵器高杯1個体、須恵器壺1個体須恵器杯身1個体、須恵器の袋物4点、滑石製品1点、および性格不明の土製品1点である。須恵器高杯はMT15、須恵器杯身はTK209あたりに比定できよう。W－7号溝は、内傾口縁の杯2個体、高杯1個体、須恵器杯身2個体、須恵器杯蓋3個体である。須恵器杯は、形態的特徴からTK10～TK43くらいに比定できよう。（木暮）



第61図　W－1号溝出土遺物（1／3）




第62図　W－1・7号溝出土遺物（1／3）

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| W－1 D，7 (B) | 高杯 須恵器 | ——<br>——<br>—— | 脚部のみ残存する。長脚1段の高杯で、スカシは3方向に開く。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、全面カキメ調整後スカシを切開。 | 横方向のナデで輪積痕を消している。 | ①灰色②良好③脚部1/3④精良⑤スカシ断面に自然釉付着 |
| W－1 D，7 (A) | 杯 | (14.7)<br>—— | 口縁部は短く直立する。体部は丸味を帯び、境には外稜を明瞭に有す。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 残存部分は全面ヨコナデ。 | ①にぶい橙色②良好③1/8④やや粗 |
| W－1 35 | 杯 | (12.3)<br>—— | 口縁部やや外反気味に直立し、端部付近でゆるく外湾する。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 体部不定方向ナデ後中央部を残して全面ヨコナデ。 | ①明赤褐色②良好③1/6④密 |
| W－1 I，9 | 壺 須恵器 | (10.6)<br>——<br>—— | 口縁部の一部のみ残存。やや外湾しており、厚みを増した丸棒状の端部を有する。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整。口縁端部ガラス質自然釉付着。 | 一面に厚く自然釉が付着するため不明。 | ①外面黒色、内面、断面褐灰色②良好③口縁1/6④精良⑤自然釉、タール状付着物 |
| W－1 J，10 | 杯 須恵器 | ——<br>——<br>—— | 体部と受部の一部が残存。比較的浅く、内傾する短いたちあがりが付くと思われる。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、体部を中央から3/5の範囲で回転ヘラケズリ。 | 回転ナデ調整。 | ①灰色②良好③小破片④精良⑤外面、自然釉付着。蓋との重ね焼の痕跡あり |
| W－7 4 | 杯 | (12.3)<br>—— | 口縁部の内傾する須恵器杯身の模倣で、受部を意識したと思われる外稜が極端に突出する。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 全面ヨコナデ。 | ①にぶい赤褐色②良好③1/6④密 |
| W－7 H，9 | 杯 | (14.4)<br>—— | 口縁部をやや内傾する。体部との境には明瞭な外稜を有する。 | 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 | 残存部分は全面ヨコナデ。 | ①にぶい黄橙色②良好③1/6④密⑤外面二次焼成 |
| W－7 18 | 杯 須恵器 | (11.4)<br>3.2 | 比較的器高の低い杯身で、たちあがりを内傾させる。受部はほぼ水平にのびる。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、体部を中央から3/5の範囲で回転ヘラケズリ。 | 体部低面不定方向ナデ、周辺から口縁にかけて回転ナデ調整。 | ①灰色②きわめて良好③9/10④密⑤蓋と重ね焼の痕跡あり |
| W－7 1 | 杯 須恵器 | 11.4<br>4.1 | たちあがりを内傾させ、丸味を帯びた体部を有し、受部をやや外上方にのばす。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、体部を中央から3/4の範囲で回転ヘラケズリ。 | 全面回転ナデ調整。 | ①灰色断面のみ灰褐色②良好③3/4④密⑤蓋との重ね焼きの痕跡あり |
| W－7 70 | 杯 蓋 須恵器 | 13.4<br>4.4 | 口縁部は直線的に外反し、端部を内ソギして受部と合致させる。外稜は天井部との境界やや下をケズリにより凹線を入れて突出させる。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、天井部全面回転ヘラケズリ後一部ナデ調整。 | 口縁端部ヘラケズリ後、全面回転ナデ調整。 | ①灰色②良好③1/5④密⑤天井部にヘラ記号あり、時計まわりのロクロによる |

W－1・7号溝土器観察表

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 外面調整 | 内面調整 | ①色調②焼成③残存④胎土⑤備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| W－7<br>6 | 杯蓋<br>須恵器 | 13.4<br>4.5 | 口縁部は端部付近でやや外湾する。端部は内ソギで受部と合致させている。外稜は天井部境界やや下をケズリにより凹線を入れて突出させる。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、天井部を中央から⅕の範囲で回転ヘラケズリ。 | 口縁端部ヘラケズリ後、全面回転ナデ調整。 | ①灰色断面のみにぶい赤褐色②良好③7/10④精良⑤時計まわりのロクロによる |
| W－7<br>12 | 杯蓋<br>須恵器 | 13.4<br>4.1 | 口縁部はほぼ直線的に外反し、端部を内ソギして受部と合致させる。外稜は天井部境界やや下をケズリにより凹線をめぐらし突出させる。 | マキアゲ、ミズビキ成形回転ナデ調整、天井部全面を回転ヘラケズリしている。 | 口縁端部ヘラケズリ後全面回転ナデ調整。 | ①外面暗青灰色、内面灰赤色、断面にぶい赤褐色②良好③3/5④密⑤片岩粒を混入する |
| W－7<br>K，14 | 高杯 | | かなり長脚の大形高杯脚部で杯部を欠損する。裾部に一条の凹線をめぐらす。 | 縦方向ケズリ、裾部ヨコナデ。 | 縦方向ナデにより、輪積痕を消す。裾部ヨコナデ。 | ①にぶい橙色②良好③脚部1/2④密⑤杯部との接合部はホゾ穴を有する |

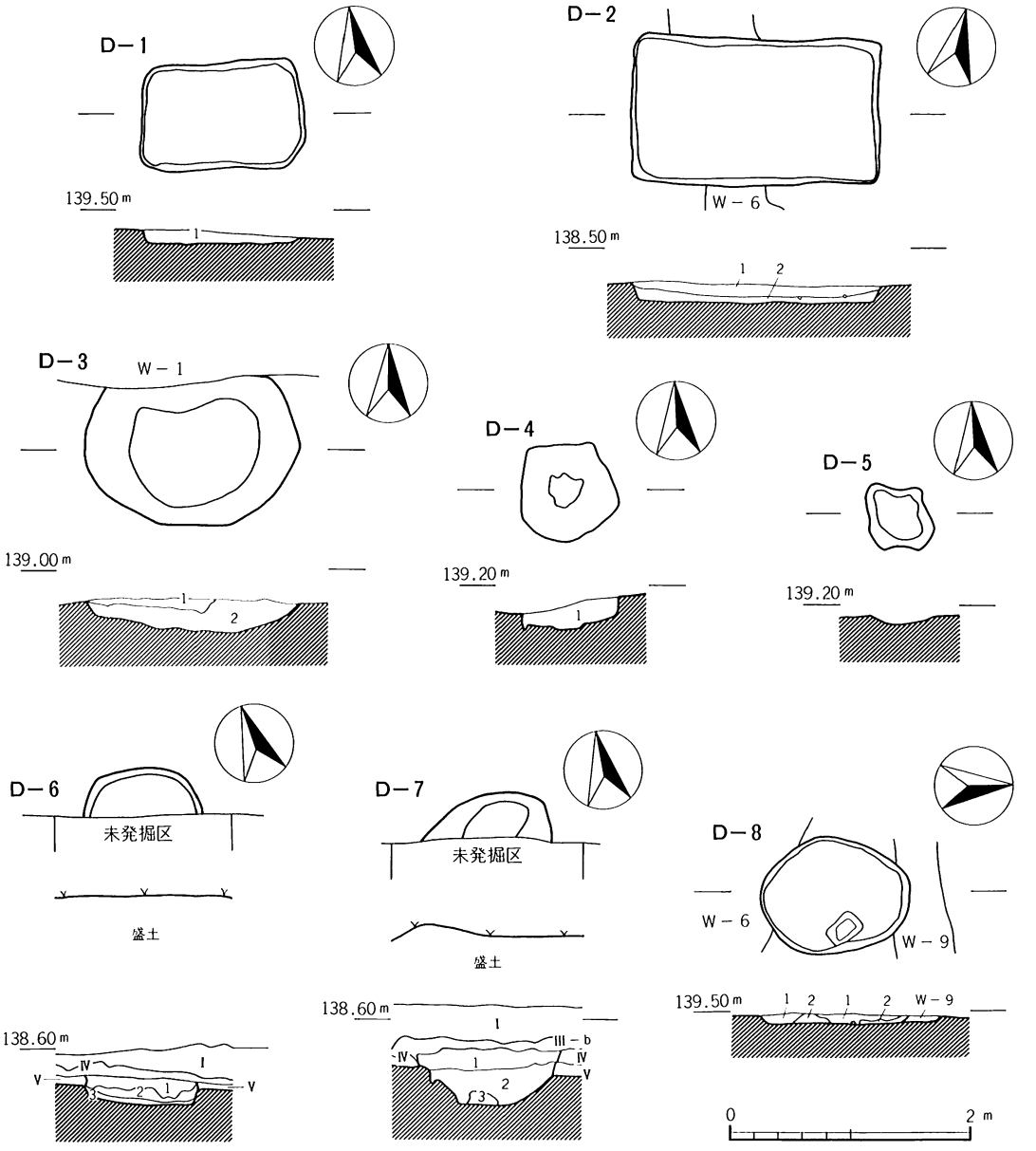
W－7号溝土器観察表

| 名称 | 上端幅 | 下端幅 | 深さ | 方向 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| W－1 | 173 | 52 | 50 | N－29°－W | 近世 | |
| W－2 | 172 | 43 | 51 | N－90°－W | 近世 | |
| W－3 | 133 | 40 | 44 | 曲線 | 近世 | |
| W－4 | 142 | 65 | 26 | N－6°－W | 近世 | |
| W－5 | 50 | 20 | 35 | N－81°－E | 近世 | |
| W－6 | 82 | 21 | 21 | N－26°－W | 近世 | |
| W－7 | 64 | 37 | 11 | 曲線 | 古墳時代 | |
| W－8 | 26 | 12 | 6 | N－18°－E | 近世 | |
| W－9 | 61 | 22 | 11 | N－87°－E | 古墳時代 | |
| W－10 | 35 | 20 | 12 | N－29°－W | 近世 | |
| W－11 | 80 | 24 | 16 | N－21°－W | 近世 | |

溝計測表

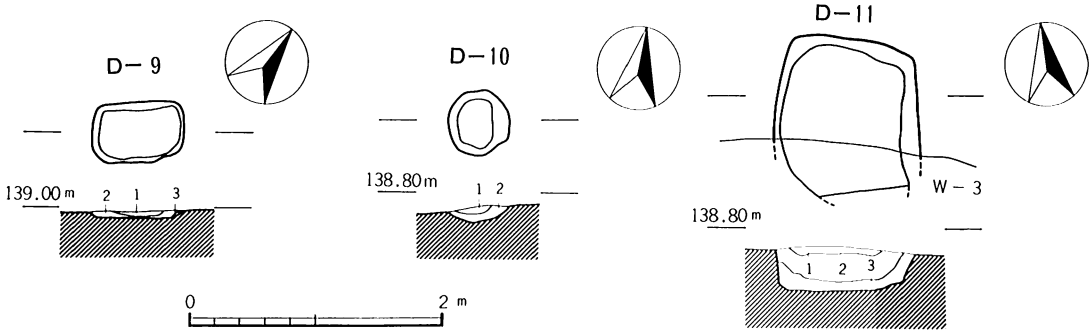
## 4 土坑

土坑は調査区全域に散在して計11基検出された。これらのうち埋土から新しい様相を呈するのはD－1号土坑、D－2号土坑で、きれいな矩形プランを呈する。D－2号土坑はW－6号溝を切っており、中から近代の磁器片が出土している。D－3号土坑は、楕円形プランを有し、埋土も古い様相を持ち、縄文時代前期の土器片を出土した。(第6図)。D－5号土坑は焼土の集積




D－1
　第1層　黒褐色土層　軽石を多く含む細砂。
D－2
　第1層　オリーブ黒色土層　ややしまりがある。
　第2層　オリーブ黒色土層　やや粘性がある。
D－3
　第1層　黒褐色土層　細砂。
　第2層　黒褐色土層　軽石を微量含む細砂。
D－4
　第1層　黒褐色土層　しまり、粘性がある。
D－6
　第1層　黒褐色土層　ややしまりがある。
　第2層　暗褐色土層　ロームブロックを含む。
　第3層　褐色土層　ローム質土。
D－7
　第1層　黒褐色土層　軽石を微量含む。
　第2層　暗褐色土層　軽石を微量含む。
　第3層　にぶい黄褐色土層　ロームブロックを含む。
D－8
　第1層　オリーブ黒色土層　固くしまっている。
　第2層　暗褐色土層　粘性が強い。

第63図　D－1～8号土坑（1／60）




D－9
第1層　黒褐色土層　粘性をもつ細砂。
第2層　暗褐色土層　柔かいが粘性をもつ細砂。
第3層　黒褐色土層　細砂。
D－10
第1層　黒色土層　しまりをもつ細砂。
第2層　暗褐色土層　粘性をもつ細砂。
D－11
第1層　黒褐色土層　ややしまりをもつ細砂。
第2層　黒褐色土層　細砂。
第3層　暗褐色土層　ロームブロックが混入する粗砂。

第64図　D－9～11号土坑（1／60）

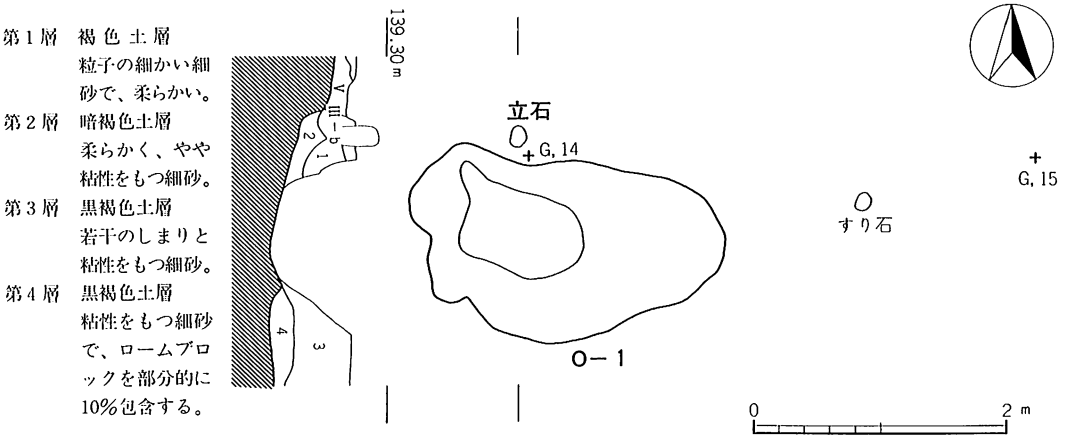
が認められ、多数の径7～8cm、深さ10cm前後の性格不明円形落ち込みを伴っており、中からは炭化物が多量に出土した。周辺からは土師器小破片が出土しているが、共判するかどうかは不明である。D－6号土坑、D－7号土坑はいずれも南壁地層断面において落ち込みを確認したもので、完掘しておらず遺物の出土もなかったが、D－7号土坑はⅣ層を、D－6号土坑はⅤ層を切り込んでおり、中世以前の構築が考えられる。D－8号土坑はW－6号溝、W－9号溝を切っており埋土からは土師器の出土を見ているが、重複関係から近世以降の構築と考えられる。D－10号土坑は小形ながら土師器小破片を多量に出土している。又、D－11号土坑はW－3号溝に切られており、土師器片が6点出土している。いずれも古墳時代の所産と考えられよう。D－4号土坑、D－9号土坑は遺物の出土、遺構の重複等いずれもなかったため構築時期は明らかにしがたい。

（加部）

| 名　称 | 所在グリッド | 平面形 | 主軸方位 | 長径 | 短径 | 深さ | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| D－1 | C－8 | 長方形 | N－96°－E | 137 | 92 | 10.5 | |
| D－2 | M－12 | 長方形 | N－74°－E | 210 | 130 | 16.5 | 近代 |
| D－3 | H－5 | 楕円形 | N－90°－E | 178 | 131 | 26.5 | 縄文時代 |
| D－4 | D－5 | 不整円形 | N－7°－E | 86 | 83 | 23.8 | |
| D－5 | E－16 | 不整方形 | N－90°－E | 58 | 54 | 6.4 | |
| D－6 | M－10 | —— | —— | —— | —— | 12.4 | |
| D－7 | N－12 | —— | —— | —— | —— | 24.5 | |
| D－8 | I－10 | 円形 | N－1°－E | 124 | 98 | 9.8 | 近世 |
| D－9 | G－14 | 長方形 | N－52°－E | 68 | 49 | 4.3 | |
| D－10 | I－11 | 楕円形 | N－174°－E | 52 | 50 | 17.9 | 古墳時代 |
| D－11 | I－7 | 不正方形 | N－16°－E | 126 | 118 | 30.1 | 古墳時代 |

土坑計測表

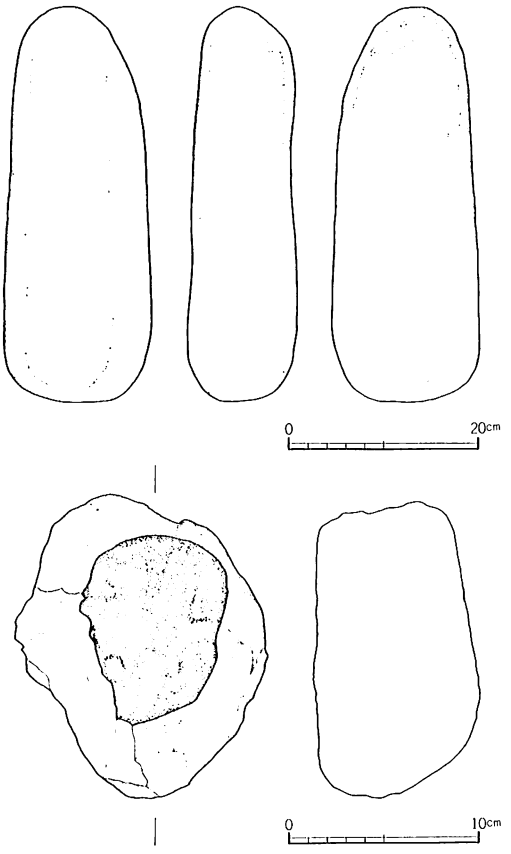
## 5 立　石




第65図　立石と風倒痕（1／60）

遺跡の東部、H－8号住居址の北東約3mの地点から立石が検出された。立石はF－13グリッドに位置し、この直南に不整形の風倒痕と思われる遺構が存在する。プラン確認の段階で立石の方が旧いことが確認されたが、風倒痕の覆土には、4世紀中頃浅間山が噴火した際に降下したとされるC軽石の純層が確認されている。

立石は、長さ42cm、幅16cmの細長い安山岩の自然石で、ほぼ直立した状態で検出された。付近からの出土遺物は少なく、立石の東2.7mの地点から長さ16cm、幅13cmの安山岩質のすり石が検出されている。またF－14グリッドからは縄文後期と思われる無文の土器片1片が出土している。これは深鉢の胴下半の無文部と思われる。立石が中期後半から後期にわたって見られることから、時期的にはこの土器片と符合している。付近からの出土遺物は以上で、埋甕等の検出もなかった。　（木暮）



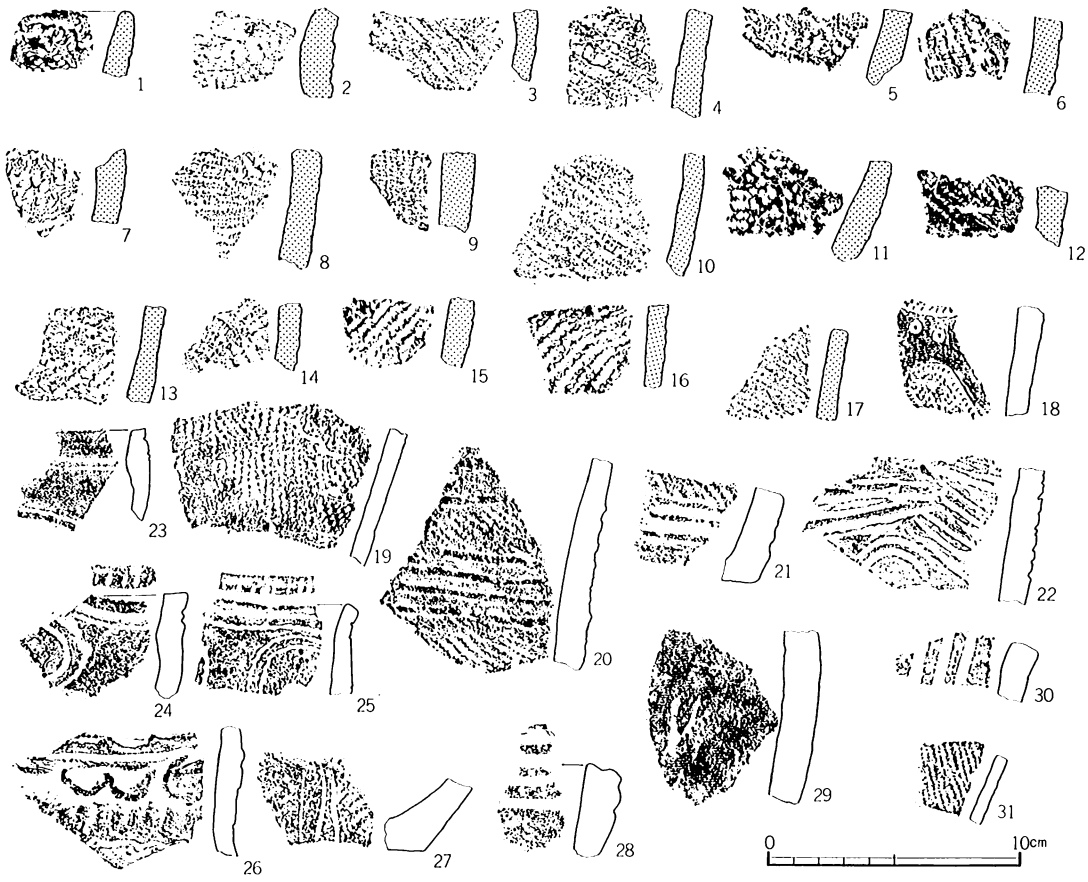

第66図　立石とすり石（1／8・1／4）

## 縄文時代の遺物

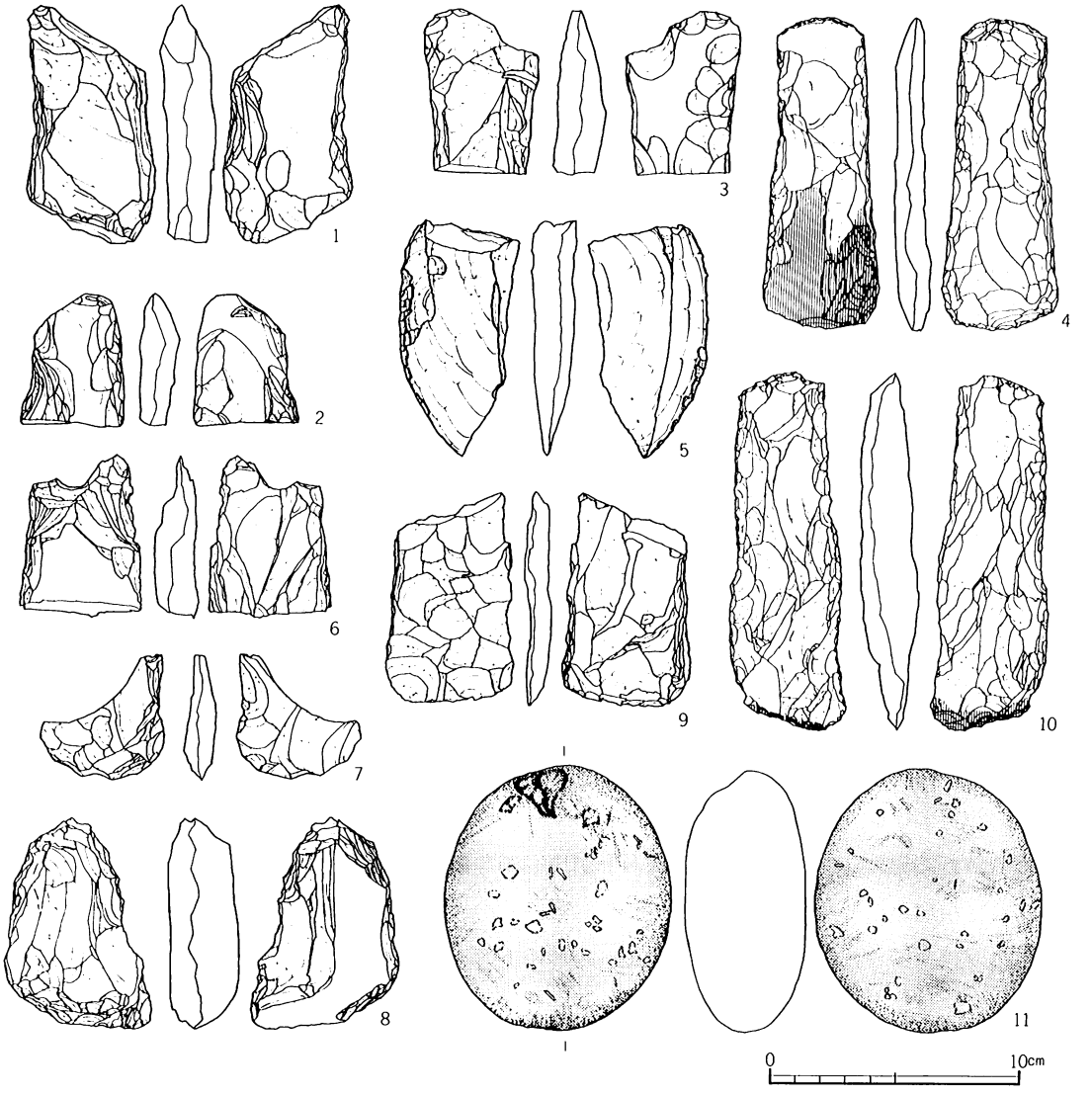
**土器**（第67図）

出土した縄文土器は、図示した他にも若干存在するが、大方の土器は掲載した。1～17は胎土に繊維を含む土器の一群である。1・2・5・7・11は末端にループ文を有する斜行縄文 LR、RL による0段多条の縄文によって施文されている。文様は縄文のみで構成され、その他の手法のものは認められない。胎土は灰黄色の質感の良い1～13と、整形が悪く赤褐色を呈す14～17に分けられる。関山式に比定できる。18は諸磯a式に比定されるものである。竹管や半截竹管でもって意匠文が施される。地文は LR の斜行縄文である。19は RL の斜行縄文と一条の結節で構成される。20～22は諸磯b式に比定される。20・21は浮線文であるが、磨滅しているため、刻みは不明である。22は半截竹管による平行沈線でもって幾何学的文様や渦巻文を中心とする文様が見られる。

23～26は阿玉台式土器である。胎土には雲母を多く含み、有節線文や突起、貼付文が見られる。




第67図　縄文時代の土器（1／3）




第68図　縄文時代の石器（1／3）

27は加曽利E式土器の底部である。垂下する3条の沈線とRLの斜行縄文が施されている。28・30は堀之内1式に比定されよう。30は明瞭な沈線が垂下し下部には渦巻文が展開されると考えられる。29は深鉢の胴下半部である。無文部であるため胎土、整形から後期前半としておきたい。31はRLの細縄文が施されている。恐らく、後期前半、堀之内式土器の地文部分と思われる。

**石器**（第68図、図版29）

1～4・6・7・9・10は打製石斧である。原材は頁岩が大多数を占めるが、1はホルンフェルス、3が安山岩である。土器との共伴関係が把握できないため不明な所が多いが、短冊形を呈す事から中期的特徴を有するといえよう。8は「片刃形の石器」の未製品と考えられる。前期の所産と考えられる。5はハリ質安山岩製の削器であり、11は頁岩製の磨石である。　（前原）

# Ⅵ　ま　と　め

赤城山南麓斜面ではすでに数多くの遺跡が発掘調査され、しだいに地域の歴史が明らかになりつつある。本遺跡からは、竪穴住居址８軒、掘立柱建物址１軒、溝11条、土坑11基が検出され、先人の生活のいとなみを知る上で貴重な資料が得られた。以下、各時代ごとに若干の所見を述べ本報告書のまとめとしたい。

## 縄　文　時　代

縄文時代の遺構としては、土坑１基と立石が検出された。出土した遺物は前期前半から後期前半と多岐に亘っている。従来までの調査において、断片的ながらも小神明Ⅰ・Ⅱ、端気Ⅰ・Ⅱの報告で縄文時代の遺構・遺物がとりあげられており、赤城山南麓の当該期の様相も解明されつつある。

今回出土した前期前半の関山期の資料は、宮城村市之関遺跡が好例である。その他にも資料が断片的にはあるが、今後資料増加を俟って、分析を必要とする。中期前半の阿玉台期の資料は、西村編年のいうⅠｂからⅡ式期の様相を有する。この時期のまとまった資料は芳賀北部工業団地造成に伴った調査により検出されている。今後、報告書の刊行が計画されているため、その詳細の検討が望まれる所である。

石器として認められたものは、打製石斧が圧倒的な数を占めている。所謂分銅形等が見られないため、中期から後期前半の所産と考えられる。この他に「片刃形の石器」の未製品と考えられるものが存在する。端気遺跡群Ⅱの中で、小形のトランシェ風の石器が出土しているが、それらを含めて、早期後半から前期にかけて盛行する石器といえる。既出例としては和田遺跡、稲荷山遺跡、前中原遺跡が県内では求められ、埼玉県内でも緑山遺跡、北山遺跡があげられ枚挙にいとまがない。しかし、神奈川県尾崎遺跡例と比較した場合の時期的相違は今後の検討課題であるし、この時期の石器組成や形式変遷を早急に解決しなければならない。　（前原）

## 古　墳　時　代

### 住居址

住居址は合計８軒検出された。これらは基本層序の第Ⅳ層で確認され、床面は第Ⅸ層まで達していた。平面的な広がりは、図面的に言えば遺跡の西側に７軒の集中がみられ、Ｈ－８号住居址だけがやや離れた位置に所在していた。各住居址間の距離、重複関係等を考慮すれば、これら８軒の住居址は同一時期のものとは考え難く、覆土および出土遺物から大きく２期に分けることができる。また住居址のちらばり具合から、住居址が西に続く可能性が指摘できる。

住居址はすべて東壁に竈を付設する方形プランで、南東コーナー付近に貯蔵穴をもつ。主軸方位はN－69°－EからN－106°－Eの範囲で、面積は11.9m²～51.4m²の間でおさえられる。周溝は、H－8号住居址を除き確認された。

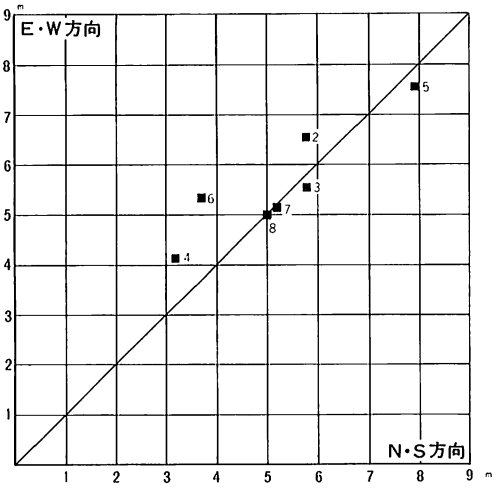
本遺跡の住居址は、形態的特徴から大きく3つに分類できる。第1は、面積が20～30m²程度の正方形プランの住居址、換言すれば1辺が5～6m程度の標準的な住居址で、主柱穴をほぼ対角線上に配するものである。H－1・2・3・7・8号住居址が、これである。H－7号住居址は、4個の主柱穴のほかに、小形のピットが対角線の交点付近から検出された。この位置からのピットの検出は稀で、どのような性格のものが不明であるが、主柱穴の補助的役割を担ったものと推定できる。H－7号住居址は5個のピットを有するが、基本的には前述の範疇でとらえたい。

第2は、面積が20m²未満の小形住居址である。これはプランが縦長長方形で、住居壁内に主柱穴を持たないという特徴をもつ。H－4・6号住居址が、これである。なお両住居址は、本遺跡中主軸がもっとも南偏している。

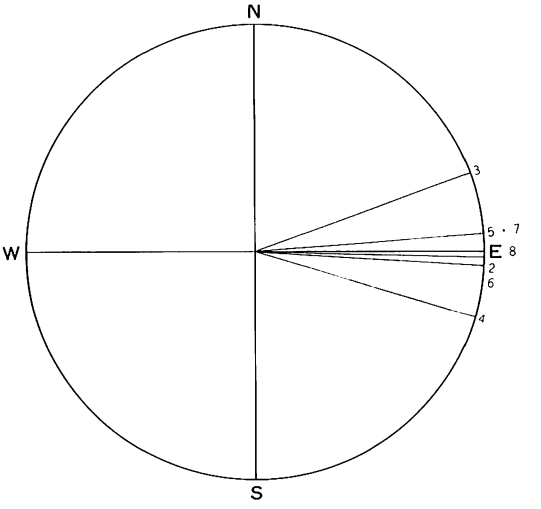
第3は、面積が50m²を越える大形住居址である。H－5号住居址1軒が検出された。一辺が8mに近い正方形プランで、ほぼ対角線上に配された4個の主柱穴のほかに2個の柱穴をもつ。両者とも主柱穴間に穿たれた補助柱穴で、南壁・西壁寄りから検出された。上屋構造の大形化に伴ない、主柱穴の補助的役割を担ったものであろう。この住居址からは、鉄鏃2点、刀子1点、砥石2点と他の住居址には見られない遺物の出土があり、注目される。

以上、本遺跡の住居址は形態的特徴から三分されたが、つぎに住居址の細部について論を進めたい。

集落構成のあり方に大きくかかわると思われる主軸は、第70図に示したように東指向性が明瞭である。ただ、この東指向性は同一時期のものではなく、2期にわたっていることに注意しなければならないだろう。




第69図　住居址の規模




第70図　住居址の主軸方位

竈はすべて東壁に付設されるが、東壁の中央ではなくやや南寄りに置かれる傾向が見られた。

貯蔵穴は竈の右、住居址の東南コーナーに設置された。プランは円形と長方形に二分されるが前者はH－1・2・3号住居址であり、後者はそれ以外の住居址である。貯蔵穴のまわりに、それを囲むような帯状の高まりが確認された住居址が、3軒見られた。H－4・5・6号住居址である。またH－2号住居址は、床面よりやや高い箇所に貯蔵穴が掘り込まれていた。こうした帯状の高まりやテラス状の高まりは、床面と貯蔵穴を区画するかの印象を与える。本遺跡の南東約1000mに所在した端気遺跡群IIでは、床面より一段低くなった箇所に貯蔵穴が掘り込まれた住居址が検出されており、H－2号住居址と好対照をなしている。この高まりや窪みは、床面と貯蔵穴を意識的に区画しようとした結果ではないだろうか。

H－5号住居址の貯蔵穴は、構造上やや特異な形態を示した。南北に長い長方形のプランであるが、下端が上下二段に分かれ、しかも掘り込みの深い北側にローム地山が蓋状に残存していた。貯蔵穴の使用方法はいまだ不明な点が多いが、上下二段の使い分けと蓋状の地山の存在は、興味深い示例である。

H－1・2・5・7号住居址からは、床面南壁際からピットが検出された。H－2号住居址はピットを取り囲むような馬蹄形状の高まりが顕著で、H－5号住居址からも若干の高まりが確認された。H－1号住居址からは、ピットを囲む高まりは見られなかったもののピットの規模は大きく、開口部は斜め南向きを指していた。これらは、おそらく入口に係わる遺構であろう。以上の4住居址は、平面図に明瞭であるように、床面堅緻部が南壁からピットを含みながら北側に広がり、竈前面にも及んでいる。堅緻面のこうした広がりは、床面の使用頻度を示していると言えよう。

住居址の室内分割の痕跡とされるいわゆる間仕切溝状の遺構は、H－1・3・6号住居址から検出された。H－1号住居址からは南壁に垂直に2条、H－3号住居址からは西壁に垂直に2条、南壁に垂直に1条、H－6号住居址からは南壁に垂直方向に1条が、それぞれ検出された。

住居址はどの住居址も貼床がなされており、ロームブロックと軽石まじりの細砂を5～10cm除去すると、凹凸の激しい掘り方面が露出した。H－6・8号住居址からは、床下土坑が検出されている。

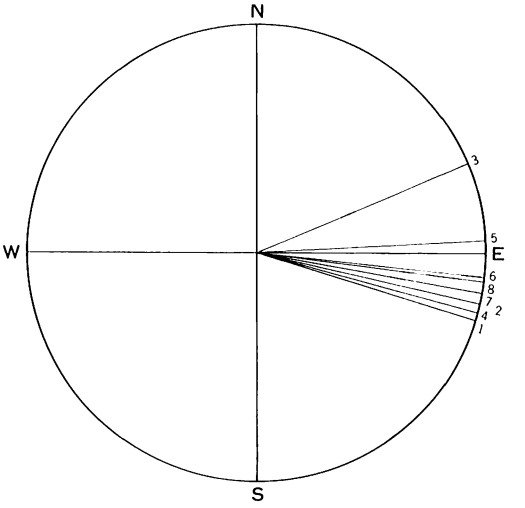
本遺跡の住居址の特徴を項目的に述べてみたが、今後さらに各項目について研究を深める必要があろう。最後に、H－8号住居址について若干ふれておきたい。本住居址は、形態や規模は先の分類の第1の範疇でおさえることができたが、次の2点に特異性がみられた。第1は、床面に10～15cmの明瞭な段差を有することである。段差は比較的緩やかな斜面で、竈右袖から直線的に西壁に向い、上段と下段を2：1の面積比に分割している。堅緻面は上段・下段とも中央部に広がっており、付近の使用頻度の高かったことを物語る。床面のこのような段差は異例で、実際の生活空間にいかに機能していたかは、今後の課題である。第2は、ローム壁である北壁から、厚さ4～10cmの筋状の黒色土層が、床面とほぼ同レヴェルで検出されたことである。ローム壁を切

り込む黒色土は鮮明で、西壁・東壁の北側⅔でも確認された。調査の結果、黒色土内には部分的に焼土・炭化物の混入が認められ、北壁では50cm、西壁・東壁では10cmの奥行があることが判明した。さらに黒色土の存在する前述の北壁・西壁・東壁は、床面の上段部分のそれぞれの壁にあたっていることに気づくのである。それにしても、このように住居ローム壁底部に黒色土が入り込んだ例は管見では知らず、今後の示例等を俟つほかない。

### 竈

竈は8軒の住居址すべてから東壁に確認された。遺存状況は、溝による攪乱を受けたH－3・6号住居址を除き良好である。

まず竈の主軸と住居址の主軸との関係であるが、H－3・4・5・6号住居址は、両者の差が3°以内の小さな値を示したのに対し、H－2・7・8号住居址は7°以上のブレを示した。ブレの大きな住居址は、竈の主軸が住居址のそれより南偏しているためで、特にH－7号住居址は15°の南偏を示した。このような竈主軸の南偏は、平面図から見る限り柱穴を意識的に避けようとした結果だと思われる。柱穴と炊き口が接近すれば火災の危険性が高く、それを回避しようとするのは当然の帰結である。もしこの推論が妥当であるならば、住居構築時の竈位置と柱穴位置の具体的決定の順序性は、このような住居の場合に限定すれば、柱穴位置の決定が先行したと言えるであろう。しかしながら、竈を壁中央に付設させれば敢えて南偏させる必要は生じない。このことは、竈の位置決定に、壁中央よりやや南寄りに設置するという大前提が働いていたことを窺わせる。事実、本遺跡の竈はすべて壁中央よりやや南に付設されているのである。



第71図　竈主軸方位

竈の構築は、大方粘土を主体としてなされていた。煙道部は、長方形あるいは三角形に壁外に掘り込み、そこに粘土を充塡させ構築される。一方、袖部は粘土主体に構築され、下部あるいは基底部にC軽石を包含する黒褐色細砂を敷くのが特徴であった。袖の補強材として両袖先端部に円礫が用いられた例が、H－2・5・8号住居址の竈である。構築材として逆位の甕を左袖内に嵌め込んだ例が、H－5・7号住居址の竈である。H

| 住居番号 | 竈全長の割合（住居内：住居外） | 竈位置 | 竈材 支柱 | 竈材 天井 | 竈材 袖 | 貯蔵穴 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| H－1 | 内 壁 外 0 100% | 東 | D | | | ● |
| 2 | | 東 | S | | S | ● |
| 3 | | 東 | － | | | ● |
| 4 | | 東 | S | | | ■ |
| 5 | | 東 | － | S | S P | ■ |
| 6 | | 東 | － | | | ■ |
| 7 | | 東 | － | | P | ■ |
| 8 | | 東 | － | | S | ■ |

○ 支柱　● 円形　■ 方形　S 石　P 土器　D 土塊

第72図　竈の構造と貯蔵穴

—5号住居址からは、鳥居状に組んだと思われる天井石が検出された。支柱が検出された竈はH—1・2・4号住居址で、H—1号住居址は粘土塊、他は円礫が使用されていた。

本遺跡の住居址は大きく2期に分けられるが、この時期差が竈の構造にもあらわれている。一般的に時代が降るにしたがい竈は壁外に突出する傾向があると言われるが、本遺跡においてもこれがあてはまる。第72図の竈の壁外・壁内の比は、竈の実測値から作成したものである。竈ごとの調査条件の差異を無視した数値であるという欠点は否めないが、おおまかな傾向は摑めるはずである。具体的な数値を上げれば、H—1号住居址の竈の壁外・壁内の比は9：91で圧倒的に壁内の割合が高く、H—2号住居址に至っては100%壁内であった。本遺跡のI期がこの2つの住居址で、FA降下以前である。これに対しH—3～8号住居址はFA降下以後の住居址、つまりII期にあたる。II期の住居址の竈の壁内の割合は60～73%、平均67%で、I期より明らかに数値が低い。前述した通り単純に受け取れない数字であるが、I期とII期では竈の壁外突出の割合に大きな差異が認められる。第72図には貯蔵穴のプランもあわせて掲載したが、本遺跡においては円形・方形の相違も時期差のあらわれとして看取できよう。

なおH—1号住居址は、住居内中央から炉址が検出されている。炉址は全面調査できなかったがきわめて良く焼け込んでいた。このような事実からすると、H—1号住居址は炉と竈を併用させた住居であった可能性が高い。覆土にFAがあり、竈と炉を併存させるという点は、粕川村前田遺跡の第1号住居址と共通している。両者とも、竈使用の初期的な示例として捉えることができるだろう。

**遺物出土状態**

出土遺物の量は、住居址によってかなりばらつきが見られた。小形のH—4・6号住居址のように100点に満たない住居址もあれば、大形のH—5号住居址のように1700点近い数になった所もある。

遺物の平面分布の傾向は、強いて分ければ次の三つに分類できる。第1は竈・貯蔵穴付近に集中している住居址で、H—1・4・6号住居址である。第2は住居址中央付近に集中している住居址で、H—3・7号住居址である。第3は広範囲にばらついている住居址で、H—2・5・8号住居址である。垂直分布の傾向は、上下かなりの広がりでばらつきが見られたが、実測可能になった土器は比較的下部に存在していたと言える。

実測可能となった遺物の水平分布と垂直分布に関しては、比較的まとまりをもった接合が多かった。特にH—1・3・4・6・7号住居址の遺物は、もちろん例外はあったのだが、多くは床面直上あるいはその付近で水平分布・垂直分布ともまとまりを示したと言えよう。これに対しH—2・5・8号住居址の出土遺物は、同様に例外はあったのだが、水平分布・垂直分布ともかなりばらつきが見られた。水平分布で6mも離れた遺物が同一個体であったり、垂直分布で50cm以上も離れた遺物が同一個体であった例もあった。

遺物の出土状態でもっとも問題となるのは、垂直分布に見られる上層と下層の接合である。50

cm以上も離れた遺物が同一個体であったり、覆土の最上層中の遺物と最下層中の遺物が同一個体であったりする現象は、どうして起こるのだろうか。きわめて難しい問題である。ただ言えることは、上層と下層に幾許かの時間差が存在していることだけである。

この問題について興味深い素材を提供してくれたのが、FA 純層を覆土にもつH－2号住居址である。本住居址で図示できた遺物は、出土遺物表にある通り合計21個体であるが、これが次のように3分される。すなわち、FA より上位のものが2個体、FA より下位のものが17個体、FA を挟む接合が2個体と分類できるのである。FA より上位の出土遺物は46の模倣杯と146の甑である。FA より下位からは模倣杯が全く出土していないこと、および146の甑が下位より新しい様相を示していることから、FA によって上位と下位は截然と区切られている印象を受ける。ところが、FA を挟み上位と下位の接合が可能となり、実測可能となった杯が2点存在しているのである。151は口縁が内傾する平底の杯で、残存率80%、8点の接合からなり、うち4点は床面直上を含め FA より下位から出土し、残り4点は FA 直上からまとまって出土している。395はいわゆる内斜口縁を有する丸底の杯で、残存率35%、3点の接合からなり、うち1点は FA 直上、2点は FA 直下から出土している。H－2号住居址の以上のような遺物の出土は、どのように解釈できるだろうか。FA より下位の遺物は、おそらく住居廃絶時あるいはそれ以降短時日のうちに住居址内に入った遺物と考えられる。住居址はしだいに埋まって行き、ある時期に FA が降下する。その後も住居址は埋まって行き、住居址の壁近くにあったと思われる151や395の破片も住居址内に入る。埋没はさらに進行して行き、46や146の流れ込みも出てくる。以上のような過程が推測されるのである。いずれにしても、151や395が使用された時期と FA の降下時期は、あまり遠くないことが言えそうである。

上層と下層の遺物の接合は、多くの住居址でみられたが、FA を挟む上位・下位の接合はきわめて象徴的な事例であった。今後さらに多くの事例を蒐集し、住居址の廃絶と埋没の問題に迫る必要があろう。

| 住居 | 土師器 | | | | | | | | 須恵器 | 鉄器 | 石製品 | 合計 | 出土点数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 甕 | 壺 | 甑 | 杯 | 椀 | 高杯 | 坩 | 手捏 | | | | | |
| H－1 | 2 | 4 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14 | 487 |
| 2 | 2 | 3 | 1 | 5 | 3 | 3 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 21 | 538 (5) |
| 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 5 | 251 (8) |
| 4 | 4 | 1 | 1 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 | 82 |
| 5 | 5 | 0 | 1 | 9 | 0 | 1 | 0 | 1 | 8 | 3 | 2 | 30 | 1,695 (10) |
| 6 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 60 |
| 7 | 4 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 15 | 417 (17) |
| 8 | 2 | 1 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 15 | 433 (21) |

（　）内は須恵の出土点数

出土遺物表

### 出土遺物

本遺跡の住居址ごとの出土遺物点数をまとめたものが前掲一覧表である。また土師器の器形分類を、第73図で試みた。これらのことから、本遺跡出土の土師器は大きくII期に分類できた。

I期の土師器は、覆土にFAが確認された住居址からの出土遺物である。杯は、須恵器を模倣したものは皆無であった。いわゆる内斜口縁を有する杯は平底と丸底があり、底部が平底でそこから体部が緩やかなカーブで広がる杯は、口縁に稜をもち内湾するものと素口縁のものに分けられた。椀は、いわゆる内斜口縁と素口縁の2つがある。この時期の壺や甑にはハケメの残存するものが見られ、また有段口縁の壺も出土している。以上の様相とFAの存在を考えると、この時期は5世紀後半、いわゆる型式編年では和泉II式〜鬼高I式に比定できよう。

II期の土師器は、I期とかなり異った様相を示す。杯はほとんど外稜を有する模倣杯で占められ、素口縁の杯がわずかに2点出土しているだけである。模倣杯は直立する口縁も見られるが、外反あるいは外傾する口縁が主流で、体部は浅くなっている。内傾する口縁の杯は、2個体出土している。甕は長胴化が顕著で、胴中央に最大径を有するものと、胴がすぼまり口縁に最大径を有するものとがある。このほか丸胴甕や小形甕も見られた。甑はハケメが消え胴部が直線的にすぼまり、高杯は脚部の長大化したものが見られた。これらの土師器に共伴する須恵器は陶邑編年のTK10〜TK43頃に比定できる。以上のことからII期の出土遺物は、6世紀後半、いわゆる型式編年では鬼高II〜III式に位置づけられよう。

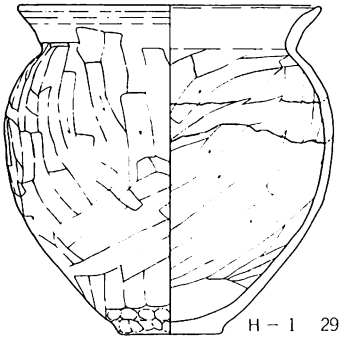
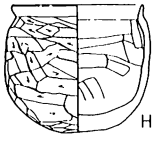
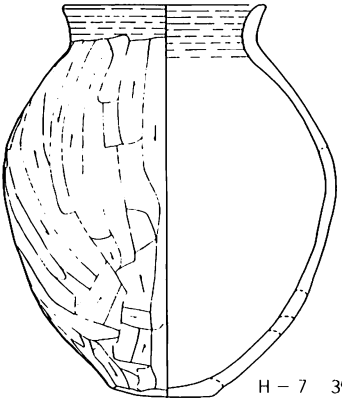
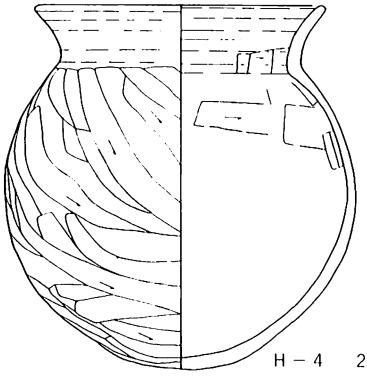
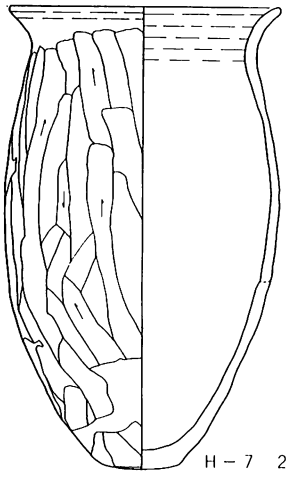
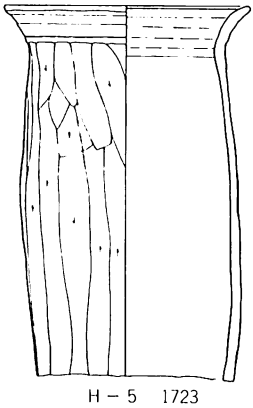
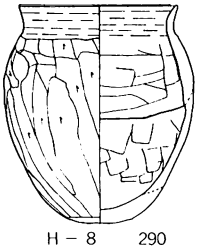
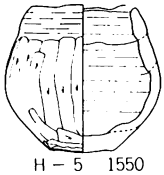
なお前年度調査した小神明遺跡群IIの九料遺跡からは、覆土にFAをもつ住居址6軒を含む合計9軒の鬼高I式土器を伴う住居址が検出されており、また端気遺跡群IIからはFAが存在しない鬼高I式土器を伴う住居址14軒が検出されている。九料遺跡の出土遺物は本遺跡のI期の遺物にやや近いが、杯についてはFAより下位から内斜口縁を有するもの、平底の素口縁のものといわゆる模倣杯が共伴して出土している。端気遺跡群IIの杯は内斜口縁を有する杯の消滅段階に入っており、模倣杯が主流を占める。直立する口縁が多いが、外反、外傾のものも見られ、体部のつくりが浅いものも見られた。以上の土器様相と本遺跡の土器様相を加味すれば、比較的近距離に所在するこれらの遺跡の変遷は、南田之口遺跡I期→九料遺跡→端気遺跡群II→南田之口遺跡II期という流れで捉えることができよう。

### 住居の変遷

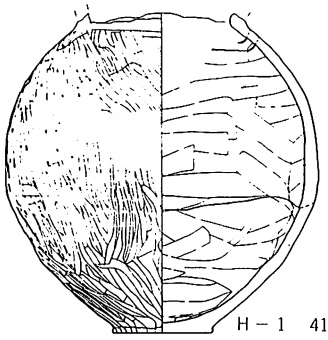
本稿では住居址・竈・出土遺物等を総合的に検討し、本遺跡の住居址の変遷について考えてみたい。

まずI期であるが、内斜口縁を有する杯・椀は、H－1号住居址では平底であるのに対し、H－2号住居址では丸底になっている。壺・甑のハケメの残存は、H－1号住居址の方が顕著である。この2点から、H－1号住居址→H－2号住居址の流れが考えられる。H－1号住居址の炉と竈の併存は、先の捉え方で矛盾は生じないと思われる。

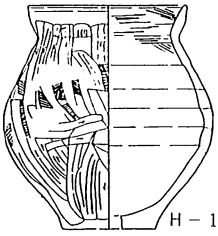
ついでII期であるが、土器様相が近似しているため前後関係をおさえるのはかなり難しい。住

| | 甕 |
|---|---|
| I 期 |  H－1　298  H－2　185 |
| II 期 |  H－7　395  H－4　23  H－7　273  H－5　1723  H－8　290  H－5　1550 |

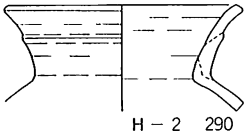
壺



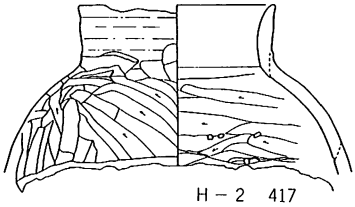
H－1　412



H－1　307

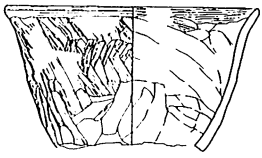


H－2　290



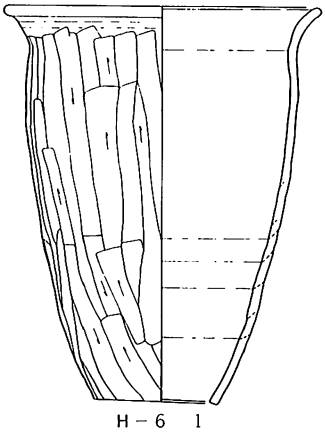
H－2　417

甑



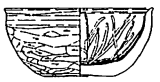
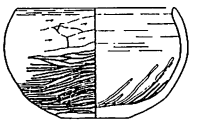
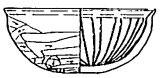
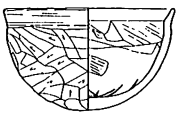
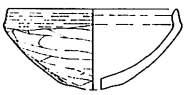
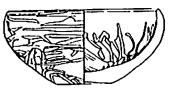
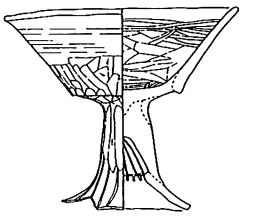
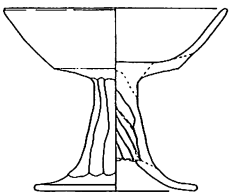
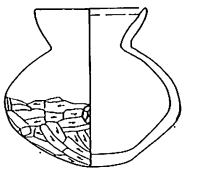
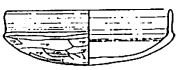
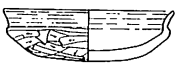
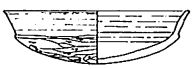
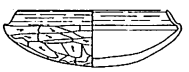
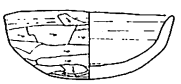
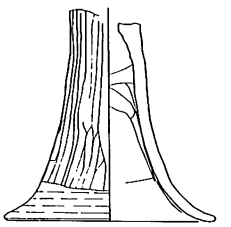
H－1　164

FA降下



H－6　1

第73図　土師器の器形分類

| 杯・椀 | 高杯 | 坩 | 手捏 |
| --- | --- | --- | --- |
|  H－1　476<br>  H－2　292<br>  H－2　253<br>  H－2　225<br>  H－2　306<br>  H－2　51 |  H－1　217<br>  H－2　277 |  H－1　404 | |
|  H－5　1040<br> H－4　68<br>  H－5　960<br>  H－2　251<br>  H－5　102<br>  H－5　101 | H－3　259<br>  H－5　1215 | | H－5　1030 |

居の位置関係を見ると、H－3・5号住居址の併存は考え難く、またH－6・7号住居址の併存はあり得ず、H－4号住居址はH－5号住居址を切っている。H－3・5号住居址の関係から言えば、甕を比較する限りH－3号住居址の方が先行していると思われる。なお、H－3号住居址は主軸方位の北偏が他に比し目立っている。H－6・7号住居址の関係は、遺物だけではほとんど決定不可能である。ただH－6号住居址はH－4号住居址と形態的に類似しており、両住居址が本遺跡中やや特異であることからほぼ同時期の所産と考えたい。H－7号住居址は、主軸方位がH－5・8号住居址とほぼ同じで、出土遺物も近似している。H－5・7・8号住居址は、同時期併存していた可能性が考えられる。もしそうであるならば、H－6・7号住居址の関係は、H－6号住居址の方が新しいということになろう。以上、住居の位置、切り合い、主軸方位、出土遺物から、H－3号住居址→H－5・7・8号住居址→H－4・6号住居址という流れが一応想定できるのである。

## 近　　世

本遺跡の11条の溝のうち、9条が下限を近世にもつ溝であると思われる。掘り方がきっちりした逆台形であること、および走行が直線的であることから、計画的に開削された用水路である可能性が考えられる。特に第2号溝は、奇しくも本遺跡の北を東流する大正用水と走行を同じくするものである。

現在の付近の土地利用はほとんど桑畑で、本遺跡からは水田は検出されていない。しかし、下流において水田耕作が行われていたことは十分考えられるし、また、雨ごいのため馬の頸を切って川に流すような儀礼が行われていたとすれば、耕作に関係する貴重な用水であった可能性は高い。

（木暮）

### 主要参考文献


井野修二　1984　『小神明遺跡群II』　群馬県前橋市教育委員会

尾崎喜左雄　1964　『市之関遺跡』　群馬県宮城村教育委員会

木暮　誠・前原　豊　1984　『端気遺跡群II』　群馬県前橋市教育委員会

小島純一　1982　『前田　粕川村文化財報告第2集』　群馬県粕川村教育委員会

後藤守一　1939　「上古時代鉄鏃の年代研究」　『人類学雑誌第54巻9号』

鈴木次郎ほか　1977　『尾崎遺跡』　神奈川県教育委員会

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古クラブ

中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

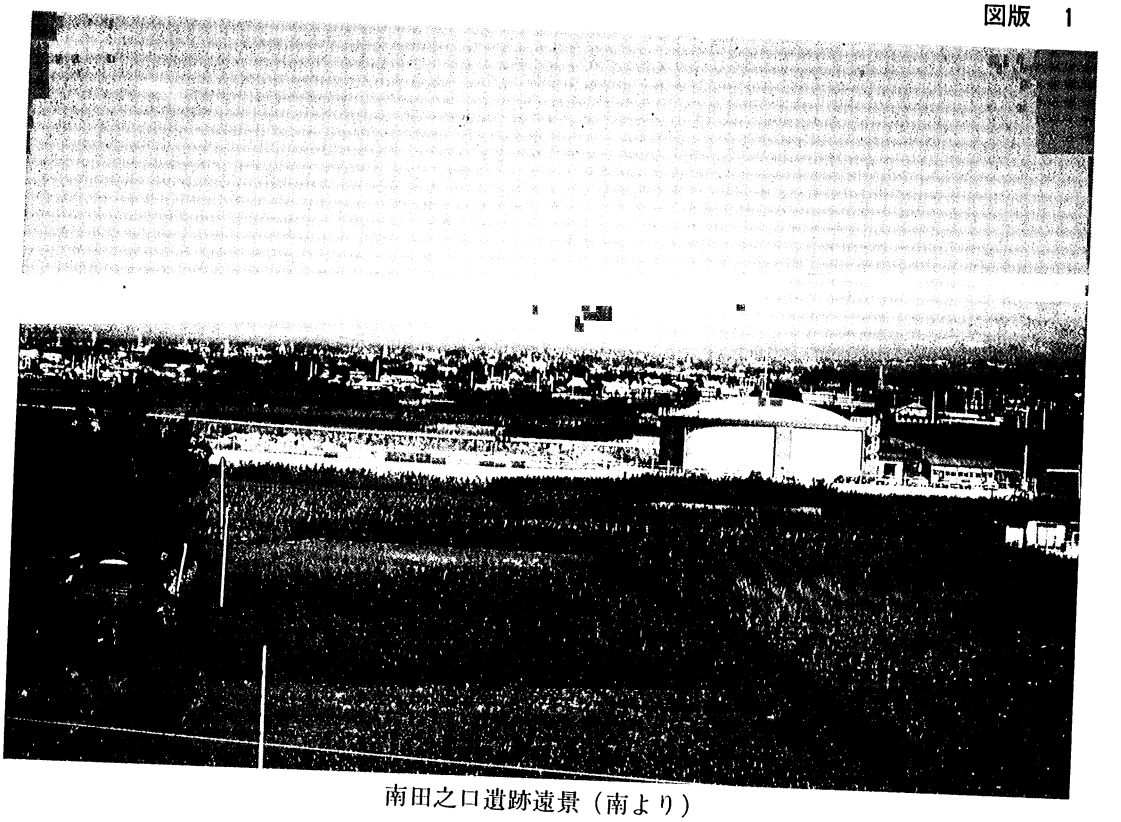
西村正衛　1984　『石器時代における利根川下流域の研究』　早稲田大学出版部

橋本博文・加部二生　1984　「Ⅶ　群馬県」　『古墳時代の土器研究』古墳時代土器研究会

藤沢平治ほか　1976　『市道』　長野県佐久市教育委員会

前原　豊ほか　1982　『堀之内遺跡群』　群馬県藤岡市教育委員会
茂木由行　1984　「群馬県における鬼高式土器の編年」　『群馬考古通信第９号』群馬県考古学談話会
横川好富ほか　1982　『緑山遺跡』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
若月省吾　1980　『笠懸村稲荷山遺跡』　群馬県笠懸村教育委員会
若月省吾　1981　『笠懸村和田遺跡』　群馬県笠懸村教育委員会

# 写 真 図 版

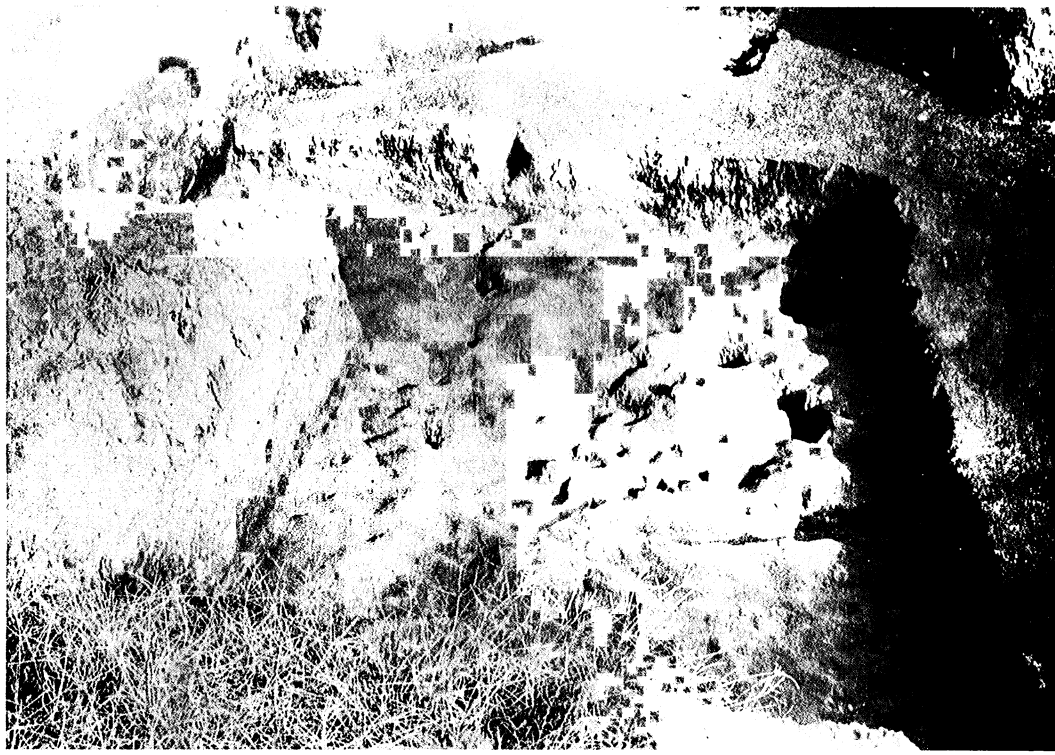


南田之口遺跡遠景（南より）

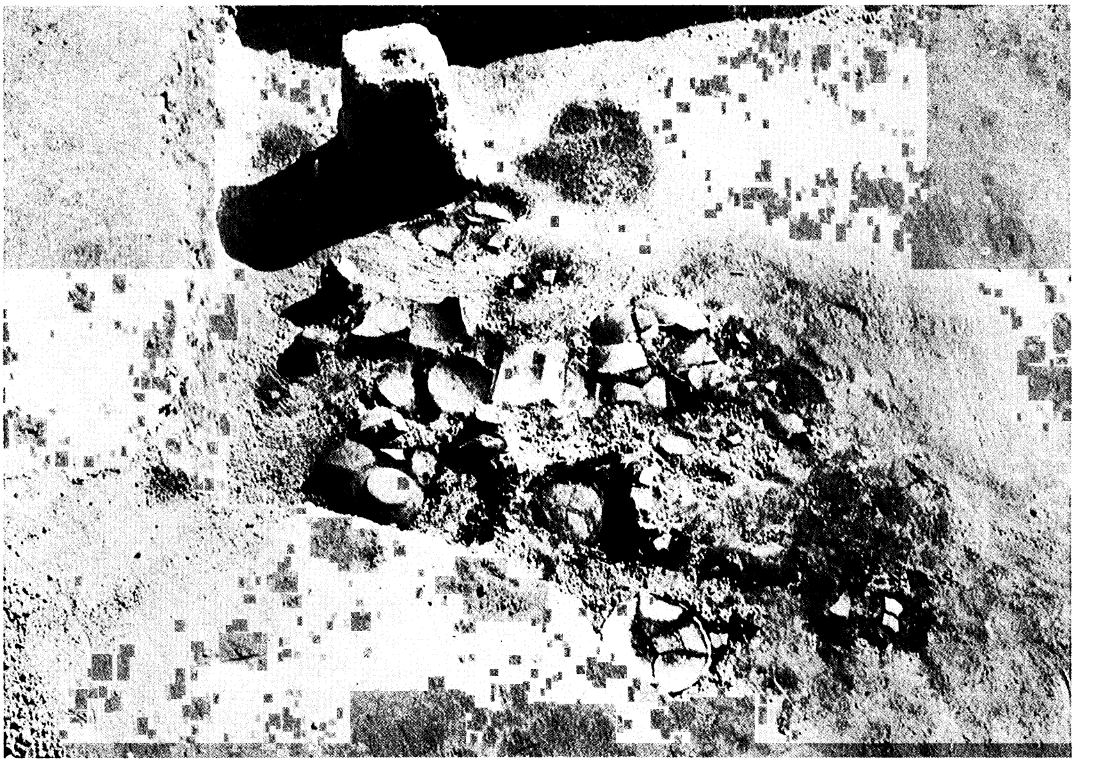
南田之口遺跡全景（東より）

図版　2

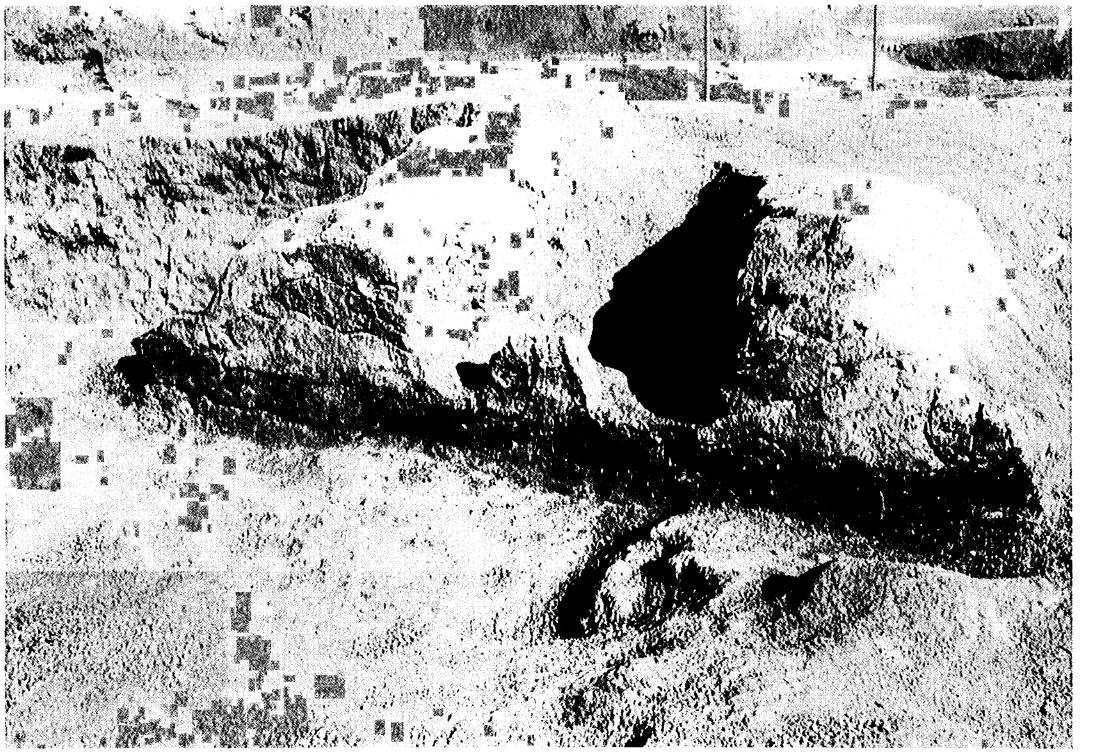
H－１号住居址（西より）



H－１号住居址掘り方（西より）



H－１号住居址遺物出土状態（東より）

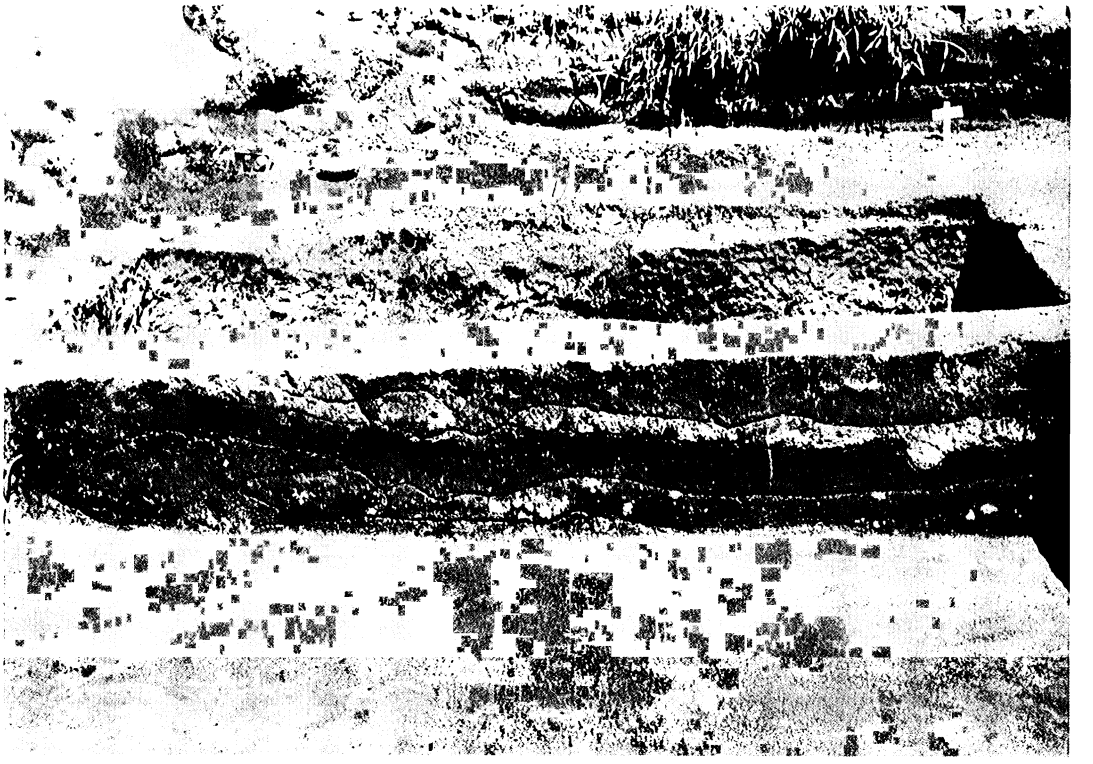


H－１号住居址竈掘り方地断（西より）

図版　4

H－２号住居址（北より）

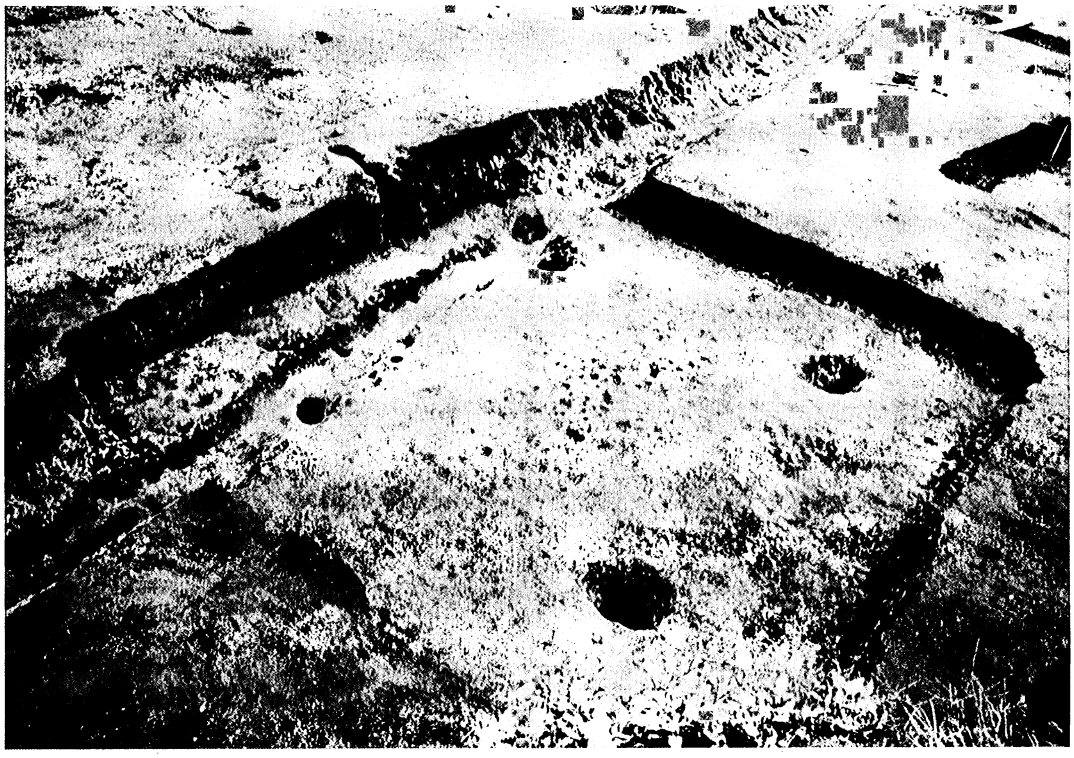
H－２号住居址掘り方（西より）



H－２号住居址地断（南より）

H－２号住居址竈（西より）

図版　6

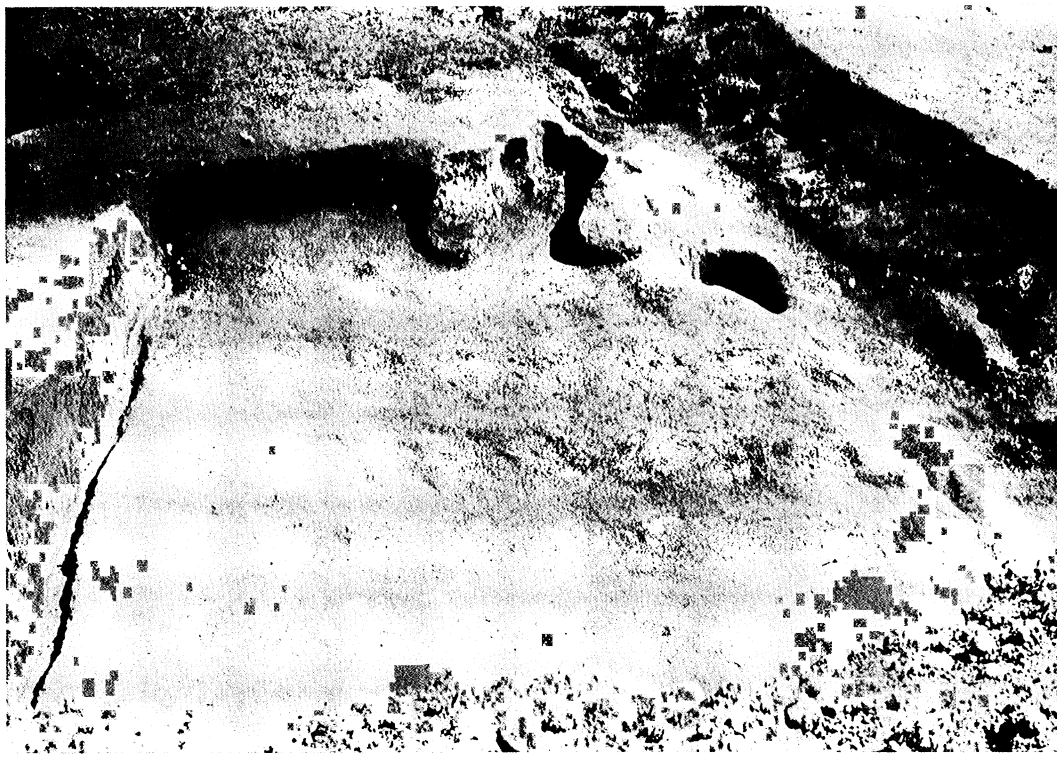


H－３号住居址（北西より）

H－３号住居址掘り方（北東より）

H－３号住居址竈（西より）

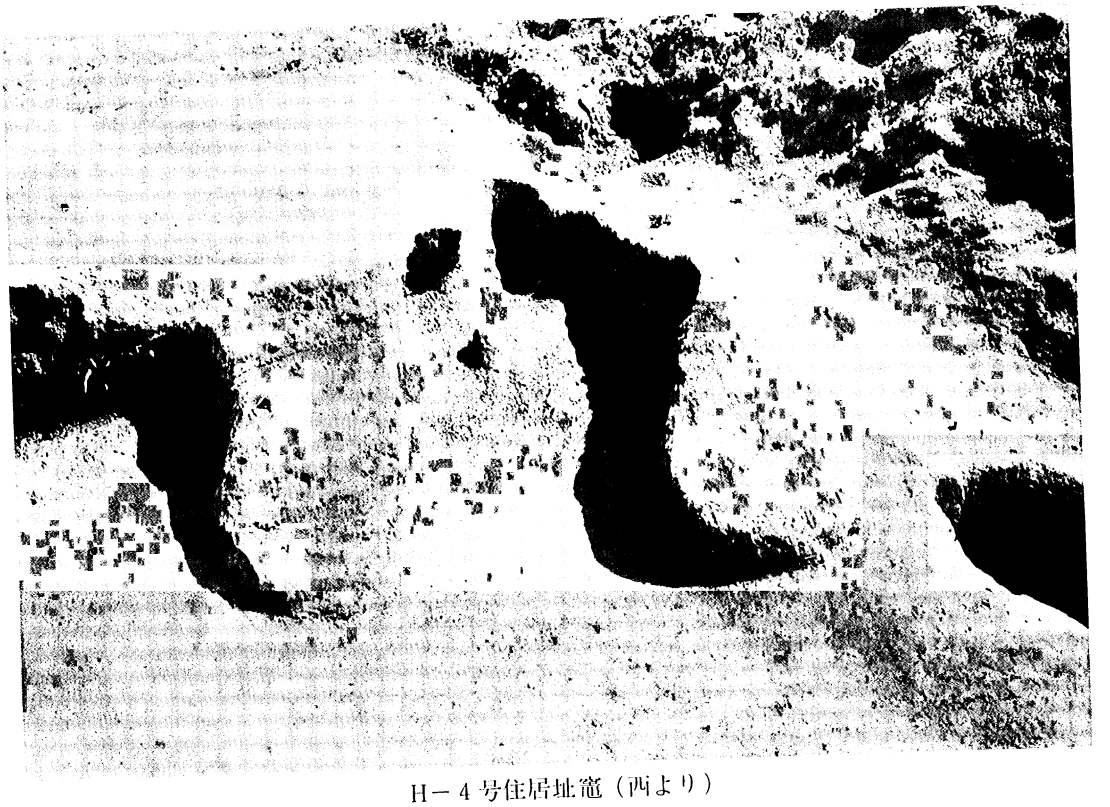
H－３号住居址遺物出土状態



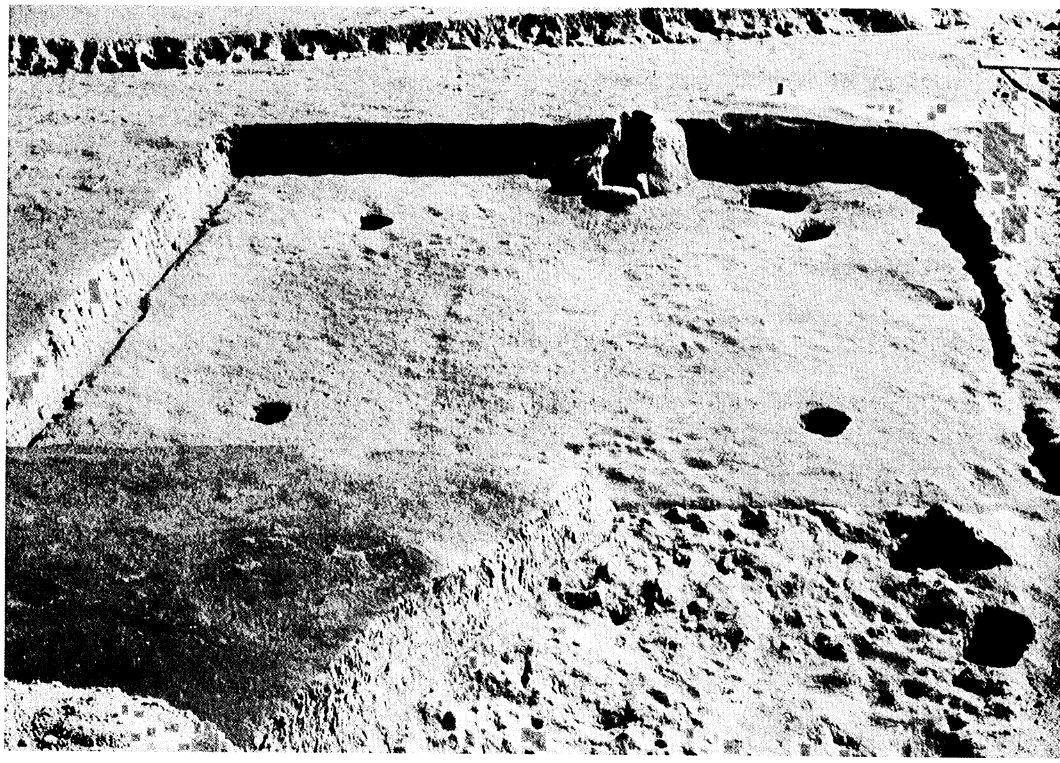
H－4号住居址（西より）

H－4号住居址掘り方（西より）

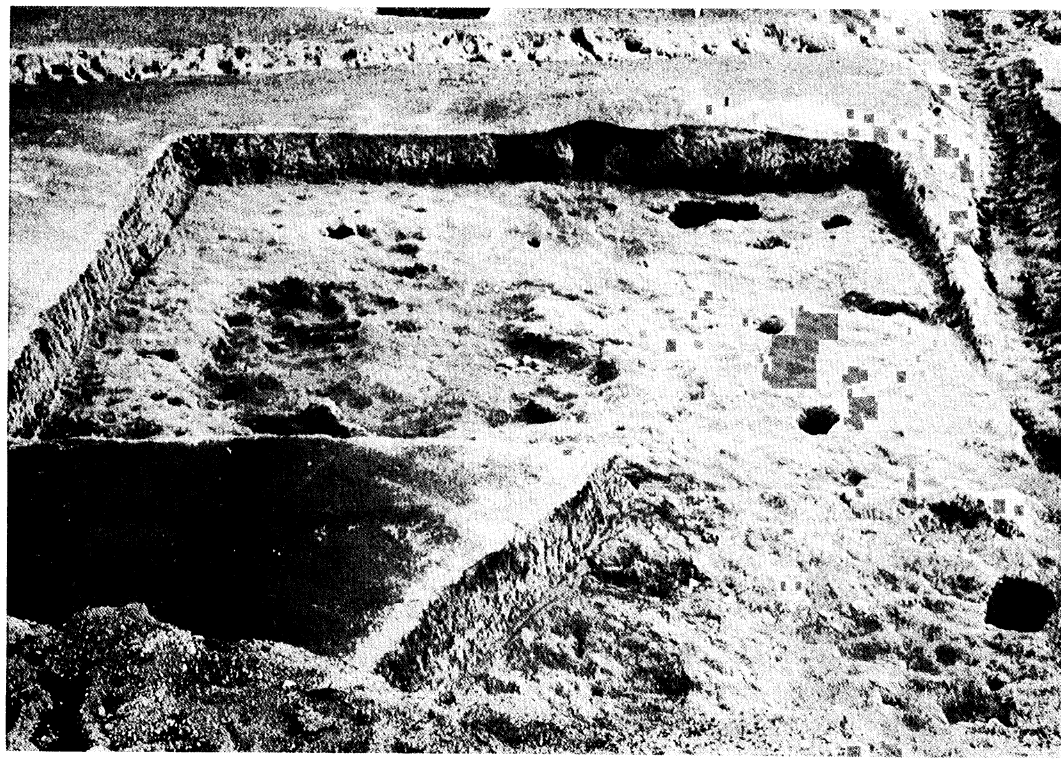
H－4号住居址遺物出土状態（西より）



H－4号住居址竈（西より）

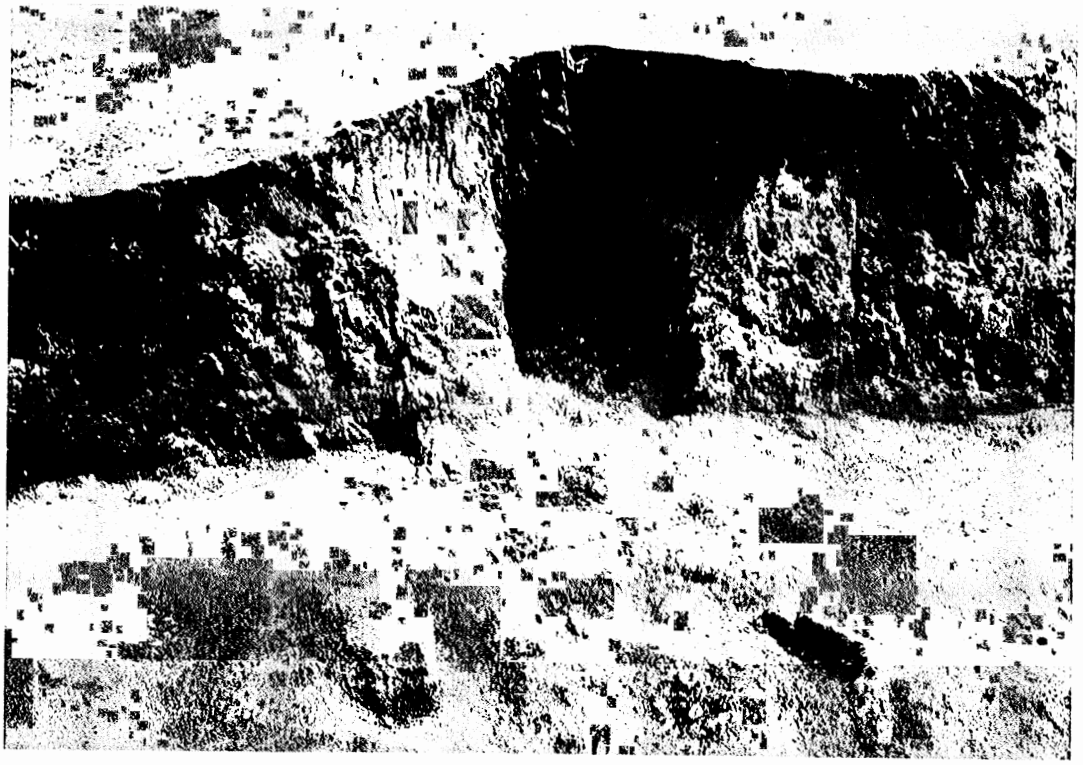


H－５号住居址（西より）

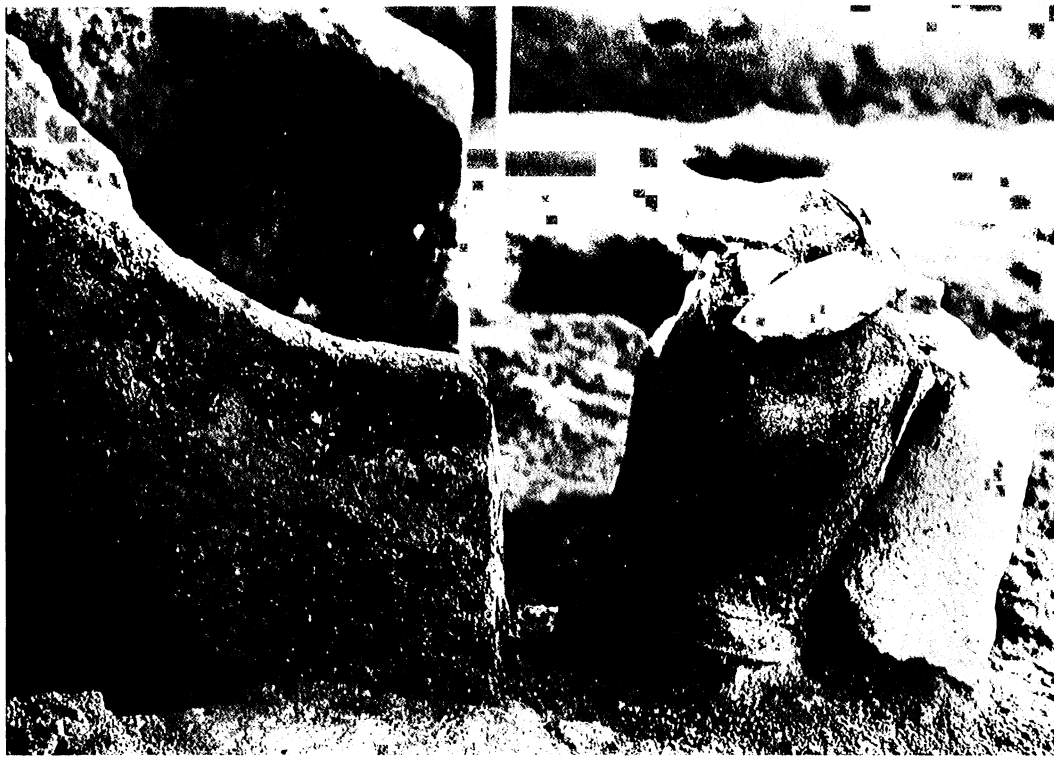


H－５号住居址掘り方（西より）

H－５号住居址竈（西より）



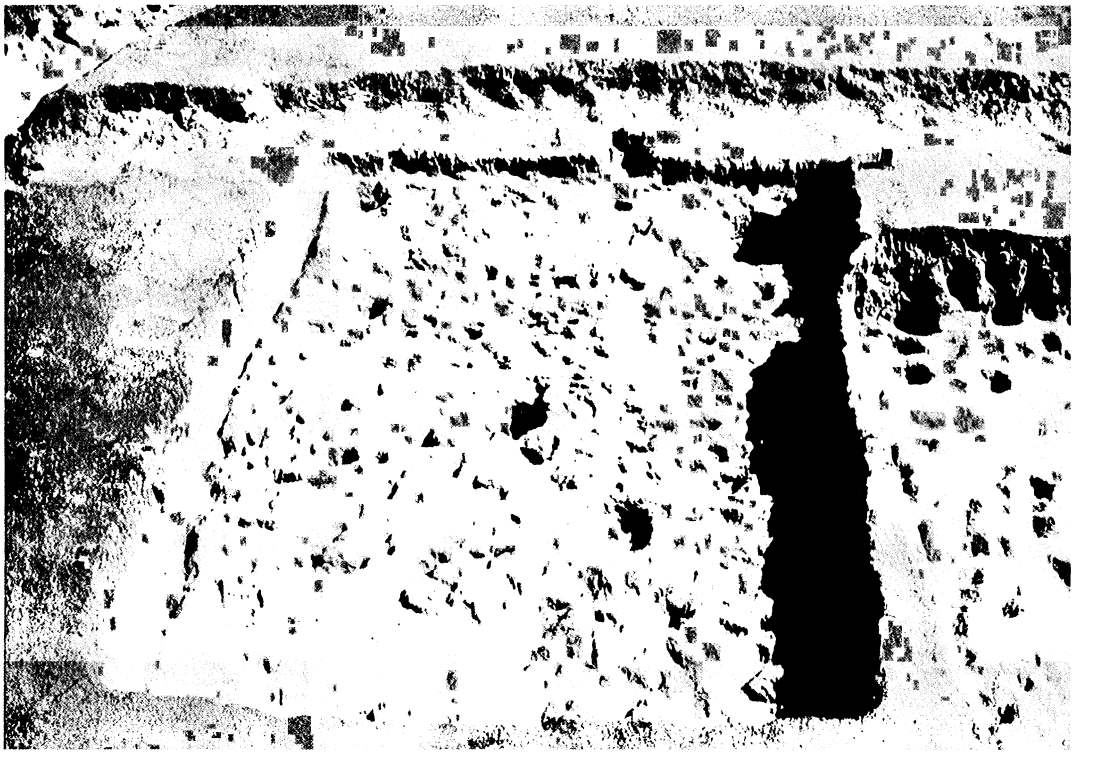
H－５号住居址竈掘り方（西より）



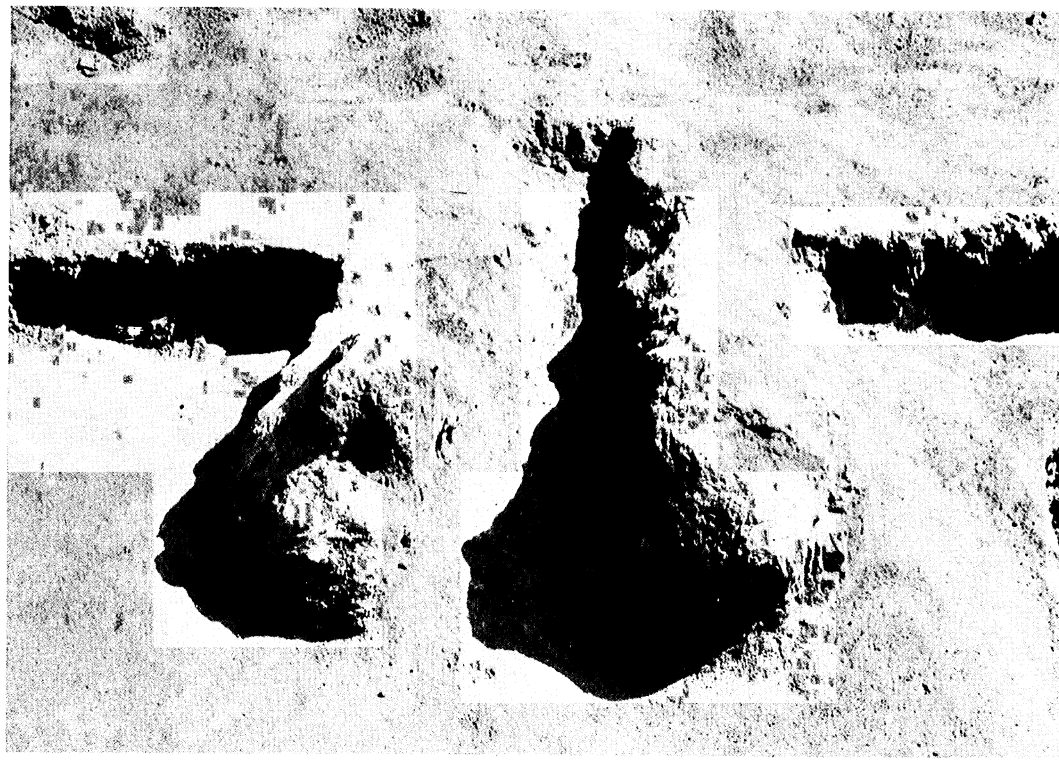
H－５号住居址竈（北より）

H－５号住居址遺物出土状態（東より）

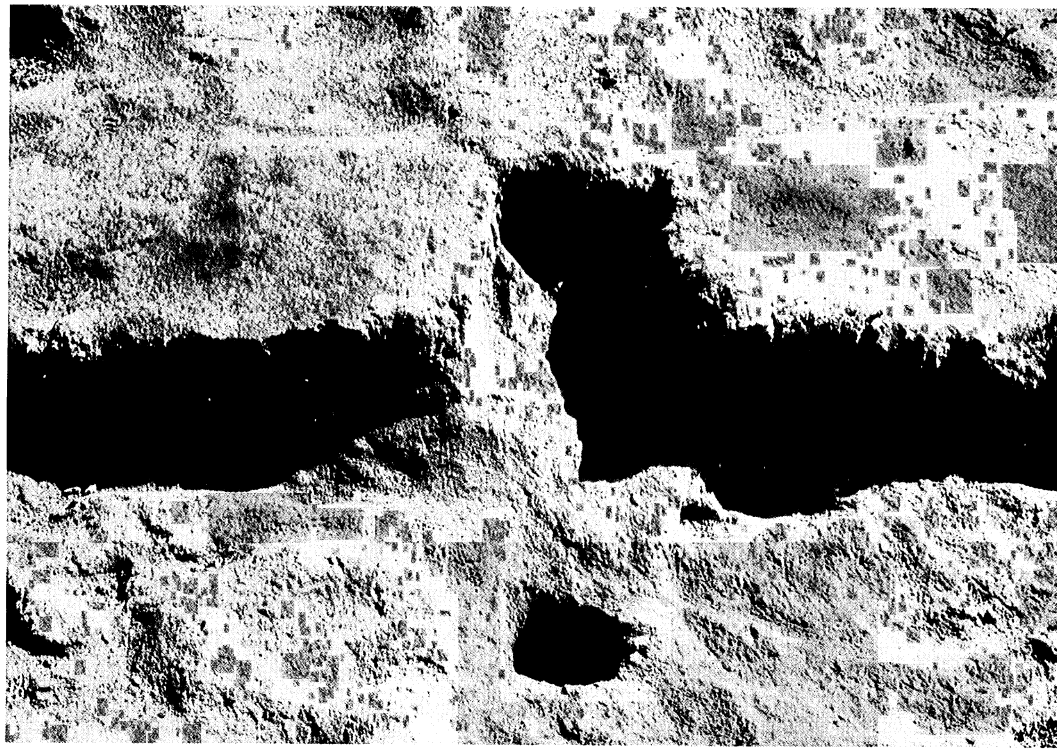
H－６号住居址（西より）



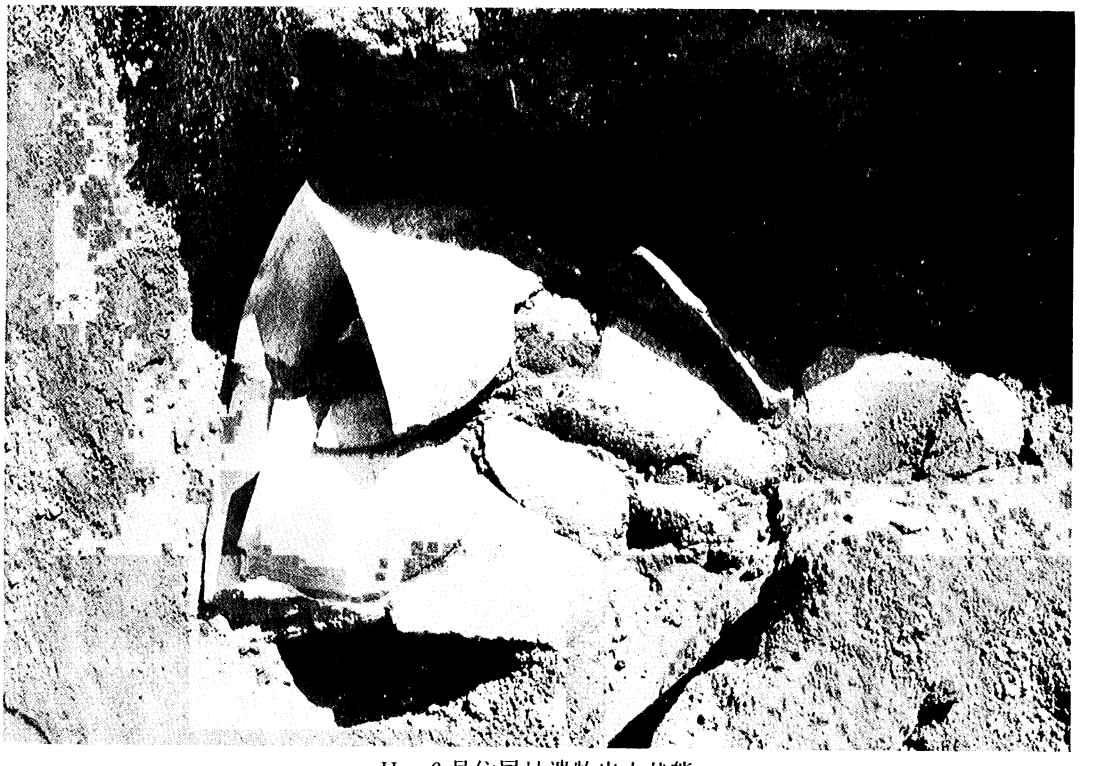
H－６号住居址掘り方（西より）



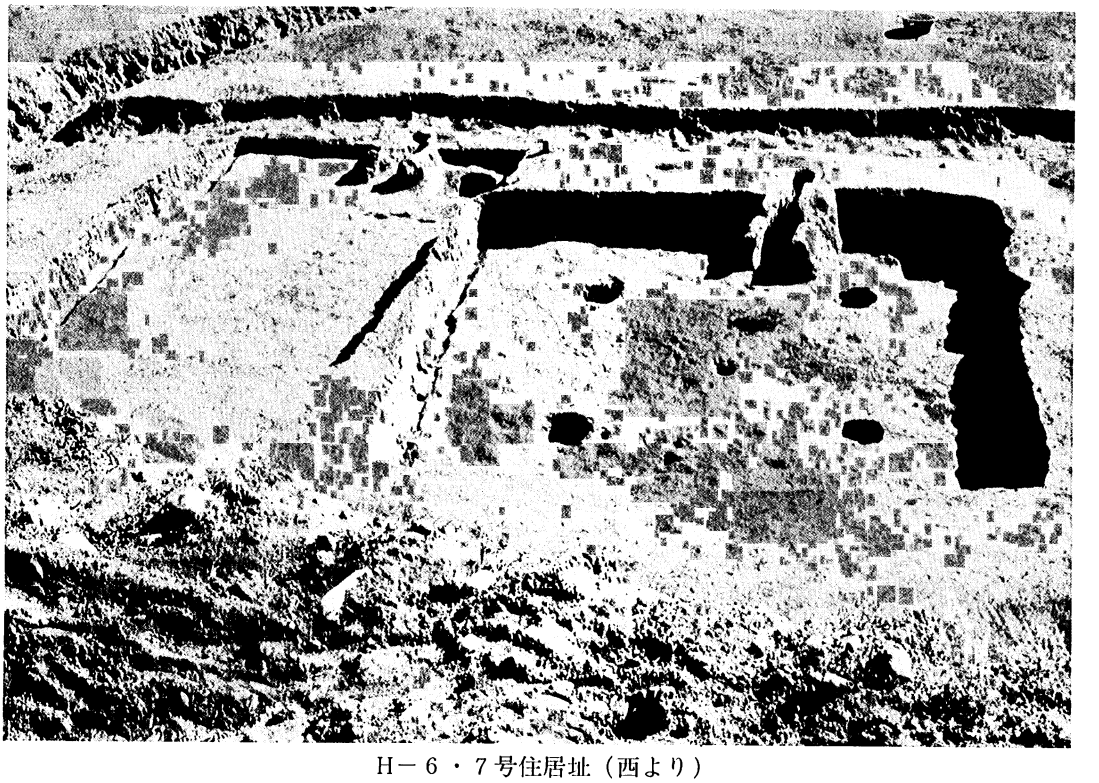
H－6号住居址竈（西より）



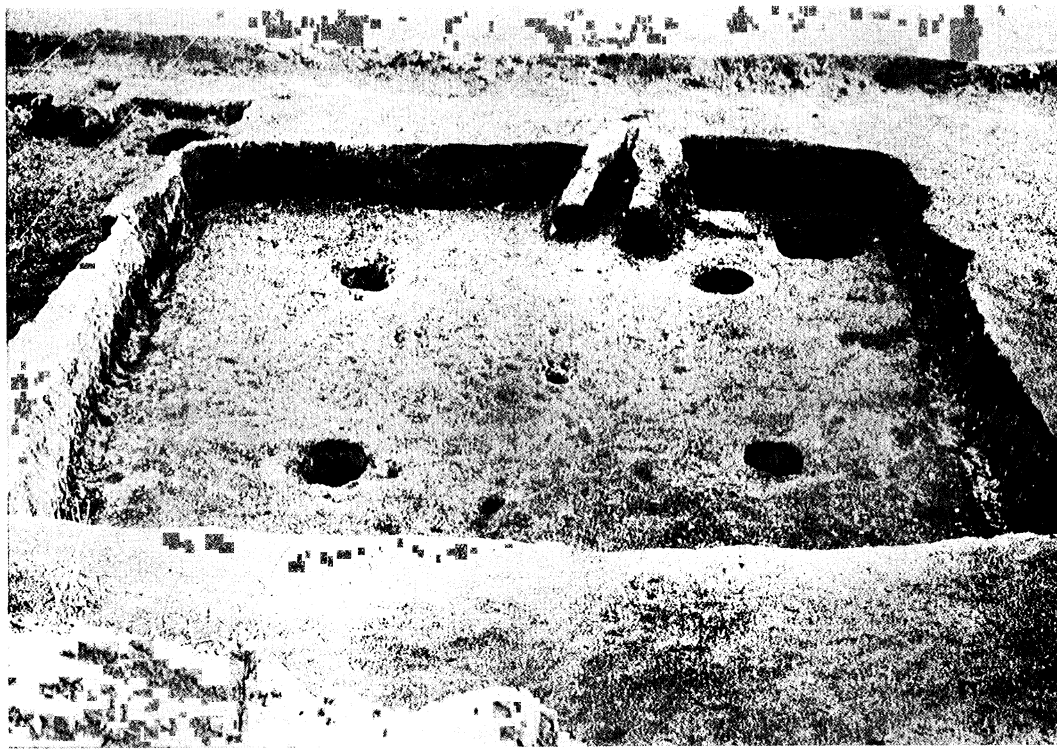
H－6号住居址竈掘り方（西より）



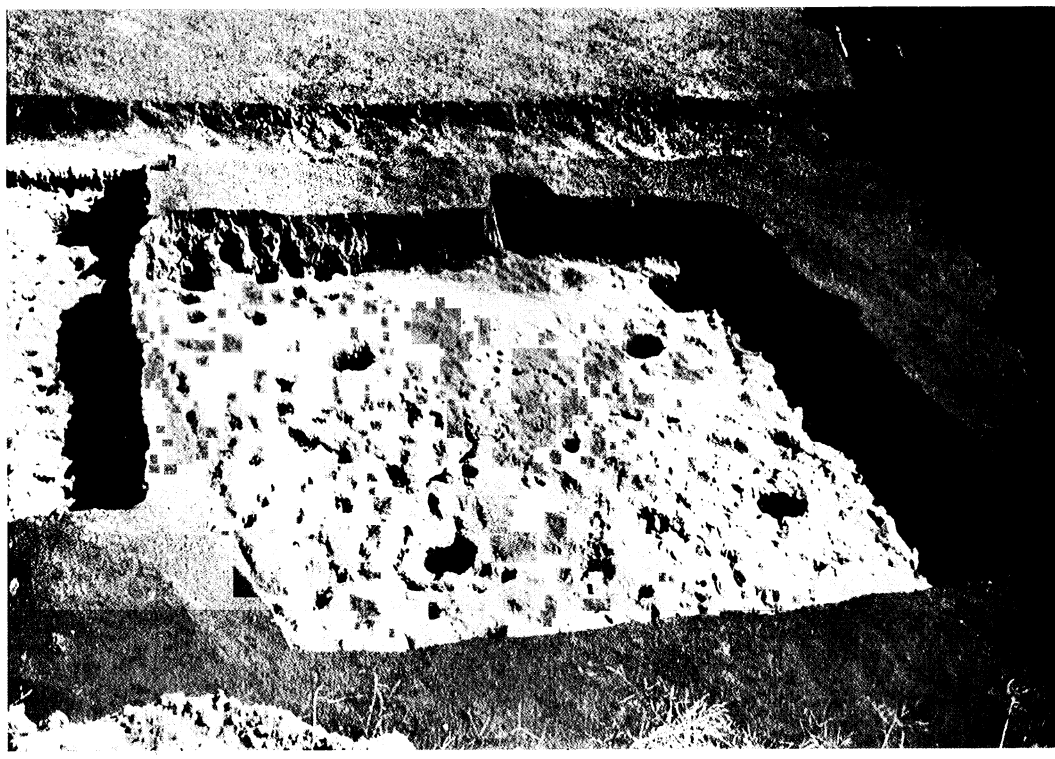
H－６号住居址遺物出土状態



H－６・７号住居址（西より）

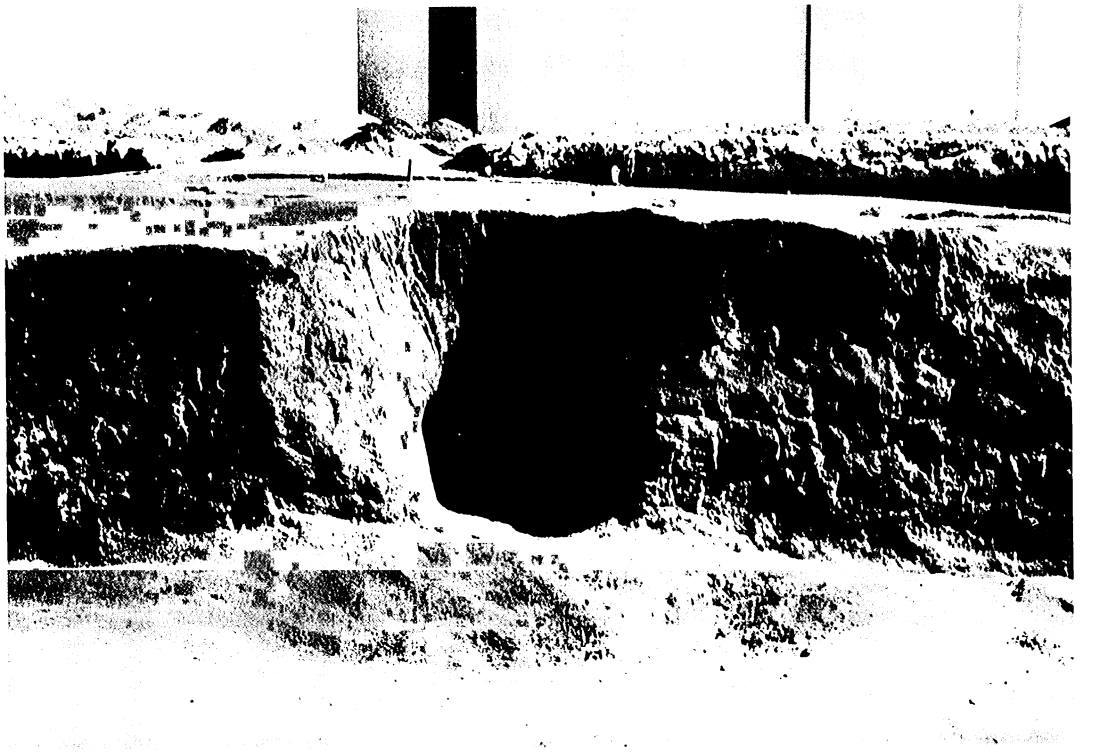


H－７号住居址（西より）

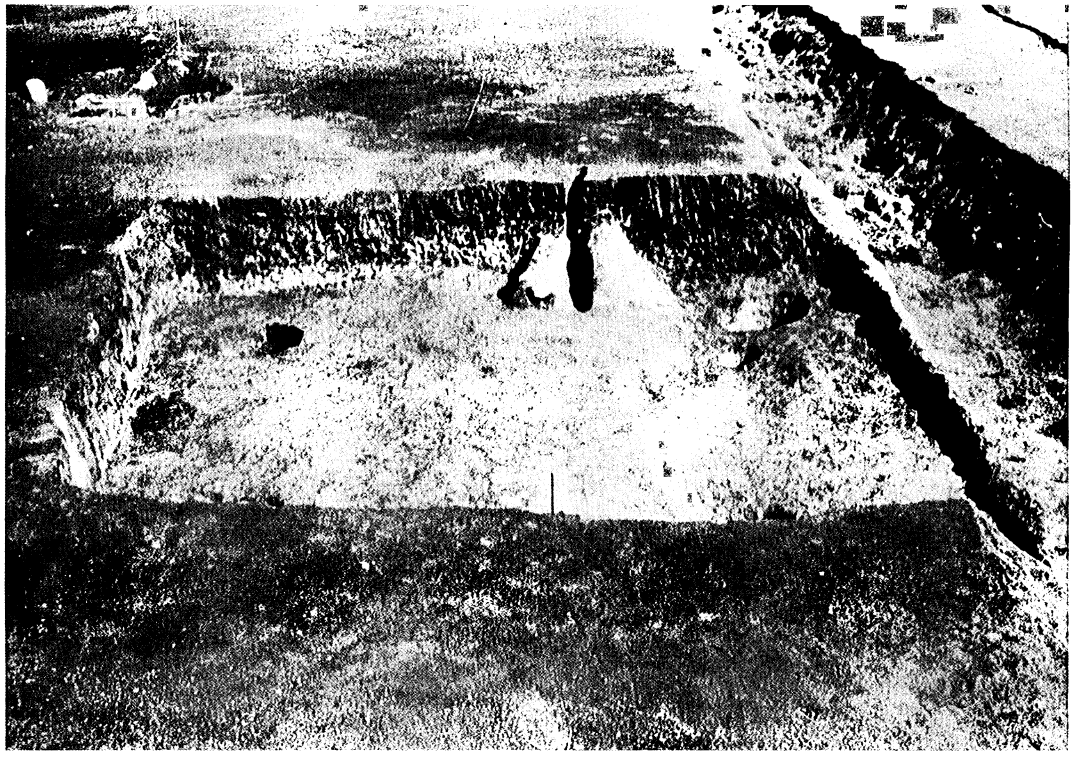


H－７号住居址掘り方（西より）

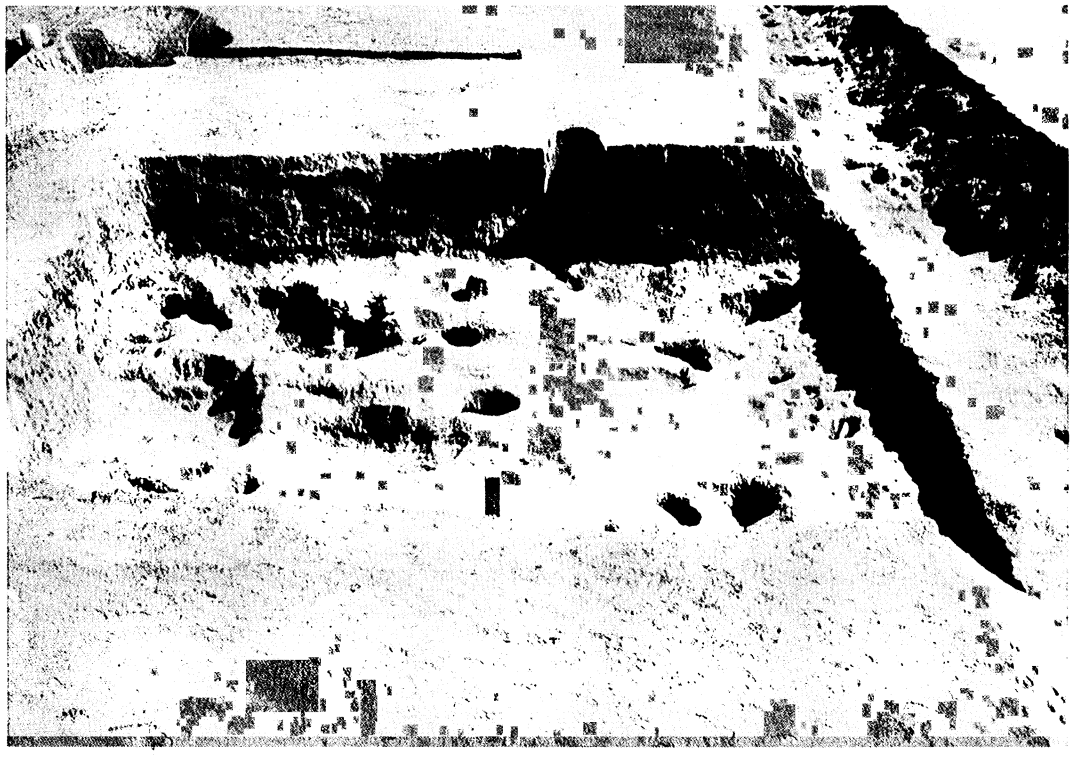
H－７号住居址竈（西より）



H－７号住居址竈掘り方（西より）



H－８号住居址（西より）



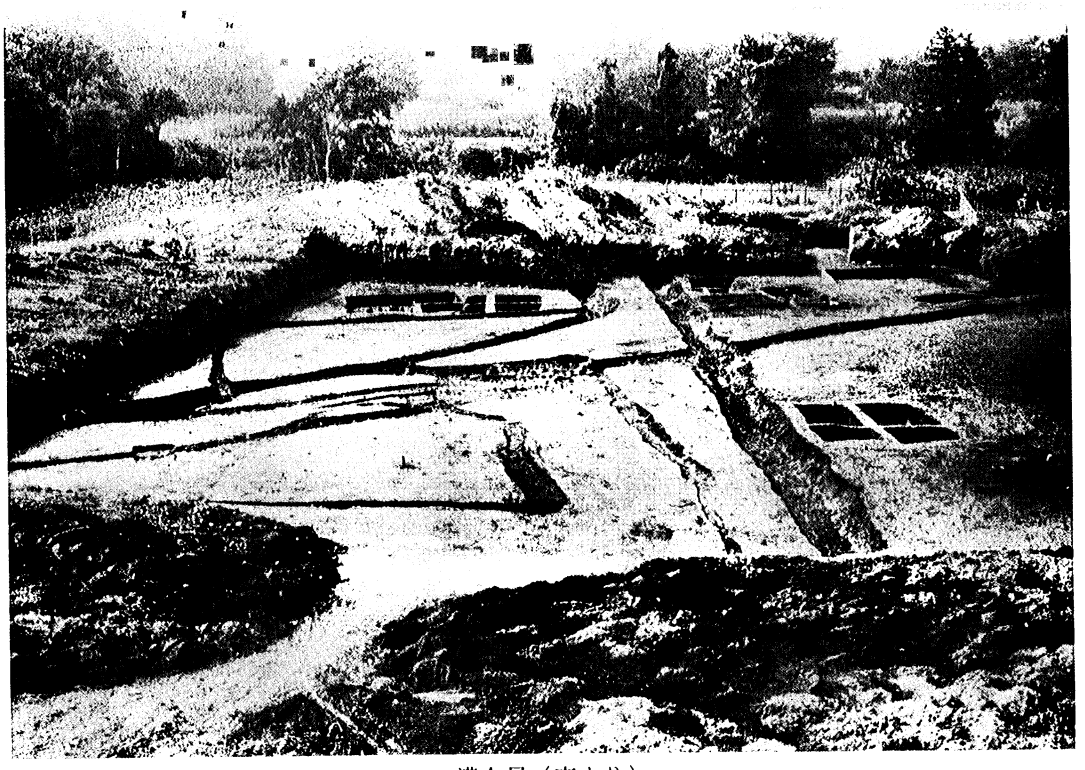
H－８号住居址掘り方（西より）

H－８号住居址竈（西より）

H－８号住居址竈掘り方（西より）

H－８号住居址遺物出土状態

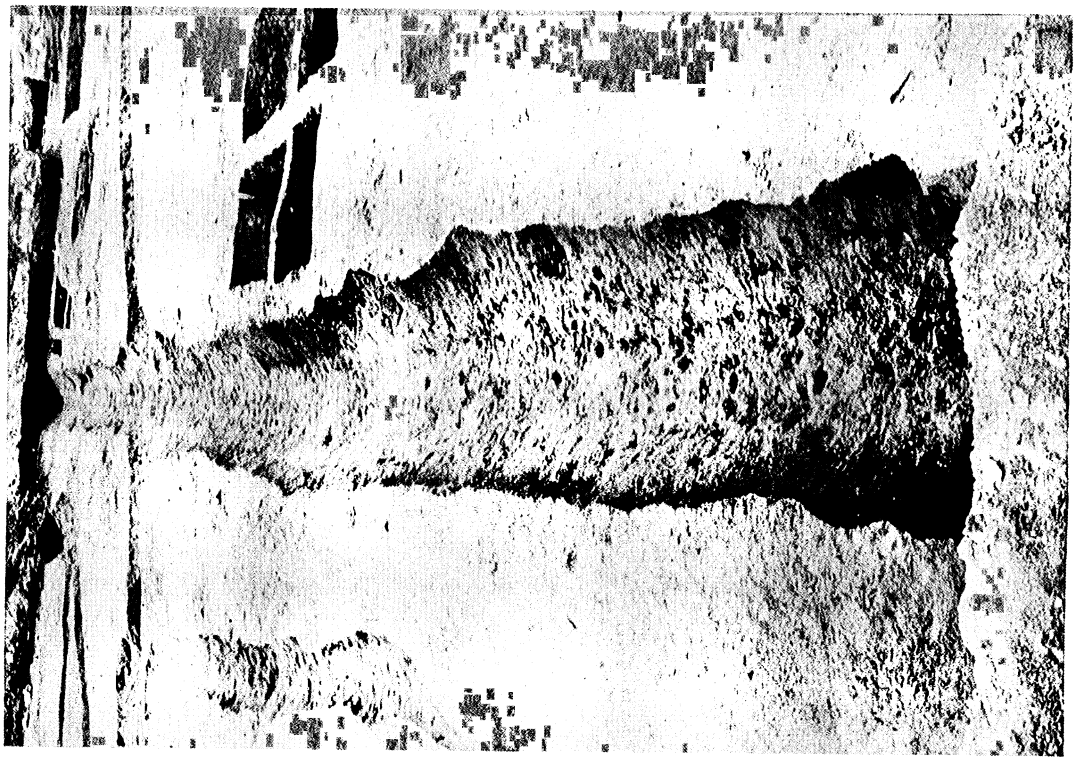
H－８号住居址特殊遺構（南西より）



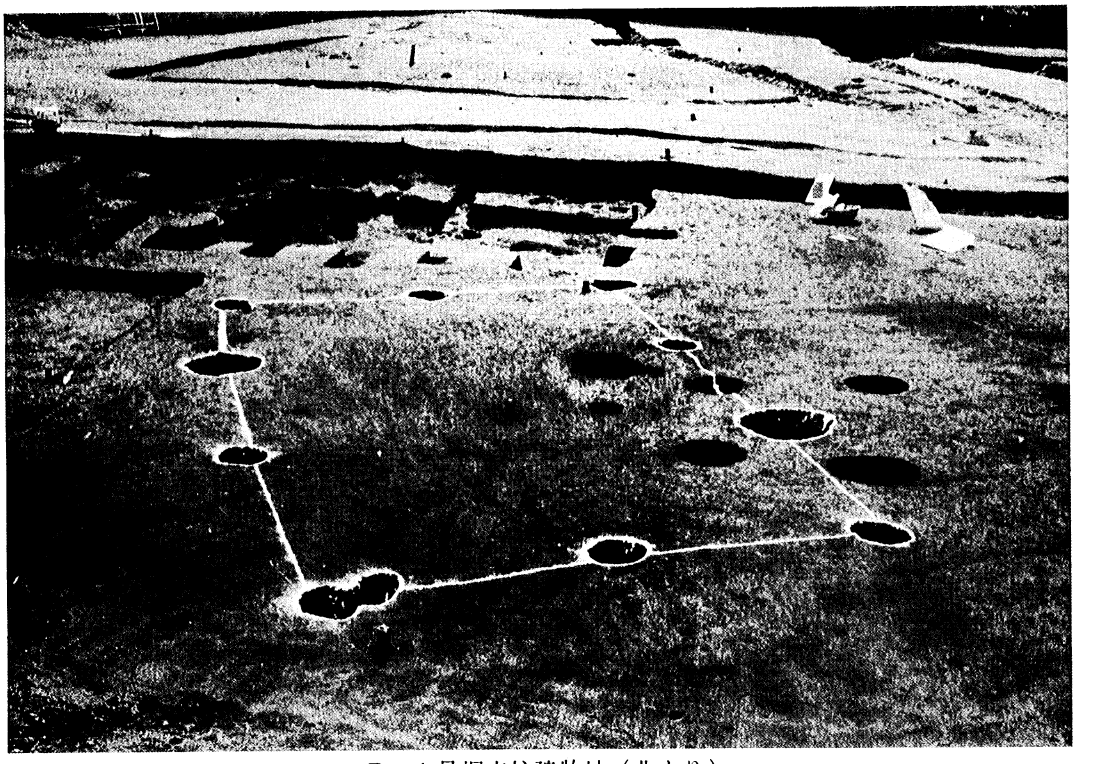
溝全景（東より）

W－3号溝（北西より）

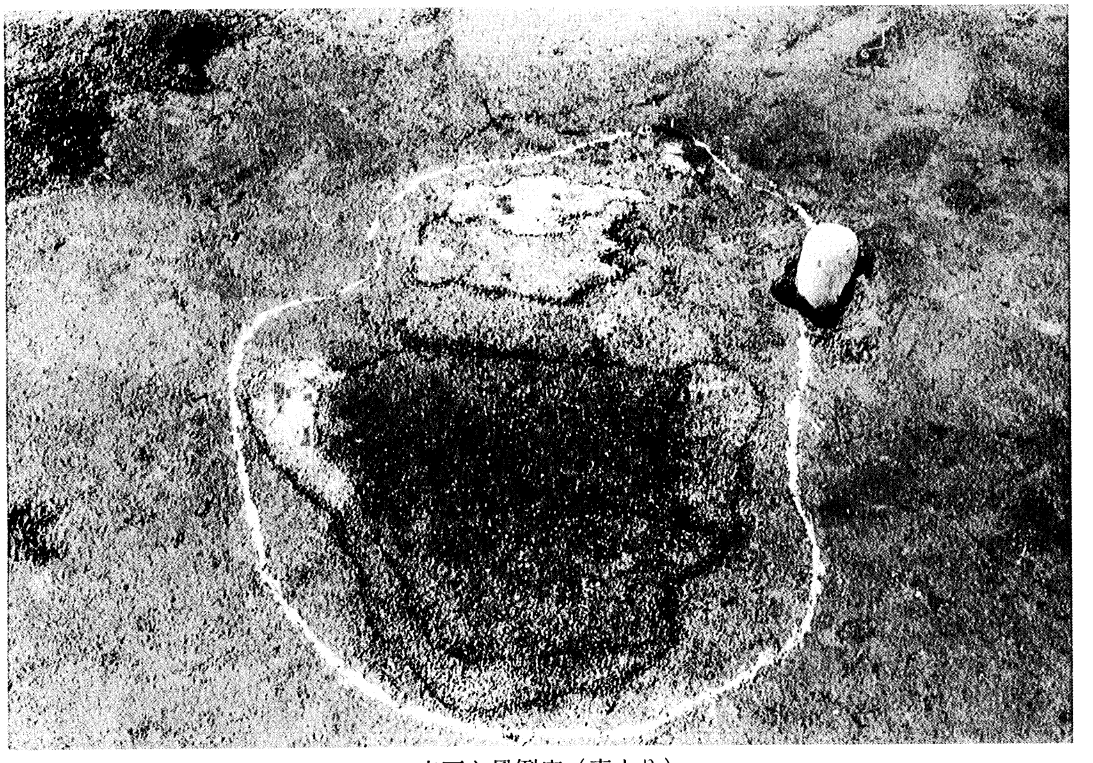
W－1号溝（北より）



W－2号溝（東より）



B－１号掘立柱建物址（北より）



立石と風倒痕（東より）

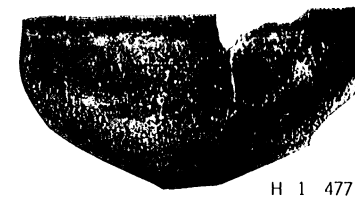
図版　24

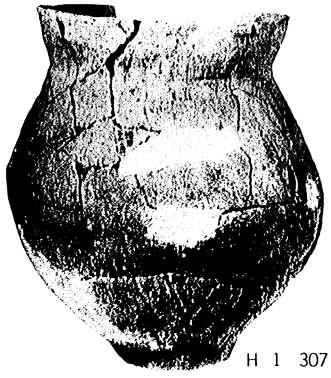
H-1　217

H-1　476

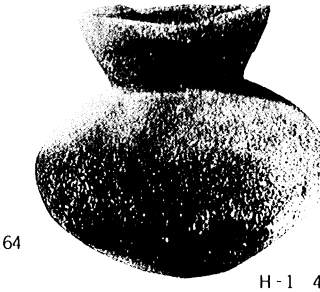
H-1　79

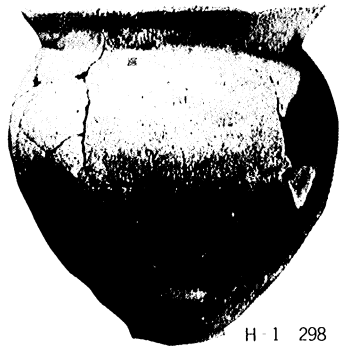
H 1　270

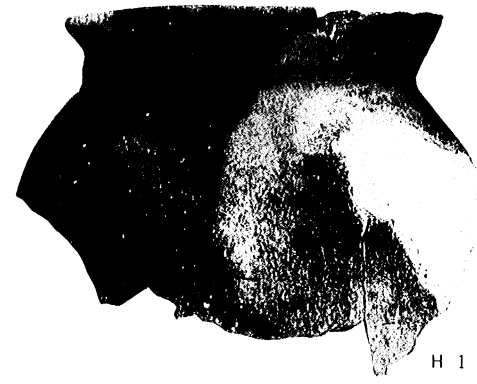

H 1　477


H 1　307

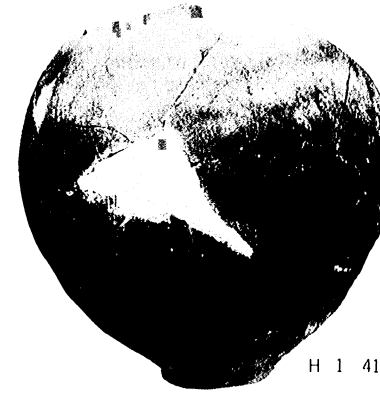
H 1　164

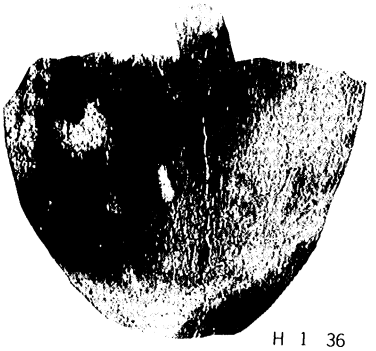

H-1　404


H 1　298


H 1　87

H 1　223


H 1　412


H 1 36

H-1 275

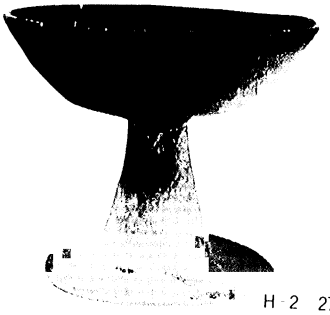
H-2 46

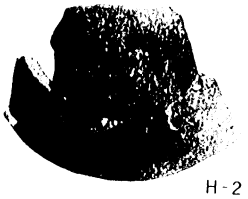
H-2 395

H 2 453

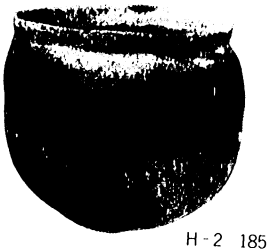
H-2 151

H-2 306

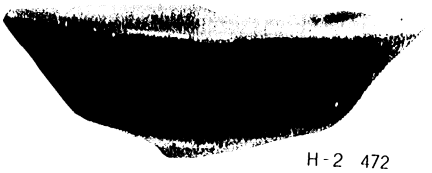

H-2 277

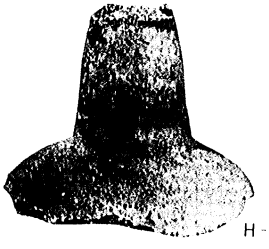

H-2 292

H-2 12


H-2 185

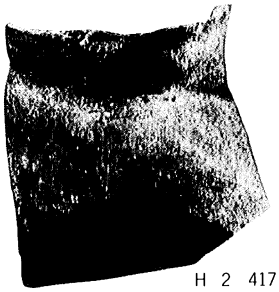
H-2 225

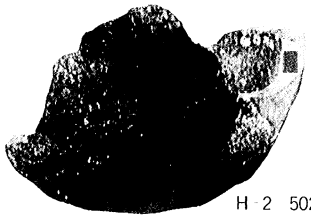

H-2 472

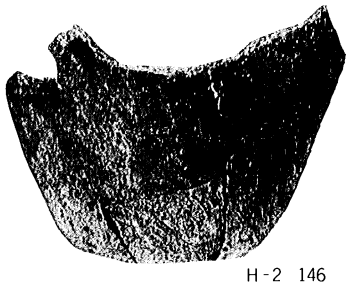

H-2 224

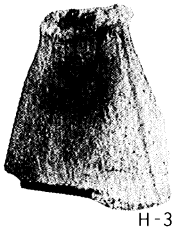
H-2 2

図版 26


H 2 417

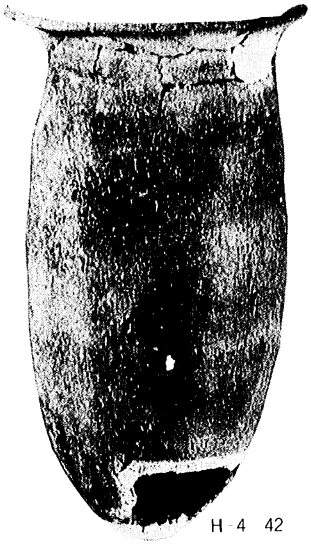

H 2 502


H-2 146

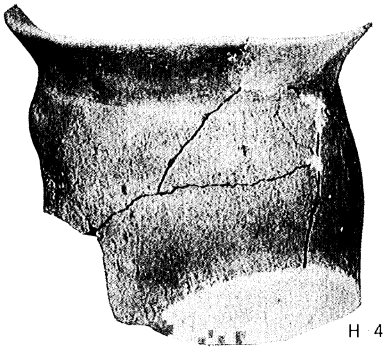

H-3 259

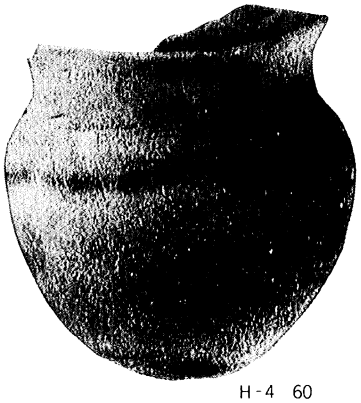
H 3 257

H 3 244


H 4 42

H 4 30

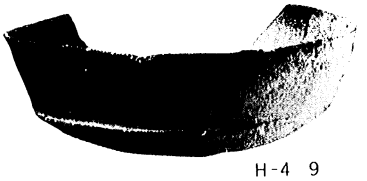

H 4 27


H-4 60

H-4 15

H-4 68

H-4 埋


H-4 9

H 4 33

H-4 31

H-4 71

H-5 1446

H-5 908

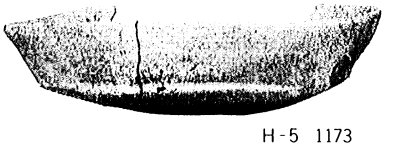
H-5 101

H-5 1289

H-5 1640

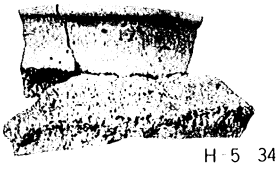
H-5 1028

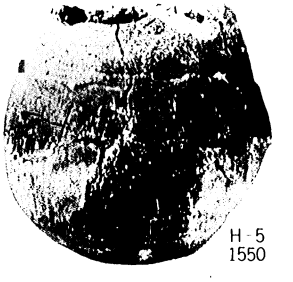
H-5 960


H-5 1173

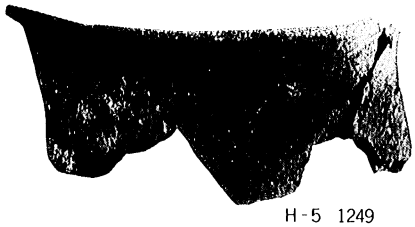
H-5 1030

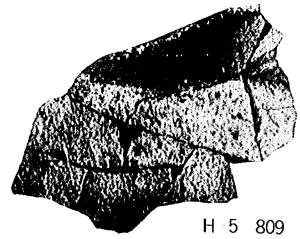
H-5 102


H-5 341


H-5 1550

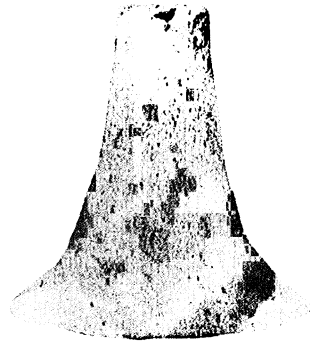
図版 28

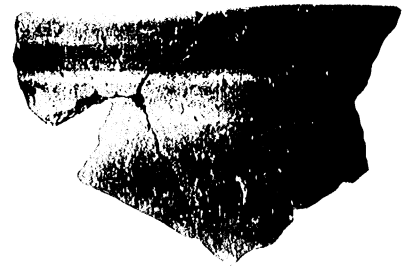

H-5 1249


H 5 809

H-5 1195

H-5 1723


H-5 1215

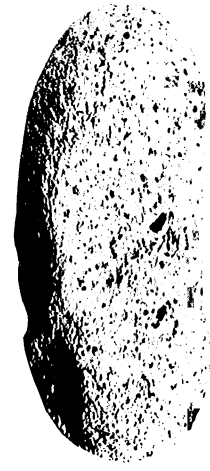

H-5 1730

H-5 563

H-5 734

H-5 576

H-5 138

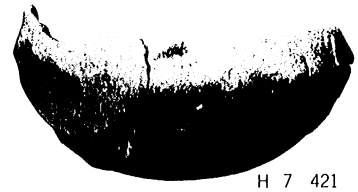

H-5, S-22

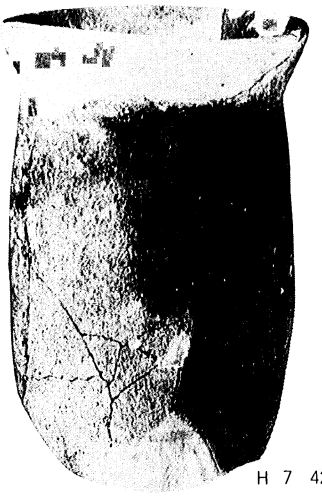
H-6 1

H-6 13

H-6 18

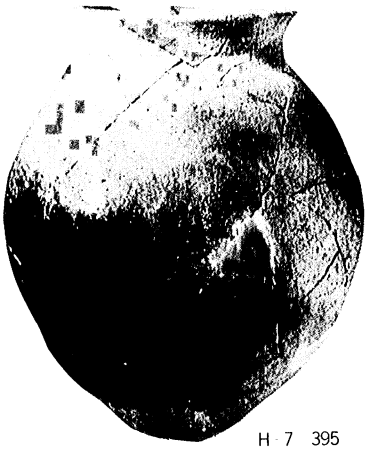
H-7 251


H 7 421

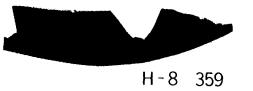

H 7 427

H-7 113

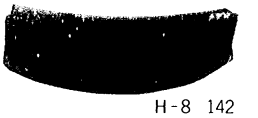
H-7 273


H 7 395

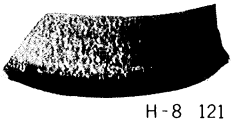
H-8 70

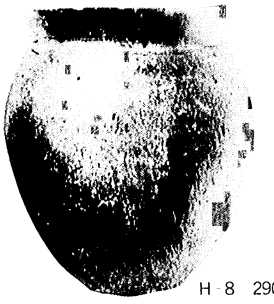

H-8 359

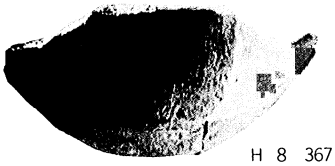
H-8 144


H-8 142

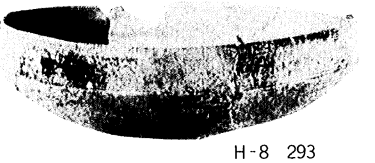
H-8 93


H-8 121


H 8 290


H 8 367

H-8 158


H-8 293

図版 30

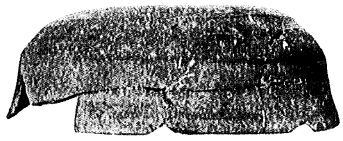
W-1
D, 7(B)

W-1 35

W-1 E, 7

W-1
D, 7(A)

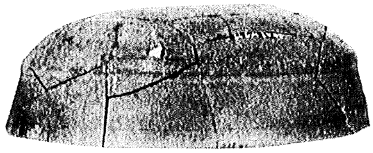
W-1
D, 7(A)



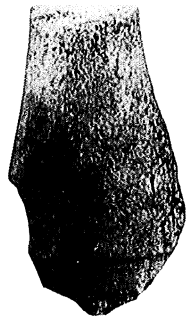
W-7 6

W-7 12

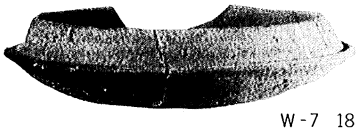
W-7 1



W-7 70



W-7 K, 14



W-7 18

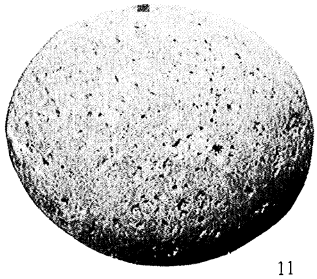
W-7 4

7

9

8

10



11

5

1

# 南田之口遺跡

印　刷　昭和60年３月25日
発　行　昭和60年３月30日

発行者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12番１号
印刷所　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

付図１　南田之口遺跡遺構全

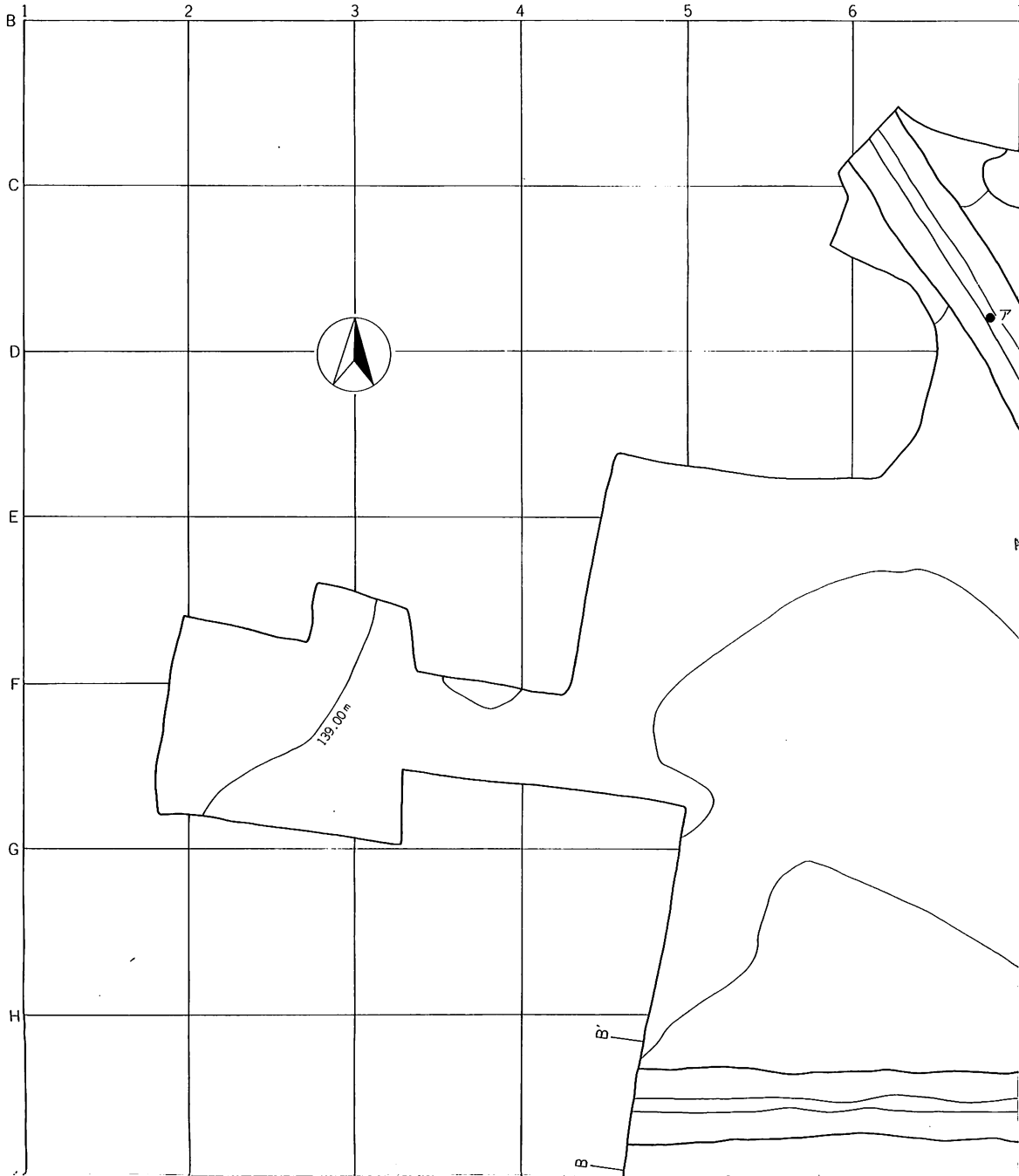
体図（1／200）

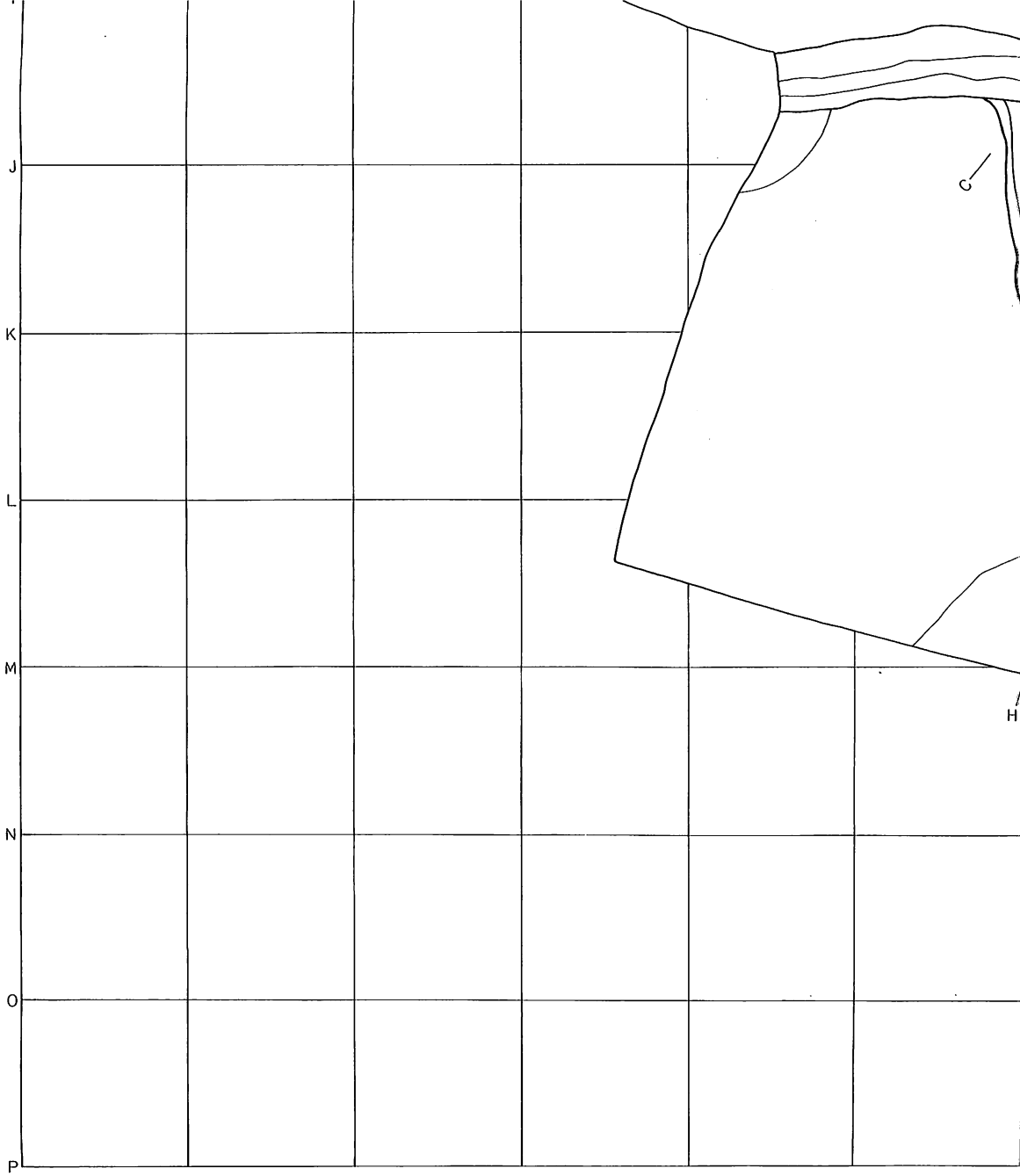
前橋市教育委員会

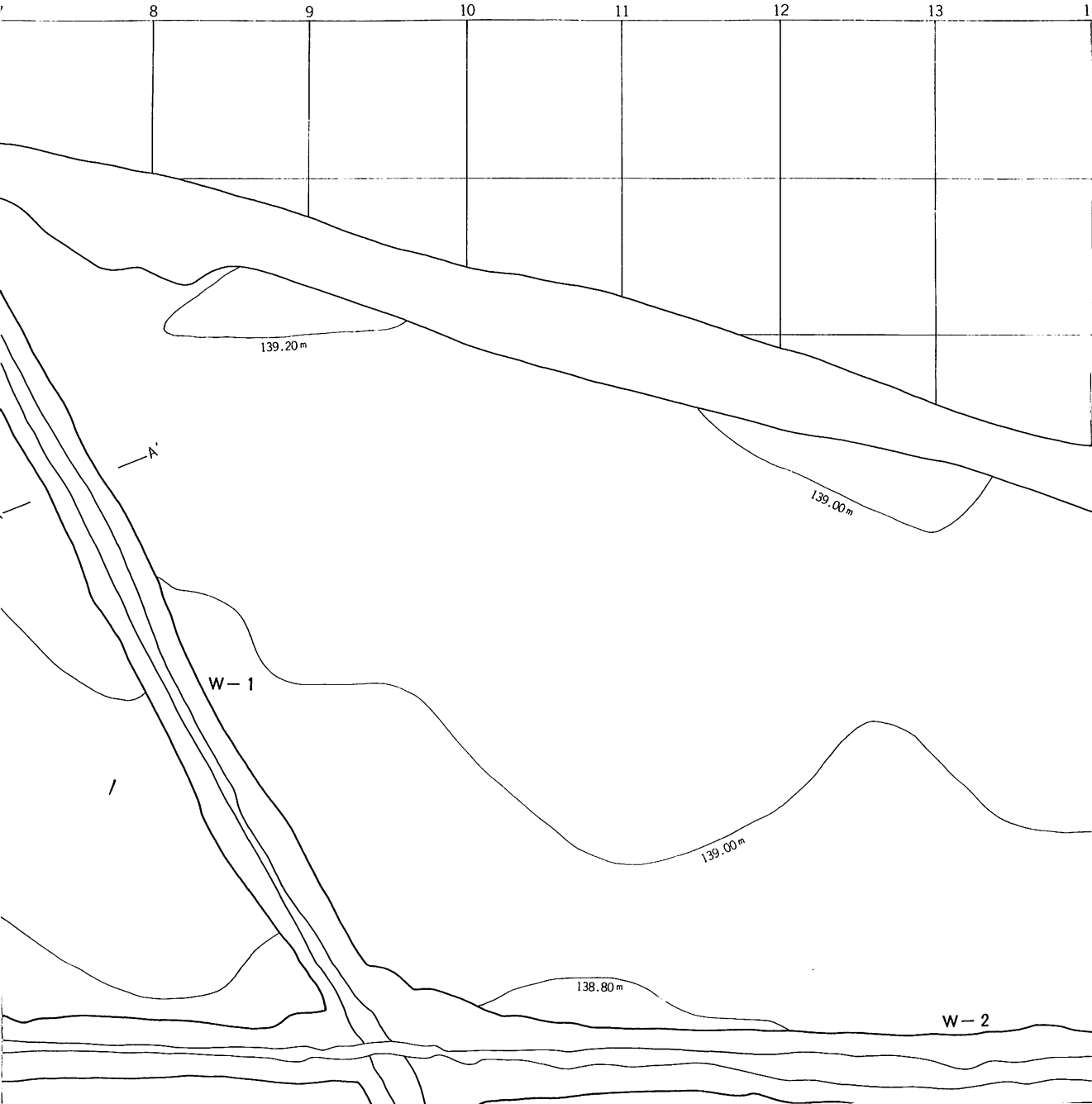
# 南田之口遺跡

印　刷　昭和60年３月25日
発　行　昭和60年３月30日

発行者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12番１号
印刷所　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

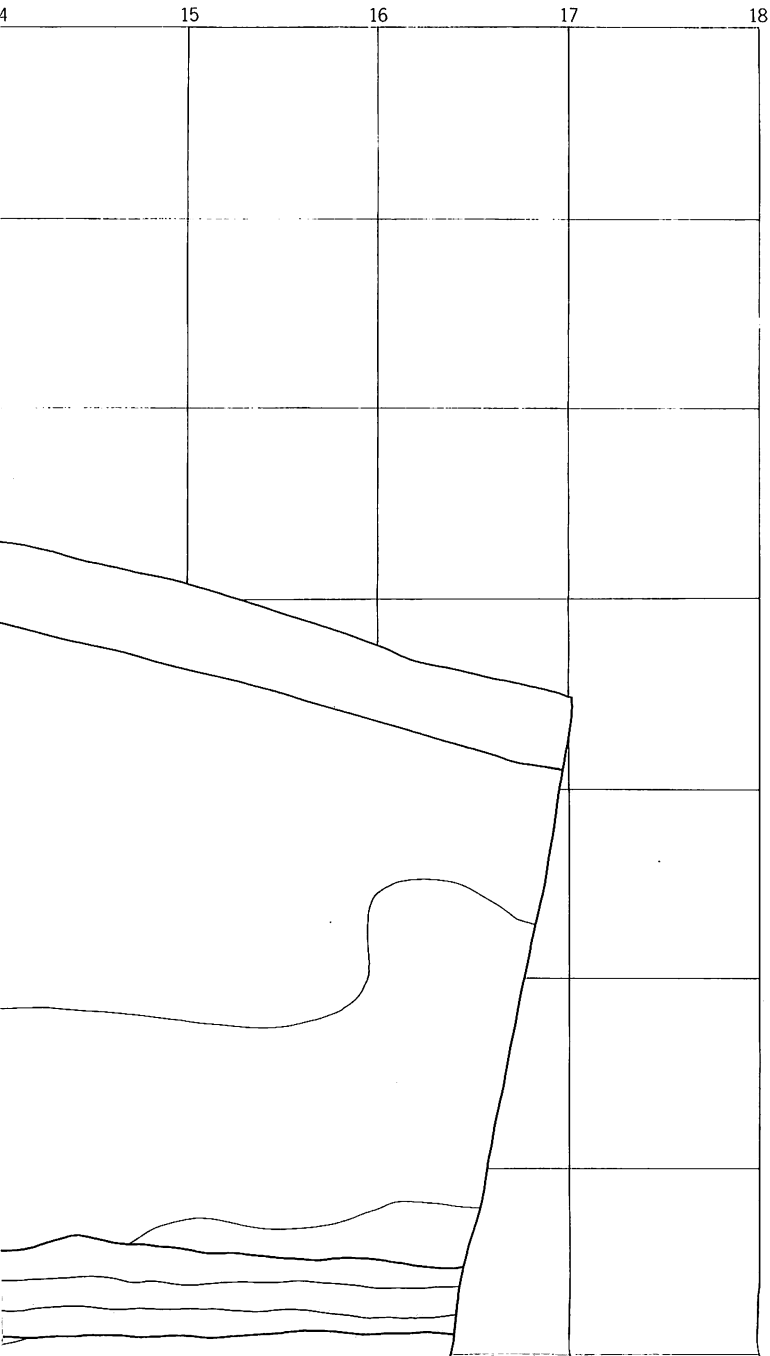

1
2
3
4
5
6
B
C
D
E
F
G
H
139.00m
B'
B

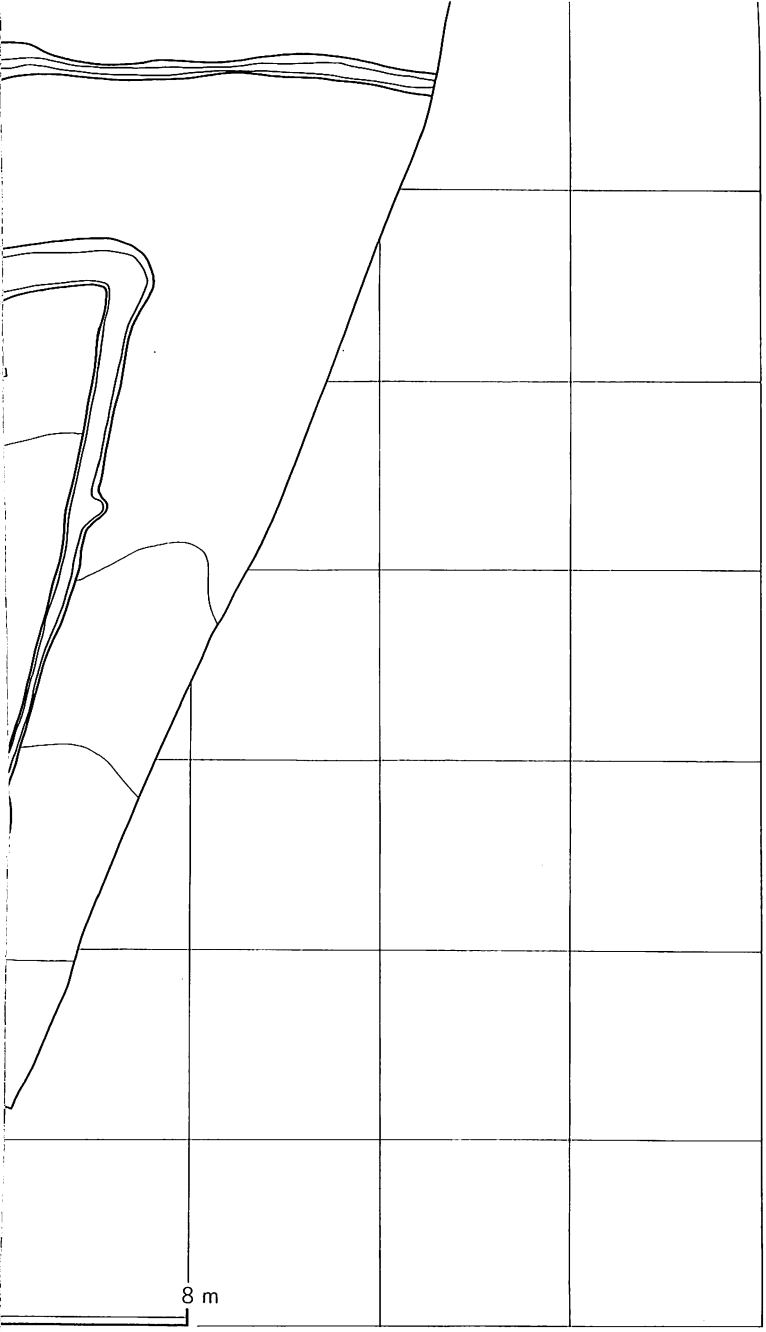

J
K
L
M
N
O
P
C
H


8
9
10
11
12
13
139.20m
A'
139.00m
W－1
139.00m
138.80m
W－2

付図２　南田之口遺跡溝平面図（１／160）

前橋市教


4
15
16
17
18




育委員会